

富士宮市文化財調査報告書第25集

石 敷 遺 跡

—富士宮市小泉農住組合による土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2000

富士宮市教育委員会

序

広大な富士の裾野に広がる富士宮市は、温暖な気候に恵まれ太古より人々の生活が営まれ、市内の随所に先人の足跡として数多くの貴重な遺跡が残されております。

このたび、富士宮市小泉地区において土地区画整理事業が実施されることになり、それに先だって石敷遺跡の発掘調査が行われました。この小泉地区には、石敷遺跡を始めとして、著名な若宮遺跡や代官屋敷遺跡など縄文時代早期と呼ばれる非常に古い時代の遺跡が数多く点在しております。

今回の石敷遺跡の発掘調査では、縄文時代早期や弥生時代後期の集落跡などが発見され、大きな成果を上げることができました。特に、縄文時代早期の出土品の数々は、富士山麓において初めて発見されたものばかりで、学術的にも大変貴重な資料であり、地域の歴史を解明するために活用されるものと期待されます。

最後になりましたが、遺跡保護の意義を理解され、本調査と本書刊行に係る費用の負担など格別なご配慮を賜りました富士宮市小泉農住組合の関係各位、並びに発掘調査に際し多大なご協力をいただきました地元関係者の方々に対しまして、深く御礼申し上げる次第であります。

平成12年3月

富士宮市教育委員会
教育長 藤井 國利

例 言

1. 本書は静岡県富士宮市小泉字前田 792番・793番外に所在する「石敷遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、静岡県富士宮市外神東町117番地富士宮市小泉農住組合（代表理事組合長 清 家末夫）による土地区画整理事業に伴うもので、平成11年4月26日に調査依頼を受けて富士宮市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成11年6月1日から同年9月29日まで実施し、以後平成11年度に整理、報告書刊行作業を継続させ、平成12年3月31日に本書を刊行してすべての事業を完了した。
4. 本書の執筆は、調査担当で分担してあたり、文責を文末に示している。
5. 写真撮影は、調査担当で分担して行なった。
6. 石器・石製品・礫の石材鑑定については、北垣俊明氏（（財）石の博物館 奇石博物館）からご教示いただいた。
7. 発掘調査及び本書発刊に関する事務は、富士宮市教育委員会文化課文化財係が担当した。
8. 本報告による出土品及び記録図面、写真などは、富士宮市教育委員会にて保管している。
9. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）

会田進 池谷信之 植松章八 小笠原永隆 恩田勇 神村透 佐藤美枝子 田中総
守屋豊人

凡 例

1. 本書で用いる方位は真北を示す。地形図、遺構実測図に記す標高は、全て海拔高度をもって示している。
2. 土器観察に記す色調は、土器の最も広い範囲を専有する色合いを原則として取り上げている。色調の観察は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）で補って判断している。
3. 土器観察表に記す略語は以下のとおりである。
縁…口縁部 唇…口唇部 竹…竹管状工具 棒…棒状工具 腹…腹面 背…背面
粗…粗粒 細…細粒 多…多量 少…少量 微…微量 長…長石 英…石英
金雲…金雲母 有…角閃石・輝石・カンラン石の有色鉱物
4. 遺物観察表の（ ）は、推定値を表す。
5. 挿図の中で、第1図は昭和51年、部公第3154号、第3図は平成8年、第64号によって建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。

目 次

I	はじめに	(渡井英誉)	1
	1. 調査の経緯		1
	2. 調査の経過		2
	3. 調査区の名称		3
II	環 境	(小野田晶)	4
	1. 遺跡の位置と環境		4
	2. 歴史的環境		6
	3. 層 序		9
III	遺構と遺物		13
	1. 弥生時代以降の遺構	(渡井英誉)	13
	A. 弥生時代		13
	B. 奈良時代		15
	C. 中 世		16
	2. 弥生時代以降の遺物	(渡井英誉)	18
	A. 弥生時代		19
	B. 奈良時代		20
	C. 中 世		20
	3. 縄文時代の遺構	(小野田晶・佐野恵里)	29
	A. 竪穴式住居		29
	B. 土 壙		29
	C. 集 石		32
	D. 礫集積		32
	4. 縄文時代の遺物	(佐野恵里)	33
	A. 土 器		33
	B. 石 器		41
IV	ま と め		80
	1. 弥生時代以降	(渡井英誉)	80
	2. 縄文時代	(佐野恵里)	81
	報告書抄録		82

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺地形と調査区	3
第2図	地質略図と湧水	5
第3図	周辺の遺跡	7
第4図	標準層序	10
第5図	石敷遺跡Ⅲ区全体図	12
第6図	竪穴1・土坑2・竪穴2実測図	21
第7図	竪穴2出土土器実測図	22
第8図	竪穴3・竪穴4実測図	23
第9図	竪穴5・竪穴6・竪穴7実測図	24
第10図	竪穴8・掘立柱1・掘立柱2・掘立柱4実測図	25
第11図	掘立柱3・土坑1・土坑3・溝2、遺構外出土1遺物実測図	26
第12図	溝1実測図	27
第13図	溝1・遺構外出土2遺物実測図	28
第14図	竪穴9実測図	44
第15図	土壌実測図	45
第16図	土壌、集石実測図	46
第17図	礫集積実測図	47
第18図	土器拓影図1	48
第19図	土器拓影図2	49
第20図	土器拓影図3	50
第21図	土器拓影図4	51
第22図	土器拓影図5	52
第23図	土器拓影図6	53
第24図	土器拓影図7	54
第25図	土器拓影図8	55
第26図	土器拓影図9	56
第27図	土器拓影図10	57
第28図	土器拓影図11	58
第29図	土器拓影図12	59
第30図	土器拓影図13	60
第31図	土器拓影図14	61
第32図	土器拓影図15	62
第33図	土器拓影図16	63
第34図	土器拓影図17	64
第35図	石器実測図1	65

第36図	石器実測図 2	66
第37図	石器実測図 3	67
第38図	石器実測図 4	68
第39図	石器実測図 5	69
第40図	石器実測図 6	70
第41図	石器実測図 7	71
第42図	遺物分布図 1	72
第43図	遺物分布図 2	73

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	6
第2表	土器・陶磁器観察表	28
第3表	縄文時代遺構一覧表	30
第4表	石器観察表 1	74
第5表	石器観察表 2	75
第6表	石器観察表 3	76
第7表	石器観察表 4	77
第8表	石器観察表 5	78
第9表	石器観察表 6	79

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景 調査区Ⅲ区
図版2	竪穴8 竪穴1と土坑2
図版3	竪穴3と掘立柱2 溝1
図版4	竪穴9 L・Mグリッド土壌群
図版5	土壌4 土壌2 土壌3
図版6	土壌6 土壌9 土壌7
図版7	集石2 礫集積出土状況
図版8	Q・R-12グリッド遺物出土状況 Q-13グリッド遺物出土状況
図版9	第Ⅲ群第2類土器(1)・表 第Ⅲ群第2類土器(1)・裏
図版10	第Ⅲ群第2類土器(2)・表 第Ⅲ群第2類土器(2)・裏

- 図版11 第Ⅲ群第2類土器(3)・表
第Ⅲ群第2類(4)
- 図版12 第Ⅰ群・第Ⅱ群・第Ⅲ群第1類土器
第Ⅳ群第1類土器(1)
- 図版13 第Ⅳ群第2類土器(1)・表
第Ⅳ群第2類土器(1)・裏
- 図版14 第Ⅳ群第2類土器(2)
第Ⅳ群第1類(2)、第Ⅵ群(一部)土器
- 図版15 第Ⅳ群第3類土器(1)・表
第Ⅳ群第3類土器(1)・裏
- 図版16 第Ⅳ群第3類土器(2)、第Ⅵ群(一部)土器・表
第Ⅳ群第3類土器(2)、第Ⅵ群(一部)土器・裏
- 図版17 第Ⅳ群第1類土器(1)
第Ⅴ群第1類土器(1)
- 図版18 第Ⅴ群第1類土器(2)
第Ⅴ群第2類土器
- 図版19 第Ⅲ群第2類土器(No.52)出土状況
第Ⅴ群第1類土器(No.248)出土状況
- 図版20 石鏃 尖頭石器・石錐・玉類
- 図版21 石皿 磨石
- 図版22 磨石 特殊磨石
- 図版23 石錘・凹石・敲石 尖頭石器(No.2)出土状況

I はじめに

1. 調査の経緯

富士宮市小泉農住組合（代表理事組合長 清 家末夫）では、急速に市街化が進む小泉地区において農地併存型の土地区画整理事業を行い、その有効な土地利用を推進させようとする計画を立ち上げた。その計画を進める中で、同組合は、開発事業予定地内の一部が石敷遺跡の範囲が含まれることが判明したため、その取り扱いについて富士宮市教育委員会文化課（以下文化課）と協議した。

文化課では、遺跡の正確な範囲と内容を把握するため、開発事業地内全域を対象として確認調査を実施することとし、その結果を踏まえて再度協議することを同組合側に伝え、両者間でその取り扱いについての具体的な検討が開始された。なお、この際の対象面積は、25,300㎡におよぶものである。確認調査は、1998年4月13日～4月27日の11日間に亘り、遺跡包蔵地として登録されていなかった地区に対しても実施させていただいた。その調査は、重機によって表土排除作業を行いながら31ヶ所のトレンチを設定して進めた。その結果、開発事業予定地の北側部分に遺跡の所在が知られ、その時代は縄文時代から中世までの複合する遺跡である事が判明した。

文化課は、その確認調査の結果を同組合に伝えると共に再度その取り扱いについて協議を行った。その結果、同組合は遺跡保存に対して快く理解と協力を示され、遺跡の範囲はなるべく保存する方向で農地として活用することが確認された。ただし、道路部分とやむを得ず開発工事による掘削が遺物包含層までおよぶ範囲については発掘調査を行うことが決定した。調査対象面積は3080㎡である。

開発事業者である富士宮市小泉農住組合から埋蔵文化財についての発掘調査の通知は、1999年4月26日に提出され、富士宮市教育委員会がその発掘調査事業を受託することとなった。

これに伴い富士宮市教育委員会で組織した調査の体制は以下の通りである。

《調査体制》

調査主体者	富士宮市教育委員会教育長 藤井 國利
調査担当者	富士宮市教育委員会文化課主任学芸員 馬飼野行雄 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井 英誉 富士宮市教育委員会文化課嘱託員 佐野 恵里 富士宮市教育委員会文化課臨時職員 小野田 晶
現場作業員	望月秀雄、天野秀男、天野一作、勝俣利雄、佐藤法夫、石川眞、佐野未芳 村野立巳、堤健一、田中敏夫、古郡善明、大平美奈子、勝俣秀子、真野隆子 山崎芙美子、吉野ふみ子、寺西生恵、渡辺修子、渡辺成子、山崎里恵
整理作業員	佐野元都芽
事務局	石川猛、成瀬正光、井出千歳、赤池敏和、小島富子、村松明美、滝川由美子 古屋克博、赤池厚司、渡井一信、伊藤昌光

2. 調査の経過

石敷遺跡の中で今回の発掘調査範囲は、遺跡の最も南側にあたり、丘陵から谷部にかけての複雑な地形環境を示す場所である。そのような状況の中で、調査対象地中央には大きな谷が南北に入り込んでいる箇所が確認できた。その谷を境に東側をⅠ区、谷に架かる部分をⅡ区、谷の東側をⅢ区として調査を開始した（第1図）。

発掘調査は、1999年6月1日よりまずⅠ区とⅡ区に対して実施した。Ⅰ区は20～30cmの表土を重機により排除し、遺構の確認を行った。Ⅱ区は、柿畑の中であったため人力による表土の排除を実施した。いずれの地区とも表土中の遺物出土は確認できたものの遺構は検出されなかった。Ⅱ区については6月4日に終了し、Ⅰ区については地形測量を残して6月14日までに終了した。

最も調査範囲の広いⅢ区については、6月3日より重機による表土排除作業を始めている。6月9日からはグリッド設定と遺構の確認作業に入り、6月の半ばより弥生時代以降の遺構の精査と縄文時代の遺物包含層に対する調査を行っている。縄文時代の包含層では、そこからの出土遺物に対して原則的に平面的な位置と垂直的な位置を記録して取り上げている。縄文時代の遺物の中で土器類は、そのほとんどが縄文時代早期のものであり、それに対応する調査方法を実施したものである。

6月も後半の28日は、縄文時代の遺構としての土壌を確認している。富士宮市で縄文時代早期の遺構が確認されたのは、著名な若宮遺跡以来のことでその重要性を再認識して調査を進めた。遺構としては、7月に入り5日に集石を確認しその調査を行っている。この頃は、弥生時代以降の遺構の調査と縄文時代の遺物包含層及び遺構の調査を同時に実施している。7月の半ば頃には、出土している縄文時代早期の土器が富士宮市内で未確認の押型文土器の一群であることが判明している。その土器については、信州の『相木式土器』に名が上がるようになった。7月の後半には、遺物分布の中心が調査対象地の中央つまり丘陵の中央にあることが分かり、その部分に対して調査の主体を置くようになる。8月24日までには弥生時代の調査が完了しているが、縄文時代の主体的な遺物分布域と弥生時代遺構の分布範囲が東西に異なっていることが幸いして同時進行で調査が実施できたため、比較的長期に弥生時代以降の遺構に対する調査を行った。

8月26日には富士宮市文化財保護審議会の委員に対する現地説明会を行なう。

8月30日から遺跡全体の土層の観察とその実測に随時入る。それは、このころから雨らしい雨がほとんど降らない天候が続き、夏の炎天日にさらされた発掘区がかなり乾燥するようになり、土層帯の崩落が起こらない前に実測しようとしたためである。

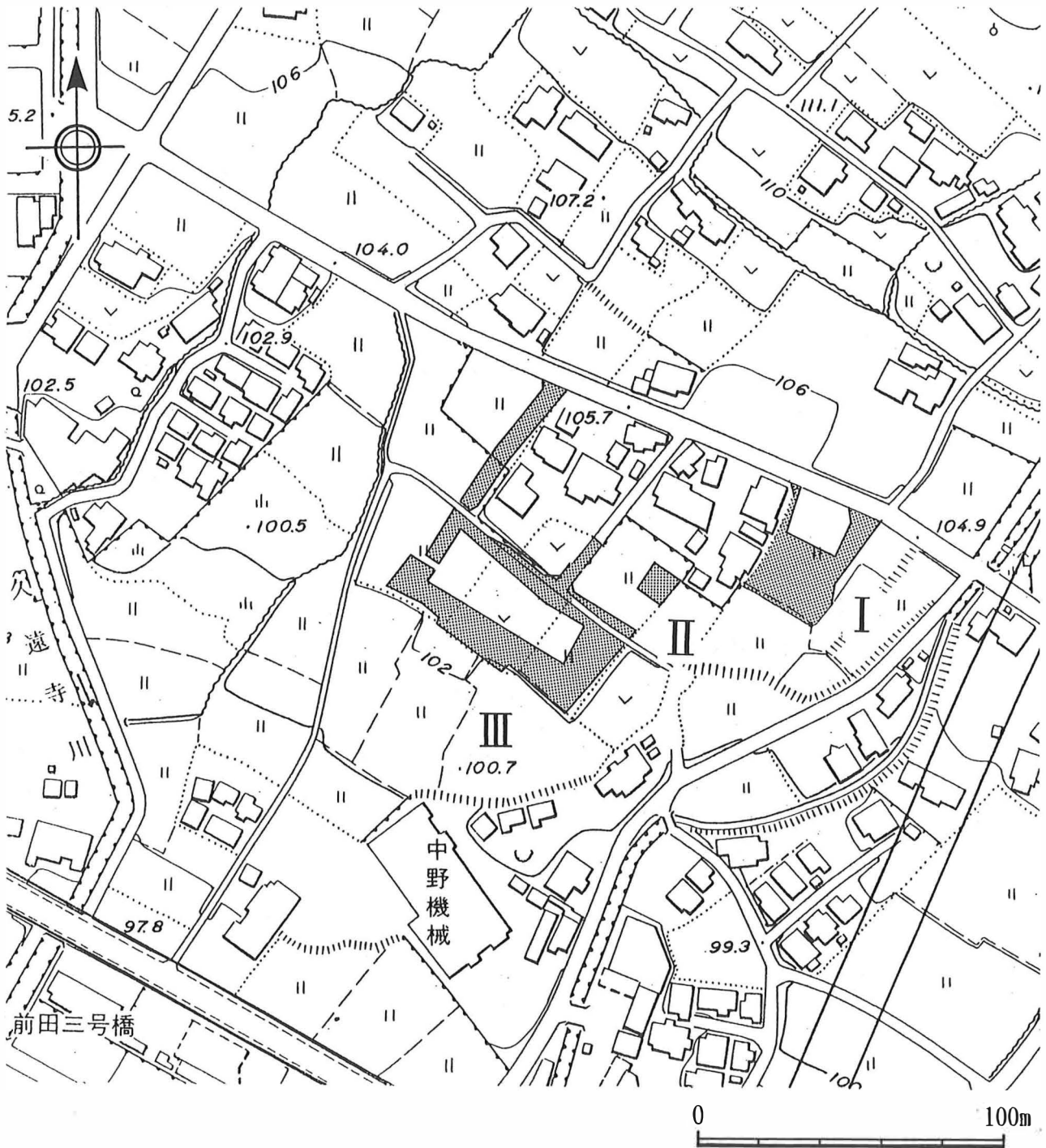
9月8日には調査区の東側において竪穴住居と思われる落ち込みを確認している。これは、9月13日においては竪穴住居として認定しており、竪穴住居に対する調査を実施している。

こうして現地調査は9月21日をもって竪穴住居を除いたすべての調査を終了し、遺物、器材等の撤収を行った。なお、竪穴住居については、9月29日まで調査担当者だけでおこないその調査を完了している。

報告書の作成作業は、富士宮市教育委員会文化課埋蔵文化財整理事務所において、現地で調査が行なわれている7月より2000年の3月まで行ない本書の刊行を以て終了している。

3. 調査区の名称

発掘調査の対象地は、前述のようにⅠ～Ⅲ区と大きく分けて対応している。そして各区においては、さらに5m間隔のグリッドを設定し、それを基準として調査を実施した。グリッドは、調査区に合うように任意に設定しており、西から東へ算用数字順、北から南へアルファベット順にすることで各列に対しては呼称し、その交点によって、「A-1」、「B-1」などとそれぞれのグリッドを呼ぶこととした。なお、南北列は、真北よりN-31.5°-Eの角度で東に振られている。
(渡井)



第1図 遺跡周辺地形と調査区

Ⅱ 環 境

1. 遺跡の位置と環境

石敷遺跡は、富士宮市の南東部、JR身延線富士宮駅より直線距離にして東へ約1.5kmの地点に位置する。石敷遺跡の所在する富士根地区は、富士山麓の末端と潤井川沖積地とが接する地域であり、幅広でゆるやかな丘陵が連続して展開している。石敷遺跡は標高102m前後のなだらかな傾斜に立地している。

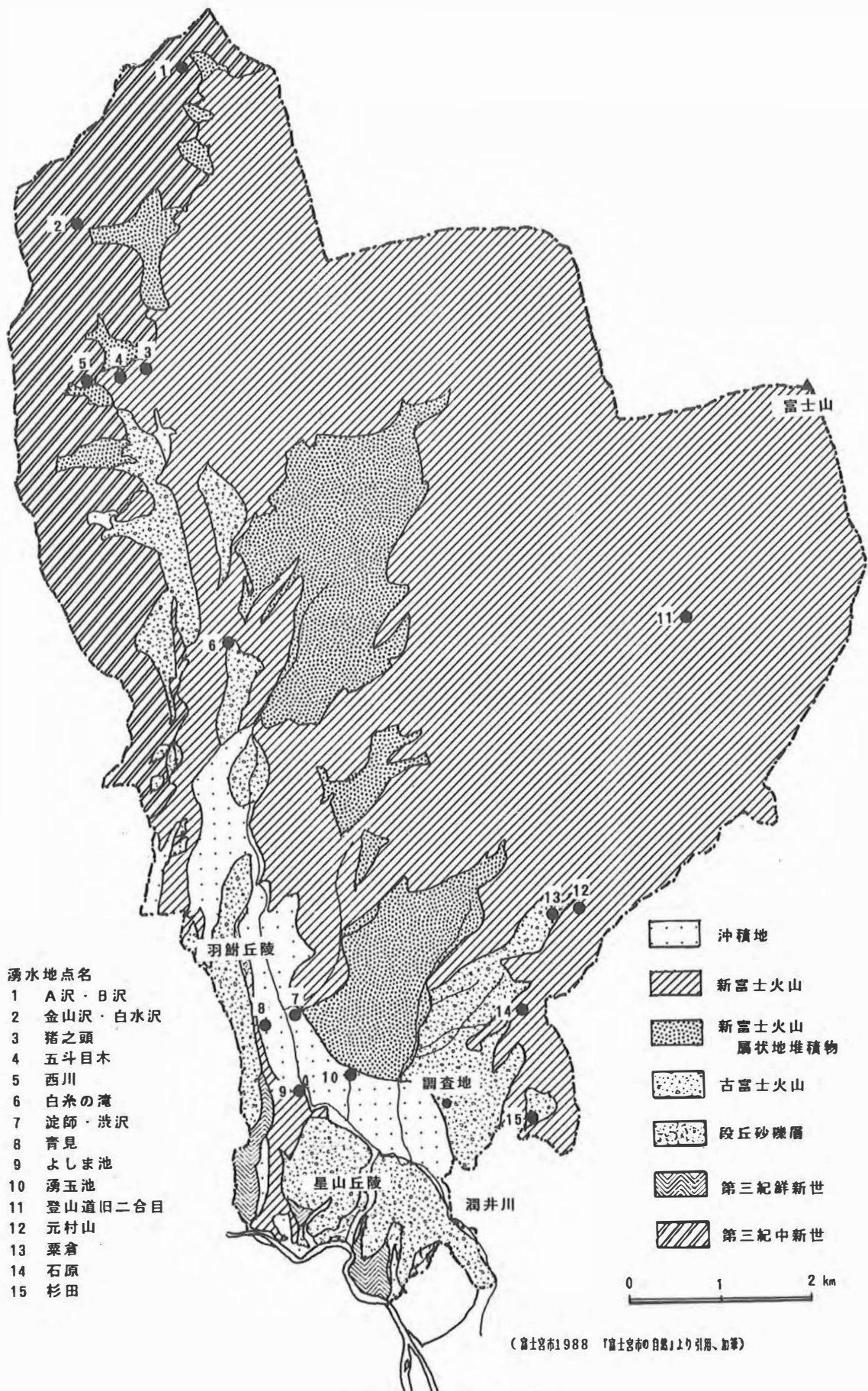
遺跡周辺は富士山西側を源流として駿河湾に流出する潤井川の支流である弓沢川と久遠寺川の小河川が流れており、かつて辺りは田園風景がひろがっていた。しかし、富士宮バイパス、西富士道路の開通によりこの地域の土地区画も整備されることに伴って宅地化と市街地化が現在もなお進んでいる。

富士山は小御岳、古富士、新富士と三火山の過程を経て成立したことが知られている（富士宮市域自然調査研究会1988）。小御岳火山はより正確な火山活動の時代は断定できないが、第四期更新世にあたる約40万年前から80万年前に噴出した標高2400m程の円錐火山体を形成していたと見られ、駿河湾頭にその容姿を現していた。その後、更新世末の約8万年前から活動を開始した古富士火山の噴出溶岩流によって、小御岳火山は北側中腹にその火口丘を残し大部分が覆われてしまった。また、古富士火山の噴出した集塊質泥流は富士川河岸まで達して、その南西部分に羽鮒、星山両丘陵の基盤を形成した。

約1万4千年前になると、それまで小康状態であった古富士火山が再び激しい噴火活動が開始された。これが新富士火山の旧期活動で、この活動は古富士火山と異なり多量の溶岩流と火山砂礫などを繰り返し噴出して、小御岳、古富士両火山を幾重にも覆うとともに、周辺の山麓部にも10数mもの厚さで堆積した。完新世になってからの約5000年前と約3000年前にも新富士火山は活動し、また歴史時代をむかえても新富士火山の活発な活動は続き、ついには円錐状火山（コニーデ）の代表的火山地形を形成するに至った。現在は1707年（宝永4年）の噴火を最後に活動を休止している。

新富士火山活動で噴出した火山碎物の大部分は西風により東側の地域に運ばれ、南西麓方面の堆積は少なく、溶岩流が火山灰に覆われなかった為に、新富士火山旧期活動以前の地形が露出している所が多く見られる。富士根地区は古富士火山の噴出した集塊質泥流（古富士火山噴出物層）を基盤としているが、これはかつて尾根上に位置していたため新富士火山初期の溶岩流が及ばずに半島状となって残ったためである。

集塊質泥流は透水性が悪く、新富士火山による堆積物は透水性に富むという特性上、両地質の境界では湧水が生じる結果となる。富士宮市内の各地でも、これによる湧水地点がいくつか知られている（第2図）。石敷遺跡周辺も「小泉」という大字名が示す通り豊水地域として知られている。長らく水田地帯として土地利用がされてきたこともそのためである。富士根地区は原始、古代より現在に至るまで、その生産活動や集落立地に富士山による大きな影響を受けてきたであろうことは言うまでもない。



湧水地点名

- 1 A 沢・B 沢
- 2 金山沢・白水沢
- 3 猪之頭
- 4 五斗目木
- 5 西川
- 6 白糸の滝
- 7 淀師・洗沢
- 8 青見
- 9 よしま池
- 10 湧玉池
- 11 登山道旧二合目
- 12 元村山
- 13 栗倉
- 14 石原
- 15 杉田

第2図 地質略図と湧水

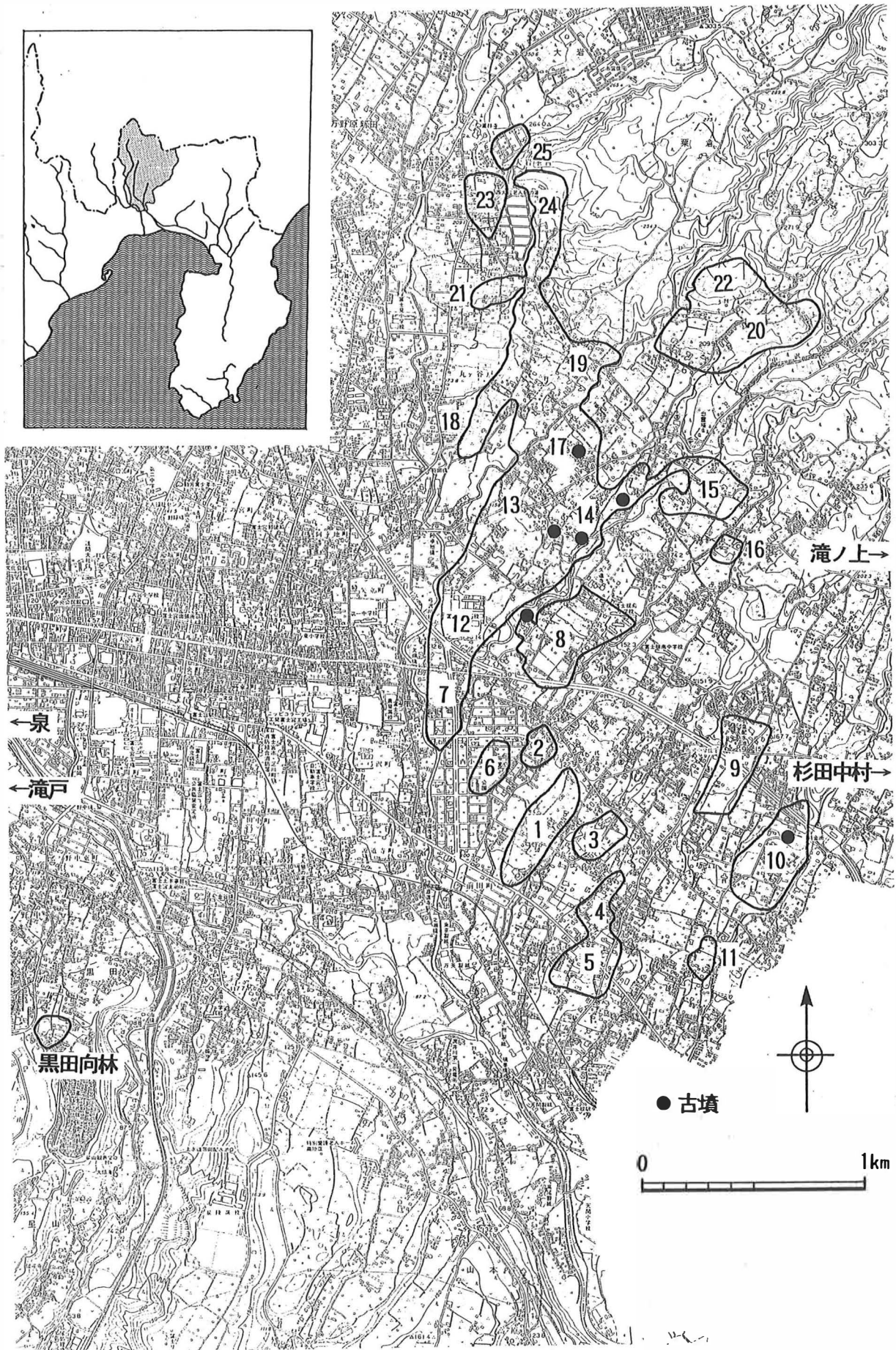
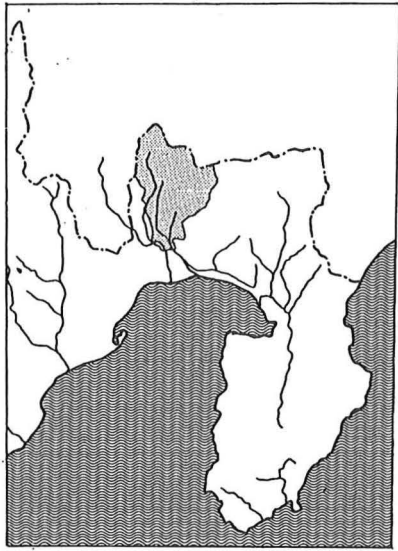
2. 歴史的環境

富士根地区は古富士集塊質泥流の分布と合致して富士宮市内有数の遺跡密集地帯を形成しており、数多くの発掘調査が行われてきた。これまでの調査では、縄文早期から奈良時代まで連続した遺跡の経営が確認されている。ここに石敷遺跡の位置する富士根地区の遺跡の時代と分布をまとめてみた（第1表、第3図）。

縄文時代早期では上石敷遺跡、代官屋敷遺跡、若宮遺跡、箕輪B遺跡が確認されており、これらは富士山麓に同心の放射上に分布している。上宿遺跡、神祖遺跡においても縄文早期の土器片が表採されている。富士根地区での人間活動の開始は上石敷遺跡、若宮遺跡において有舌尖頭器が発見されていることから、これは後期旧石器時代とも縄文時代草創期ともいわれるがその年代に想定される。若宮遺跡は縄文時代早期の集落跡が確認され、多彩な遺物の出土が顕著である（富士宮市教育委員会1983）。石敷遺跡においても押型文、捺糸文などを主体とした縄文時代早期の土器片や多量の石鏃が出土しており、縄文時代早期とみられる住居址が確認されている。また、上石敷遺跡のような集石遺構も確認されており、縄文時代早期に発展があったことを窺わせる。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	石敷遺跡	縄文早期、弥生後期、奈良	16	出水東遺跡	古墳前期
2	上石敷遺跡	縄文早期・中期、奈良	17	大室遺跡	縄文中期・後期、古墳
3	荻間遺跡	古墳前期	18	丸ヶ谷戸遺跡	縄文中期・後期、古墳
4	上宿遺跡	縄文早期・中期、古墳	19	峯石遺跡	縄文前期～後期、奈良
5	権現遺跡	古墳前期、奈良	20	箕輪B遺跡	縄文早期～後期、古墳
6	向田遺跡	古墳前期	21	時田遺跡	縄文中期・後期、古墳
7	中沢遺跡	古墳、奈良	22	箕輪A遺跡	縄文中期・後期、古墳
8	寺内遺跡	縄文前期・中期、古墳	23	宝田遺跡	縄文中期・後期、古墳
9	代官屋敷遺跡	縄文早期～中期、古墳	24	辰野遺跡	縄文晩期、古墳
10	若宮遺跡	縄文早期、弥生、古墳	25	峰ヶ谷戸遺跡	縄文前期・中期、古墳
11	蟹入越遺跡	縄文中期・後期、古墳		杉田中村遺跡	縄文中期・後期
12	木ノ行寺遺跡	縄文中期・後期、古墳		滝ノ上遺跡	縄文前期～後期
13	三ツ室遺跡	縄文前期、古墳前期		黒田向林遺跡	縄文早期
14	神祖遺跡	縄文早期・中期、古墳		泉遺跡	弥生後期～平安
15	出水遺跡	縄文前期・中期、古墳		滝戸遺跡	縄文中期、縄文後期～古墳

第1表 周辺の遺跡



第3図 周辺の遺跡

羽鮒、星山両丘陵に分布する縄文時代早期の遺跡も黒田向林遺跡などで時代が並行して存在していたことが知れ、富士宮市内の縄文時代早期の遺跡の分布状況を大観してみると、富士山麓線及び丘陵と富士川の断崖線に沿って鎖状に標高 120mの等高線の前後に立地していることが指摘されている（富士宮市教育委員会1989）。

縄文時代前期になると星山丘陵一帯では遺跡が影を潜めるのに対し、富士根地区では寺内遺跡、三ツ室遺跡、出水遺跡、峯石遺跡、箕輪B遺跡、峰ヶ谷戸遺跡とこの地区での遺跡の数も増加し新たな進展がみられ、杉田中村遺跡や滝ノ上遺跡が所在する大淵溶岩流の東縁まで面的な広がりが進出している。出水遺跡や峯石遺跡では縄文時代前期の標式土器である木島式土器の良好な資料が検出されている。

縄文時代中期の遺跡では新たに蟹入越遺跡、木ノ行寺遺跡、大室遺跡、丸ヶ谷戸遺跡、時田遺跡、箕輪A遺跡、宝田遺跡が確認され、徐々に標高の低い所までその分布域を広げている。この地区で確認される縄文時代の遺跡は前期から中期に該当する遺跡が多く、最も盛行した時期であると考えられる。縄文時代中期前半を代表する勝坂式土器の繁栄の中心は日本列島中部高地の山岳地帯であり、本地域もその周辺地域としての理解が可能であるが、遺跡の立地は丘陵斜面の小規模遺跡が多く、中部山岳の大規模な集落遺跡の形成とは対称的であるとされている。本地域の縄文時代遺跡で大規模な経営が見受けられるのは、縄文時代中期後半の曾利・加曾利E式土器の時期からである。勝坂式期に残存した遺跡は遺跡の立地を小規模な丘陵斜面から広大な台地の平坦面に移し、基地的遺跡へ発展をした。箕輪A遺跡、箕輪B遺跡、滝ノ上遺跡、滝戸遺跡、富士市の天間沢遺跡などがこれにあたる。さらに基地的遺跡とは別に小規模遺跡が五十数箇所形成され、この時期には富士西南麓一帯が遺跡といえる状況となる。

縄文時代後期にも中期からの遺跡は存続するが、堀之内式土器の時期には急激に衰え、わずかな基地的遺跡を残すだけとなる。この現象については海岸部の漁撈文化の発展が内陸部で文化の発展の妨げとなったと考えられているが、明確な原因追求に至っていない。

縄文時代晩期も遺跡の経営状態が貧弱であり、遺跡には滝戸遺跡や辰野遺跡があるが、微量の資料が認められるにすぎない。資料も晩期前葉に限られることから本地域の文化は弥生時代を迎えるまで中断されると考えられている。

富士宮市での弥生時代の遺跡は、羽鮒、星山両丘陵のいずれも潤井川を望む台地上または自然堤防上に生活の場を構える傾向にある。弥生時代中期初頭の渋沢遺跡（富士宮市教育委員会1989）や別所遺跡などが市内における萌芽期の遺跡として取り上げられる。

弥生時代の遺跡は星山丘陵と羽鮒丘陵が接する野中に所在する滝戸遺跡が挙げられる。弥生時代から古墳時代と続く集落跡と墓域跡が明らかにされ（富士宮市教育委員会1997）、本地域の弥生時代集落の代表的な遺跡となっている。潤井川対岸の泉遺跡は市内でも明確な弥生時代後期の遺跡として知られ、石敷遺跡も、これに並行する弥生後期の住居址が確認され、それまで弥生遺跡の発達が見られなかった富士根地区にも弥生文化が波及していたことが知れる希少な遺跡ということになる。また、泉遺跡と石敷遺跡は後の奈良時代の遺構が確認されていることでも共通している。弥生時代遺跡の潤井川沖積地内への進出は今のところ泉遺跡だけであり、他は丘陵上に立地することから、本地域の弥生時代遺跡は台地を占有することが一般的であったとするほうが適切なようである。

古墳時代の遺跡は、発展した弥生遺跡が存在する星山丘陵東辺部ではさらに濃密化し、弥生遺跡の発展が見られない富士根地区でも湧水地を中心にかつての縄文時代遺跡の立地と重複して形成される傾向がある。富士根地区では他にも荻間遺跡、権現遺跡、向田遺跡、中沢遺跡、出水東遺跡が確認されており、古墳文化の発展の様相を印象づけている。この文化の発展を生む温床となるべき弥生時代終末期の萌芽的な遺跡の存在を想定しなければならないのであるが、上石敷遺跡、丸ヶ谷戸遺跡、権現遺跡などが果たしていた役割はかなり大きなものであったと思われる。一時の発展をみせる富士根地区の古墳時代遺跡群であるが、急激な衰退を迎える。木ノ行寺遺跡などでは後期の集落跡がみられるが、貧弱である印象は払拭できない。潤井川兩岸の微高地も安定を始めていて集落の活動が可能となってきたため、富士根地区の古墳時代遺跡群も生活領域の移行に伴い衰退していったと考えられている。

奈良時代の富士根地区の遺跡は上石敷遺跡、権現遺跡、峯石遺跡において短期間で廃絶しているようであるが集落跡が確認されている。石敷遺跡においても奈良時代の住居址が確認され本地域の古墳時代の衰退から新たな営みの開始が確認できる。小泉に集中する集落のひとつとして経営されていたことが窺えるが、781年（天応元年）に富士山が噴火をしたという記録があることから当時のこの地域は富士山の火山災害による居住性の悪さ、火山灰の影響による生産性の弱さなど集落運営に大きな弊害が発生したことにより、積極的な集落の発展や進出が妨げられていたことが事実のようである。そのため奈良・平安時代には短期間で廃絶する集落遺跡が僅かにみられる程度で、この地域の勢力は極めて弱いようである。

3. 層 序

石敷遺跡の地質基盤は古富士集塊質泥流であり、その上部に新富士火山から噴出した火山性降下物が堆積し、遺構や遺物を埋没させている。その層序は上石敷遺跡や若宮遺跡と同一であるとみられ、基本的な小泉地区での層序関係は以下の通りとなる。

a 表土層

小粒で少量のスコリアを含む黒色有機質土層で、実質的な旧表土層であり、中近世陶磁器、古銭、土師器、須恵器などが混在する。

b 大沢ラピリ層

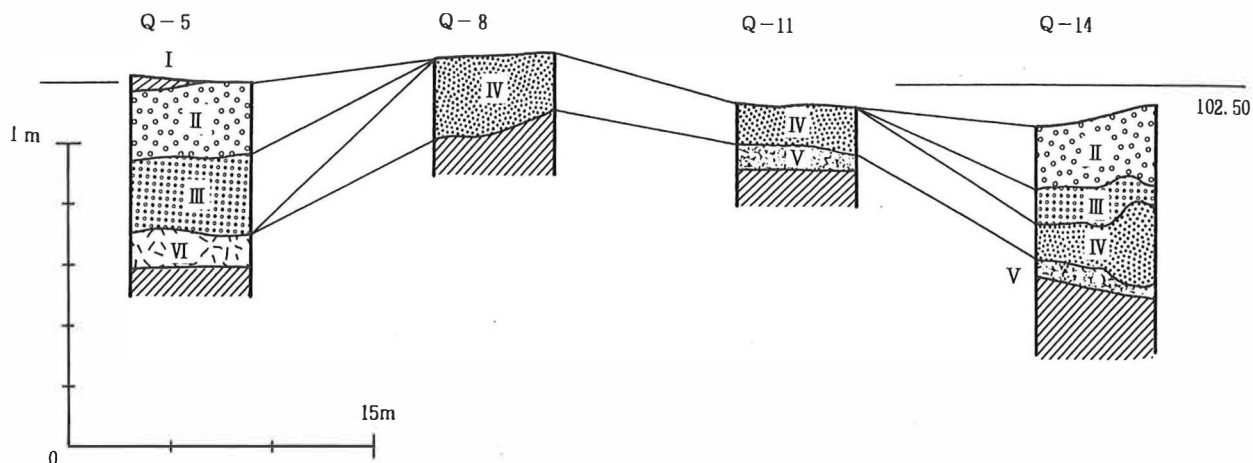
スコリア粒子が緻密で、乾燥すると白っぽく変色しコンクリート状を呈し堅固となる。いわゆる「富士マサ」である。弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構は表土層下部からこの層に掘り込まれており、遺構確認面となる。

c 黒褐色土層

黒色の強い土層帯で「黒ボク」と称され、大沢ラピリの影響で小粒のスコリアを若干含むが、層下部にしたがい量は減る。本来は縄文時代後期から晩期の包含層であるとされている。

d 栗色土層

本地域における縄文時代前期から中期にかけての遺物が包含される縄文時代の鍵層である。しかし、地形条件等によって連続した堆積が認められず、鎖状の若干暗い層を混入するところもある。若宮遺跡ではこれを褐色土層とした。



第4図 標準層序

e 富士黒土層

大粒のスコリアを含む層であり、縄文時代早期から前期の遺物を包含する。上層、下層間に黒色帯を形成する。スコリア粒子をより多く含んだ層下部が明るく見えるのが一般的であるが、石敷遺跡では層上部の方が明褐色のブロック粒が混入しているために明るく感じる。

f 橙色土層

大粒スコリアを多量に含むため赤色にちかい。スコリアの混入度合は部分的に差異があり、斜面に少なく、平坦面や窪地に厚く堆積する。混入される土層がローム質の黄褐色土であるため、乾燥しても際立って白さが増すことはない。先土器時代の包含層として見られている。

g 黄褐色粘質土層（黄褐色ローム層）

スコリア粒が極端に減り皆無にちかい。黄色味を強く帯びて粘性に富んでおり、本土層内では異質である。

h 暗黄褐色砂質土層

上層より色調が暗くなり、スコリア粒も皆無にちかい。粘性はまったく無く、小砂礫を含んで砂質である。

i 古富士泥流上扇状地堆積物上部層

本地域の基盤である古富士泥流が浸食、堆積した、いわゆる扇状地の上部層である。拳大から人頭大の礫から成り、河原状を呈している。

以上の分層から成り立っているが、石敷遺跡周辺の土地利用状況は、かつて水田であったこともあり、ゆるやかな丘陵が段をもって整形されたため、表土層より残存する標準的な土層が確認されるに至らず、遺跡の谷部において富士黒土層から黄褐色粘質土層が確認できる程度である。

石敷遺跡では確認された土層を標準層序（第4図）として調査を行った。各層からの遺構と遺物の検出状況をまとめてみておくことにする。

第I層は暗褐色の耕作土層である。攪拌しているため、この層からは中近世から縄文時代までの幅広い年代の遺物が検出される。

第Ⅱ層と第Ⅲ層は富士黒土層である。これは掘削の及ばなかった谷部において確認でき、石鏃や縄文早期の土器片を多量に包含している。石敷遺跡の層序では層上部の栗色土層からと思われる明褐色ブロックの混入によって褐色に見える部分を第Ⅱ層とし、元来の富士黒土層である黒褐色土層を第Ⅲ層と分けている。本遺跡の弥生時代から奈良時代の住居址の遺構は第Ⅱ層から辛うじて確認された。

第Ⅳ層は橙色土層であるが、色調は若宮遺跡の橙色土層漸移帯層に類似して褐色を帯びている。丘陵部からは遺物の検出が認められるが、谷部では縄文土器の出土はなく、黒曜石の剥片が貧弱に出土する程度である。層下部にはロームが混入し、遺物の出土が見られなくなる。本来は先土器時代の包含層であるが、縄文時代の遺物の出土は土層自体の移動による影響であると充分考えられる。

第Ⅴ層は黄褐色粘質層である。この層は旧石器時代の包含層であるが、本遺跡では遺物、遺構の出土は見られなかった。

第Ⅵ層は淡黄色粘土層であり、東南側の谷部のみで確認されている。成分は潤井川湿地の植物が腐食してできた粘土である。遺物の出土は見られない。

石敷遺跡では第Ⅴ層と第Ⅵ層以下を無遺物層として、第Ⅱ層から第Ⅳ層を主体的に調査を行った。かつての水田耕作などの土地利用により富士黒土層以上が削平、攪拌されていることにより富士根地区で普遍的な層序は本遺跡では見られないが、残存する層より遺構が確認され、また縄文時代早期の土器や遺物が集中して検出されたことは、他遺跡との比較検討を迫るに及ぶ成果である。

(小野田)

《文 献》

- 富士宮市域自然調査研究会 1988 「富士宮市及び周域の地質」『富士宮市の自然』 富士宮市
富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』
富士宮市教育委員会 1989 『小松原 A 遺跡』
富士宮市教育委員会 1989 『渋沢遺跡』
富士宮市教育委員会 1997 『滝戸遺跡』



第5図 石敷遺跡Ⅲ区全体図

Ⅲ 遺構と遺物

1. 弥生時代以降の遺構

今回の調査では、弥生時代後期以後の時代に比定される遺構・遺物がほぼ全域に亘って確認されている。その中で、Ⅲ区とした調査対象地の大半を占める南から西側にかけての地区においては、集落としての竪穴住居や掘立柱建物が占有している。これらは、調査区の西側と東側にそれぞれ偏る状況でその分布を示しており、特に西側にその中心があるように全体図（第5図）などの見せかけの遺構の配置からは捉えることができる。しかし、今回の調査対象地は、明治から昭和にかけての精力的な開墾による土地の削平が進んだことによる地形の改変が促され、中世以前の状況を示しているとは言い難い。そのため、標高に比較的高い部分においては、すでに多くに遺構が消失しているものと理解され、今回の遺構群が、その群としての集落の原風景を表しているわけではない。当然、遺構の構成などから導かれる集落論には馴染まない検出状況を示している。

A. 弥生時代

弥生時代（後期）の遺構としては、竪穴住居が7軒確認されている。全体の形状が分かる例は、竪穴5だけでR-13・14グリッドで検出している。

竪穴5（第9図）

この住居は、唯一Ⅲ区調査区の東側に位置する竪穴住居で435cm×385cmの規模を有するものである。今回確認している弥生時代の竪穴住居の中では、比較的隅丸方形に近い平面形を示している点が指摘できる。そのため、竪穴の東辺は直線的なラインを描いている様子が良く見て取れる。竪穴の掘り方は、南側部分を除いた標高に高い側をその周辺に対して馬蹄形の溝状に掘り窪め、中央部を島状に残す形態のものである。付属する柱穴などのピットは、5つ調査されているが、北西側の2つのピット以外は、柱穴と理解して構わないその配置を示しており、いずれも床面より40cmほどの深さを測るよく似た長楕円気味の円形ピットとして確認されている。北西側の2つのピット（外側をP1、内側をP2とする。）は、規格的な位置関係からP1が他のピットと対応しそうであるが、その深さが10cm以上も浅く、やや形態を異とする。P2は、位置的には規格性に難を残すものの、その形態や規模は他のピットによく似ており、相互の関連が指摘できる。それぞれの同時性についてはよく分からないが、4本柱を基調とする弥生時代後期の一般的な住居構造の中で捉えられる竪穴住居である事には問題ないものと思われる。ただし、一部改変している可能性も考慮しなければならない。そのために炉が中央よりやや東に偏って設置されているのであろう。

その炉であるが、47cm×27cmを測る楕円形の地床炉として確認されている。深さは、床面より10cm程度を測る。炉跡内の焼土の堆積は、多量に確認されものではなく、明瞭に充填してはいない。これにより、この竪穴住居を比較的短期間しか使用していない状況を考えることができるわけである。それは、短期間で廃棄しなければならなかった事情に対して、それほど時期差が無い竪穴2における焼土及び土器類の廃棄行為との関連などから窺えるその背景にある集

落の時間的な画期を考慮しなければならない。

竪穴2（第6図）

S-5グリッドで北東側の一部が確認されている竪穴住居である。全体の規模、形状などは不明であるが確認されている平面の一辺は、直線を指向しており竪穴5と同様に隅丸方形になるものと考えられる。

中央に柱穴が検出されている。その掘り方は円形を基調としている床面より35cmの深さを測り、その東側に幅15cmの弱いテラス状の部分が付随している。住居の掘り方は、周囲を深く掘り窪める形態のもので、それが溝状に巡る様子が観察されている。

この住居の大きな特徴は、比較的多くの土器類が焼土や炭化物を伴って検出されていることである。焼土は床面上に堆積して、炭化材や炭化物を伴っており、その分布は、住居の壁際を除いた部分以外に面的な広がりを示している。焼土の層は、残りの良い部分で床面より10cmほど上から確認されるが、その上面に破片化した土器類の出土が認められる。土器類（第7図）の中に、完形土器はないが壺・甕の両者が認められるもので、確認された住居部分の南西側でやや集中する状況で出土しており、その広がり、調査区外の南側へと続いている。

これらの土器群は、壺・甕類が混在する状況で、焼土の上から出土しているが、その場所は、丁度柱穴の直上部分に相当している。それは、柱穴がある程度埋まった段階に焼土及び土器を廃棄したものと捉えられる出土状況を示すもので、その廃棄行為に住居の柱穴に対する意識はないものと考えられる。つまり、これらの土器群は、直接この住居と関連しないものと捉えられるわけである。焼土等も含めたこれらの遺物は、他の施設で使用あるいはそこから排出されたものであろうか。

この竪穴2は前述のように隅丸方形の平面形を示すようであるが、同様の形態を示す竪穴住居として竪穴4を上げることができる。確認された部分が狭いので詳細は分からないが、竪穴の東壁の一部は直線を指向する部分が認められる。

この竪穴4に対して竪穴3、それと先程の竪穴2に対する竪穴6は、それぞれ重複関係にあるが、いずれも前者の方が後出で新しい。後者は古いことのほかにその平面形が円形あるいは小判形を示している点でも共通している。

竪穴3（第8図）

竪穴2あるいは竪穴5とはその平面形が異なる竪穴3は、M・N-1・2グリッドで確認され、竪穴4と重複関係にありそれよりも古い。掘立柱2と土坑3とも重複関係にあり、それらより古い。全体の2/3程度が検出されているが、掘り方のみの確認で、住居の具体的な内部構造については分からない。平面形は、南北に長い楕円形を示し、いずれの部分でも直線を指向していない。今回の調査で確認された弥生時代の竪穴住居の中では、最も大きなもので、南北方向の長軸で660cmを測る。竪穴の掘り方は中央部を島状に残し、その周囲を溝状に掘り窪める形態のもので、谷側に当たる南側を他の部分より更に深くしている。住居の付属する施設としては、柱穴が2つ検出されている。柱穴は、方形の平面形を示す掘り方で確認されており床面より深さ40cm程を測る。

この竪穴3と同様に円形をその平面形としているのは、竪穴6と竪穴8であるが、これらは、その規模をやや小さくしている。因みに、竪穴6は、径520cm程を測り、残りは悪いが、この竪穴住居に関連するものと思われる幅28cm、深さ5cmを測る排水溝のような溝を有している。弥生時代の住居に付属する排水溝については、富士地区における発見例は他にない。

B. 奈良時代

奈良時代の遺構は、竪穴住居1軒、掘立柱建物4棟である。ただし、それぞれの遺物は出土数が非常に少なく、厳密な時代設定できるような状況にはない。周辺の上石敷遺跡や権現遺跡の調査成果に基づいて、現状ではこの段階として認識している。

竪穴1（第6図）

R-5グリッドにおいて土坑2と重複して検出されている。土坑2は中世の遺構であり、竪穴1はそれに大半を切られる状況にある。ただし、竪穴の周囲を巡る周溝が切れ合い関係にある西壁の一部まで残っており、竪穴の規模は類推することを可能にしている。

竪穴1は、一辺325cmを測るほぼ正方形の平面形を示す竪穴住居で、北壁にカマドを持つ。カマドの位置による軸方位はN-23°-Wを示す。そのカマドは、地山である黄褐色ローム及び富士グロ相当層を掘り残して袖部としており、向かって左側の袖ほどその状況は顕著に観察された。その袖部を芯にして白色粘土によるカマドを構築しているが、焚口や燃焼部の大半は、すでに破壊されており残存していない。焼土の分布によってその部分が認識できるが、支脚などの付属品は出土していない。袖部分に架からない天井部は、土圧等により陥没しており、前面に向かって落ち込んでいる。天井部の陥没により煙道部も原状を止めていない。煙道部分の最大幅は、8cm程である。

竪穴に伴うその他の付属施設としては、竪穴の北東隅で確認された長径50cmを測る楕円形のピットが上げられる。深さは床面より30cmを測る比較的しっかり掘り込んでいるピットであるが、内容物は一斉確認されていない。その位置する場所からいわゆる「貯蔵穴」であるとされる場合が多いが、具体的な遺物などの出土はない。このピット以外に柱穴等は確認していない。

出土遺物としては、竪穴の北東側壁際から第6図1の坏がほぼ正位の状態で出土しているが、床面からは4cmほど浮いた状況であった。

掘立柱建物（第10・11図）

掘立柱建物址は、Ⅲ区調査区の西側に偏って4棟確認されている。緩やかな谷部における検出であるが、いずれも検出状況はそれほど良いとは言えない。掘立柱2と4は、それぞれ竪穴3と竪穴8と重複関係にあり、平面的に両者を識別することはなかなか難しい状況であった。また、黄褐色ローム層で確認された掘立柱1と3は、確認面からの掘り込みが極めて浅く、一部は消失している部分も認められた。

この4棟はいずれも調査区外に展開しており、全体が分かるものは1棟もないが、それぞれ調査された部分から推測すると、すべて1間×2間の形態になるものと考えられる。そうすると、掘立柱2と4が東西位、掘立柱1と3が南北位に桁行を持つことになる。ただし、掘立柱

2と4はよく似た方向を示すものの掘立柱1と3は、方位に対する類似性は認め難い状況にある。それぞれの桁行(棟)は、掘立柱1がN-20.5°-W、掘立柱2がN-61°-E、掘立柱3がN-32.5°-W、掘立柱4がN-56.5°-Eの方位をそれぞれ示す。

規模は、その方位に関連して掘立柱1と3が梁間340cm、桁行の1間230cm程度の規模を有するのに対して、掘立柱2は、梁間310cm、桁行の1間180cm、掘立柱4が梁間230cmを測り、その規模を小さくしている。これは、確認された柱穴跡によるそれぞれの規模の想定である。その中で、掘立柱4の梁間としたものは、その長さの類似により桁行を1間としてその方位を南北位に持つ掘立柱建物になる可能性も考慮しなければならない。一番南側の柱穴が後世の削平により消失していると考えたと掘立柱3との方向及び規模の共通性が指摘できる。また、これらと掘立柱2が直角になるように配されたようで、その相関性も指摘できる。そうすると掘立柱1の特異性が浮き彫りにされる。時間差なのであろうか。

柱穴跡としてのその掘り方は、残りの良い掘立柱2における南側列(桁行)で確認できる限りでは、60~70cm×80cmほどの長方形に掘られており、その底面を平坦にしているものが多い、いづれにしても、それらは比較的しっかり四角に掘り下げているものであると言える。

土坑3(第11図)

M-2グリッドにおいて竪穴3と重複して確認されている土坑である。確実に竪穴の覆土上部に架かっており、こちらの方が新しい。平面形は、275cm×242cmを測る南側に細い卵形を示す。断面は、深さ12cmほどの浅い皿状を呈しており、明確な平坦面は形成されていない。付属するものとしては、南側に径30cm、深さ20cmのピットを1つ確認している。

また、この土坑は、全面に亘って硬化面が観察されることが大きな特徴として指摘できる。それは、地山直接の硬化面であり、掘り方などを伴う貼床とは異質なものである。そこに平坦面が形成されないことから理解されるように、人的な痕跡とはあまり捉えることはできないようである。具体相については良く分からない。

出土遺物は覆土中から地山の自然礫である拳大の火成岩が3こ検出されているが、その他は皆無である。弥生時代後期より新しいのは確実であるが、一応、覆土の類似性からこの奈良時代に比定している。近接する掘立柱1と何か関連するのであろうか。

C. 中世

中世のものと確実に言える遺構はないが、覆土中にその時代の遺物が含まれるものをこの時代のものとして取り上げている。この時代のものとしては、大きな溝である溝1と円形の土坑1、方形の土坑2が該当する。ただし、いづれも近世の遺物が混在しており、厳密な時代設定はできない。それが中世から近世までとする遺構の使用された継続年数を表すのかどうか判断し難い。

土坑1(第11図)

Q-14・15グリッドにかけて確認された土坑で、245cm×192cmの規模を有する。平面形は、整った楕円形とすべきか、やや隅丸方形に近い印象を受ける。掘り込みも形同様にしっかりし

ており、確認面より50cmほどの深さを測り、その底面に平坦な面を形成している。覆土は、壁際の三角堆積を除くと、上下2つに大きく分層される。両者ともに黒色の強い色彩を示すもので、橙色スコリアを含有するしまりの弱い層相を示す。分層は、そのスコリアを含む比率によるものであり、その間より拳大の礫の出土が確認されている。

この土坑の場合、用途などその直接的な性格については分からない。その時代設定についても確実なことは言えないが、覆土の状況などから溝1に近い年代を想定している。

この土坑1は、南東―北西方向に走る溝2と重複関係にあるが、それよりも新しい。溝2は幅48cm、深さ30cmを測る比較的小さな溝であり、東側の谷部のみにおいて確認されている。その遺跡内での展開などは分からないが、覆土中から出土している弥生土器の破片より当該期のものとして判断している。竪穴6で確認された住居の排水溝などの機能を考慮する必要がある。規模はやや異なるものの、掘り方の形態などはよく似ている。

土坑2（第6図）

竪穴1と重複してR-5グリッドを中心に確認されている。平面形は長方形で、555cm×352cmの規模を測る。規模が比較的大きな竪穴状の遺構であり、深さ40cmほどの掘り込みを有する。壁は、緩やかな傾斜を持って立ち上がる東側の丘陵側とやや直立気味の谷側の西側とでは様相を違えている。覆土は、大半が大沢ラピリ含有のブロックを多く含む人的な埋土であり、故意に埋められている状況を示していた。墓であろうか。

出土遺物は、第6図2のカワラケの破片だけである。その他の遺物は検出しておらず、その具体的な性格については、よく分からないが、土坑2の短辺の方向が後述する溝1のそれとほぼ一致しており、その相関関係を窺うことはできそうである。なお、付属すると思われるピットは北東壁際中央と西側コーナーにある2つのピットであり、長軸45～50cmほどの楕円形で、深さ30cmほどを測るものである。

溝1（第12図）

溝1は、調査区のほぼ中央9～10列グリッドを南西―北東に走る最大幅485cmを測る大規模な溝状の遺構である。それが占有する場所は、舌状に広がる丘陵上の最も高い部分に当り、丘陵下の谷部へ緩やかに下るような状況を示している。そのため、溝底部における南西と北東それぞれ端部の比高差は、13mの距離で42cmを測る。この溝は、さらに北側のM-11グリッド辺りに展開するような位置関係にあるが、M・Nグリッドにおいては、すでに削平されてしまったようで、その痕跡は一斉確認していない。このように、この溝は旧地形に沿って敷設されていることがよく分かるが、それは、富士山の傾斜に沿っているとも言換えることができる。つまり、富士山に向かう溝状のもの、あるいは富士山を起点として流下する溝として捉えることができるわけである。その中で、谷あいには展開する自然の川（沢）とは異なり、丘陵上で人為的に構築されている点は、その用途などの解明する問題に絡んで、注意しなければならない立地を示していると言える。

溝1は、構造的にも非常に特異な状況にあると言える。その深さは、最深部で確認面より60cmを越える数値を測る。断面形は東壁の立上がりやや急な船底形を示す。全体的には、最大

幅150cmを測る底面から緩やかに両壁が立ち上る溝であると言える。ただし、それは、標高が高くなるにつれて底面が浅くなり、その幅も狭くなる規格性には乏しい形態を示すもので、地形に左右された形であることが指摘できる。つまり、谷部の標高が低い部分では深く幅広に掘削して構築していると言える。

溝に付属するものとしては、その底面で確認されたピット列を上げることができる。ピットは、30×40cm～40×50cmほどの規模を測る長方形のもので、70cmほどの間隔をあけて溝底面沿い並ぶ。その配列は、底面の幅が狭い部分で1列、それが広がると2列に並ぶ所も認められる。ピットの掘り込みは、人為的な掘削が困難となる古富士泥流層である礫層までで、いずれのピットも共通しており、地山礫が露呈しているものも認められる。そのため、溝底面からの深さは10～20cm程度で、それほど深くはない。

この溝を覆う土は、底面から35cmを測る人的に埋められた埋土とその上で確認されている自然堆積の土とに大きく2分される。人的な埋土の上には、幅380cmほどの平坦面が形成されており、その面は長期に亘り露呈し日に照らされていたようで、堅固に硬化していた。平坦な硬化面としては、道状の遺構が思い当たり、急な傾斜地に対する切り通しのような部分が想定されるが、荷車の轍などは確認されておらず、明確な判断はできない。ただし、丘陵の地形に沿わないで、それを縦断させる大規模な溝を作る労力を考えると、自分達の生活に密着している施設か、あるいは政治的な構造物として権力者の権威の産物であると考えられることができるが、今回の調査では、前者を想定している。ピット列の評価により柵列などに断定されれば、柵、堀、土塁などが連想され話は変わる。実際、今回に調査では、ピットの実際の掘り込み面はよく分からず、その計測された深さも実態を表しているかどうか疑問である。

この平坦面から上は、やや粒子の粗い暗褐色土に覆われるが、この覆土中には、陶磁器片のほかに溝の西側壁際にやや目立って、拳大から人頭大の火成岩である地山礫の出土が認められる。その中で、西壁沿いで溝1の南側には、径150cmほどの範囲に礫の集積が確認されている。この集積は、溝の中央に向かって緩やかに落ち込むが、視覚的にはほぼ平坦なもので、中央に人頭大の礫をおき、周囲に拳大からそれ以下の小さな礫を集めている。用途についてはよく分からない。ただ、この溝1については、その土層図からも理解されるように、覆土内に小さな溝が最低3条以上はできていることが分かる。この礫の集積がそれらの降雨時に自然流路化する溝に対応して構築された堰のような機能を想定することはできないであろうか。これとよく似たものは、丸ヶ谷戸遺跡でも確認されており、「堰」状の石組みとして判断されている（富士宮市教育委員会1991）。

溝1については、以上のように、実際の溝としての段階と硬化した道状の平坦面を構築した段階、さらにそれが埋まり小溝が窪地伝いに何条も形成された段階の3期に分けて捉えられる。それぞれが同時期であった可能性も考慮しなければならないが、幾度となく人の手を加えられ整備されていた事だけは、明らかなようである。

2. 弥生時代以降の遺物

弥生時代以降の遺物は、調査区の全域で確認されるが、出土の頻度が大きいのは、やはり遺構が検出されているⅢ区である。ただし、遺構単位での出土状態から遺物の一括が問題にでき

るのは、竪穴2の土器群だけであり、その他は小破片としての土器が少量確認されているだけである。以下、時代ごとにその概要を説明する。

A. 弥生時代

弥生時代の遺物として明確に比定されるのは、土器類だけである。滝戸遺跡の土器分類（富士宮市教育委員会1998）に則して、それらを検討してみる。まず、一括性が強い竪穴2の出土土器（第7図）であるが、3・4が複合部の下端を垂下させる広口壺A2に相当する複合口縁壺である。6・7は、折り返し口縁壺であるが、6が広口壺B1、7が広口壺B3にそれぞれ相当する。台付甕は、9が台付甕C、10が台付甕Dに分類される。竪穴2においては、広口壺A・広口壺Bと台付甕Cおよび台付甕Dの共伴が確認されるが、広口壺Aがその器種構成上目立つ点が大きな特徴として指摘できる。加飾性の強い広口壺Aが盛行し一定量出土するのは、弥生時代後期の傾向であり、この組成はそれをよく特徴づけていると言える。2個体出土している広口壺A（複合口縁壺）の内、3は複合部とその上端部および肩部に文様が施文され、よく飾られている様子が分かるのに対して4は複合部の貼付文だけであり、大きな違いを見せている。

この竪穴2から出土している土器群の年代については、雌鹿塚Ⅲ式期の中で捉えている。広口壺は、徐々に短頸化が進行する変化の中で、雌鹿塚Ⅲ式期には口縁部が一旦直立気味に開くものが緩やかな曲線を描いて外反するようになるが、3の複合口縁壺の頸部は緩やかな外反が認められ、この段階の特徴をよく表している。また、肩部に施文されている刺突の横線文・斜縄文（羽状縄文）＋S字状結節縄文・貼付文からなる最も基本的な文様構成は、雌鹿塚Ⅱ式期以降に完成されているものと考えており、それが顕在化するのには、雌鹿塚Ⅲ式期においてである。文様帯の幅を比較的狭くし、それを区画する施文方法は、雌鹿塚Ⅲ式期以降における通有のものである。この3の例は、その典型例である。

このように、その土器組成・器形・文様構成などから雌鹿塚Ⅲ式期の段階が竪穴2に土器類が廃棄された段階として捉えることができるものと思われる。この段階の基準的な一括資料としては、月の輪上遺跡竪穴住居跡58の良好な例（富士宮市教育委員会1994）を上げることができる。

竪穴2に対して、重複関係にありそれよりも古い竪穴6で出土している14と15（第9図）は広口壺A2と広口壺B1にそれぞれ当る。14は複合口縁壺であるものの加飾性がやや弱い点の特徴であろう。15は、小破片ながら折り返し部の刺突が全周することが分かる資料である。刺突文を全周させるものは、弥生時代後期の中でも比較的古い段階の型式的な要素として捉える事ができる。また、この土器は、口縁部内面に縄文が施されている。ただ、この場合、LRとRLの縄文をそれぞれ摩消しにより方形区画している極めて特異な文様である。あまり見ない例である。

この竪穴6と同じ円形の平面形を示す竪穴3から出土している11（第8図）は、斜縄文＋S字状結節文が多段に施文されている壺胴部破片である。このS字状結節文は、外来的な属性として捉えることができる文様であり（鮫島1994）、それが採用されるのは、文様区画の意識がはっきりしてくる雌鹿塚Ⅱ式期からである。そして、それが複数の段を構成するのは、雌鹿塚Ⅱ式期に盛行しており、雌鹿塚Ⅲ式期以降では原則的に1段となる。

土器自体の状態やその出土状況があまり良好ではないため厳密な時間設定はできないが、竪穴3については、雌鹿塚Ⅱ式期の段階が想定される。この段階の基準的な資料としては、泉遺跡第1号溝の出土土器（富士宮市教育委員会1993）を上げることができる。

竪穴5では、その炉跡から二次的に加熱された甕の破片資料である12（第9図）の出土が認められている。これは、炉に関連したものと思われる甕の頸部であり、内外面にハケ整形が認められる。この土器の大きな特徴としては、頸部外面の輪積み痕を残している点を上げる事ができる。滝戸遺跡の分類（富士宮市教育委員会1998）では、台付甕Eとしたもので雌鹿塚Ⅰ式期～Ⅱ式期に一定の数が認められる型式であるとしている。いづれにしても、弥生時代後期（雌鹿塚様式）の中で古段階に確認できるものである。そして、外来系土器としてその系譜を輪積み痕が盛行する東京湾地域に求めている。

B. 奈良時代

遺構に伴う遺物の出土は、極めて不調である。唯一、第6図の1が竪穴1に伴う資料として取り上げることができる。1は口径9.1cmを測る内斜口縁の坏で、その体部外面に無調整としての指押えが残る粗製の土器である。口縁部を屈折させている点から須恵器模倣坏からの系譜を引くようであるが、指押えなど独自の調整技法が認められる。このような例は、比較的西駿河に多く見受けられる。静岡市の神明原・元宮川遺跡（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所1988）などでは、古墳時代後期～奈良時代の主要器種のひとつとして捉えられている。

これ以外としては、20（第11図）の湖西産と思われる須恵器の高台付坏の破片や放射状暗文の認められる土師器坏の破片である23（第11図）などをこの段階の特徴的なものとして上げることができる。

C. 中世

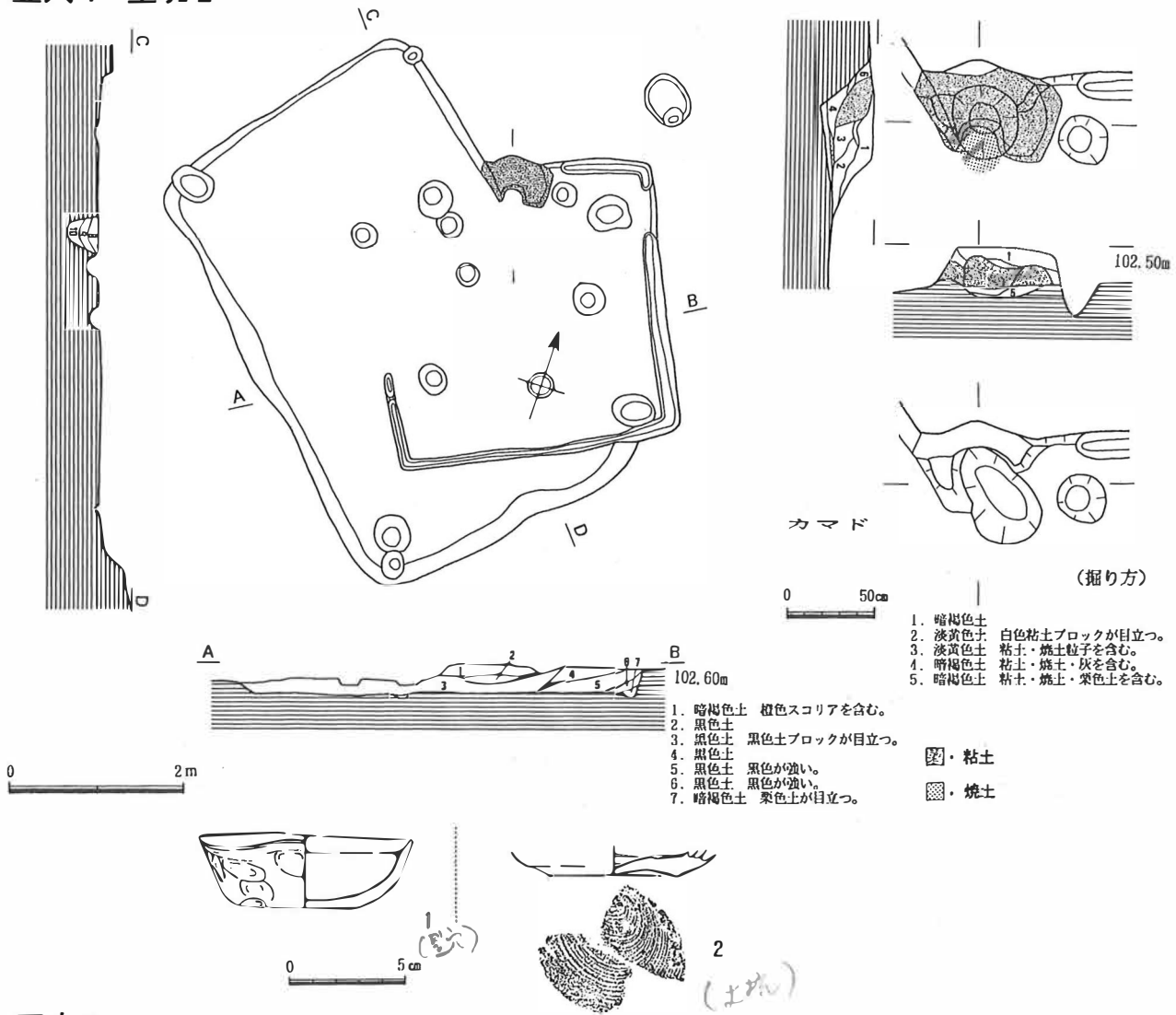
カワラケである2（第6図）が土坑2より出土している。底径5.4cmを測り回転系切りを残す底部破片である。現状では時間的位置づけが難しい。

溝1からは、24（第13図）の瀬戸美濃の摺鉢、27（第13図）の瀬戸美濃の灯明皿、27（第13図）の常滑の甕、35（第13図）の山茶碗が出土しており、その溝1を切る小溝より38（第13図）龍泉窯系の青磁端反碗が出土している。いづれも小破片で全体の分かるものはない。（渡井）

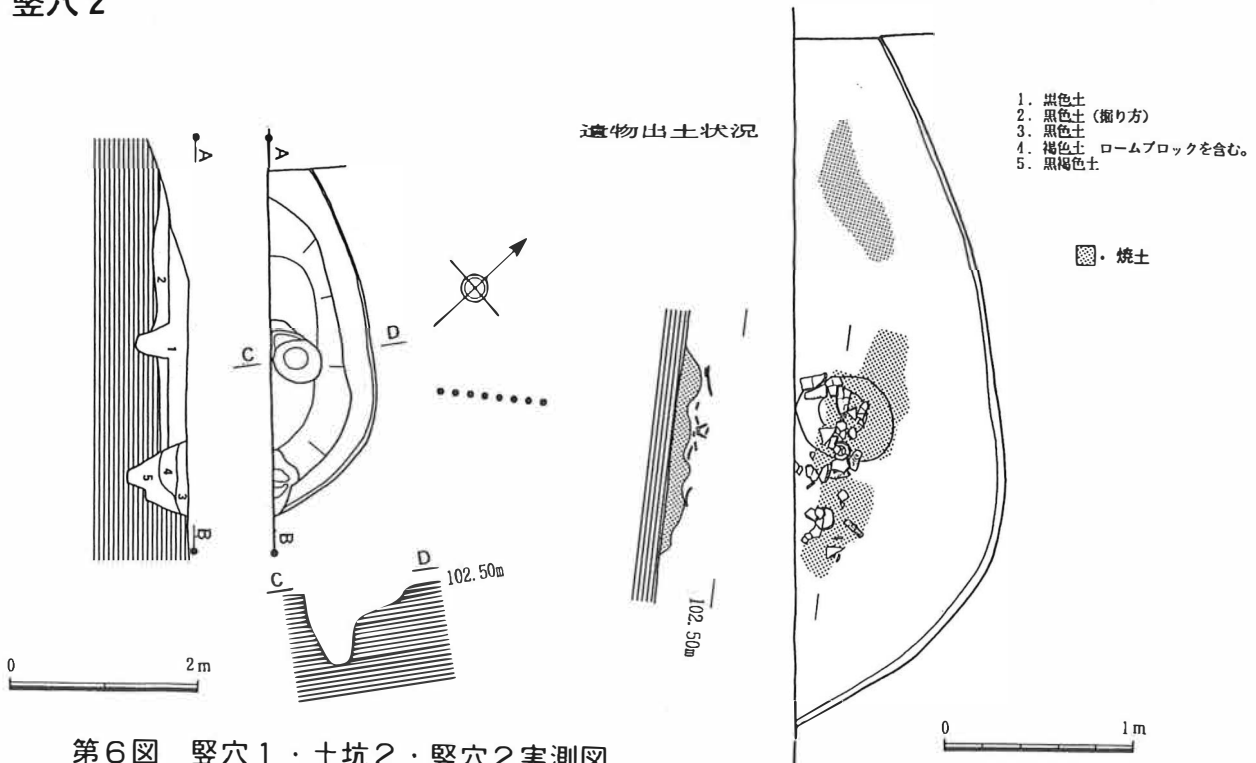
《文献》

- 富士宮市教育委員会 1991『丸ヶ谷戸遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1993『富士宮の遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1994『月の輪遺跡群Ⅳ』
- 富士宮市教育委員会 1998『滝戸遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988『大谷川Ⅲ（遺物編）』
- 鮫島和大 1994「南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統」
『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第12号

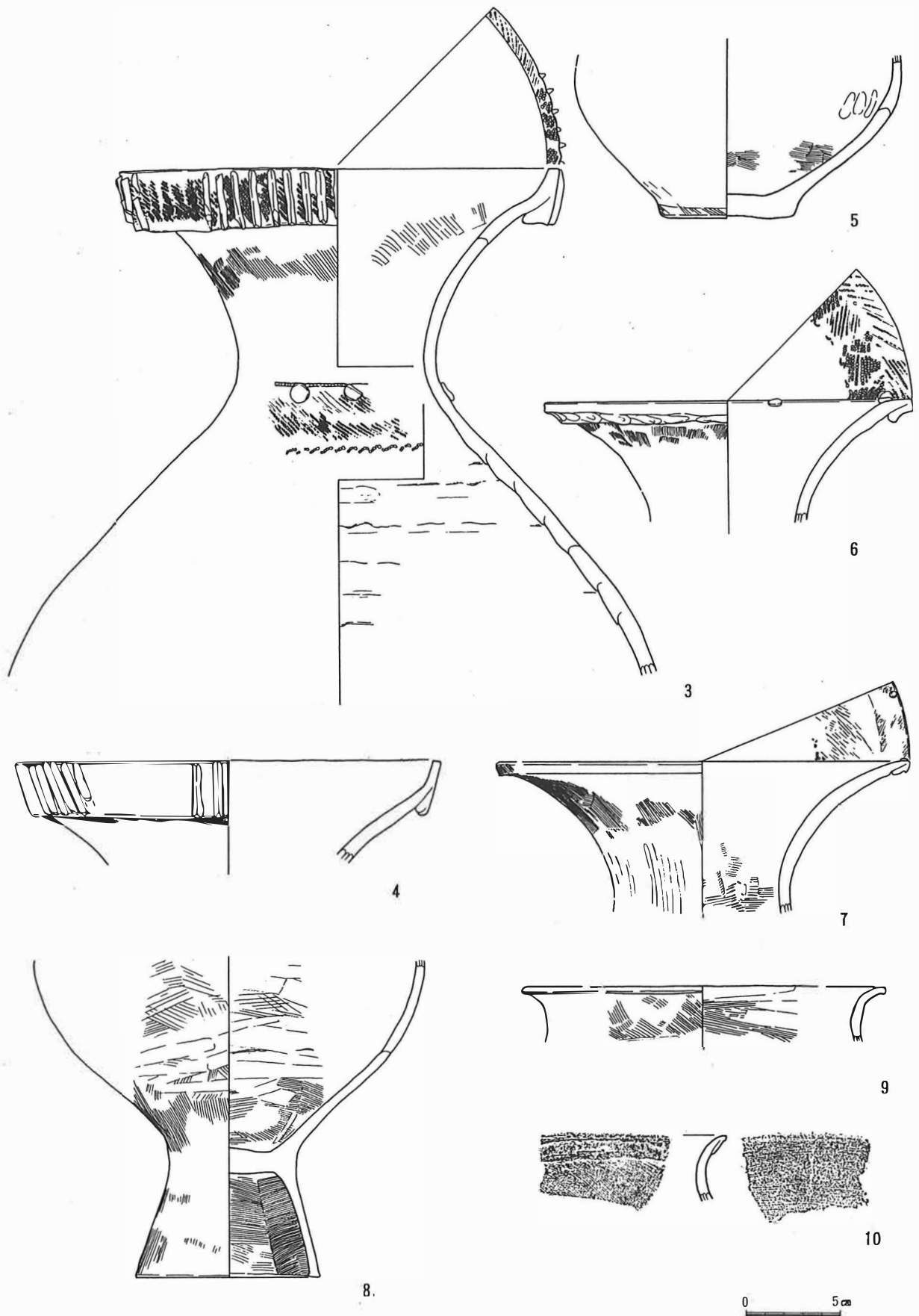
竪穴1・土坑2



竪穴2

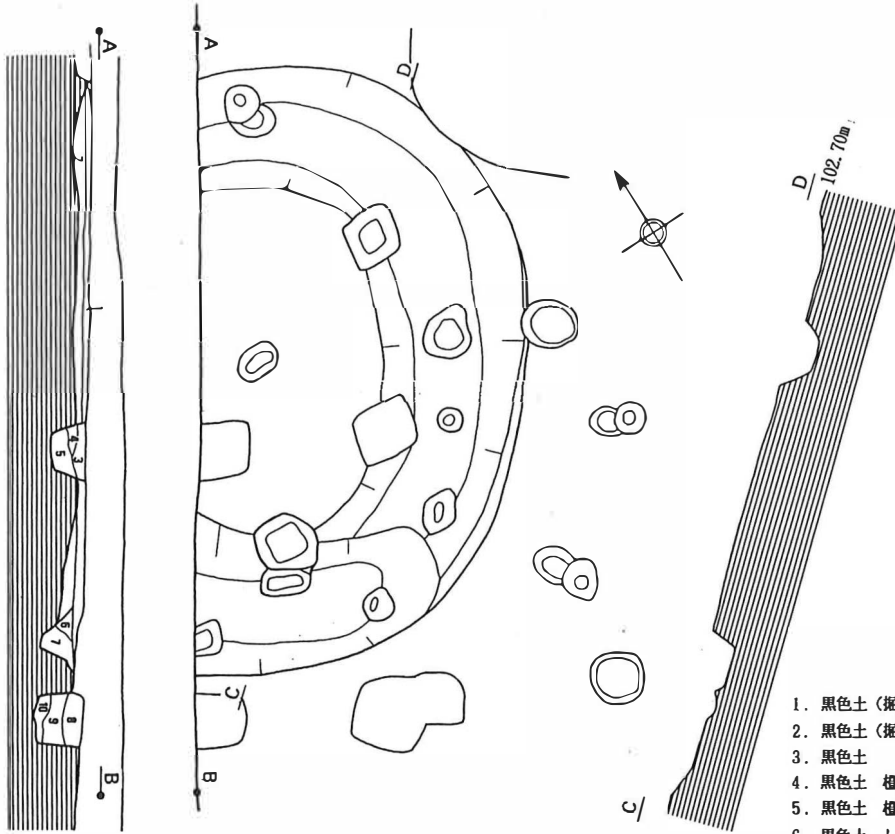


第6図 竪穴1・土坑2・竪穴2実測図



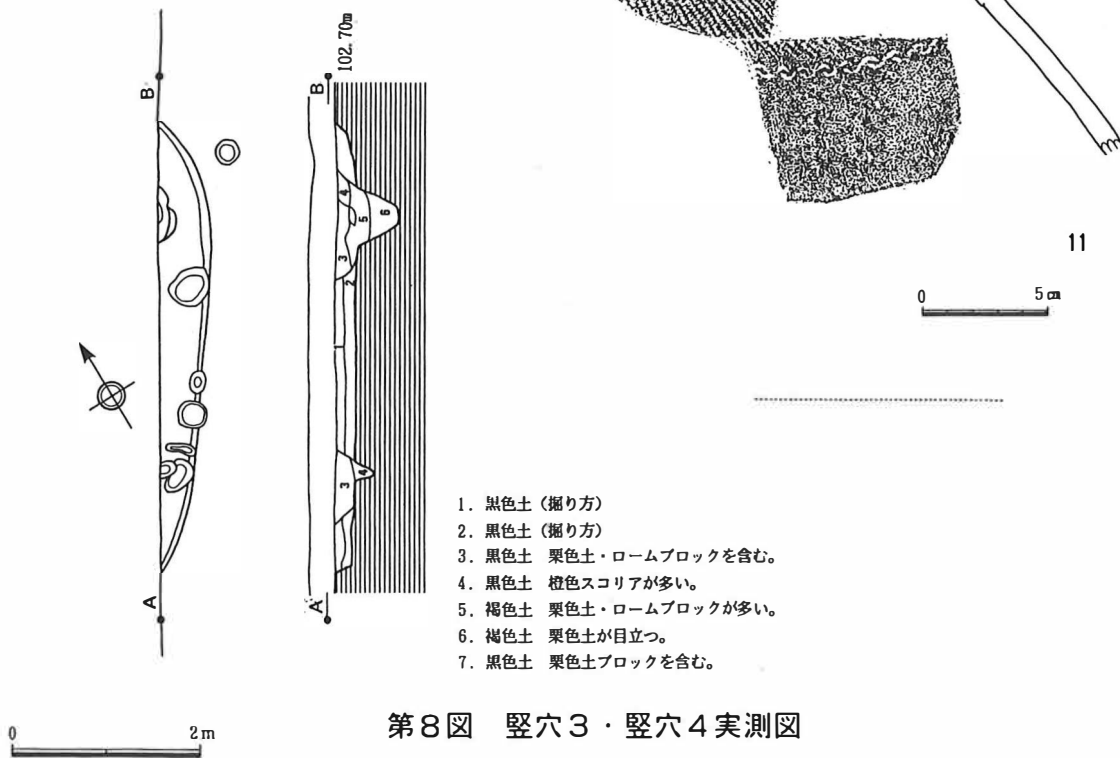
第7图 竖穴2出土土器实测图

竖穴 3



1. 黒色土 (掘り方)
2. 黒色土 (掘り方)
3. 黒色土
4. 黒色土 橙色スコリアが目立つ。
5. 黒色土 橙色スコリアブロックが多い。
6. 黒色土 しまりが弱い。
7. 黒色土
8. 黒色土 粒子が粗い。
9. 黒色土 黒色が強い。
10. 黒色土 栗色土ブロックが目立つ。

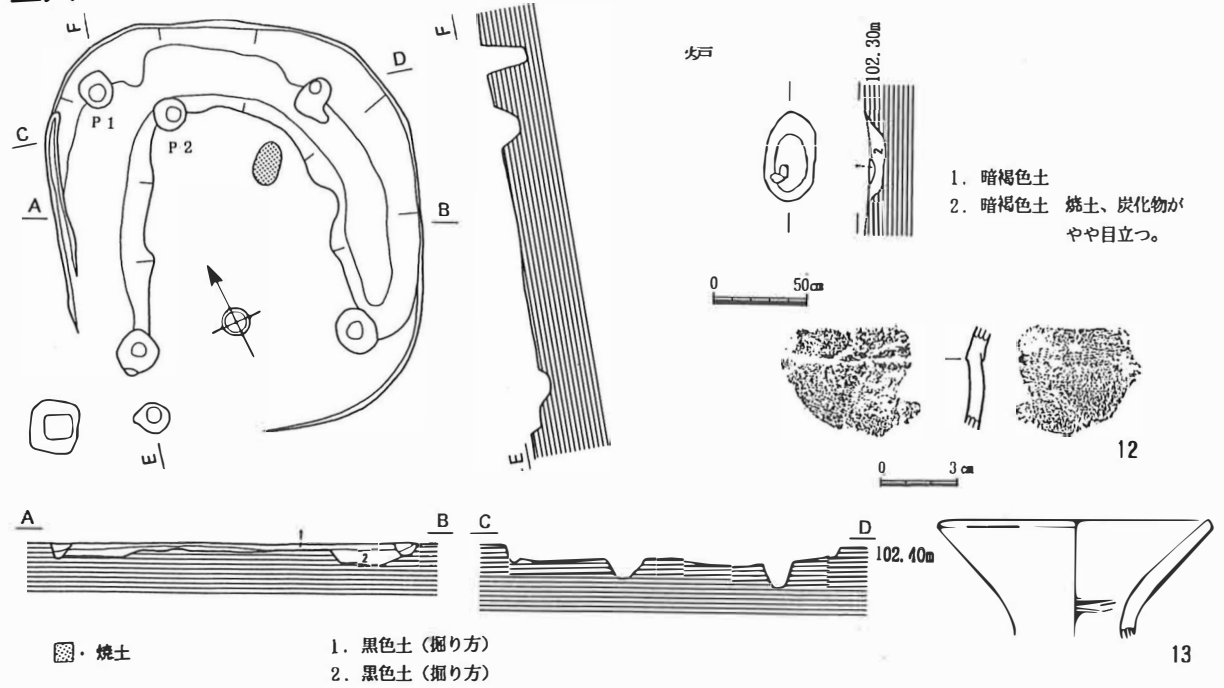
竖穴 4



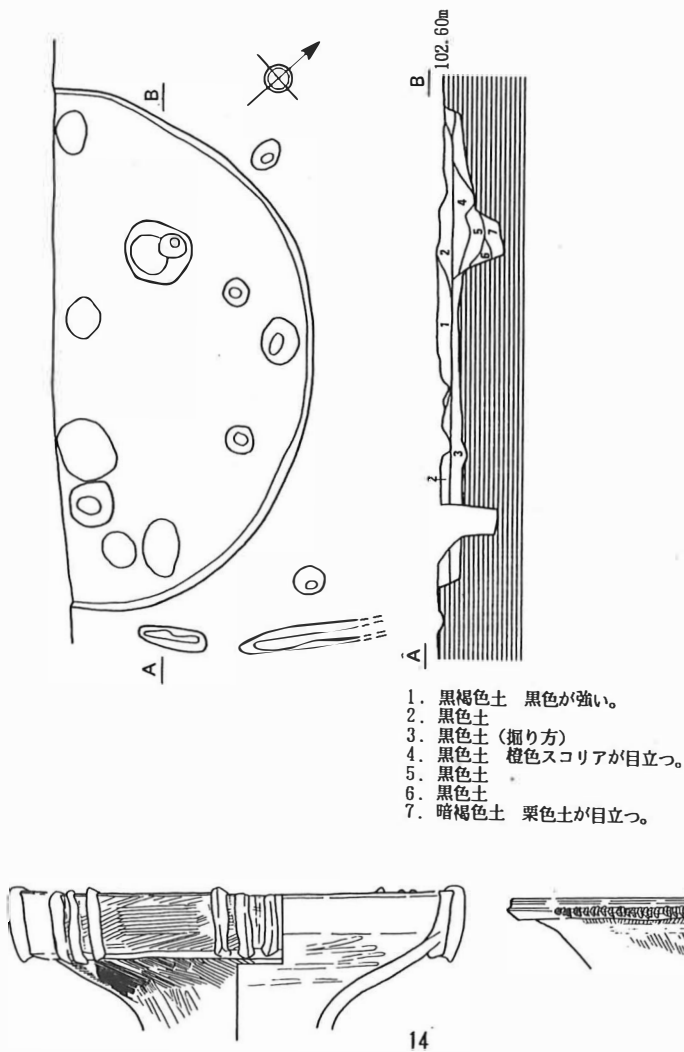
1. 黒色土 (掘り方)
2. 黒色土 (掘り方)
3. 黒色土 栗色土・ロームブロックを含む。
4. 黒色土 橙色スコリアが多い。
5. 褐色土 栗色土・ロームブロックが多い。
6. 褐色土 栗色土が目立つ。
7. 黒色土 栗色土ブロックを含む。

第8図 竖穴3・竖穴4実測図

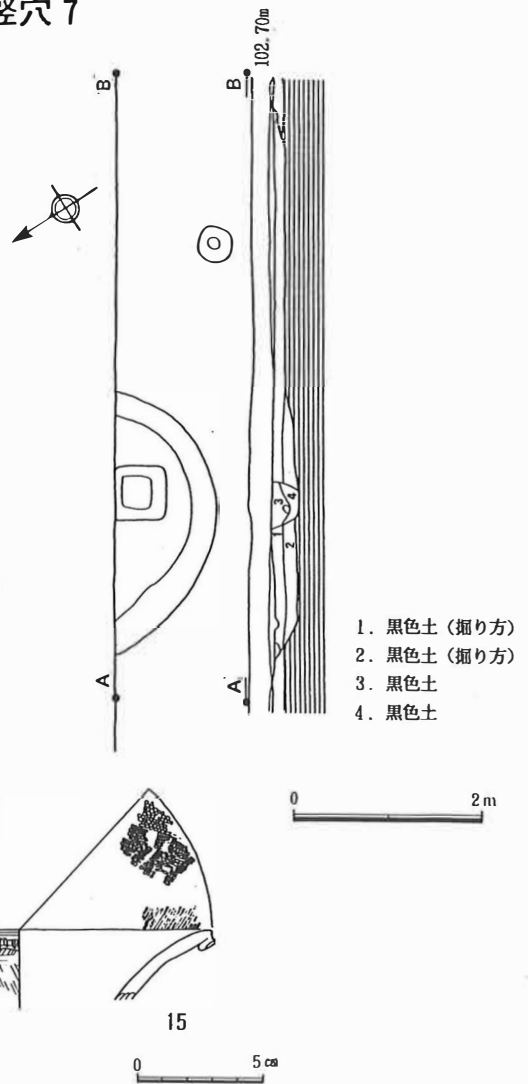
竖穴 5



竖穴 6

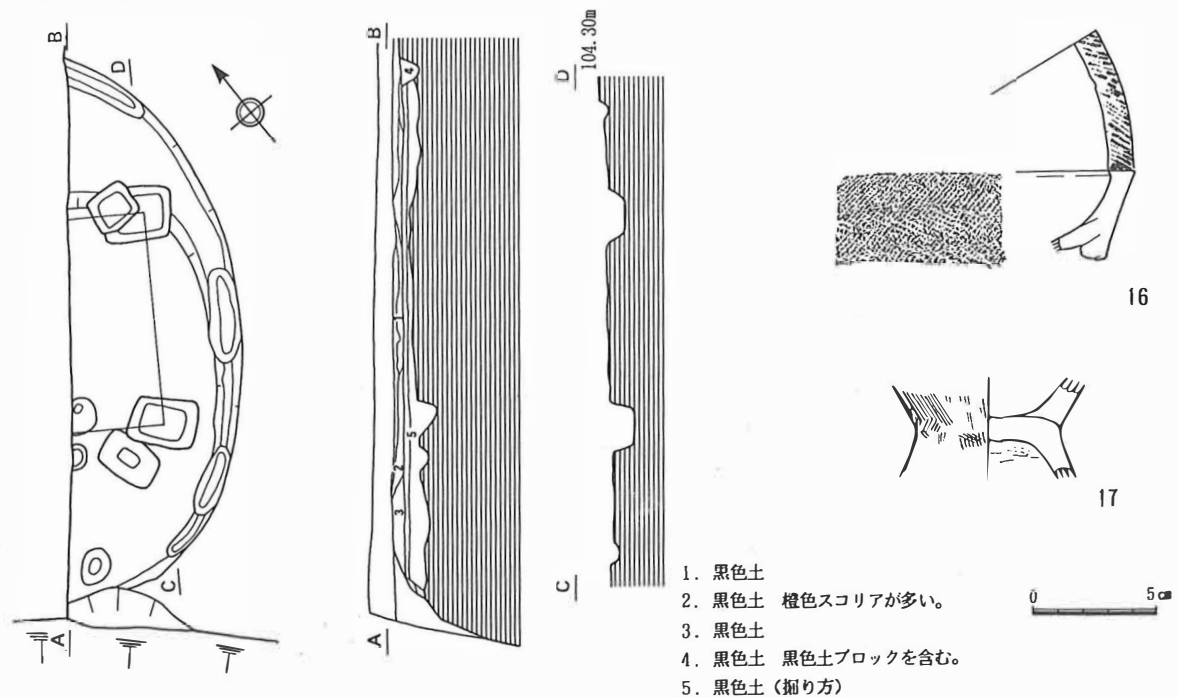


竖穴 7

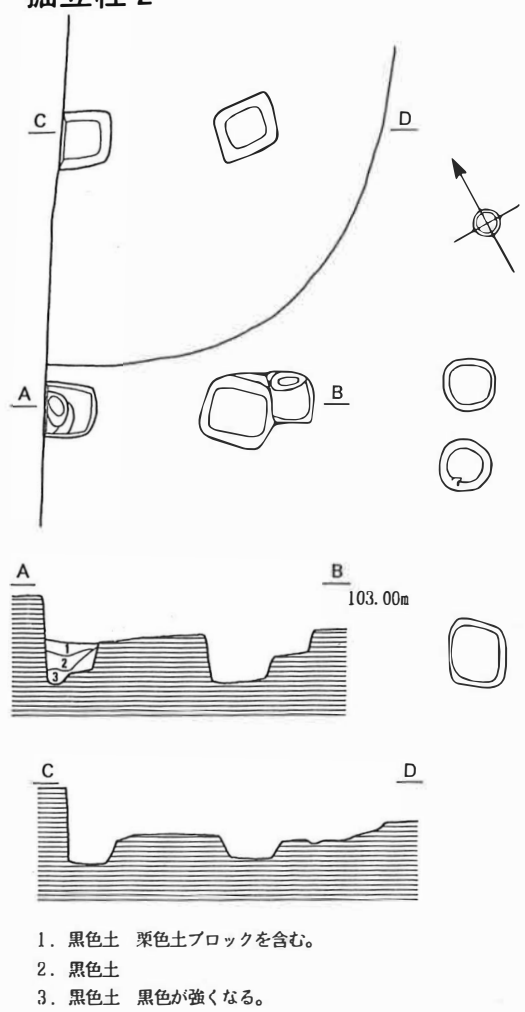


第9図 竖穴5・竖穴6・竖穴7実測図

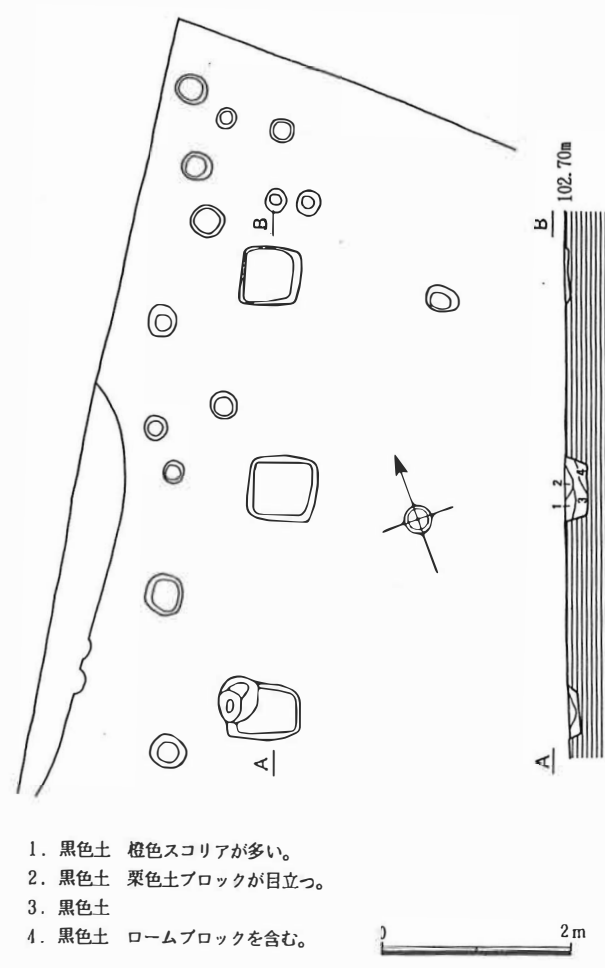
竖穴 8・掘立柱 4



掘立柱 2

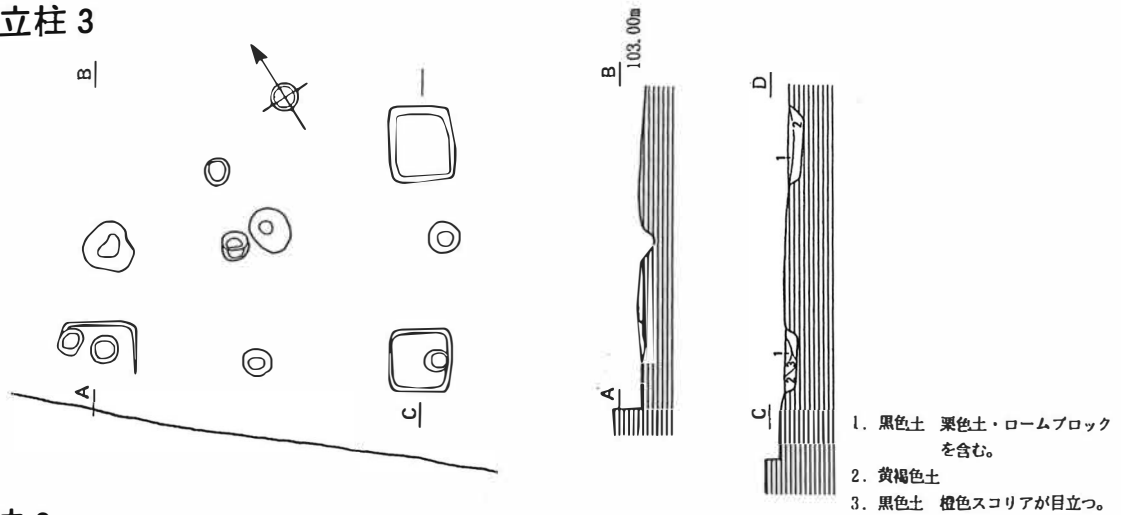


掘立柱 1

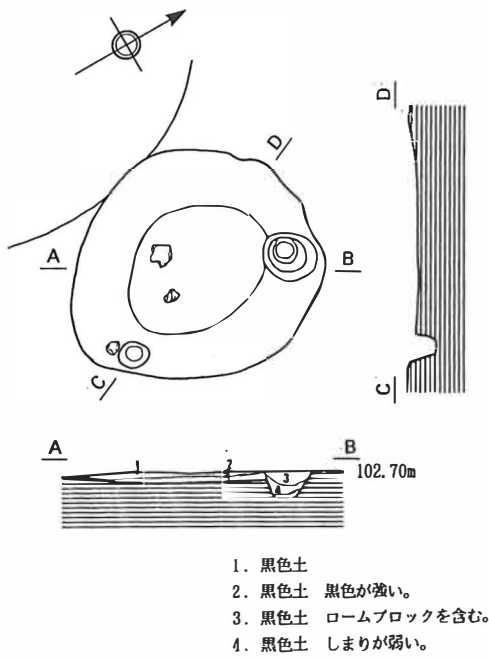


第10図 竖穴 8・掘立柱 1・掘立柱 2・掘立柱 4 実測図

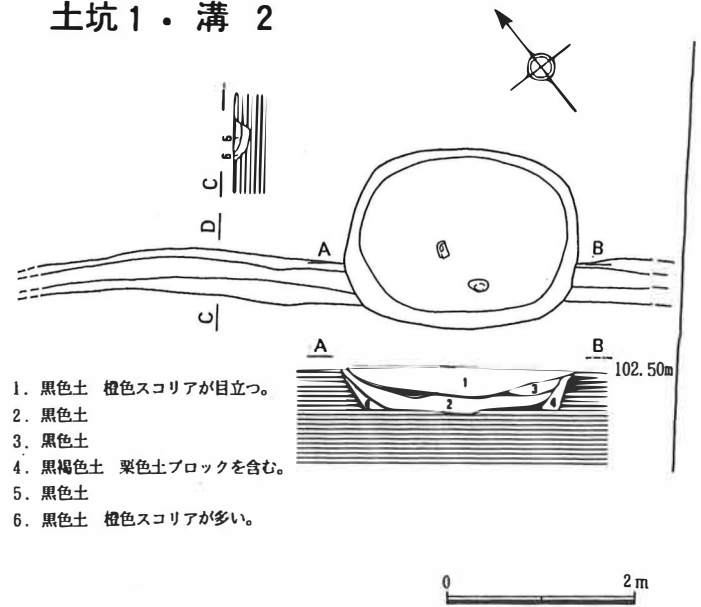
掘立柱 3



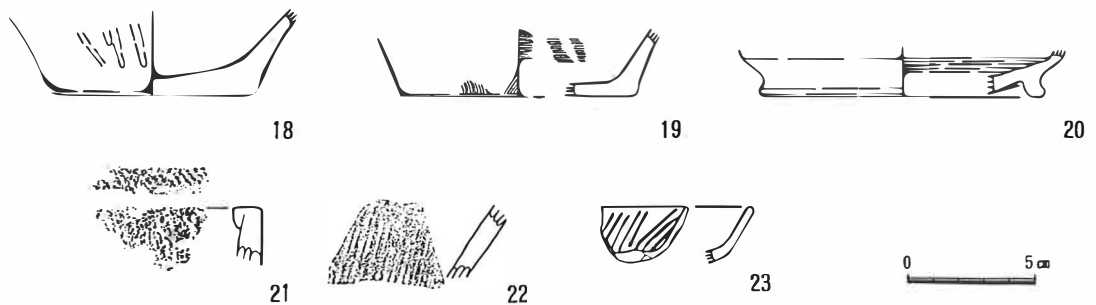
土坑 3



土坑 1・溝 2

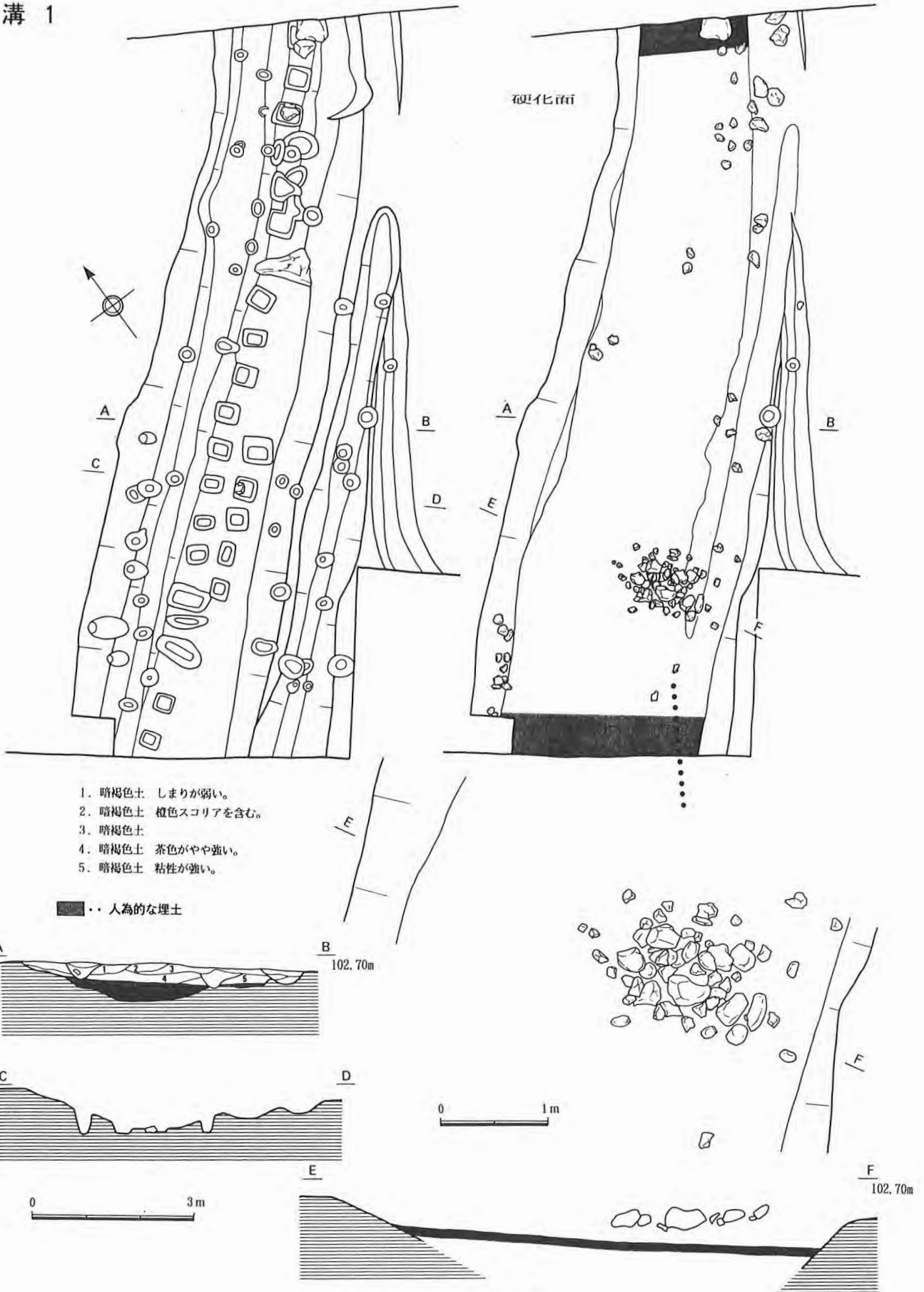


遺構外出土①

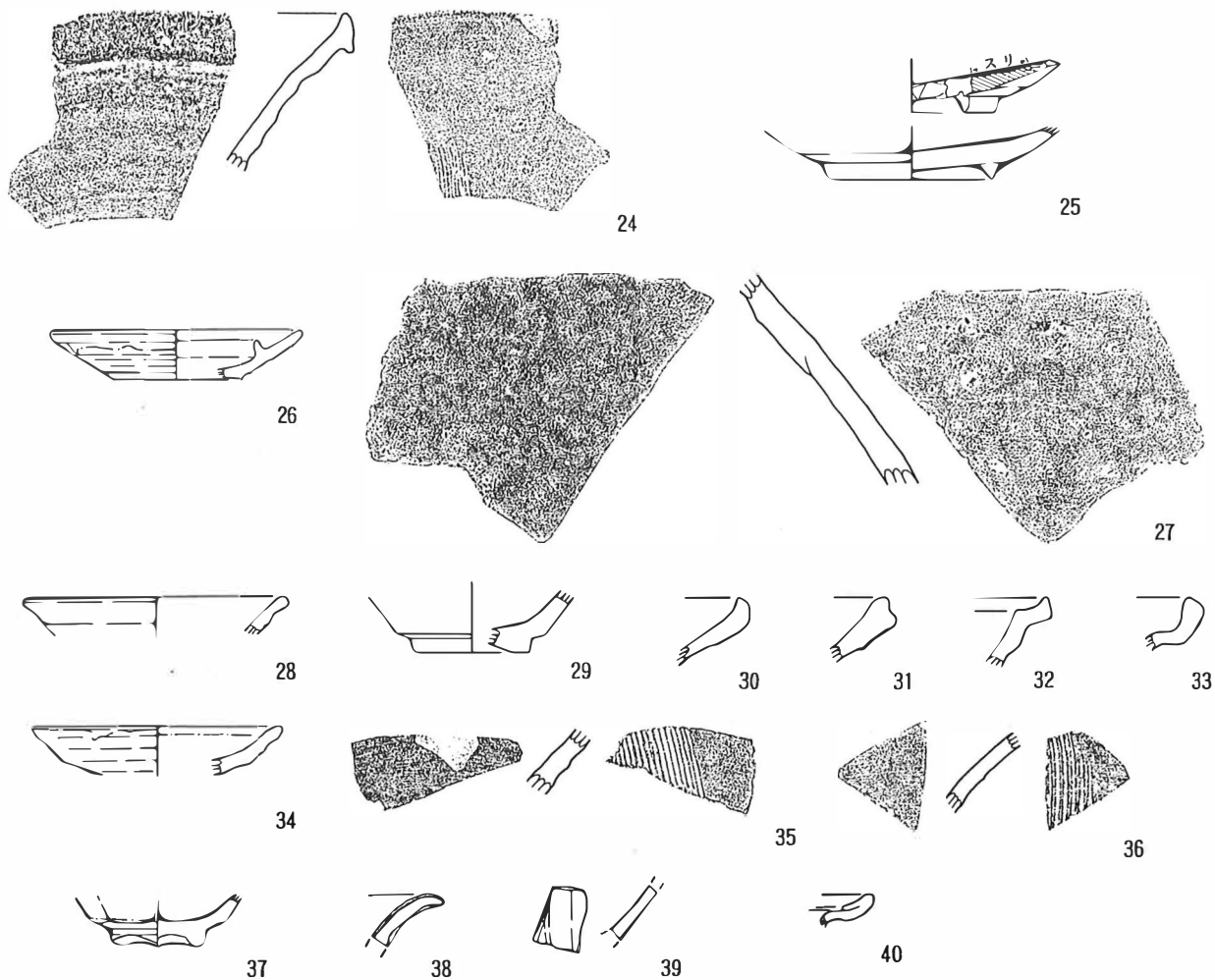


第11図 掘立柱 3・土坑 1・土坑 3・溝 2、遺構外出土 1 遺物実測図

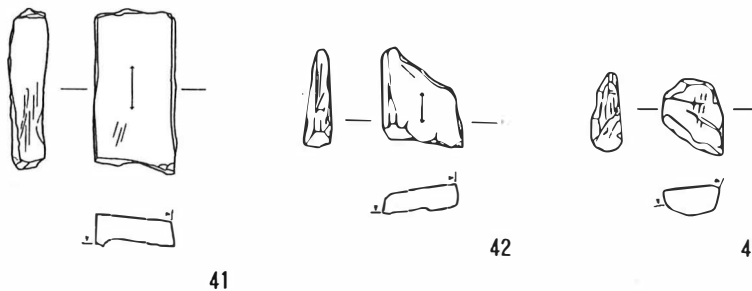
溝 1



第12図 溝1実測図



砥石



0 5 cm

第13図 溝1・遺構外出土2遺物実測図

番号	器種	口径	底径	器高	出土地点	時代	備考
1	坏	9.1	—	3.3	竪穴1	奈良	土師器
2	皿	—	(5.4)	—	土坑2		カワラケ
3	壺	23.4	—	—	竪穴2	弥生後期	
4	壺	(22.5)	—	—	竪穴2	弥生後期	
5	壺	—	7.0	—	竪穴2	弥生後期	
6	壺	(19.5)	—	—	竪穴2	弥生後期	赤彩
7	壺	(22.0)	—	—	竪穴2	弥生後期	
8	壺	—	9.7	—	竪穴2	弥生後期	
9	壺	(19.2)	—	—	竪穴2	弥生後期	
10	壺	—	—	—	竪穴2	弥生後期	
11	壺	—	—	—	竪穴3	弥生後期	
12	壺	—	—	—	竪穴5	弥生後期	炉内出土
13	壺	(10.7)	—	—	竪穴5	弥生後期	
14	壺	(17.0)	—	—	竪穴6	弥生後期	
15	壺	(15.3)	—	—	竪穴6	弥生後期	
16	壺	—	—	—	竪穴8	弥生後期	
17	壺	—	—	—	竪穴8	弥生後期	
18	壺	—	(8.5)	—	Q-4	弥生後期	
19	壺	—	(9.4)	—	Q-12	古墳~奈良	土師器
20	坏	—	(11.1)	—	溝1	奈良	須恵器

番号	器種	口径	底径	器高	出土地点	時代	備考
21	壺	—	—	—	R-4	弥生後期	
22	壺	—	—	—	溝1	古墳	内面擦消
23	坏	—	—	—	R-11	古墳~奈良	内面暗文
24	摺鉢	—	—	—	溝1	16C前半	
25	碗	—	(6.6)	—	溝1	12C後半	山茶碗
26	皿	(10.3)	(5.3)	(2.0)	溝1	近世	灯明皿
27	壺	—	—	—	溝1		常滑
28	椀	(10.4)	—	—	R-6	16C後半	
29	天目茶碗	—	(4.6)	—	P-15		初山
30	摺鉢	—	—	—	H-3	15C後半	
31	摺鉢	—	—	—	Q-15	近世	
32	摺鉢	—	—	—	S-7	近世	
33	摺鉢	—	—	—	Q-12	近世	
34	緑釉皿	(10.1)	—	—	R-4	15C後半	
35	摺鉢	—	—	—			
36	摺鉢	—	—	—	Q-4		志戸呂
37	白磁面取坏	—	3.8	—	I区	15C前半	
38	青磁端灰碗	—	—	—		15C前半	
39	青磁碗	—	—	—		13C後半	蓮弁文
40	碗	—	—	—			伊勢型

第2表 土器・陶磁器観察表

3. 縄文時代の遺構

本調査区は富士山から潤井川に向かって傾斜する丘陵の緩斜面上に位置し、その東西には小規模な谷が刻まれている。本調査区は後世の削平を受け、表土を剥ぐとすぐⅣ層の橙色土の露出する部分が全体の半分以上を占め、竪穴式住居についてはⅡ層とⅢ層が、土壌についてはⅣ層が遺構確認面である。

西側谷部のトレンチ調査においてはⅡ層とⅢ層の下に淡黄色粘土層であるⅥ層が確認され、現在においても調査区西側周辺は地盤がゆるい地帯となっているが、縄文時代早期当時においてこの状況が保たれていたかどうかは本調査区内では未確認である。対して東側谷部トレンチでは粘土層は確認していない。

竪穴式住居跡は東側の谷へと続く緩やかな斜面地に単独で、土壌は調査区西側にまとまりをもって構築され、集石・礫集積遺構はそれらの間に分布する。

A. 竪穴式住居（第14図）

東西2.65×南北3.05mの円形というより方形に近い形状をなす。長軸は南北方向にある。壁高は約20cm程度残存し、南壁はⅢ層の堆積時に流失している。

床面はⅤ層を上面とし、貼り床などの施設は確認されなかった。床面上には焼土が固まりをもって散らばり炭化物が混在していたが、黒曜石剥片は遺構覆土中において出土し、床面直上では出土していない。本竪穴式住居跡の覆土上層には板状に剥離した火山岩を主体に礫がまとまって分布しているが、これらは谷地形の流れ込みに伴うものである。

遺構に伴う柱穴は12本分検出した。深さは床面より30cm前後、径は20～40cmの規模である。

遺構覆土からは第Ⅳ群第2類C種と縦位山形押型文を施文する土器・無文土器、磨石が1点（第39図34）出土し、本竪穴式住居跡は該期に属する可能性が高い。（佐野）

B. 土 壌

石敷遺跡では土壌が9基確認されている。調査区北側のL-4～8グリッドにかけて分布する土壌2～6の一群と、調査区南側に土壌7～9が確認されており、これらは102mの等高線の傾斜に沿うようでもあり、本遺跡における一連の土壌群であると見られる。

各土壌については次の通りである。

土壌1（第15図）

P-11グリッド東端で確認される。標高102.25m付近に位置する。規模は長さ123cm、幅70cm、確認面からの深さが40cmである。長方形に近い形状をしており、断面も角張っており、土壌内の最上層は黒褐色土で下層に従ってロームの混入が目立つ。長軸はN-13°-Wの方向に向いている。土壌内から出土した遺物は土器片が20点のうち相木式土器が3点確認され、黒曜石の小片が2点である。

土壌2（第15図）

L-8グリッド中央で確認される。標高102.85m付近に位置する。規模は長さ130cm、幅75cm、確認面からの深さが28cmである。やや崩れた輪郭であるが楕円形の形状をしており、断面はバスタブ形である。土壌内最上層は黒褐色土であり、基底部に近づくにつれてロームの混入

が目立つようになる。長軸はN-12.5°-Wの方向を向いている。土壙内から出土した遺物は石鏃が1点と磨石が1点、相木式土器が3点、黒曜石片2点である。

(cm)

名称	長径	短径	深さ	備考
土壙 1	123	70	40	長方形、相木式土器
土壙 2	130	75	28	楕円形、相木式土器、石鏃、磨石
土壙 3	175	84	43	楕円形
土壙 4	158	70	32	長円形
土壙 5	138	90	20	ヒョウタン形
土壙 6	110	55	20	楕円形
土壙 7	138	79	30	長方形
土壙 8	—	—	—	
土壙 9	185	84	35	タマゴ形
集石 1	25	25	—	
集石 2	119	65	10	

名称	長軸	短軸	深さ	備考
竪穴 9	305	265	20	方形に近い不整形

〈竪穴9内ピット計測表〉

ピット	径	床面からの深さ	ピット	径	床面からの深さ
P 1	21	(26.5)	P 7	30	25.7
P 2	31	14.5	P 8	15.5	(20.2)
P 3	20	(31.5)	P 9	17	(25)
P 4	15	21.5	P 10	20	28
P 5	16	28.3	P 11	42	(34)
P 6	17.5	(23.9)	P 12	23.5	41.4

第3表 縄文時代遺構一覧表

土壙3 (第15図)

M-5グリッドの東端でわずかにM-6グリッドにかかる地点で確認される。標高102.70m付近に位置する。規模は長さ175cm、幅84cm、確認面からの深さが43cmである。楕円形の形状をしており、土壙2を深くしたような断面である。土壙内はスコリア混じりの黒褐色土が堆積しており、上層は柔らかく、下層は硬くしまりがある。壁面際にローム混じりの黄褐色土が堆積している。長軸はN-46°-Wの方向を向いている。土壙内から出土した遺物は土器片が1点と凝灰岩質の剥片が1点である。

土壌4 (第15図)

L-4中央東側で確認される。標高101.70m付近に位置する。規模は長さ158cm、幅70cm、確認面からの深さが32cmである。長円形であるが北側の輪郭はやや角ばった形状をしており、断面はバスタブ形である。土壌内の最上層は黒褐色土であり、基底に向けて徐々にロームが混入し、レンズ状に層が堆積している。長軸はN-29.5°-Eの方向を向いている。土壌内から出土した遺物は凝灰岩質の剥片が1点、黒曜石の小片が2点である。

土壌5 (第15図)

L-6グリッドの西端でL-5グリッドにややかかる地点で確認される。標高102.60m付近に位置する。規模は長さ138cm、幅が最も広い箇所90cm、確認面からの深さが20cmである。歪なヒョウタン形の輪郭をしており、断面はパイ皿形である。二層に分かれており、上層がスコリア混じりの黒褐色土で、下層がローム混じりの黄褐色土である。基底面からは岩盤が露出している。長軸はN-26°-Eの方向を向いている。土壌内から出土した遺物は土器片が1点と黒曜石片が8点である。

土壌6 (第15図)

L-7グリッド南端で確認される。標高102.80m付近に位置する。規模は長さ110cm、幅55cm、確認面からの深さが20cmである。楕円形の形状をしていて、断面はバスタブ形である。二層から成り、上層は黒褐色土で下層はローム混じりの黄褐色土である。長軸はN-75°-Eの方向を向いている。土壌内から出土した遺物は黒曜石片が2点である。

土壌7 (第15図)

S-6グリッド北端で確認される。標高101.90m付近に位置する。規模は長さ138cm、幅79cm、確認面からの深さが30cm程度である。角に丸みを帯びた長方形の形状をしていて、断面はバスタブ形である。土壌内上層部の15cm程の堆積は自然堆積土であり、壁面北側にみられるピットも住居址に絡んだものであるとみられ土壌との関係は無いものである。覆土下部は黒褐色土であり、下層に従いロームの混入が目立つ。基底面上に10cm程の厚さで黄褐色土が堆積している。長軸はN-78°-Eの方向を向いている。土壌内からは遺物が検出されなかった。

土壌8 (第16図)

調査区南側セクション壁のQ-7杭がある地点で確認される。標高102.15m付近に位置する。規模や形状は端部のみの確認であるため、推測不可能である。土壌の覆土上尺に拳大の礫が見られる。その出土状況から直接的な関連は薄そうであるが、他の土壌では認められないものである。

土壌9 (第16図)

Q-8グリッド西側で確認される。標高102.40m付近に位置する。規模は長さ185cm、幅84cm、確認面からの深さが35cmである。長く伸びたタマゴ形の形状をしていて、断面は鉢形である。最上層は黒色土であり、10cm程下より粒子が粗くなりロームブロックを含むようになり、下層に従いロームの混入が目立つようになる。長軸はN-38°-Eの方向を向いている。土壌内からは遺物が検出されなかった。

調査区内で確認された土壌を総監すると、先に述べたようにこれらは遺跡における土壌群として捉えることができる。しかし、個々の長軸の向きや形状に統一性は見られない。1、2、

3は北西方向に長軸が傾き、4、5、6、7は北東方向へ長軸が傾いている。およその土壌の規模は成人の人間が屈葬されるには十分な空間を保持している。(小野田)

C. 集 石

本遺跡内ではいくつかの石のまとまりが見られたが、使用痕のない礫はこの地域周辺で見られるものが多いという石材の鑑定の結果を考え合わせ、石の分布が密であり、遺構と判断できるもののみを図示した。調査区の周辺は河川の存在が想定できるが、礫は円礫ではなく、角礫がほとんどである。

集石1(第16図)

本遺跡の遺物包含層であるⅡ層・Ⅲ層中で確認した。石材は火山岩質の角礫で、製品はなく、火を受けた痕跡も認められない。掘り込みは確認できなかったが、石の重なり状況からは、何らかのピット状遺構に沿って積み重ねられていたと考えられる。

縄文時代早期に属する。

集石2(第16図)

縄文時代早期の竪穴式住居(竪穴9)の西約5mの位置にある。Ⅱ層・Ⅲ層中で検出された。集石1と同じく明瞭な掘り込みは確認できなかった。

30cm四方、厚さ3・4cmほどの板状に割れた火山岩が7枚並び、上に拳大よりやや大きい程度の火山岩が積み重なっている。これらは表面に鉄分が付着して赤く変色したものが多いが、直ちに火を受けた痕跡とは判断できない。使用痕のない礫がほとんどで、1点磨石が含まれる。

縄文時代早期に属すると考えられる。

D. 礫 集 積 (第17図)

磨石・石皿などの砂岩系の石器や火山岩質の角礫が、東西約6m南北約6.5mの範囲に混在する。重量のある石皿などは径3mの範囲内に集中し一部が積み重なる傾向があるが、その配置には規則性は見られない。また、周辺には掘り込みも確認できず、焼土や炭化物などの火の使用の痕跡もなかった。石の分布からやや離れた位置にはピットが1基検出されたが、ピット内遺物は黒曜石剥片のみである。

北側に分布する石は富士黒層中から検出され、大ぶりの石皿など南側に分布するものはその底面がⅣ層中で検出されたが、遺物の分布から見ると、両者とも同一の縄文時代早期に属すると考えられる。

本礫集積周辺は本調査区内でも遺物の集中地帯であり、黒曜石片をはじめ土器片が満遍なく出土している。なかでも特筆できるのは蛇紋岩製玉類の出土が2点見られたことである。約5mほどの間隔を持ち、他の遺物と混在して出土している。

礫集積の北には土壌群が広がるが、礫集積の範囲と土壌群とは重複しない。これら遺物の出土状況と考え合わせ、礫集積の性格を決めるひとつの根拠となるのではなかろうか。(佐野)

4. 縄文時代の遺物

本調査区では従来この周辺において確認されている縄文時代早期から前期の包含層である富士黒土層を2細分したが、層自体に厚みがなく、またお互いに同系統の土質であるため層位別での遺物の組成を据えることはできなかった。遺物の分布は土器・石器とも混在し、全体的に見れば谷に向かうにつれ疎になる（第42・43図）。

土器1624点、石器226点、黒曜石片1792点、総数3642点を数えた。

A. 土器

土器の接合関係は25固体ほどにみられたが、復元可能なものは1固体のみであった。また、近接した接合関係を示すものが多く、最長で20m程度である。

本遺跡では以下の6群に分類可能な土器群が出土している。主に縄文時代早期中葉に比定されてきた土器群である。表採資料等には該期より新しい土器もあるが、少量で細片であるため記載対象から除外した。

第Ⅰ群 撚糸文土器

第Ⅱ群 縄文土器

第Ⅲ群 押型文土器

第1類 細久保式土器併行

第2類 相木式土器併行

第Ⅳ群 沈線文土器

第1類 田戸上層式土器併行

第2類 判ノ木山西式土器併行

第3類 その他の沈線文土器

第Ⅴ群 無文土器

第1類 条痕調整のみられるもの

第2類 条痕調整のみられないもの

第Ⅵ群 その他の土器

第Ⅰ群 撚糸文土器（第18図1～21）

撚りがRで、異方向に施文するものがほとんどである。施文単位が重複するものとしがないものがある。口縁部・胴部破片が出土した。器壁は1cm前後で、胎土には石英・長石の細粒と有色鉱物を含み、少量の繊維を含むものと含まないものがある。また、外面だけでなく割れ口にも煤の付着するものが多く見られる。25点中21点を図示した。

第Ⅱ群 縄文土器（第18図22～27）

縄文にはLRとRLがあり、異方向に施文する。器壁は1cm前後である。胎土には有色鉱物と石英・長石を含むが、繊維を含まない。第18図22の口縁部には横位の沈線が巡っているのがみてとれる。6点すべてを図示した。

第Ⅲ群 押型文土器（第19図28～第25図140）

第1類 細久保式土器併行（28～37）

<a種>

原体条痕を施文するもの。口縁部と胴部破片が出土し、4点中3点を図示した。口縁部内面には縦位の原体条痕、外面には山型状に施文する。胎土は繊維は混入するが鉱物の混入物が少なく、密である。

<b種>

楕円押型文を施文するもの。6点すべてを図示した。いずれも器壁5mm前後の破片である。小片のため詳細は知れないが、湾曲の緩い破片は斜位方向であり、湾曲のややきつい破片は横位・異方向重複施文の傾向がある。胎土にはすべて雲母を混入し、石英・長石の細粒と有色鉱物を含む。

第2類 相木式土器併行（38～140）

分類にあたっては守屋分類(守屋1997)を参考にし、横位の沈線・山形押型文・押引文等を組み合わせて施文しているものと、本遺跡土器の出土様相から山形押型文、押引文のみ施文するものも本分類に充てた。

相木式土器は、口縁部と胴部に隆帯状の盛り上がりを作り出し、それらを分帯として全体の文様構成が複数段構成となることが知られている。本遺跡内においてもいずれも破片資料ではあるが、その様相を窺い知ることのできる多くの資料の出土をみた。

本分類土器は口縁部から胴部にかけてのものが主体を占めるが、一部胴部下破片に山形押型文を施文するものがみられ、これらは一様に波長が大きい。口縁部はいずれも外反し、その胎土は肉眼でみえる範囲内では、少量の繊維と他に比して大ぶりの石英・長石を多く含み、雲母・角閃石などの有色鉱物を含まないという共通点がある。204点中102点を図示した。

<a種>

口縁部に数条の横位の沈線を引くもの。内面には横位の山形押型文を施文する。守屋分類相木式a種に対応する。

沈線を引くことによって隆帯状に盛り上がった部分には、へら状工具・棒状工具による連続の凹圧を加えるものが主体を占め、胴部上半にかけては縦位の山形押型文を施文するものと鋸歯状文を施文するものがある。第19図38の外面には隆帯を添付し、その上に連続凹圧を施している。

口縁部が波状口縁と確認できるものもあるが（第20図46～48）、これらは他の相木式に比べ器壁がかなり薄く、またやや小型になると思われる。また、沈線によって隆帯状の盛り上がりを作り出すというより、横位の沈線の上に斜位の沈線を引いたという感のあるもの（第19図43・44）も見られる。

<b種>

口縁部に横位の山形押型文を施文するもの。その下部には横位の押引文あるいは沈線がめぐり、胴部には山形押型文を施文する。本文類では前者をb1種、後者をb2種とした。口縁部内面には両種とも横位の山形押型文を施文する。守屋分類相木式b-1種・b-2種にそれぞれ対応する。

b 1

口縁部の横位山型押型文の下部に横位の押引文を施文するもの。押引文の下、胴部上半には山形押型文を施文し、縦位・横位とも見られる。守屋分類相木式b-1種に対応する。

b 2

口縁部の横位山形押型文の下部に横位の沈線を引き、隆帯状の隆起を作り出すもの。隆起した部分にはへら状工具・棒状工具による連続の凹圧を加えるものと、何もしないものがある。沈線の施文方法には口縁部横位山型押型文の上に重ねて沈線をめぐらすもの（第20図56・58、第21図60～63）と、山型押型文と沈線の施文域を区別して施文するもの（第20図54・55・57・59、第21図64～67）の2種類ある。

<c種>

口縁部に突帯を貼り付けるもの。突帯は口縁部上部よりやや離れた位置にある。突帯の上端には横位の沈線を施し、突帯と口唇部には竹管状工具により刺突を加える。守屋分類穂谷式a種に該当する。本遺跡においては第21図70の1点のみの出土であり、竹管状工具による刺突などは、本遺跡出土の他の相木式土器には見られない。

<d種>

口縁部に縦位の山型押型文を施文するもの。口縁部から胴部にかけても縦位の山形押型文を施文する。守屋分類穂谷式b種に該当する。

口唇部にへら状工具による刺突を持つものと、持たないものの2種類が見られる。

<e種>

相木式土器併行の胴部以下破片を対象とする。分類の便宜上、口縁部文様を一部含むが口縁部全体の文様構成の不明なものも対象にした。本遺跡出土資料には文様構成の分帯となるような破片の出土が多い。

e 1

山形押型文を縦位に施文するもの。山形押型文を施文する土器の中で主体を占める。出土部位は胴部・底部付近ともに見られる。

山形押型文は無文帯を挟むものと密接に施文するもの、玉抱き山型文となるものとならないものが見られるが、前者は工具端を残すものに多い。また、山形のくずれて直線状になるもの（第23図96～98）も見られる。

文様構成の分帯となる、横位沈線によって作り出された隆帯状の盛り上がりには、口縁部破片で見られたように凹圧を加えるものが主体を占めている。凹圧の形態には棒状工具・へら状工具によるもの、口縁部破片にはみられなかった指頭圧痕状の3種類が見られる。また、隆帯の作り方には2通りあり、横位沈線を1本引くことによってできるその両側に隆起した部分をつくりだすものと、横位沈線を2本引くことによってその間に隆起した部分をつくりだすものが見られる。

e 2

山形押型文を斜位に施文するもの。縦位施文のものに比べて胎土の混入物が少なく、硬質なものが多い。緩やかに外反する屈曲部をもつ破片が含まれ、本遺跡穂谷式b2種を構成する可能性が高い。ほとんどが胴部破片であるが胴部下破片も1点見られる（第24図119）。

e 3

山形押型文を横位に施文するもの。いずれも胴部下部破片であり、無文帯を挟む。第24図123はやや斜位気味であるが、本文類に含めた。

e 4

押引文を施文するもの。多くが破片資料であるが、鋸歯状に展開するのであろう。胴部破片には数条の横位の沈線によって隆起した部分に、ヘラ状工具による縦の刻みをくわえる。土壌2覆土において1個体分と考えられる破片3点（第24図127・129・132）が出土している。

e 5

縦位山形押型文と鋸歯状文を組み合わせるもの。鋸歯状文は押引文で施されるもの、太沈線で施されるものがある。また、山形押型文と鋸歯状文を左右に並べて施文するもの（第24図133・134）と縦位山形押型文を施文してからその上に重ねて鋸歯状文を施文するもの（同図135・136）がある。

e 6

文様構成の分帯となる隆帯状の盛り上がりを含む底部以下が無文となるもの。隆起部分には棒状工具による凹圧、ヘラ状工具による刻みを施す。以上より、相木式土器の文様要素の1つと判断した。

第Ⅳ群 沈線文土器（第25図141～第30図246）

第1類 田戸上層式土器併行（141～172）

いずれも破片資料であり、貝殻腹縁文や沈線によって鋸歯状文などを施文するもの、胴部上半に縦位区画を設けるものを本分類にあて、文様構成によって以下の4つに大別した。口縁部はa種は内湾傾向であり、以下b～d種は外反傾向のあるものが主体を占める。部位は胴部上半以上のものがすべてである。46点中29点を図示した。

<a種>

貝殻腹縁文と沈線文を施文するもの。胎土は肉眼で見える範囲では、少量の繊維と本遺跡相木式土器に比べ微細な石英・長石、有色鉱物を含み、硬質である。内面はすべて丁寧になでられている。

文様構成は、貝殻腹縁文と沈線文とを平行に並べて施文するもの（第25図141～150）と、沈線文間に貝殻腹縁文を異方向に施文するもの（同図151・152）の2種類見られる。

口唇部にはヘラ状工具による刺突を施すものとそうでないものがあるが、口縁部上端にはすべて竹管の背面による刺突を施しているため、施文具は貝殻腹縁文と合わせて3種類の工具が使用されている。

<b種>

貝殻腹縁文のみを施文するもの。本類a種と似かよった胎土的特徴がみてとれる。

口唇部には刺突が施されるもの、何も施されないものがある。また、口縁部上端には竹管の背面・腹面による刺突が施されるもの、刺突は施されず貝殻腹縁文のみのものがある。口唇部の刺突は貝殻腹縁分より凹凸の幅が狭く、異種工具と考えられ、本類a種と同じく3種類の工具が使用されていると推測される。

頸部から胴部破片においては貝殻腹縁文を鋸齒状または羽状に展開するものも見られるが、多くは小破片のためその展開は不明である。

< c 種 >

沈線文を鋸齒状に施文するもの。部位は胴部上半のものである。鋸齒状の沈線の下に条痕あるいは擦痕を残さず、内面も丁寧になでられているなどの調整方法から判ノ木山西式土器とは区別した。

< d 種 >

胴部上半の文様帯の中に縦位区画を設けるもので、その類例は長野県新水B遺跡にみられる。本遺跡出土資料は刺突列を口縁部上端と胴部中ほどに施し、それらを結び器形を分割する刷毛状工具による沈線を垂下し、それを中心に弧線文を施文するもの（第26図170・171）と、縦位区画を境に上向きの矢羽上に沈線を引くもの（同図172）がある。

口縁部は前者は外反し、後者は内湾傾向である。また、第26図172は口唇部に幅の狭いへら状工具による刺突が見られ、3種類の施文具を使用する点で本類 a・b 種と共通する。

第2類 判ノ木山西式土器（173～225）

判ノ木山西式土器は半截竹管状工具を主要な原体とし、その腹面や先端によって胴部上半に格子目文をはじめ綾杉状の文様や刺突列を施文するもので、長野県判ノ木山西遺跡出土資料をもとに阿部氏によって細分されている（阿部1997）。本遺跡においては沈線の施文の下や内面には地文状に条痕や繊維束などによる擦痕が見られるものが主体を占めるが、内外面ともに見られるものは5分の1程度である。

口縁部は外反するものが主体を占め、胎土には繊維と石英・長石の細粒、有色鉱物を含む。特に雲母を混入するものの割合が他に比べて高く、繊維も多い。94点中52点を図示した。

なお、分類にあたっては阿部分類を参考にした。本分類 a～d 種は阿部分類第1類に、f 種は第2類に、g 種は第3類にそれぞれ対応し、e 種、h 種は初出である。

< a 種 >

半截竹管状工具を主要な原体とし、胴部上半に文様を描くもの。阿部分類第1類（阿倍1997）に該当する。

a 1

単線によって格子目文を施文するもの。内外面とも条痕がみられるものが3点のうち2点を占める。口縁には刺突を施さない。3点とも他の判ノ木山西式土器に比べても、また他の土器に比べても、かなり薄手の部類に入る小型の土器である。

a 2

半截竹管状工具によって格子目文を施文するもの。原体の性質により2本で1単位の格子目になっているもの（第26図176～第27図186）、多截のもの（第27図187～194）がある。

口縁部には口縁部上端に半截竹管状工具の腹面による刺突を施すものと施さないもの、胴部においては同じ刺突を施し、この刺突までが格子目文の下端になるもの（第27図186・191）と、刺突を越えても格子目文を施すもの（同図185、192・194）がある。また、格子目間にも刺突を加えるもの（第26図182、第27図190）があるが、その工具は格子目と同一工具と異種工具の両方が見られる。

< b種 >

外面に綾杉状文を施文するもの。阿部分類第1類（阿部1997）に該当する。

施文原体は2本割れのもの（第27図195～197）と多截のもの（同図198～203）に分けられる。口縁部には竹管の背面による刺突を加えるものと、そうでないものがある。口唇部にはヘラ状工具あるいは棒状工具による刺突が施されるものと、面取り状になでたまま無文のものがあるが、後者が主体を占める。内面はすべての破片において丁寧になでられて無文である。器形は1点のみ（同図202）内湾する。

< c種 >

縦位の沈線と斜位の沈線を組み合わせて施文するもの。阿部分類第1類（阿部1997）に該当する。

多截に割れた原体を用いて施文するものが主体を占め、口縁部には沈線と同じ原体で刺突を施すものと、何も施さないものがある。

口縁は緩やかに外反するが、やや直立気味である。

< d種 >

外面に3本に割れた原体を用いて縦位の沈線を施文するもの。阿部分類第1類（阿部1997）に該当する。

口縁部には刺突が施さないものと、沈線と同じ原体を用い、3つを1単位として刺突を施すものがある。内面には条痕は見られないが、外面に見られるものが1点ある。

< e種 >

多截に割れた原体を用いて横位の沈線を施文するもの。横位の沈線間などには2つで1単位の刺突を施すもの（第28図211～213、215）と施さないもの（同図214）がある。雲母の混入が目立つ胎土的特徴から同図211・212は同一固体と考えられる。

本種は竹管状工具を使用する点、口唇部外面に刺突が施される点、地文に擦痕が使用される点が判ノ木山西式土器との共通要素である。

< f種 >

刺突文を施すもの。刺突は2つで1単位となる。また、これらは一様に胎土に雲母の混入が目立ち、横位の沈線が見られない点を除けばe種と非常によく似ている。

< g種 >

縦位の隆線をもつもの。阿部分類第3類に該当する。1点のみの出土である。隆線には沈線で文様が刻まれ、長野県判ノ木山西遺跡出土資料に類似するものがある。他の判ノ木山西式土器に比べ厚手で、胎土的特徴は相木式土器のものによく似る。

< h種 >

繊維束のような刷毛状の工具により彫りの浅い沈線を施文するもの。なで消しを行った擦痕調整の上に重ねて幅1～2mmほどの細い条線を異方向に施す。口唇部と口縁部上端には、口縁部端を挟んでハの字に刺突を施すもの（第28図220・221）、口縁部のみ竹管状工具の腹面による刺突を施すもの（同図222）がある。

出土部位は口縁部・頸部のみであり、内面に条痕を残すものと残さないものの両方が見られるが、前者が主体を占める。

本種は竹管状工具を使用する点、口唇部外面に刺突が施される点、地文に擦痕が使用される点が判ノ木山西式土器との共通要素である。

第3類 その他の沈線文土器（226～246）

上記分類に当てはまらないもの、あるいは小片によりその構成が不明なものを含め、以下に大別した。36点中21点を図示した。

<a種>

沈線が鋸歯状に展開するもの。口縁部・胴部破片に見られる。

第29図230は横位沈線を横切るように斜位の沈線を引く点は本遺跡出土相木式土器 a 種に類似するが、内面に横位山型押型文を施文しない点で除外される。同図229は横位沈線の上部に器面に対して斜め方向からの刺突を横位に施し、内面には条痕を施文する。類例は岐阜県小の原遺跡（岐阜県教育委員会1991）にみられる。同図226は口縁部に横位の沈線、その隆起部分に凹圧、胴部に文様帯の分帯が見られることなどは相木式土器に最も類似点が多い。

<b種>

横位沈線により隆起した部分に凹圧を加えるもの。口縁部・胴部破片に見られ、凹圧は棒状工具による。内面に山型押型文が施文されないため相木式土器からは除外した。

<c種>

刷毛状工具によって縦位の波状文を施文するもの。出土部位は口縁部・頸部・胴部・底部破片に見られ、胴部上半を区画する刺突などは見られない。第29図237は口縁部上面にヘラ状工具による斜めの刺突が見られる。内面には波状文を施文するもの、格子状の沈線を施文するものがある。

胎土には細かい繊維が多く混入され、また石英・長石などの他の押型文土器や沈線文土器に普遍的に見られた混和材が少ない。

第V群 無文土器（第30図247～第34図302）

第1類 条痕調整の見られるもの（247～274）

口縁部から底部までみられ、ほとんどが胴部破片である。259点中27点を図示した。

<a種>

幅3～5mmの条痕がみられるもの。口縁部上端に刺突を施すものが主体を占める。内面に調整を施すものと施さないものとある。口縁部・頸部・胴部・底部とすべての部位に見られ、口縁部は外反あるいは直立し、緩い波状口縁になるものがある。胎土の特徴は本遺跡田戸上層式土器併行と本遺跡判ノ木山西式土器のものに近似し、雲母を含むものもある。

<b種>

幅5～8mmの条痕が見られるもの。本分類土器はほとんどが繊維を多量に含み、厚手で軽量であるが、第32図269のみ少量の繊維と雲母を含み、胎土の特徴を異にする。内面に調整を施すものと施さないものがあり、出土部位は頸部と胴部破片がある。

第2類 条痕調整の見られないもの（275～302）

本群第1類と同じく口縁部から底部破片に見られるが、ほとんどが胴部破片である。920点中27点を図示した。

< a種 >

少量の繊維を含むもの。胎土にはやや石英・長石の細粒の混入が目立つ。口縁部の外反するもの、内湾するもの、直立するもの、口縁部上端に突帯を貼り付けるものがある。また、口唇部には刺突・凹圧・刻みが見られるもの、無文のもの両方がある。

刺突・刻みについてはヘラ状工具、凹圧については棒状工具・竹管状工具が使用されている。点数的には刺突・凹圧が均衡した出土数であり、比べて刻みは少ない。

< b種 >

繊維を多量に含むもの。厚手で軽量である。a類に比べ胎土に石英・長石の混入が少ない。第Ⅴ群第1類b種の条痕を施すものと胎土がよく似ている。口縁部が外反するもの、突帯を貼り付けるもの、口縁部上端をなでて隆起部分を作り出すものがある。

第Ⅵ群 その他の土器（第34図303～318）

刺突文が見られるものと、沈線で文様を描くもの。刺突は竹管状工具によるものが主体を占める。第34図303～305の口縁部破片はいずれも厚みがあり、本遺跡出土の他の土器型式とは異なる様相である。

同図307～311は判ノ木山西式と共通する要素はあるものの、器壁の厚さ、直立気味な口縁部の形態などやや異質の感があり、本分類に含めている。

同図312～316はやや先の鋭い竹管状工具により2本で1単位の沈線を施文するもので、いずれも器壁が1cm強となり、他の土器に比べ厚手である。胎土においては有色鉱物を含まず、本遺跡出土判ノ木山に西式より本遺跡相木式の胎土に近く、判ノ木山西式土器からは除外した。

25点中15点を図示した。

（佐野）

《主要参考文献》

- 阿部芳郎1997「判ノ木山西式遺跡出土土器の分類と編年」『シンポジウム押型文と沈線文 本編』
小笠原永隆1999「中部地方を中心とする縄文時代早期中葉土器編年の展望—「シンポジウム」の再検討を中心とした若干の予察—」『長野県考古学会誌87・88号』
岡谷市教育委員会1998『間下丸山・禅海塚遺跡』
岐阜県教育委員会1991『小の原遺跡・戸入障子墓遺跡』
田中 総1999「中部地方における縄文早期沈線文土器群の終末について—関東以西における早期前半から後半への移行期の問題—」『長野県考古学会誌87・88号』
長野県教育委員会1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村 その3—昭和51・52年度』
長野県考古学会縄文（早期）部会1997『シンポジウム押型文と沈線文 資料集』
富士宮市教育委員会1986『黒田向林遺跡』
守屋豊人1997「中部地方における押型文土器後半期の様相」『シンポジウム押型文と沈線文 本編』
領塚政浩1997「常世式土器の再検討—常世Ⅰ式土器の成立過程と編年的位置をめぐって—」『シンポジウム押型文と沈線文 本編』

B. 石器

発掘調査によって得た石器は226点で、その内容は石鏃124点、尖頭石器3点、石錐9点、石錘1点、玉類2点、石皿8点、磨石39点、特殊磨石11点、凹石3点、敲石26点である。

本遺跡出土の石器をみると、石鏃が全石器の5割以上を占めることと、打製石斧の出土がないことが特徴である。これは同地域で高山寺式土器を良好に出土する黒田向林遺跡（富士宮市教育委員会1986）の石器比率にちかく、縄文早期中葉遺跡に共通する石器構成といえるが、これと同様に石皿や、その対用石器である磨石、敲石の出土頻度も高いことももう一方の特徴といえる。ともすれば、中期遺跡よりも高いこのような石器の出土傾向は単純に中期的食物調理をあてるだけでは説明はつかないようである。

また、出土する石器の大半が欠損資料であることも縄文石器の遺存のあり方に共通するものであるが、石皿をはじめ、多くの石器が礫集積付近で破壊されたような状況は後面に接して広がる墓壙群と関わりをもつものか、興味あるところである。

(1) 石 鏃（第35・36図）

石鏃は124点が出土し、半数近くが完形、略完形で、その遺存率は通常より高いように思われる。基部の形状によって3類にされ、Ⅰ類—円基式1点、Ⅱ類—平基式1点、Ⅲ類—凹基式96点、不明26点に分けられる。Ⅲ類—凹基式が大半を占め、挟り込みの深浅によって細分されるが、緩く湾入するものが一般で、深く挟られたり、角をもつものはまったく無いことが特徴に思われる。もっとも多い資料はⅢ—2—a類の32点、次いでⅢ—2—b類の22点である。これは側辺が緩く湾曲する資料であるが、これにⅢ—4—a、b類の刺突部に尖起を付けるものが21点認められ、これも本遺跡の特徴的な石鏃にあげられる。素材には透明感のある良質な黒曜石が使われ、調整も丁寧で概して大形品が多い。出土区は66点、およそ半数が礫集積付近である。

Ⅰ類 円基式		(No.1)	1点
Ⅱ類 平基式		(No.2)	1点
Ⅲ類 凹基式	1. 側辺が直線のもの	a. 正三角形 (No.3, 4)	2点
		b. 二等辺三角形 (No.5~15)	11点
	2. 側辺が緩く湾曲するもの	a. 正三角形 (No.16~47)	32点
		b. 二等辺三角形 (No.48~69)	22点
		c. 長二等辺三角形 (No.70)	1点
	3. 側辺が円形に近いもの	(No.71~77)	7点
	4. 刺突部に尖起をもつもの	a. 正三角形 (No.78~94)	17点
		b. 二等辺三角形 (No.95~98)	4点
不明		(No.99~124)	26点
		合計	124点

(2) 尖頭石器（第37図）

頭部が尖頭状となるものが3点認められるが、一般に言う尖頭器には当たらないと判断され

る。1は第1次剥片を片側から調整したもので左側面に刃部が作出されている。刃部のあり方はナイフ形石器に似る。2も1同様の素材と調整がされるもので、これも左側のみ刃部が作出され、右側面は敲打を重ね完全につぶされている。3は尖頭部よりも基部に刃部を見出せるような小形石匙かエンドスクレイパー的な様相を呈した石器である。3点とも出土区は礫集積の範囲内で早期中葉の遺物であると理解している。

(3) 石 錐 (第37図)

石鏃と法量を同量とする小形の石錐を9点みるが、その機能上、錐部を欠く例が6点と多い。はっきりとしたつまみ部をもつⅠ類が3点、片面に第1次剥離面を残したまま錐部を三角形状に作出するⅡ類6点に分けられる。全て黒曜石を素材にして、原面を残すことに特徴をもっている。出土区は6点が礫集積付近である。

(4) 石 錘 (第37図)

礫岩製の円礫に縄掛けの刻みが長軸1対に作出されている。軟質な素材のためか縄掛け部は摩耗して擦り切り風になっている。表面にφ0.5cm程の孔が円錐状に穿たれている。単品で礫集積より出土したものである。

(5) 玉 類 (第37図)

竹管状の蛇紋岩製の玉が礫集積の範囲より出土している。丁寧なミガキと穿孔がされている。集石の祭祀的な性格を示すものと興味を持たれる。

(6) 石 皿 (第37図)

石皿は全てが欠損しているが、1、2が接合されて完形となる。これは礫集積において破損した後に遺存されたものと判断される。使用面が窪むⅠ類6点、平坦なⅡ類2点に分けられ、Ⅰ類が軟質な砂岩、礫岩、Ⅱ類が硬質な安山岩が選ばれている。6を除く7点が礫集積とその周辺出土で、集石との因果が問われる。

(7) 磨石類 (第38図)

完形1点、略完形1点の他は全て欠損する。磨石類と称されるように、磨るだけでなく敲きも併用され、使用法によって4類に分けられる。Ⅰ類は磨りだけのもので4点、その比率は少ない。Ⅱ類は磨りと敲きを併用するもので30点、資料の80%以上を占める。これらはさらに側面だけに敲きをもつⅡ-1類22点、側面と平面に敲きをもつⅡ-2類8点に分けられる。Ⅱ-2類は安山岩、火山岩などの硬質の素材が選ばれることが多い。Ⅲ類は側面の極端な使用によって石鱗状となるもので3点をみる。長軸側面を機能面にすることは特殊磨石と同様であるが、機能面の幅が厚く、作業の対象物に違いがあるように思える。平面の磨りも曲面的なローリングではなく、往復運動によるものである。Ⅳ類は凹みを併せ持つ2点が認められ、凹みは2穴が連結している。敲きの延長によるものではなくはっきりと凹みが意識されている。

(8) 特殊磨石 (第39・40図)

全て欠損する。5がグリッド内で接合するから付近での破壊が予想されるが、割れることを目的としたように著しく敲打されている。三角形断面をもつ素材の頂部を平坦で細長く機能面とすることを特徴とするが、長軸端部に打痕をもたないⅠ類、打痕をもつⅡ類に分けられる。両者は5点ずつで対等であり、またその有無に素材の硬軟は反映されていないようである。11は土壌5の埋土内より出土したものである。

(9) 凹石 (第40図)

凹みと敲きを併せた3点が出土している。凹みは磨石類にも2点含まれ、凹みをもつ資料としては5点である。両面に凹みをもつものが4点で、これが一般らしく、それも凹みの芯をずらしていないことが特徴である。

(10) 敲石 (第40・41図)

完形品1点、他に1点の接合資料による完形があるが、他は欠損して磨石類などの遺存状況と変えることはない。打痕の位置によって3類に分けられる。Ⅰ類は長軸端部を使用面として5点。Ⅱ類は斜め側面を使用面にするもので5点、いずれも小形の不正円形のものが素材となっている。26の資料も斜め打痕をもったものであるが平面打痕を持ち合わせているため除いている。Ⅲ類は偏平な円形素材の側面を使用面にするⅢ-1類と、さらに平面も使用面にするⅢ-2類に分けられる。16点中、Ⅲ-1類が9点、Ⅲ-2類が7点である。

同様の打痕を有する磨石類Ⅲ-1類は22点、Ⅲ-2類は8点であるから、平面使用率は敲石のほうが少し高くなるが、素材は同じように平面使用するものに火山岩や花崗岩など硬質な素材が多い。

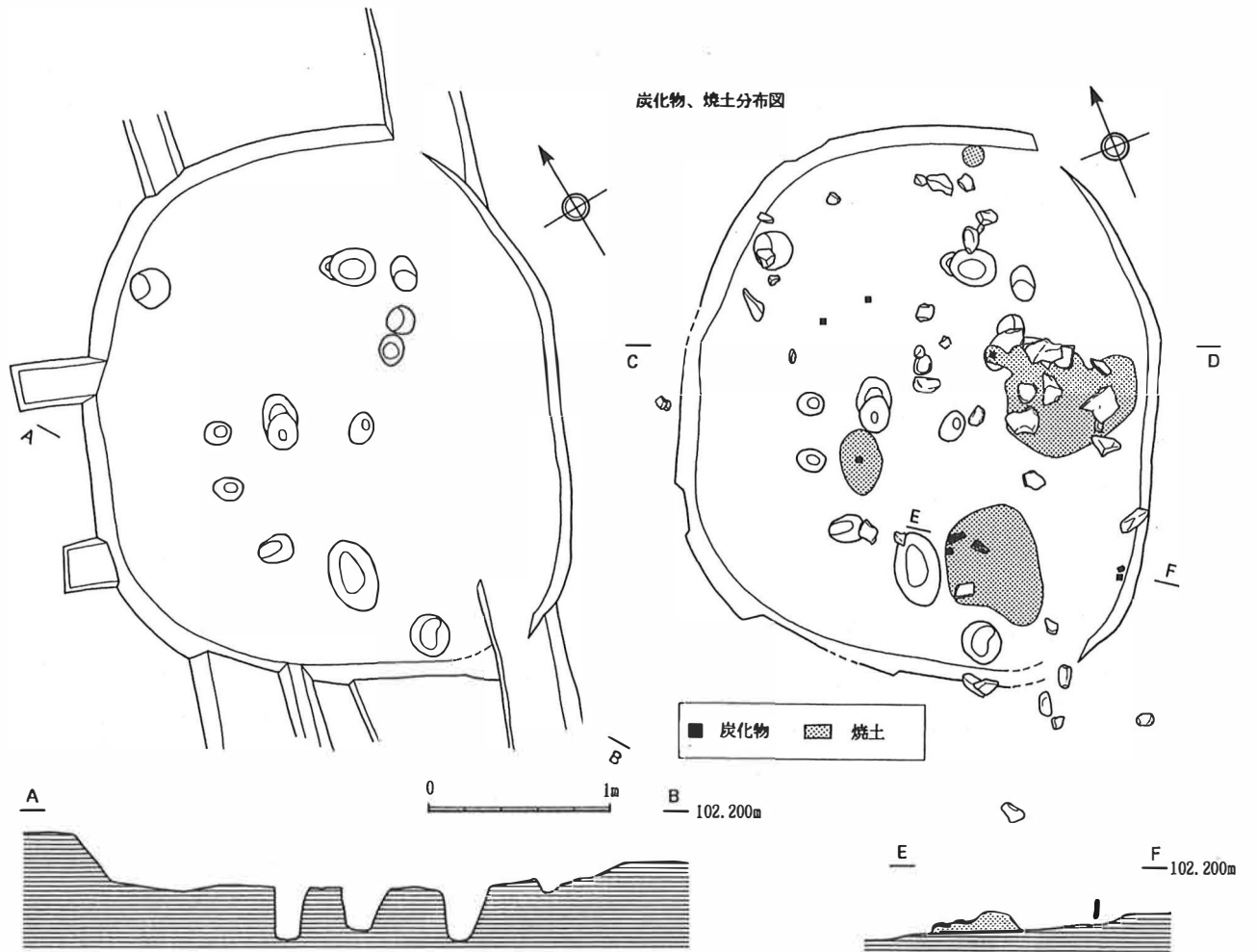
(11) 黒曜石片

黒曜石片は1792点がグリッド内遺物として取り上げられ、そのうちの1545点、約86%が礫集積を中心とした20mの範囲内の出土となっている。また、80数点もの資料が2cm内外を測る大形の剥片であり、近隣の遺跡の出土状況とは異なった様相を呈している。このような黒曜石の集中出土は同じ相木式土器を出土する岡谷市禅海塚遺跡(岡谷市教育委員会1998)にも認められ、報文によると黒曜石の内容も似て、特に茶色がかった透明度のあるものが目立っている。

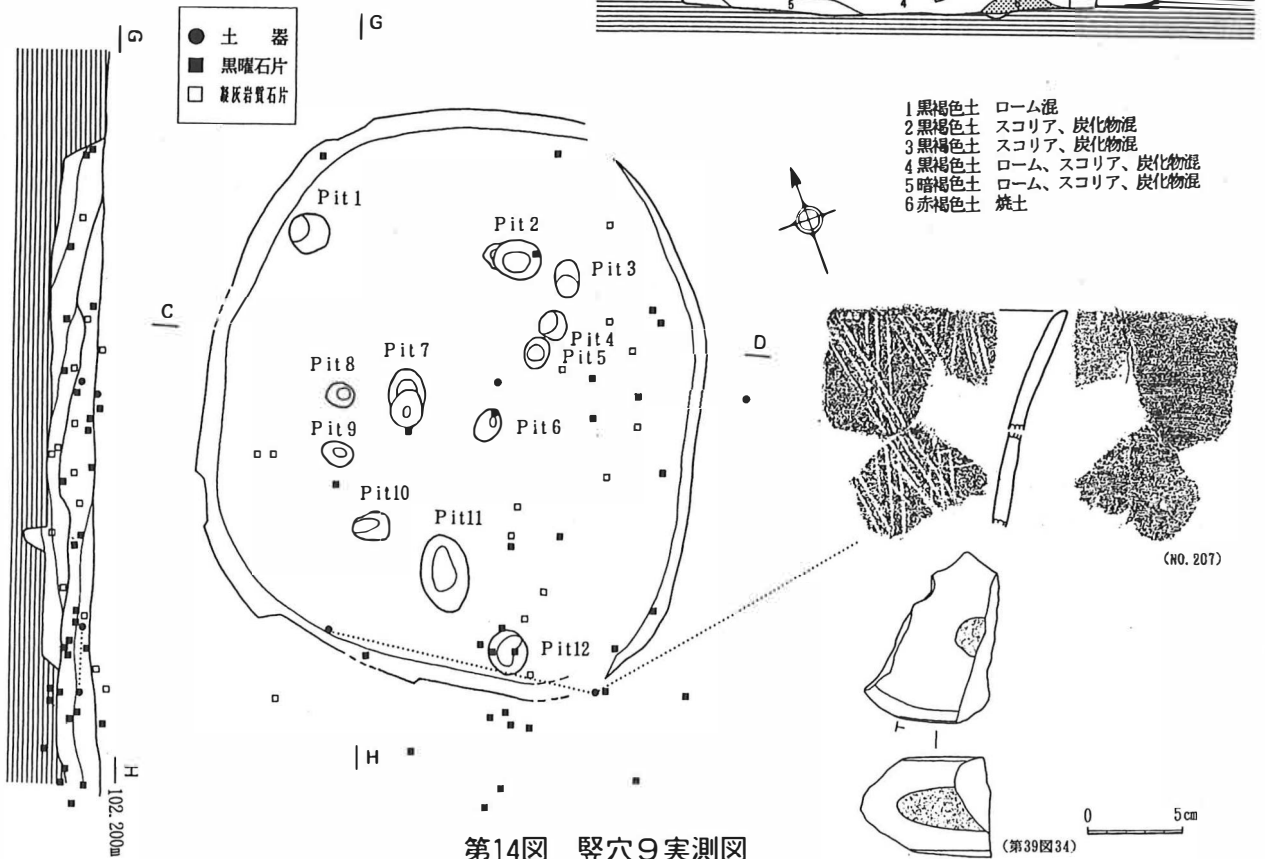
《文献》

富士宮市教育委員会 1986『黒田向林遺跡』

長野県岡谷市教育委員会 1998『間下丸山・禅海塚遺跡』

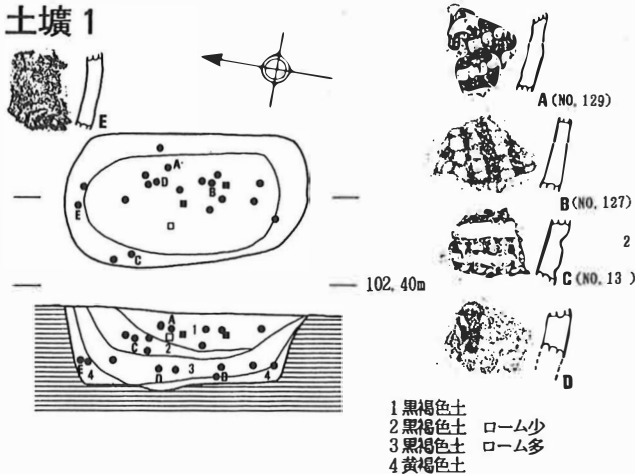


遺物分布およびピット位置図

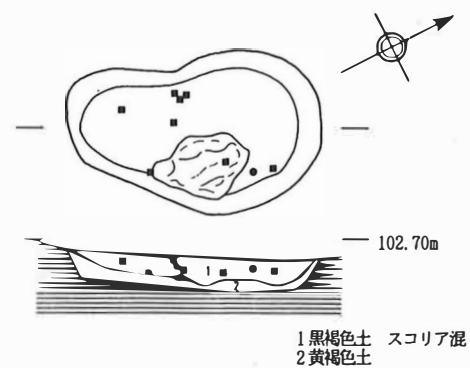


第14図 竪穴9実測図

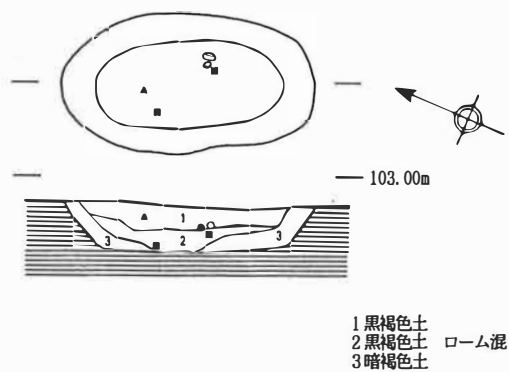
土壌 1



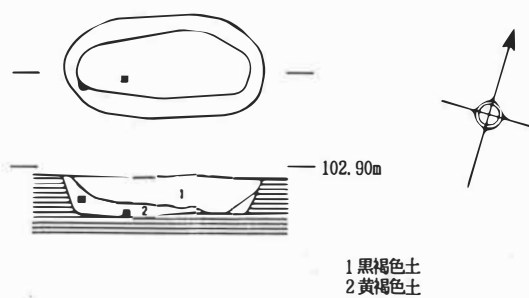
土壌 5



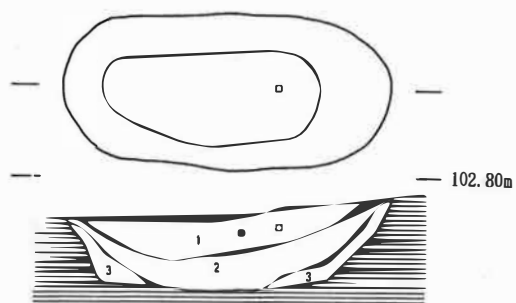
土壌 2



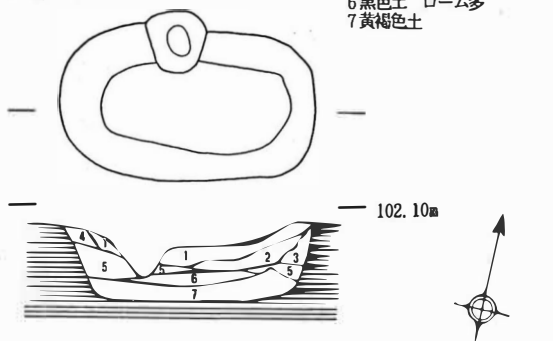
土壌 6



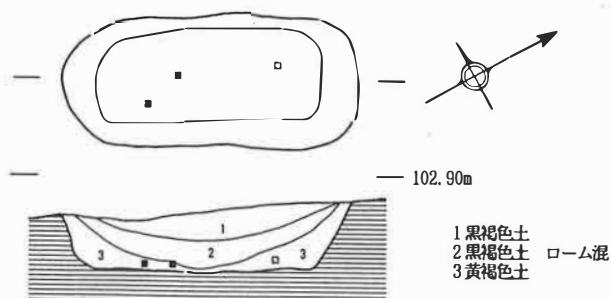
土壌 3



土壌 7



土壌 4

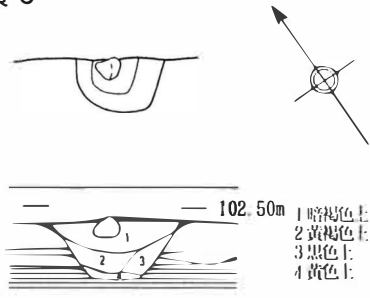


●	土器
▲	石器
○	磨石
■	黒曜石片
□	凝灰岩質石片

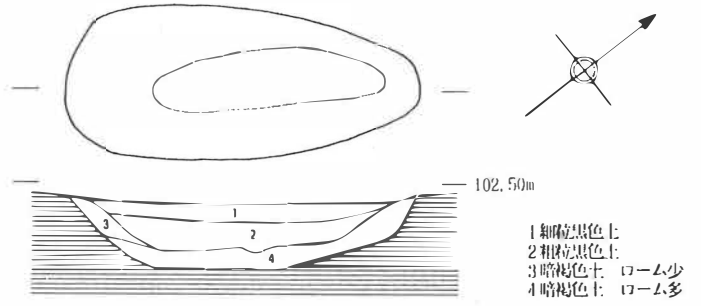
0 1m

第15図 土 壌 実 測 図

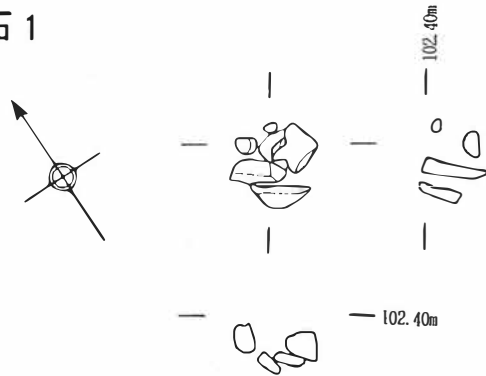
土壌 8



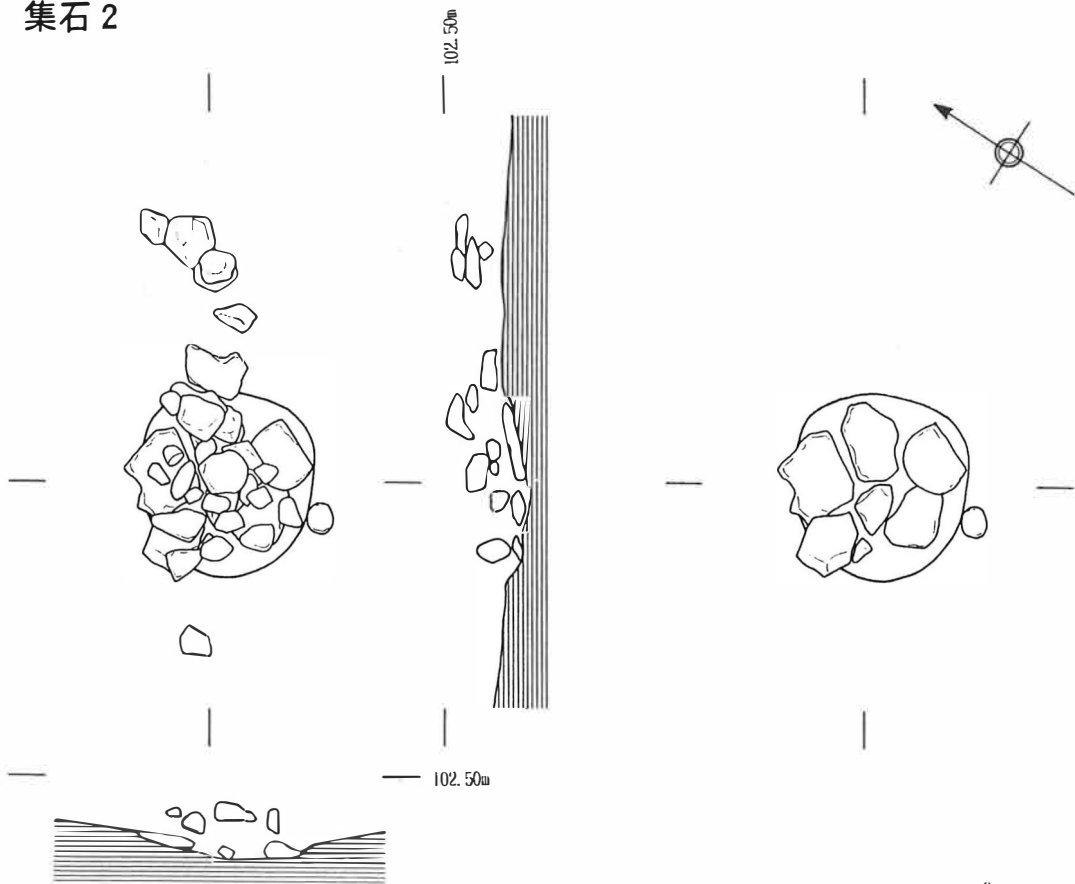
土壌 9



集石 1

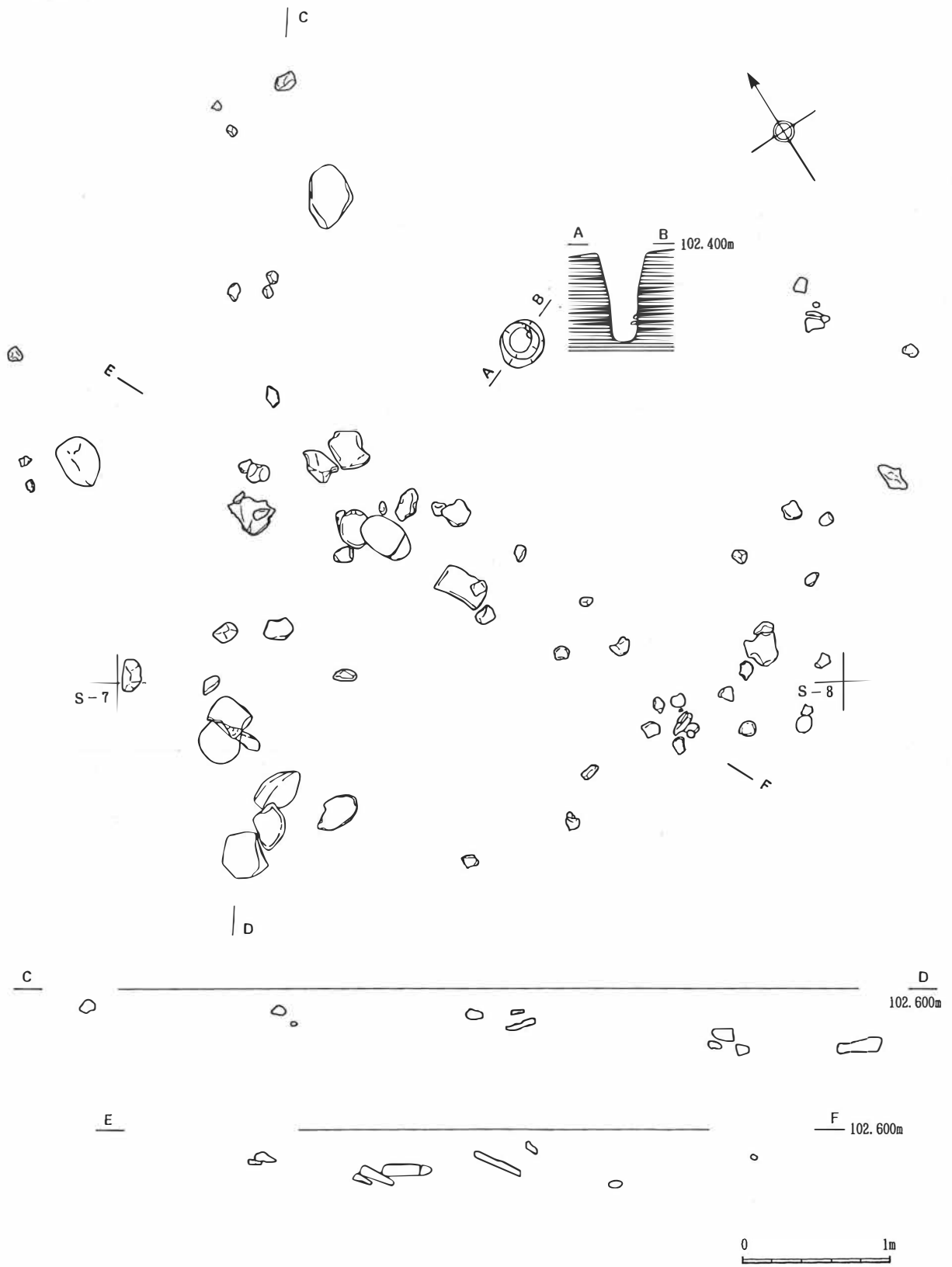


集石 2

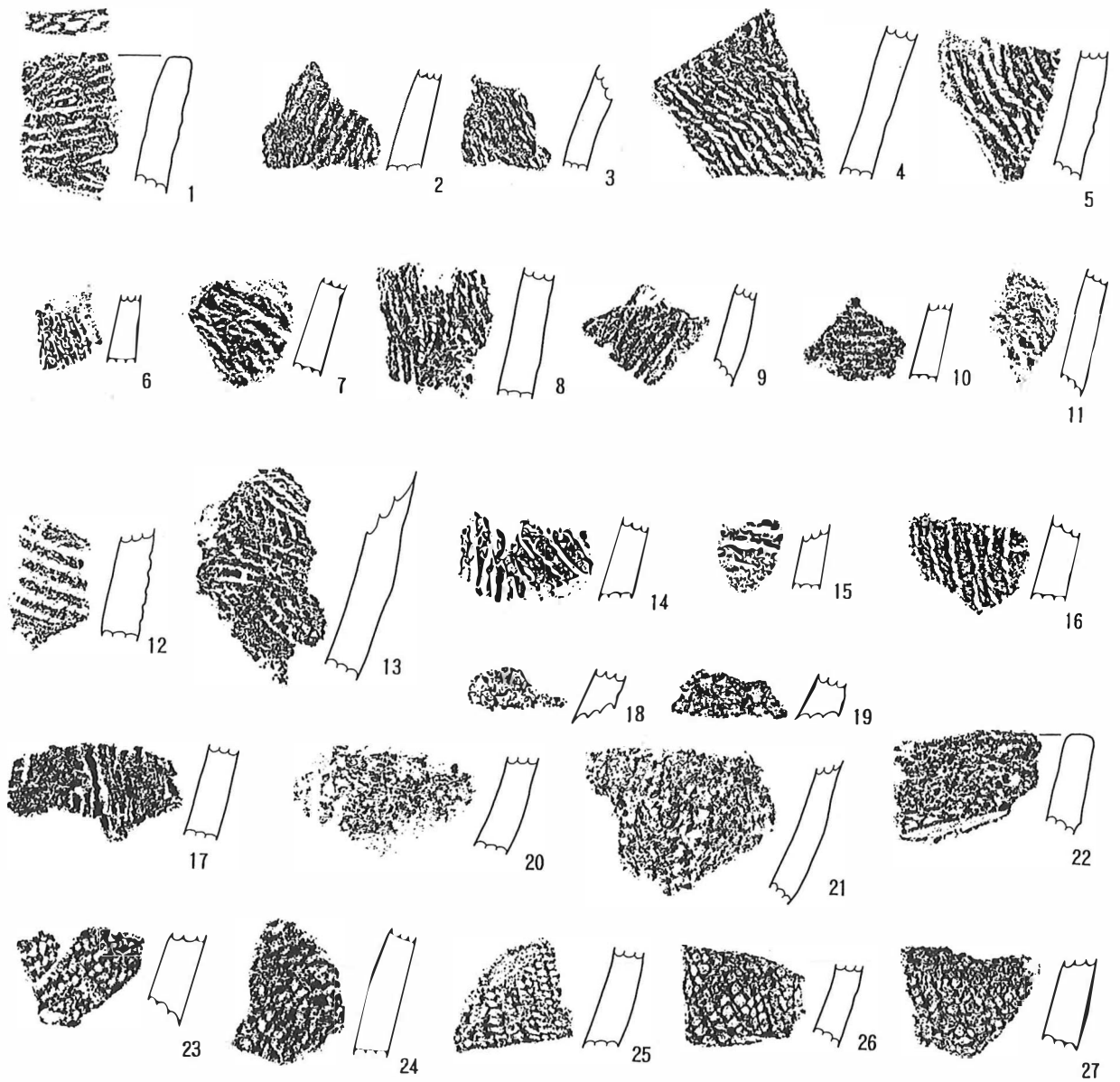


第16図 土壌、集石実測図

礫集石



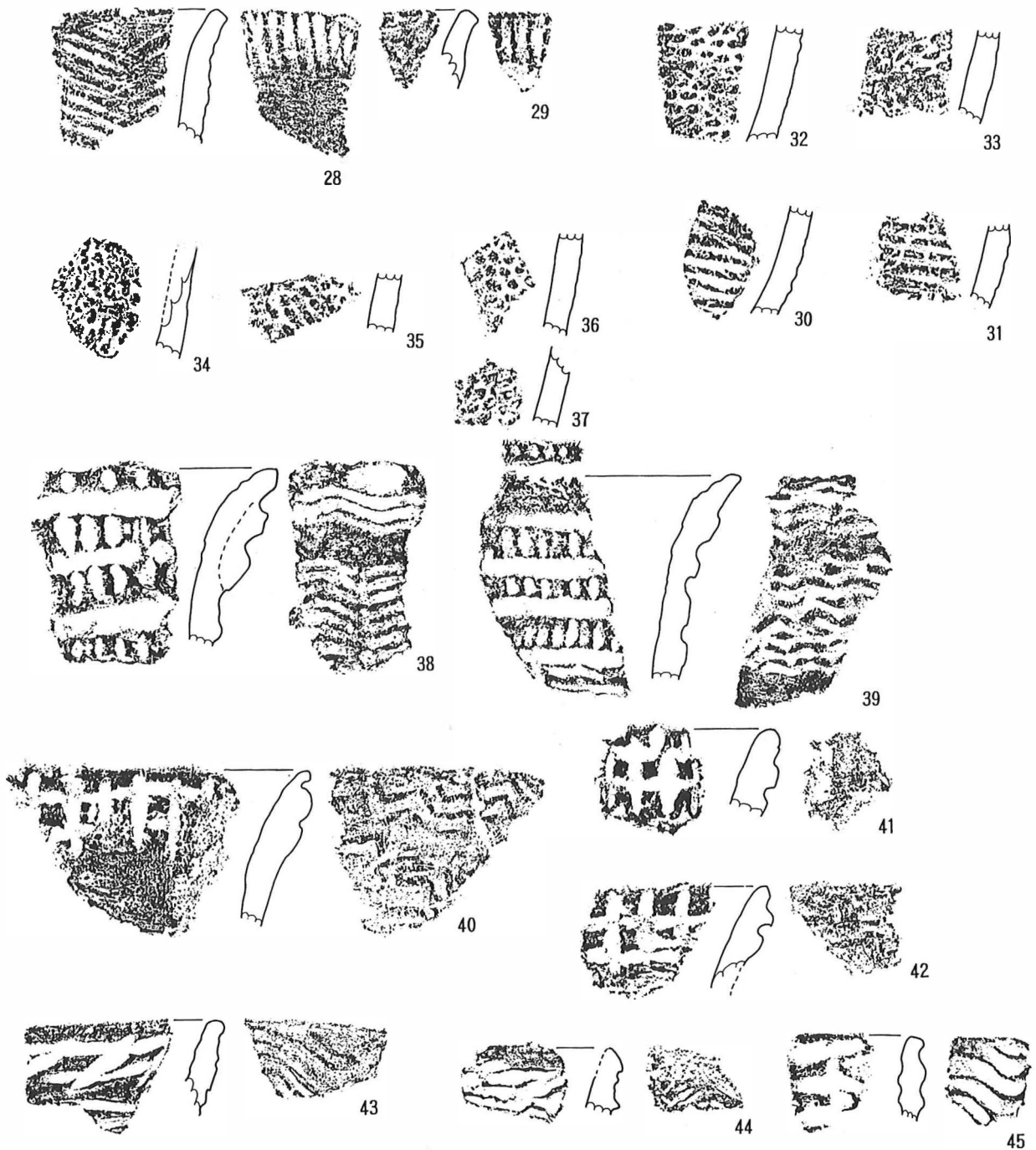
第17図 礫集積実測図



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
1	S8	口縁	R	K、唇凹・絡状押圧痕		有、細英・長微、織少、金雲多	暗褐	不良	
2	R8	胴	R			細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	内面煤付着
3	Q7	胴	R			細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	
4	Q6	胴	R			有、細英・長少、織少、金雲多	にぶい褐	普通	
5	Q6	胴	R			有、細英・長少、織少、金雲多	褐	普通	
6	Q13	胴	R			有少	にぶい橙	普通	
7	Q5	胴	R			有、細英・長微、織少、金雲多	にぶい褐	不良	
8	R11	胴	R			有、細英・長微、織少	明赤褐	普通	
9	S8	胴	R			有、織少、金雲多	褐	不良	
10	S7	胴	R			有、細英・長少、織少	にぶい橙	普通	
11	Q5	胴	R			有、細英・長少	褐	普通	
12	Q8	胴	R			有、細英・長少	にぶい褐	普通	
13	溝1	胴	R			有微、細英・長微	明赤褐	普通	
14	Q7	胴	R			有、細英・長微、織少、金雲多	褐	不良	
15	R7	胴	R			有、細英・長少	明赤褐	普通	
16	Q5	胴	R			有、細英・長少、織少、金雲	にぶい赤褐	普通	
17	Q11	胴	R			有少	灰褐	不良	割れ口煤付着
18	R11	胴	R			有少	にぶい褐	不良	割れ口煤付着
19	R11	胴	R			有少	灰褐	不良	割れ口煤付着
20	R11	胴	L			有少	にぶい橙	不良	18と同一個体
21	R11	胴	L			有少	にぶい褐	不良	割れ口煤付着、18と同一個体
22	R4	口縁	LR、横位沈線			有、英・長少、織少	灰黄褐	普通	
23	R4	胴	LR			有、英・長少	黄橙	普通	
24	Q6	胴	LX			有、英・長少	にぶい黄橙	普通	
25	Q4	胴	LR			有、英・長少	にぶい黄橙	普通	
26	R6	胴	RL			有、英・長少	にぶい黄橙	普通	
27	佳厨2	胴	RL			有、英・長少、織少	橙	特徴	

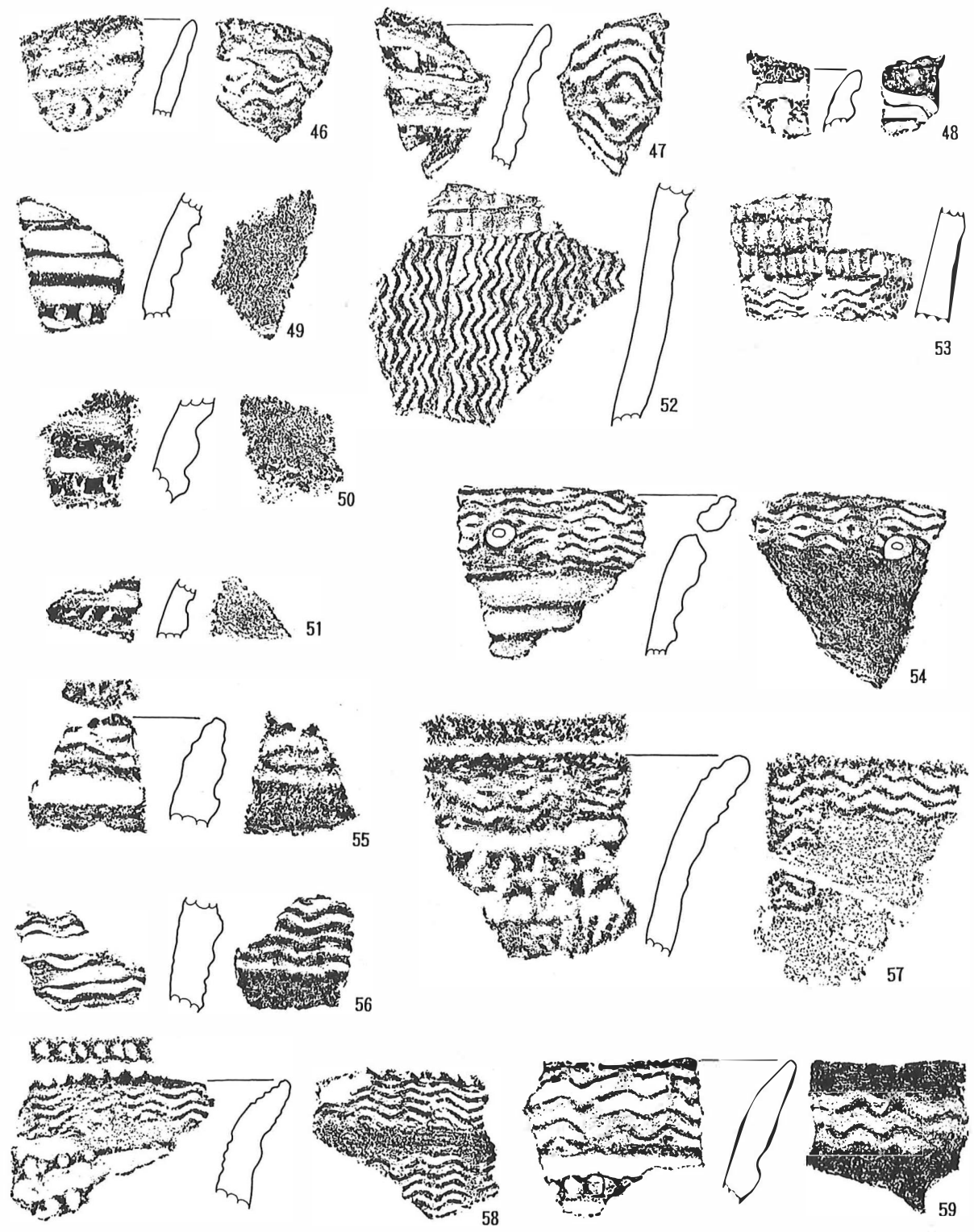
第18図 土器拓影図1



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
28	a	Q7	口縁		原体条痕	細英・長微、織	橙	普通	胎土やや軟質
29	a	Q8	口縁		原体条痕	細英・長微、織	橙	普通	胎土やや軟質
30	a	Q6	胴			細英・長微、織	橙	普通	胎土やや軟質
31	a	P13	胴			細英・長微、織	橙	普通	胎土やや軟質
32	b	Q7	胴			有少、細英・長、織微、金雲	赤褐	普通	
33	b	Q5	胴			有少、細英・長、織微、金雲	赤褐	普通	
34	b	Q7	胴			有少、細英・長、織微、金雲	赤褐	普通	
35	b	Q7	胴			有少、細英・長、織微、金雲	赤褐	普通	
36	b	Q7	胴			有少、細英・長、織微、金雲	赤褐	普通	
37	b	Q6	胴			有少、細英・長、織微、金雲	赤褐	普通	
38	a	S13	口縁	階階添付	横位山型	英・長、織少	橙	普通	ヘラ状刻み
39	a	R9	口縁		横位玉抱き山型	英・長、織少	にぶい褐	普通	ヘラ状刻み
40	a	R11	口縁		横位山型	英・長、織少	暗褐	普通	棒状凹庄
41	a	R12	口縁		横位山型	英・長、織少	暗褐	普通	棒状凹庄
42	a	R8/S8	口縁		横位山型	英・長、織少	黒褐	普通	棒状凹庄
43	a	R7	口縁		横位山型	英・長、織少	暗赤褐	普通	
44	a	R11	口縁		横位山型	英・長、織少	暗赤褐	普通	
45	a	O3	口縁		横位山型	英・長、織少	暗赤褐	普通	

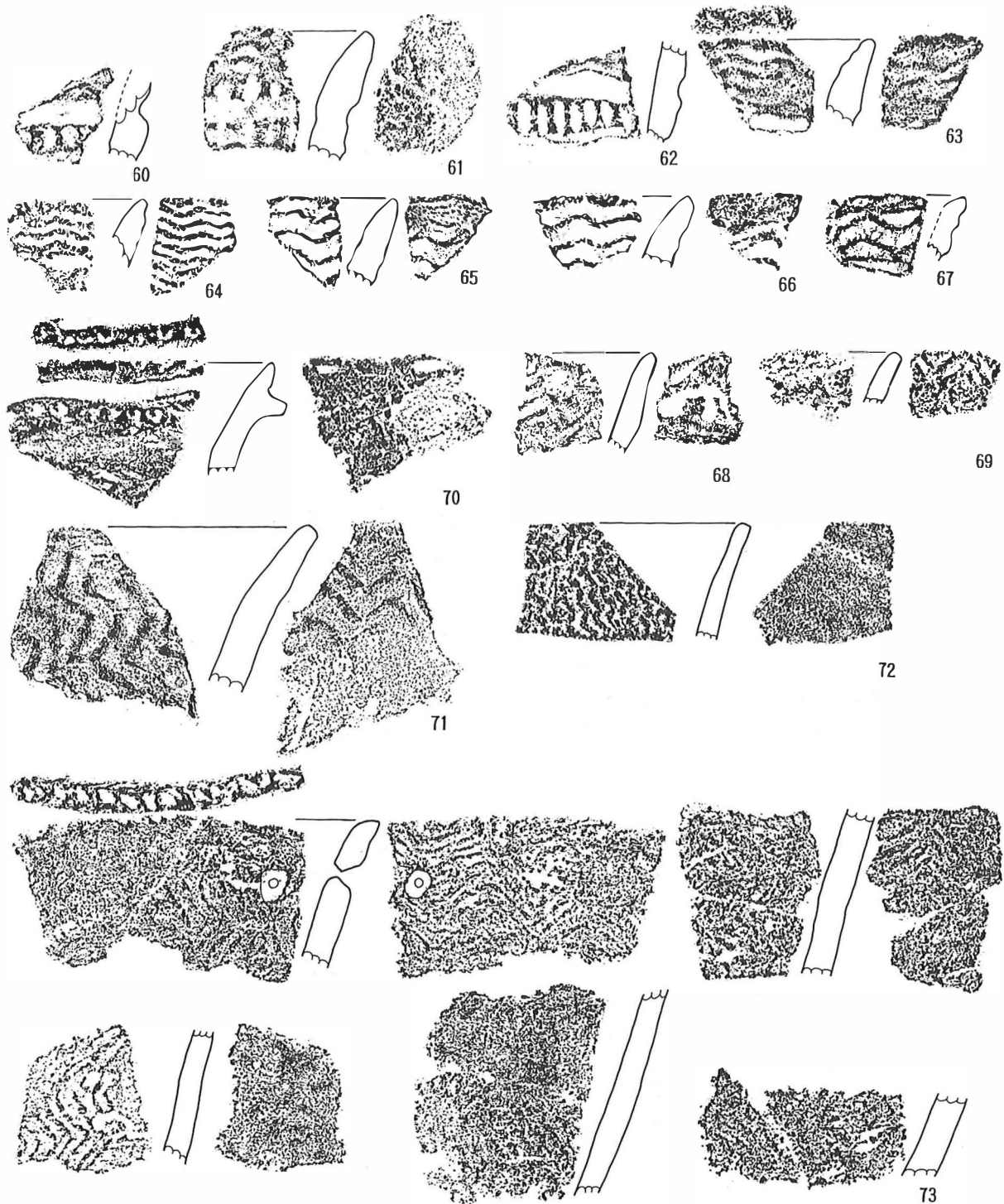
第19図 土器拓影図2



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
46	a	S7	口縁		横位山型	灰・長、織少	明褐	普通	波状口縁
47	a	S8	口縁		横位山型	灰・長、織少	赤褐	普通	棒状刺突・波状口縁
48	a	S8	口縁		横位山型	灰・長、織少	にぶい赤褐	普通	棒状凹圧・波状口縁
49	a	R11	口縁		横位山型	灰・長、織少	暗褐	普通	棒状凹圧
50	a	R6	口縁		横位山型	灰・長、織少	赤褐	普通	棒状凹圧
51	a	R6	口縁		横位山型	灰・長、織少	暗褐	普通	へら状刺突
52	b1	P14	胴	胴上縦位山型	横位山型	灰・長、織少	明赤褐	普通	煤附着
53	b1	J2	胴	胴上横位山型	横位山型?	灰・長、織少	橙	普通	
54	b2	J2	口縁	玉抱き山型	横位玉抱き山型	灰・長、織少	にぶい赤褐	普通	補修孔あり
55	b2	R11	口縁	唇凹・棒	横位山型	灰・長、織少	橙	普通	
56	b2	一括	口縁		横位山型	灰・長、織少	にぶい赤褐	普通	
57	b2	R12/Q12	口縁	唇凹・棒	横位山型	灰・長、織少	黄橙	普通	棒状凹圧
58	b2	Q9	口縁	唇凹・棒	横位山型中央ナデ消し	灰・長、織少	にぶい赤褐	普通	棒状凹圧
59	b2	P13	口縁		横位山型	灰・長、織少	暗赤褐	普通	棒状凹圧

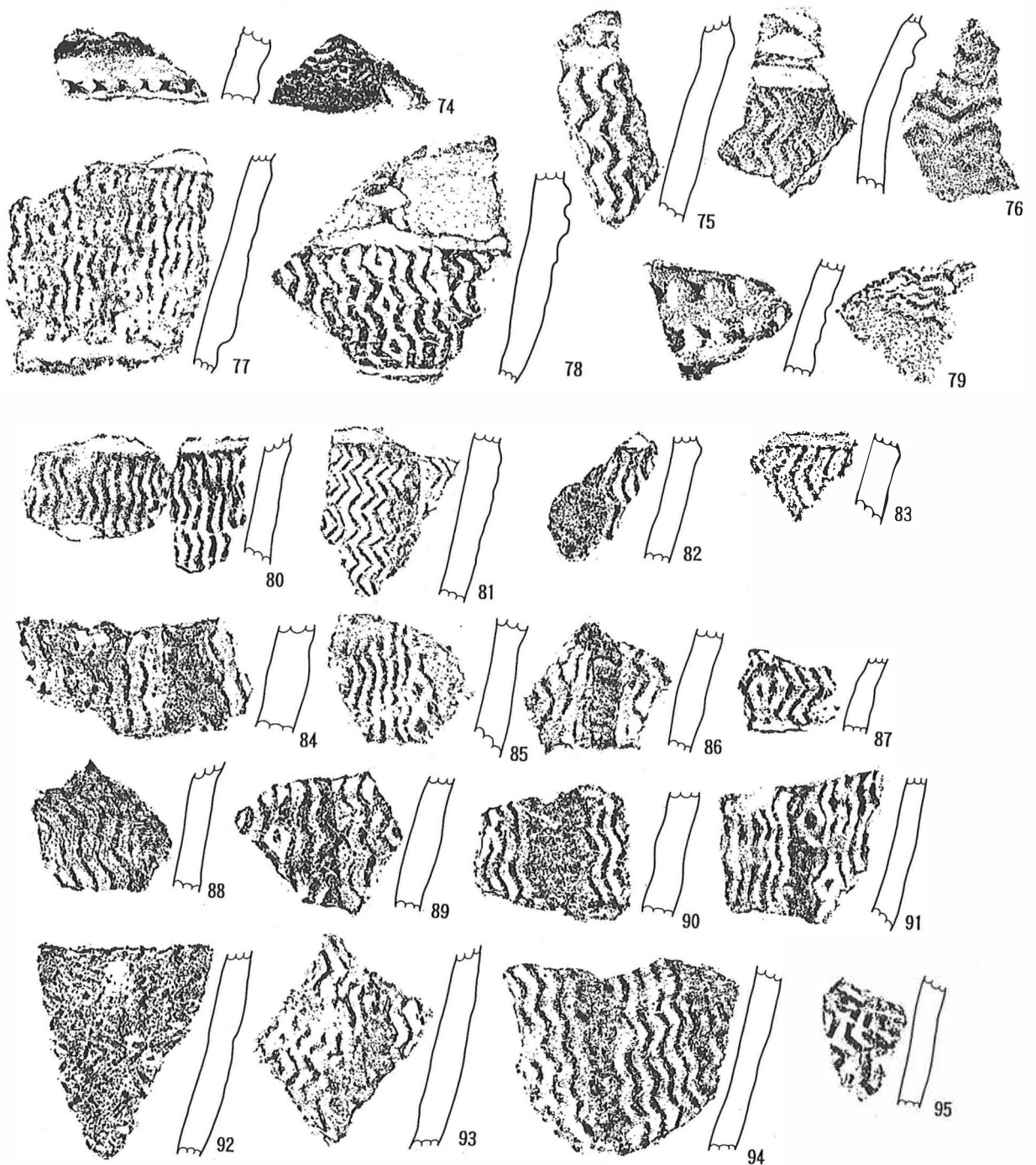
第20図 土器拓影図3



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・刺整	内面文様・刺整	胎土	色調	施成	備考
60	b2	一宿	口縁			英・長、織少	暗赤褐	普通	棒状凹柱
61	b2	Q11	口縁		横位山型	英・長、織少	橙	普通	へら状刻み
62	b2	Q11	口縁			英・長、織少	橙	普通	へら状刻み
63	b	Q11	口縁	唇凹・へら	横位山型	英・長、織少	橙	普通	
64	b	R8	口縁	唇凹・へら?	横位山型	英・長、織少	橙	普通	
65	b	P13	口縁		横位山型	英・長、織少	暗赤褐	普通	
66	b	R13	口縁		横位山型	英・長、織少	暗赤褐	普通	
67	b	表採	口縁	唇凹・棒		英・長、織少	にぶい赤褐	普通	内面剥落
68	b	Q12	口縁		横位山型	英・長、織少	明褐	普通	
69	b	Q6	口縁		横位山型	英・長、織少	橙	普通	
70	c	S8	口縁	唇刺・竹頭、胴上縁位山型	横位山型	英・長、織少	灰褐	普通	竹管状刺突
71	d	鉢Tr	口縁		横位山型	有、英・長、織少	灰黄褐	普通	
72	d	1区表採	口縁		横位山型	英・長、織少	黒褐	普通	内面煤付着
73	d	Q7/S8	口縁～底	唇刺・へら	横位山型	英・長、織少	明赤褐	普通	

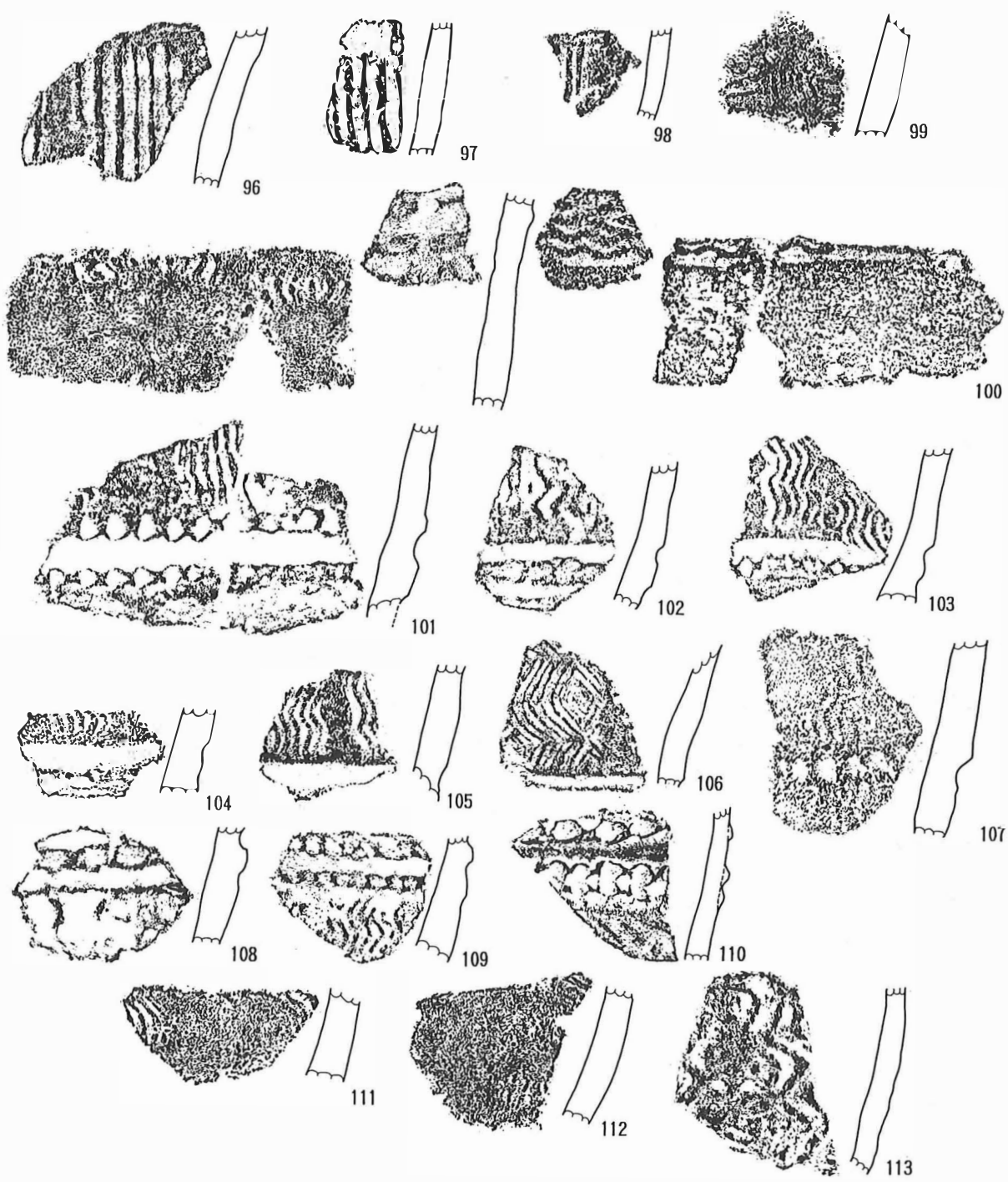
第21図 土器拓影図4



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	粘土	色調	構成・備考
74	e1	K7	胴		横位山型	灰・長、縦少	赤褐	普通 棒状凹圧
75	e1	S13	胴			灰・長、縦少	赤褐	普通 棒状凹圧
76	e1	P13	胴		横位山型	細灰・長、縦少	にふい赤褐	普通 指凹圧
77	e1	Q4	胴			灰・長、縦少	明赤褐	普通
78	e1	R6	胴	玉抱き山型	横位山型	灰・長、縦少	にふい赤褐	普通 指凹圧
79	e1	Q12	胴			灰・長、縦少	明赤褐	普通 棒状凹圧
80	e1	Q4	胴			灰・長、縦少	明赤褐	普通
81	e1	雑Tr	胴			灰・長、縦少	灰褐	普通
82	e1	J2	胴	玉抱き山型		灰・長、縦少	にふい赤褐	普通
83	e1	R7	胴			灰・長、縦少	極赤褐	普通
84	e1	溝1	底	玉抱き山型、無文帯状む		灰・長、縦少	橙	普通
85	e1	R9	胴	玉抱き山型		灰・長、縦少	明赤褐	普通
86	e1	R6	胴	無文帯状む		灰・長、縦少	明赤褐	普通
87	e1	L3, 4, 5	胴	工具端あり、玉抱き山型		灰・長、縦少	赤褐	普通
88	e1	K13	胴			灰・長、縦少	にふい赤褐	普通
89	e1	R5	胴	工具端あり、玉抱き山型		灰・長、縦少	明赤褐	普通
90	e1	P14	胴	無文帯状む		灰・長、縦少	橙	普通
91	e1	S8	胴	工具端あり、玉抱き山型		灰・長、縦少	明赤褐	普通
92	e1	表探	胴			灰・長、縦少	赤褐	普通
93	e1	S8	胴	無文帯状む		灰・長、縦少	にふい赤褐	普通
94	e1	Q5	胴	無文帯状む		灰・長、縦少	明赤褐	普通
95	e1	R11	胴	横位沈線あり		灰・長、縦少	赤褐	普通

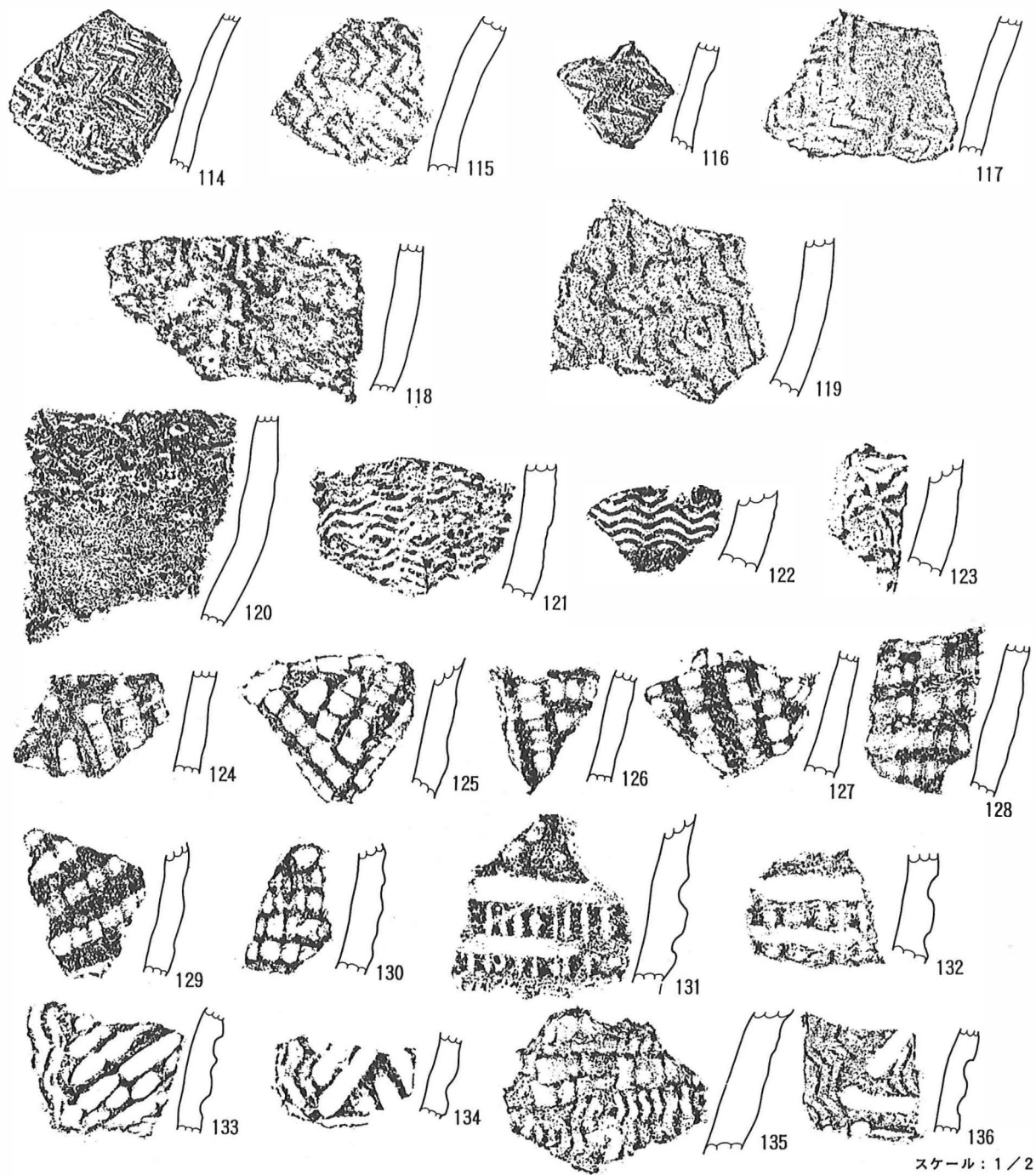
第22図 土器拓影図5



スケール：1/2

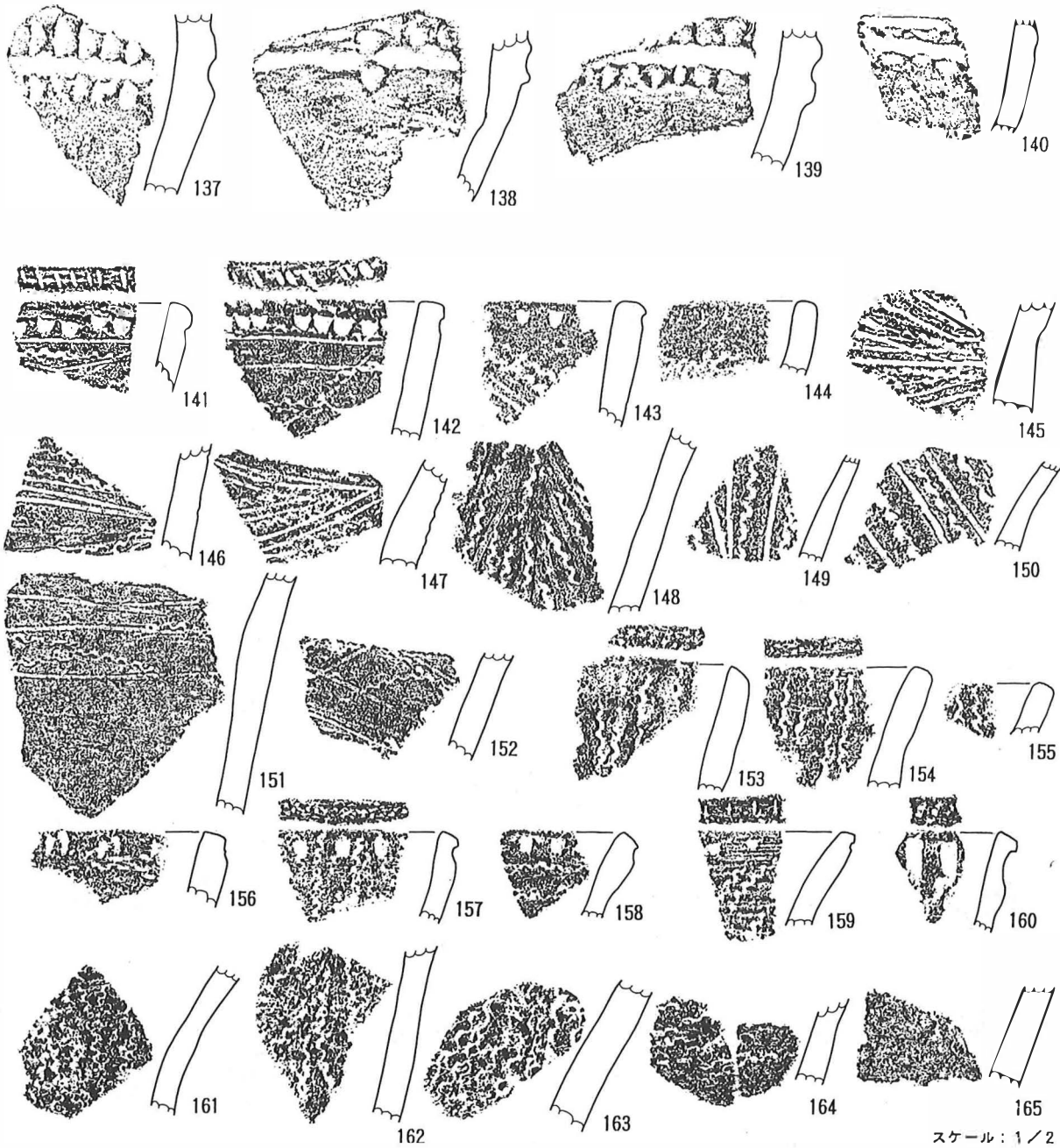
No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色別	焼成	備考
96	e1	S13	胴			灰・長、織少	明赤褐	普通	
97	e1	R7	胴			灰・長、織少	明赤褐	普通	
98	e1	R7	胴			灰・長、織少	橙	普通	
99	e1	Q4	底	縦位×横位山型?		灰・長、織少	橙	普通	
100	e1	Q11	胴	玉抱き山型、無文帯挟む	横位山型	灰・長、織少	橙	普通	
101	e1	R7	胴	無文帯挟む		灰・長、織少	明赤褐	普通	1本沈線、へら状凹凹
102	e1	R7	胴	工具端あり、玉抱き山型		灰・長、織少	明赤褐	普通	2本沈線、棒状凹凹
103	e1	Q13	胴	工具端あり		灰・長、織少	明赤褐	普通	2本沈線、へら状凹凹
104	e1	R6	胴	無文帯挟む		灰・長、織少	明赤褐	普通	2本沈線、へら状凹凹
105	e1	Q5	胴	無文帯挟む		灰・長、織少	にぶい赤褐	普通	2本沈線
106	e2	P14	胴			灰・長、織少	黄橙	普通	2本沈線?
107	e1	R5	胴	玉抱き山型、無文帯挟む		灰・長、織少	明赤褐	普通	棒状工具刺突列
108	e1	Q11	胴			灰・長、織少	橙	普通	2本沈線、棒状凹凹
109	e1	R6	胴			灰・長、織少	明赤褐	普通	2本沈線、棒状凹凹
110	e1	R5	胴			灰・長、織少	褐	良	粘土細貼り付け、指頭凹凹
111	e1	R14	胴	無文帯挟む		灰・長、織少	明赤褐	普通	
112	e1	Q5	胴	無文帯挟む		灰・長、織少	赤褐	普通	
113	e1	L3, 4, 5	胴	無文帯挟む		灰・長、織少	明赤褐	普通	

第23図 土器拓影図6



No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	粘土	色調	焼成	備考
114	e2	S8	胴	玉抱き山型		英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	
115	e2	R12	胴		英・長、織少		暗赤褐	普通	
116	e2	Q13	胴		英・長、織少		明褐	普通	
117	e2	S8	胴		英・長、織少		明赤褐	普通	
118	e2	Q11	底		英・長、織少		橙	普通	
119	e2	R12	底		英・長、織少		にぶい褐	普通	
120	e3	Q11	底		英・長、織少		明赤褐	普通	
121	e3	S13/R11	底		英・長、織少		明赤褐	普通	
122	e3	Q14	底		英・長、織少		赤褐	普通	
123	e3	R9	底		英・長、織少		橙	普通	
124	e4	Q11	胴		英・長、織少		明褐	普通	
126	e4	R11	胴		英・長、織少		明褐	普通	
126	e4	Q11	胴		英・長、織少		橙	普通	
127	e4	土壌2	胴		英・長、織少		橙	普通	
128	e4	Q12	胴		英・長、織少		橙	普通	
129	e4	土壌2	胴		英・長、織少		橙	普通	
130	e4	Q11	胴	英・長、織少		橙	普通		
131	e4	Q12	胴	英・長、織少		橙	普通		
132	e4	土壌2	胴	縦位山型×鋸歯状		英・長、織少	橙	普通	
133	e5	R11	胴	縦位山型×鋸歯状		英・長、織少	明赤褐	普通	鋸歯状は剣突に近い押引
134	e5	R6	胴	縦位山型×縦位押引		英・長、織少	にぶい赤褐	普通	鋸歯状は沈線
135	e5	L4	胴	縦位山型×縦位押引		英・長、織少	橙	普通	
136	e5	R8	胴	縦位山型×鋸歯状		英・長、織少	明赤褐	普通	鋸歯状は沈線、煤付着

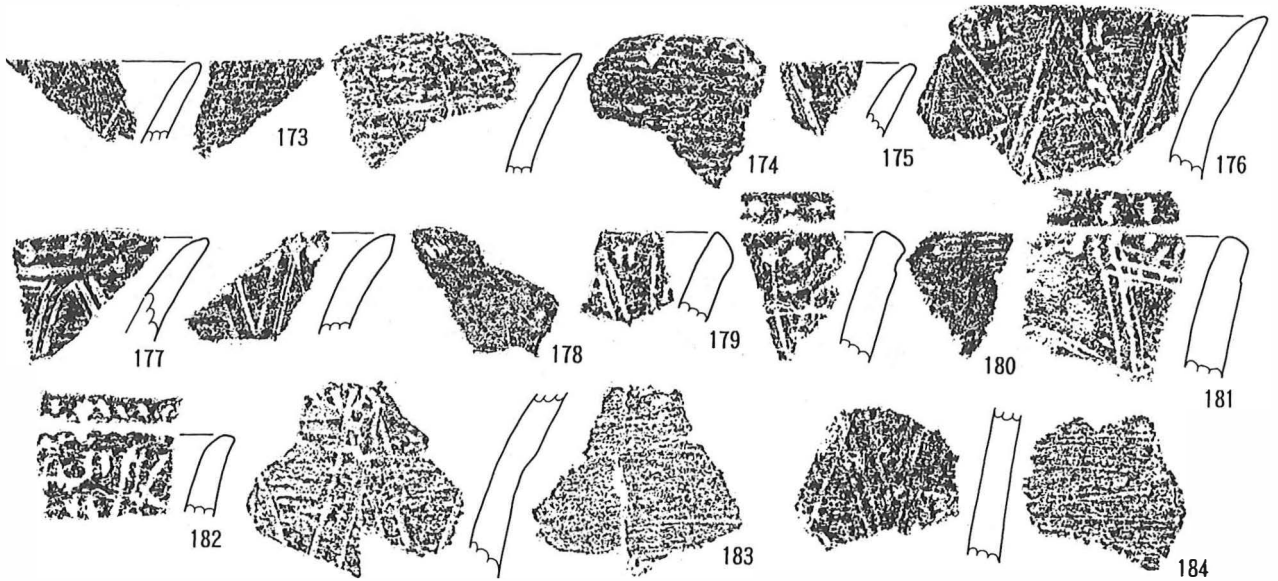
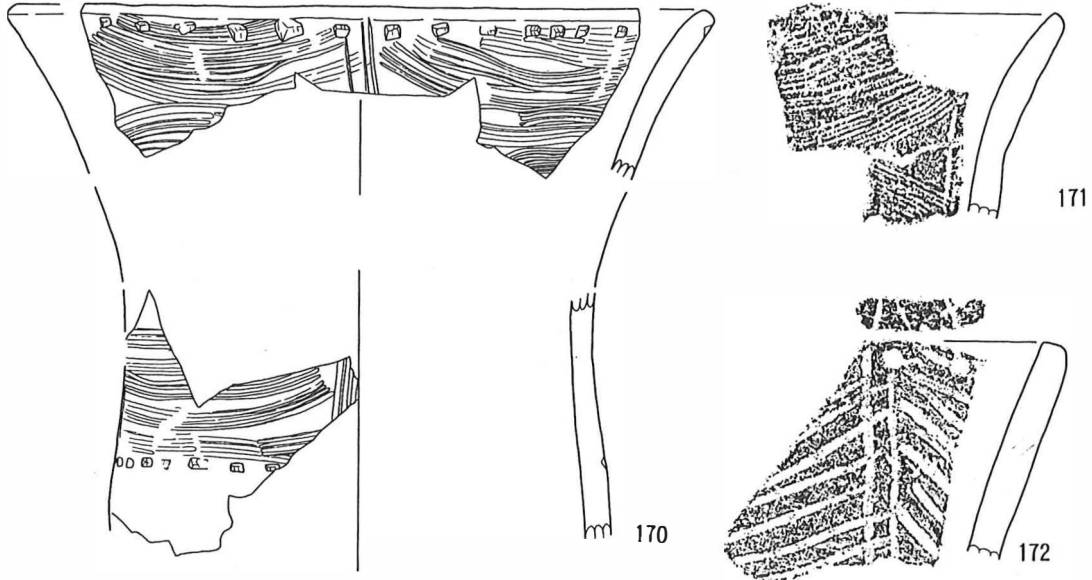
第24図 土器拓影図7



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
137	e6	Q6	胴			英・長、織少		普通	1本沈線、ヘラ状凹圧
138	e6	R11	胴			英・長、織少		普通	1本沈線、棒状凹圧
139	e6	Q5	胴			英・長、織少		普通	2本沈線、棒状凹圧
140	e6	M4	胴			英・長、織少		普通	2本沈線、棒状凹圧
141	a	R7	口縁	緑刺・竹背、唇凹・ヘラ?		有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	良	口縁刺突と口唇凹圧は異種工具
142	a	R8	口縁	緑刺・竹背、唇凹・ヘラ?		有少、細英・長、織少	橙	普通	口刺突と口唇凹圧は異種工具
143	a	Q5	口縁	緑刺・竹背		有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	
144	a	M2	口	緑刺・竹?		有少、細英・長、織少	橙	普通	
145	a	L3, 4, 5	胴上			有少、細英・長、織少	明赤褐	普通	
146	a	Q5	胴上			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	良	
147	a	R11	胴上			有少、細英・長、織少	明赤褐	普通	
148	a	R13	胴上			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	良	
149	a	Q6	胴上			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	
150	a	S13	胴上			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	149と同一図体か
151	a	M8	胴上			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	良	
152	a	R8	胴上			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	良	
153	b	L3, 4, 6	口縁	唇刺・?		有少、細英・長少、織少	褐	良	
154	b	R11	口縁	唇刺・?		有少、細英・長少、織少	橙	良	
155	b	R12	口縁			有、細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	
156	b	R7	口縁			有少、細英・長少、織少	にぶい赤褐	良	
157	b	膚1	口縁	唇刺・?		有少、細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	
158	b	R11	口縁			有少、細英・長少、織少	にぶい赤褐	良	
159	b	試Tr	口縁	唇刺・ヘラ?		有少、細英・長少、織少	明赤褐	普通	
160	b	Q8	口縁	唇刺・?		有少、細英・長少、織少	暗赤褐	良	
161	b	F3	口縁	条痕		有、細英・長、織少	明赤褐	普通	
162	b	R11	口縁			有少、細英・長、織少	赤褐	普通	
163	b	L3, 4, 5	胴上			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	
164	b	表深	胴上			有少、細英・長、織少	明赤褐	普通	
165	b	Q4	胴上			有、細英・長多、織少	にぶい赤褐	良	

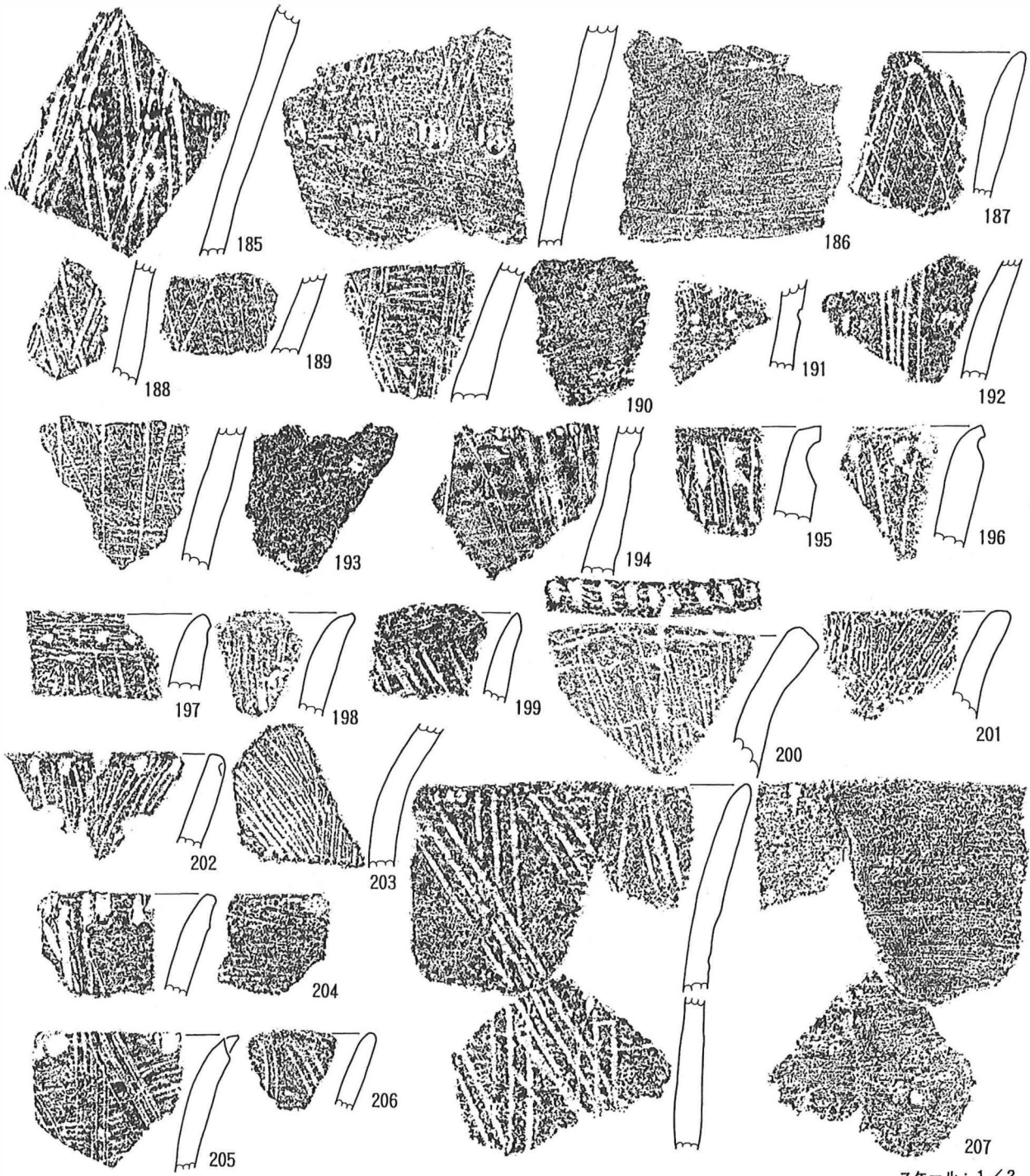
第25図 土器拓影図8



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
166	c	S8	胴上			有少、細英・長少、織少	明灰袍	普通	
167	c	R6	胴上			有少、細英・長少、織少	黒袍	良	
168	c	R8	胴上			有微、細英・長、織少	明灰袍	普通	
169	c	R12	胴上			有少、細英・長少、織少	橙	普通	
170	d	Q6/R6	口縁	刷刺・棒		有、細英・長少、織少	にぶい袍	普通	刷毛状工具沈線
171	d	K6	口縁	刷刺・棒		有、細英・長少、織少	赤袍	普通	刷毛状工具沈線
172	d	R11	口縁			有、細英・長少、織少	灰袍	普通	沈線工具?
173	a1	S7	口縁		条痕	有少、細英・長	にぶい袍	普通	口唇ナデ
174	a1	R11	口縁	条痕	条痕	有、細英・長少、織少、金雲多	にぶい赤袍	普通	口唇ナデ
176	a1	S8	口縁			有少、細英・長少	にぶい袍	普通	口唇ナデ
176	a2	Q11	口縁	緑刺・竹履		有、細英・長、織少	にぶい袍	普通	刺突と沈線は同一工具、口縁ナデ
177	a2	S12	口縁	条痕		有微、細英・長少、織少	にぶい赤袍	普通	
178	a2	K4	口縁	擦痕	緑刺・竹	有微、細英・長少、織少	にぶい赤袍	普通	裏面刺突と沈線は同一工具、口唇ナデ
179	a2	住:7地方	口縁	擦痕、緑刺・竹履		有少、細英・長少、織少	明赤袍	普通	刺突と沈線は同一工具、口縁外削ぎ状
180	a2	Q11	口縁	緑刺・竹頭、唇凹・竹頭	擦痕→ナデ	有微、細英・長、織少	にぶい赤袍	普通	口唇を取り状
181	a2	Q13	口縁	緑刺・竹、唇凹・竹		有少、細英・長、織少	にぶい赤袍	普通	刺突・凹圧は同一工具、沈線とは異種工具
182	a2	R11	口縁	擦痕、緑刺・竹、唇凹・竹		有少、細英・長微、織少	にぶい袍	普通	格子目間に刺突、刺突と沈線は同一工具
183	a2	S7	胴	条痕	条痕	有少、細英・長少、織少	灰袍	普通	
184	a2	S7	胴上	条痕	条痕	有少、細英・長少、織少	にぶい袍	普通	

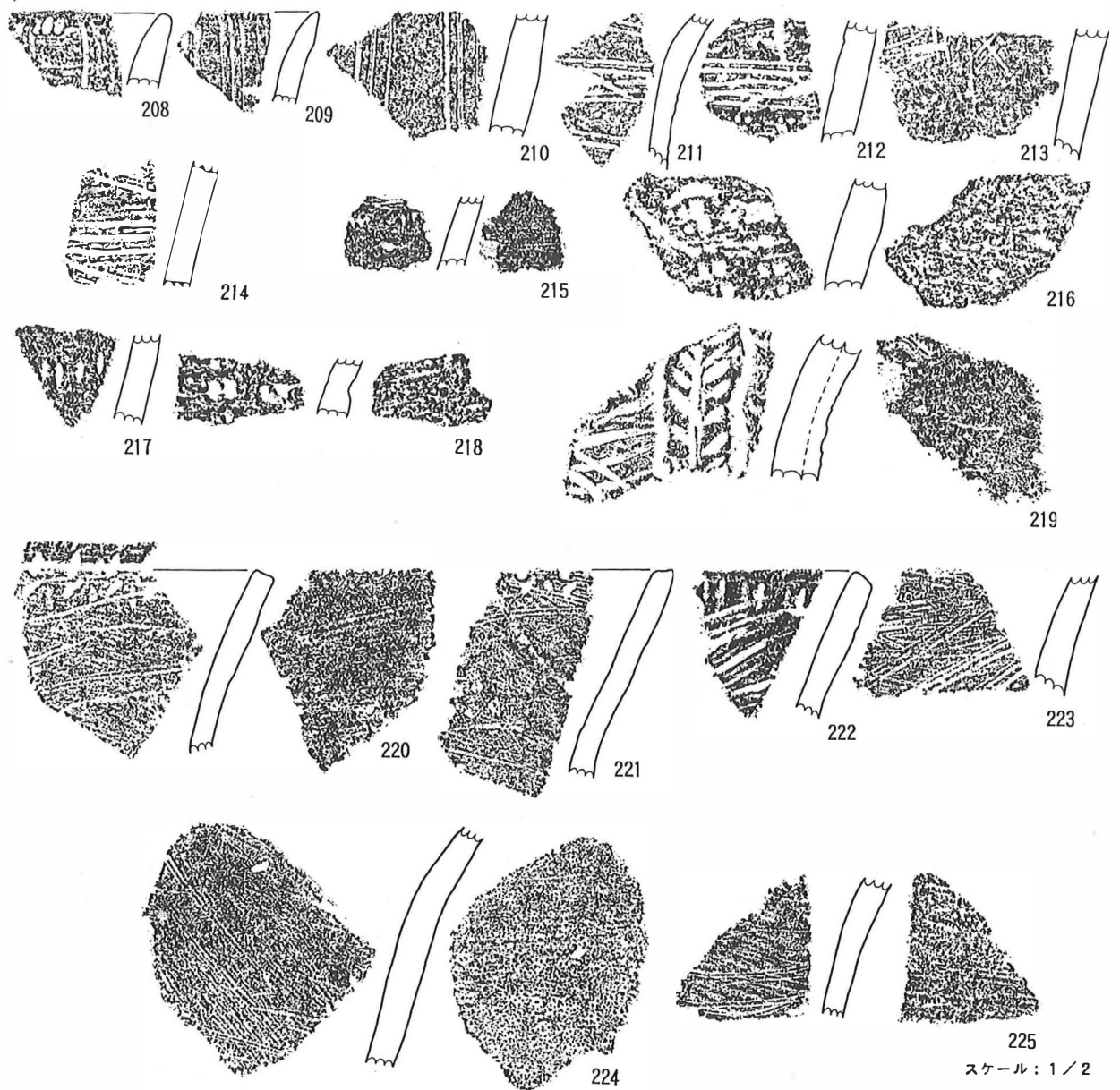
第26図 土器拓影図9



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
185	a2	M4	肩上	捺痕・刺・竹蔑	捺痕→ナデ	有微、細英・長少、織少	にぶい褐	普通	刺突と沈線は同一工具
186	a2	S7	肩上	捺痕・刺・竹蔑	捺痕	有少、細英・長少、織少	にぶい褐	普通	刺突と沈線は同一工具
187	a2	R11	口縁	捺刺・竹		有、細英・長、織少	にぶい褐	良	口縁刺突は右方向から、口唇ナデ
188	a2	Q6	肩上			有微、細英・長、織少	にぶい褐	普通	
189	a2	Q5	肩上			有微、細英・長、織少	にぶい黄橙	普通	内面やや刺落
190	a2	Q9	肩上	条痕・刺・棒	条痕→ナデ	有微、細英・長、織少	灰褐	普通	沈線と刺突は異種工具
191	a2	S11	肩上	刺・棒		有、細英・長少、織少	橙	普通	沈線と刺突は異種工具
192	a2	R11	肩上	刺・竹		有、細英・長、織少	橙	普通	刺突と沈線は同一工具
193	a2	M4	肩上			有少、細英・長少、織少	にぶい褐	普通	
194	a2	M4	肩上	条痕・刺・竹	捺痕→ナデ	有少、細英・長、織少	橙	普通	
195	b	R11	口縁	捺刺・ヘラ		有少、細英・長、織少、金雲多	黒褐	普通	口唇面取り状にナデ
196	b	R8	口縁	捺刺・竹背		有、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	口唇面取り状にナデ
197	b	R5	口縁	捺痕・捺刺・竹背		有、細英・長、織少	橙	普通	口唇内面ナデ
198	b	S7	口縁	捺ナデ		有、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	
199	b	R11	口縁			有少、細英・長、織少	灰褐	不良	
200	b	表塚	口縁	堰凹・棒		有、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	口唇面取り状
201	b	J2	口縁		捺痕	有、細英・長、織少	灰褐	普通	口唇面取り状にナデ
202	b	Q6/Q11	口縁	捺刺・竹背、劈凹		有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	口唇面取り状
203	b	R13	頸			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	口唇面取り状
204	c	R7	口縁	捺刺・竹	条痕	有微、細英・長少、織少	灰褐	普通	刺突と沈線は同一工具、口唇ナデ
205	c	Q9	口縁	条痕・捺刺・竹背		有微、細英・長少、織少	褐灰	普通	刺突と沈線は異種工具、口唇部内面ナデ
206	c	Q8	口縁	捺痕?	捺痕?	有微、細英・長、織少	にぶい黄橙	普通	内外面風化
207	c	住9/P14	口縁	捺痕・捺刺・竹	捺痕	有微、細英・長、織少	にぶい褐	普通	刺突と沈線は同一工具、口唇ナデ

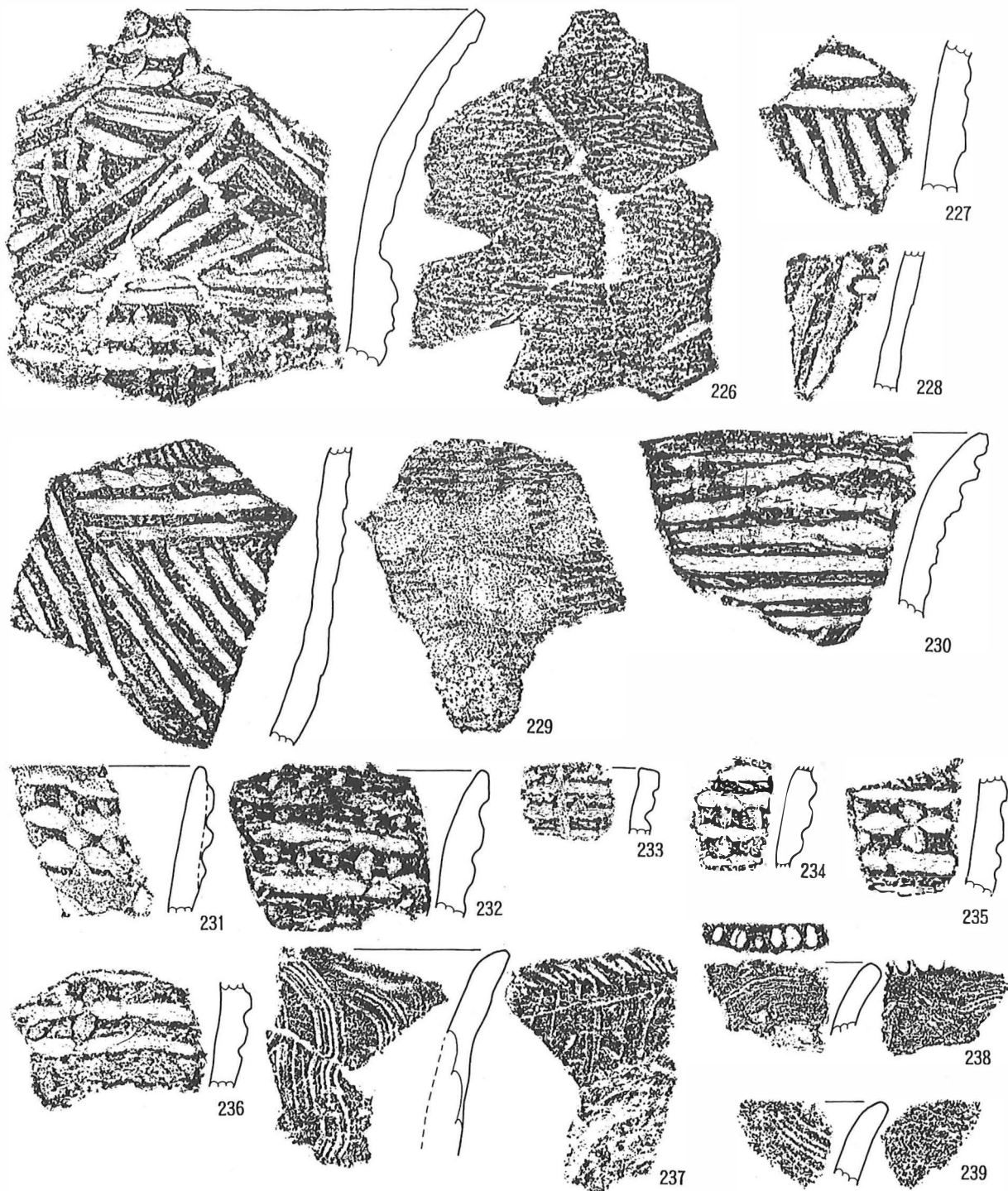
第27図 土器拓影図10



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
208	d	S8	口縁	線底、線刺・竹		有微、細灰・長少、織少	にぶい赤褐色	普通	刺突と沈線は同一工具
209	d	Q12	口縁			有微、細灰・長少、織少	にぶい赤褐色	普通	
210	d	R9	胴上			有、細灰・長多	にぶい赤褐色	普通	内面風化
211	e	Q8	胴上	刺・竹?		有、細灰・長微、織少、金雲多	黒褐色	不良	
212	e	Q6	胴上	刺・竹?		有、細灰・長微、織少、金雲多	黒褐色	不良	211と同一器体
213	c	Q7	胴上	刺・竹?		有、細灰・長微、織少、金雲多	黒褐色	不良	
214	e	S7	胴上	線底		有微、細灰・長少	にぶい褐色	良	
215	e	Q7	胴上		線底	有少、細灰・長、織少	にぶい赤褐色	普通	
216	f	R11	胴上	条痕	条痕	有、細灰・長、織多、金雲多	明赤褐色	不良	外面に織線痕、刺突原体?
217	f	J2	胴上		線痕?	有、細灰・長少、織少	灰黄褐色	普通	内面風化
218	f	R11	胴上	条痕	条痕	有、細灰・長、織多、金雲多	明赤褐色	不良	刺突原体不明
219	g	R5	頸	縦位陸線	波状沈線・竹腹?	有微、細灰・長、織	橙	普通	
220	h	S13	口縁	線刺・ヘラ、唇刺・ヘラ		有、細灰・長、織少	にぶい赤褐色	普通	口縁と口唇の刺突は同一工具、裏線付着
221	h	Q12	口縁	線刺・ヘラ、唇刺・ヘラ	線痕	有、細灰・長、織少	にぶい赤褐色	普通	口縁と口唇の刺突は同一工具
222	h	R13	口縁	線刺・竹腹		細灰・長、織少	赤褐色	普通	
223	h	J2	頸		線痕	有、細灰・長、織少	にぶい赤褐色	普通	
224	h	R15	頸			有、細灰・長、織少	赤褐色	普通	
225	b	S7	頸		線痕	有、細灰・長、織少	赤褐色	普通	

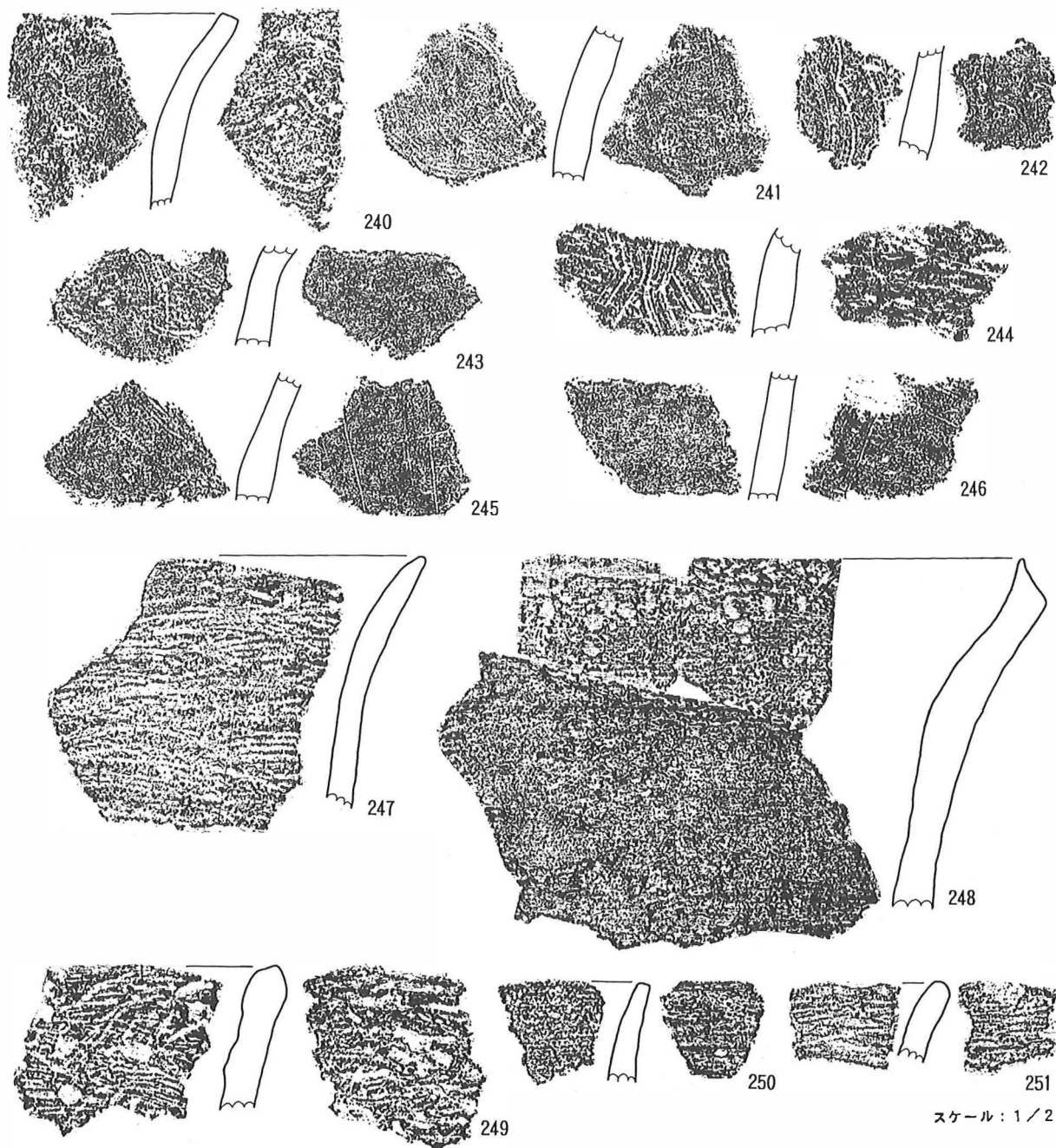
第28図 土器拓影図11



スケール：1/2

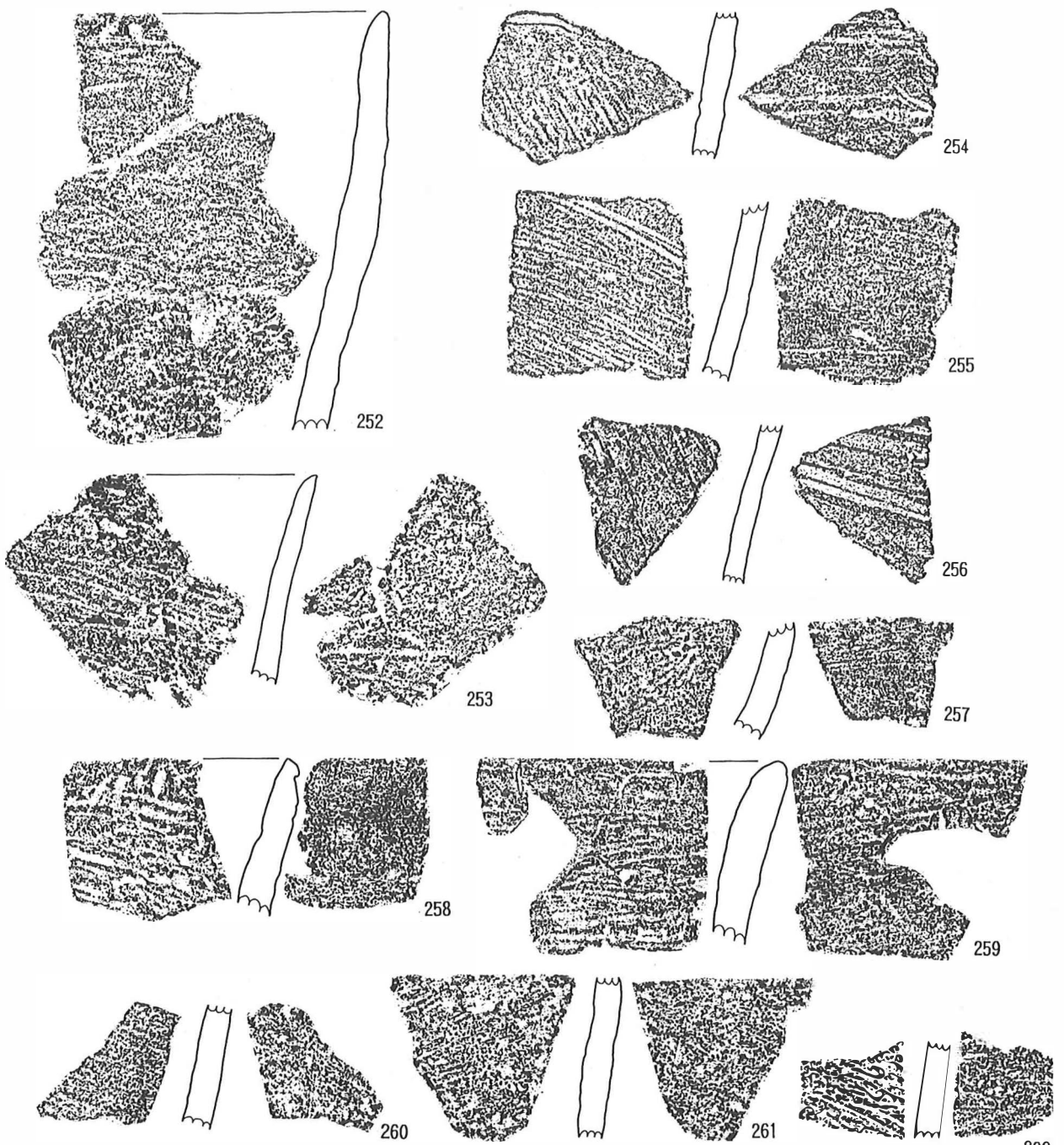
No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
226	a	L3, 4, 6	口縁~胴	縁凹・棒、胴部彫歯状?	条痕	有、英・長、織少、金差少	赤褐色	普通	すべて同…工具で施文か、内面煤付着
227	a	Q15	胴	胴部彫歯状		有微、英・長、織少、金差微	暗褐色	普通	
228	a	S8	胴			有少、細英・長、織少	にぶい赤褐色	普通	
229	a	Q5	胴	胴部彫歯状	条痕	有微、英・長、織少	暗褐色	普通	
230	a	E3	口縁	胴部彫歯状?		英・長、織少	赤褐色	普通	
231	b	R11	口縁			英・長、織少	暗赤褐色	良	外面煤付着、棒状凹圧
232	b	Q5	口縁			英・長、織少	暗赤褐色	普通	棒状凹圧
233	b	Q6	口縁			英・長、織少	にぶい黄褐色	普通	棒状沈線
234	b	Q6	口縁			細英・長微、織少	赤褐色	普通	棒状凹圧
235	b	Q5	胴			英・長、織少	明褐色	普通	棒状凹圧
236	b	R7	胴			英・長、織少	明赤褐色	普通	棒状凹圧
237	c	Q8	口縁		縁割・へら、横位細沈線、原底	有微、細英・長微、織	明黄褐色	普通	
238	c	S8	口縁	唇凹・棒	波状文	有微、英・長微、織少	暗褐色	普通	
239	c	J2	口縁			有、細英・長、織少	明褐色	普通	

第29図 土器拓影図12



No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色澤	焼成	備考
240	c	R9	口縁		波状文	細夾・長、織少	淡黄	普通	
241	c	R8	頸		鱗痕	細夾・長少、織少	橙	普通	
242	c	R6	胴		波状文	細夾・長少、織少	にぶい褐	普通	
243	c	R5	頸			夾・長、織少	にぶい褐	普通	
244	c	R9	胴		鱗痕	細夾・長少、織少	橙	普通	
245	c	R8	胴		格子状細沈線	細夾・長少、織少	褐	普通	
246	c	R11	胴	無文	格子状細沈線	夾・長、織少	褐	普通	外面煤付着
247	a	S13	口縁	縁刺・竹?		有、粗夾・長、織少	明赤褐	普通	格子状帯条痕?、波状口縁
248	a	S8	口縁	縁刺・ヘラ?		有、粗夾・長、織少	にぶい赤褐	普通	格子状帯条痕?
249	a	P14	口縁		条痕	有、細夾・長、織多	明赤褐	普通	格子状帯条痕?
250	a	R13	口縁			有、細夾・長、織少	にぶい赤褐	普通	格子状帯条痕?
251	a	L3, 4, 5	口縁			有、細夾・長、織少	にぶい赤褐	普通	格子状帯条痕?

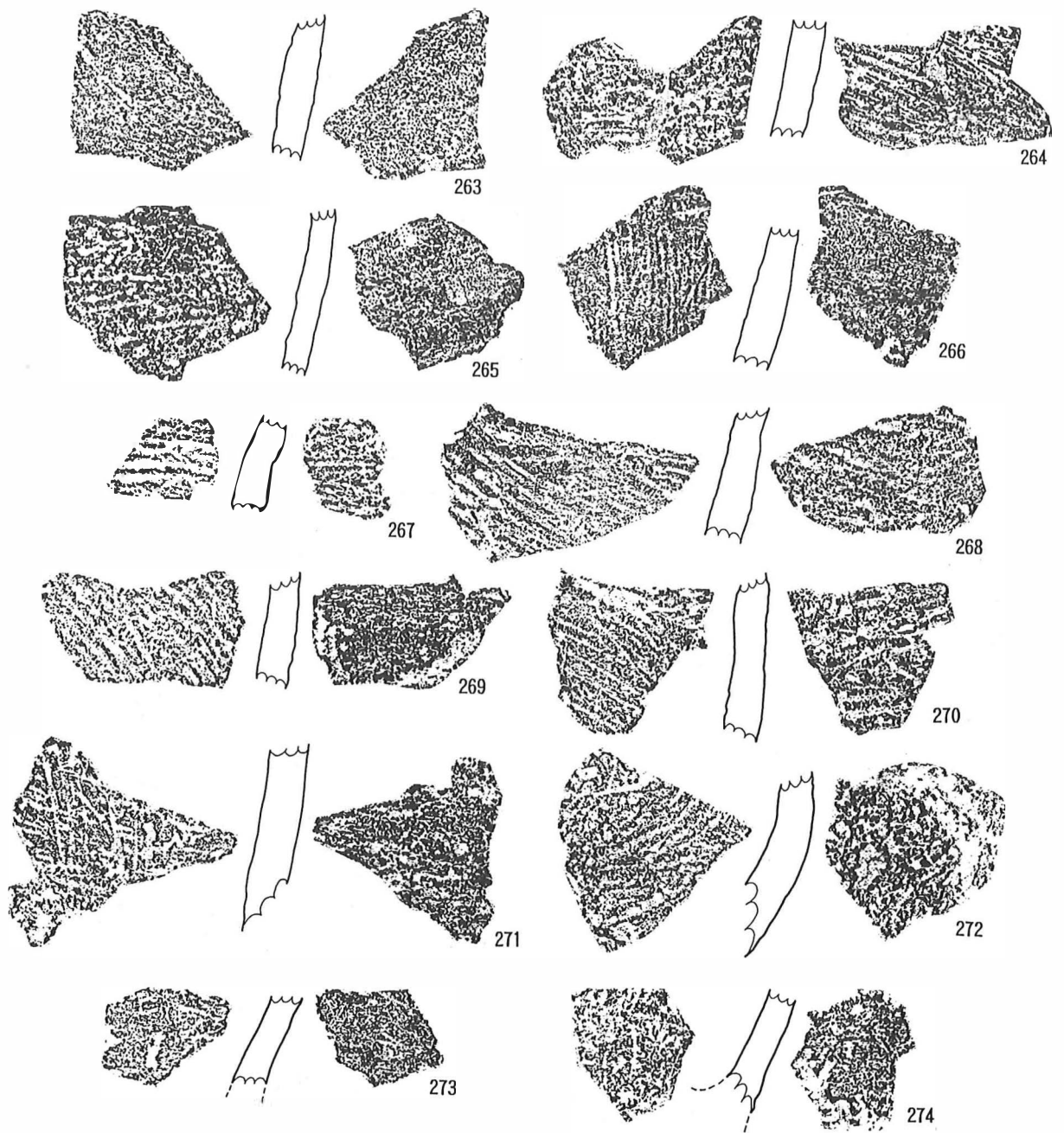
第30図 土器拓影図13



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	施成	備考
252	a	1.3, 4, 6	口縁	綵刺・ヘラ?		有、細英・長少、織少	明赤褐	普通	絡状帯条痕?
253	a	Q1	胴		条痕	細英・長、織少	橙	普通	絡状帯条痕?
254	a	Q5	胴	横位沈線	条痕	細英・長、織少	暗赤褐	普通	絡状帯条痕?
255	a	S7	胴		条痕	有微、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	絡状帯条痕?
256	a	M4	胴		条痕	細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	絡状帯条痕?
257	a	Q13	底		条痕	有少、細英・長、織少	明赤褐	普通	絡状帯条痕?
258	a	P14	口縁	綵刺・ヘラ		有、細英・長、織少、金雲	橙	普通	絡状帯条痕?
259	a	Q1	口縁		条痕	有、細英・長少、織少、金雲多	褐	普通	絡状帯条痕?
260	a	R8	胴			有微、細英・長、織少、金雲多	にぶい褐	普通	絡状帯条痕?、内面煤付着
261	a	R11	胴			有微、細英・長、織少、金雲多	にぶい褐	普通	絡状帯条痕?
262	a	Q6	胴			有微、細英・長少、織少、金雲多	褐	普通	絡状帯条痕?

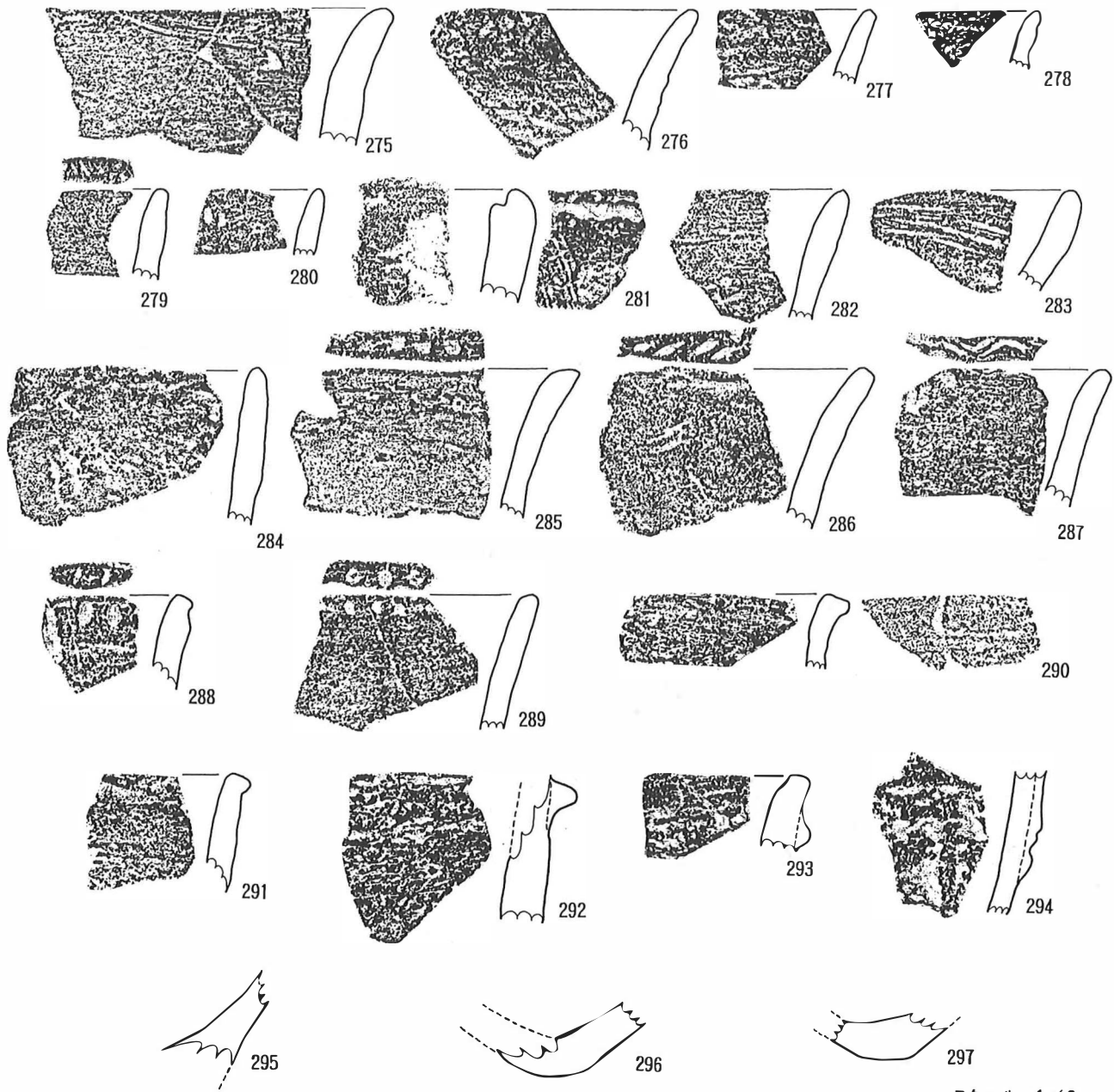
第31図 土器拓影図14



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色別	焼成	備考
263	a	S15	胴			有微、細英・長、織少、金雲	明赤褐	普通	絡状帯条痕?
264	a	Q4	胴		条痕	有微、細英・長少、織少、金雲少	明赤褐	普通	絡状帯条痕?
265	a	Q6	胴			有微、細英・長少、織少、金雲多	明赤褐	普通	絡状帯条痕?
266	a	R13	胴			有微、細英・長少、織少、金雲多	明赤褐	普通	絡状帯条痕?
267	b	R8	頸		条痕	有微、英・長微、織多	にぶい赤褐	不良	板状工具条痕?
268	b	S7	胴		条痕	有微、英・長微、織多	橙	不良	板状工具条痕?
269	b	R8	胴			有少、英・長微、織少、金雲多	明赤褐	普通	板状工具条痕?
270	b	R8	頸		条痕	有微、英・長微、織多	橙	不良	板状工具条痕?、内面謀付着
271	b	表探	胴		条痕	有微、英・長微、織多	暗赤褐	不良	板状工具条痕?
272	b	Q13	胴?		条痕	有微、英・長、織	明赤褐	普通	板状工具条痕?
273	b	Q16	底			有微、英・長微、織多	にぶい赤褐	不良	板状工具条痕?
274	b	J2	底			有微、英・長微、織多	明赤褐	不良	板状工具条痕?

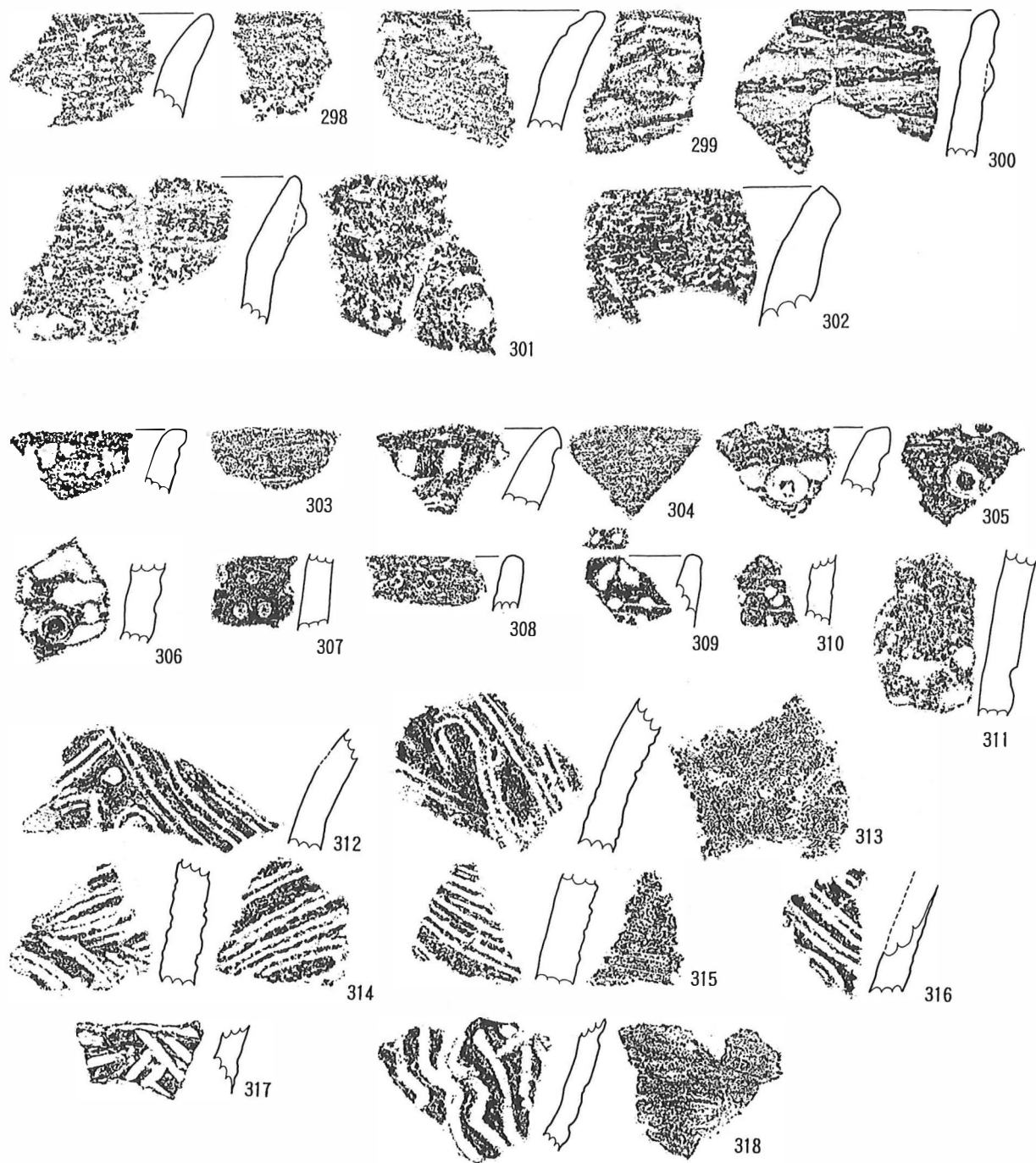
第32図 土器拓影図15



スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
275	a	Q12	口縁	外反		細英・長、織少	赤褐	普通	
276	a	R9	口縁	外反		有少、粗英・長少、織少、金型少	明赤褐	普通	
277	a	Q11	口縁	外反		英・長、織少	にぶい赤褐	普通	
278	a	S8	口縁	外反		細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	
279	a	S8	口縁	外反		有微、細英・長、織少、金型	灰褐	普通	
280	a	R5	口縁	外反		有、細英・長微、金型	橙	普通	
281	a	Q9	口縁	直立	口縁上端横位沈線	有、細英・長少、織少	明赤褐	普通	
282	a	R12	口縁	内湾		有微、細英・長、織少	灰褐	普通	
283	a	S13	口縁	内湾		有微、細英・長、織少	にぶい赤褐	普通	口唇煤付着
284	a	Q5	口縁	内湾		有微、細英・長少、織	橙	普通	内外面煤付着
285	a	欵Tr	口縁	外反、唇凹・棒		細英・長少、織少	にぶい褐	普通	
286	a	Q6	口縁	外反、唇凹・棒		細英・長少、織少	明赤褐	普通	
287	a	R9	口縁	外反、唇凹・竹?		細英・長少、織少	灰褐	普通	
288	a	Q9	口縁	直立、縁刺・棒、唇刺・ヘラ		有、細英・長少、織少	明赤褐	普通	割れ口煤付着
289	a	R8	口縁	内湾、縁刺・棒、唇刺・竹頭		有微、細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	外面煤付着
290	a	K11/S8	口縁	直立	条痕	有微、細英・長微、織少、金型多	にぶい赤褐	不良	外面煤付着
291	a	R7	口縁	直立		細英・長、織少	灰褐	普通	
292	a	R7	口縁	直立・突帯		英・長、織多	暗赤褐	不良	
293	a	K8	口縁	直立・突帯		英・長、織	橙	普通	
294	a	R8	胴	突帯		英・長、織少	明赤褐	普通	
295	a	Q9	底			細英・長少、織少	灰黄褐	普通	
296	a	R7	底			英・長、織少	にぶい橙	普通	
297	a	K11	底			英・長、織少	にぶい橙	普通	

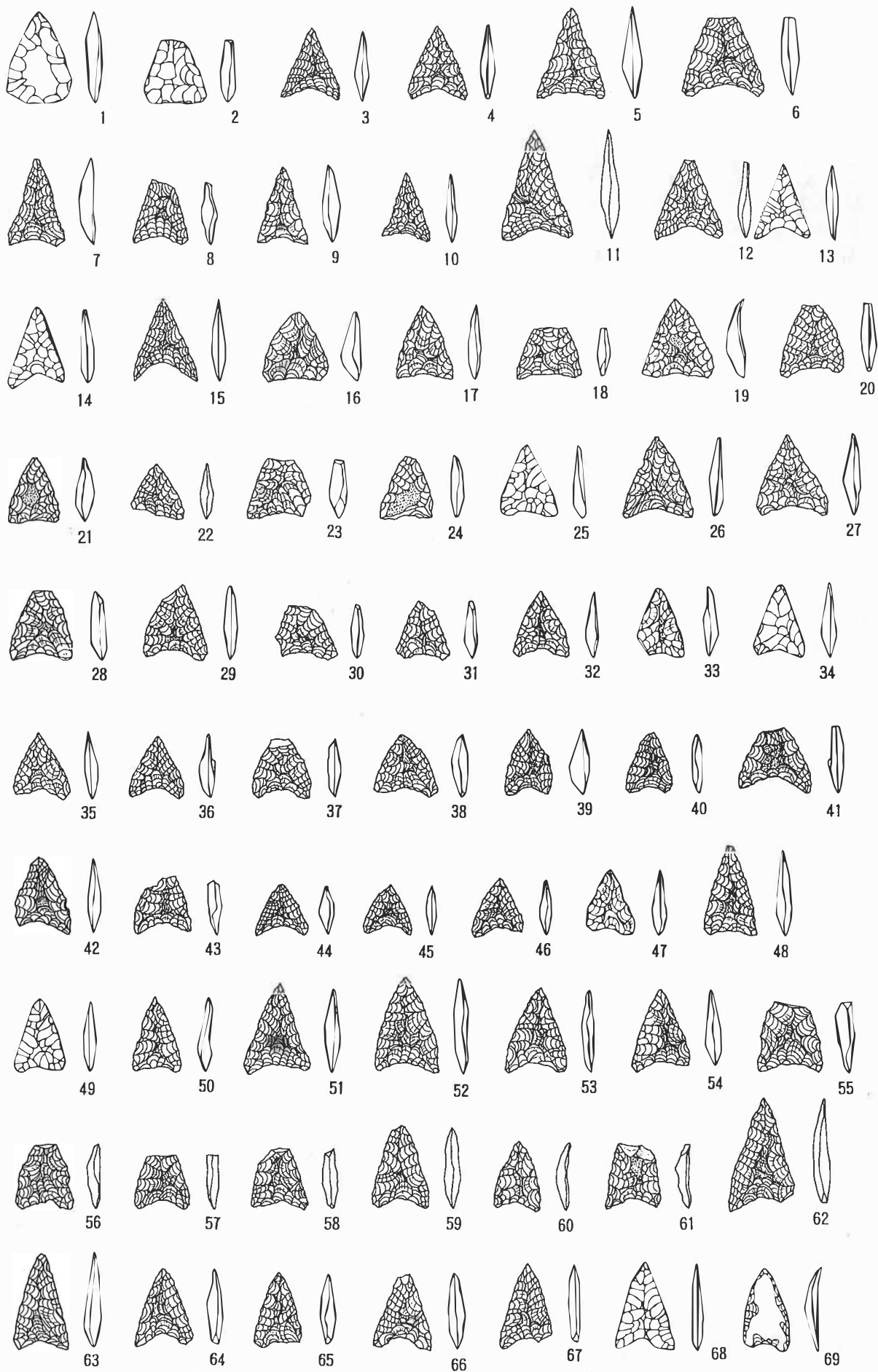
第33図 土器拓影図16



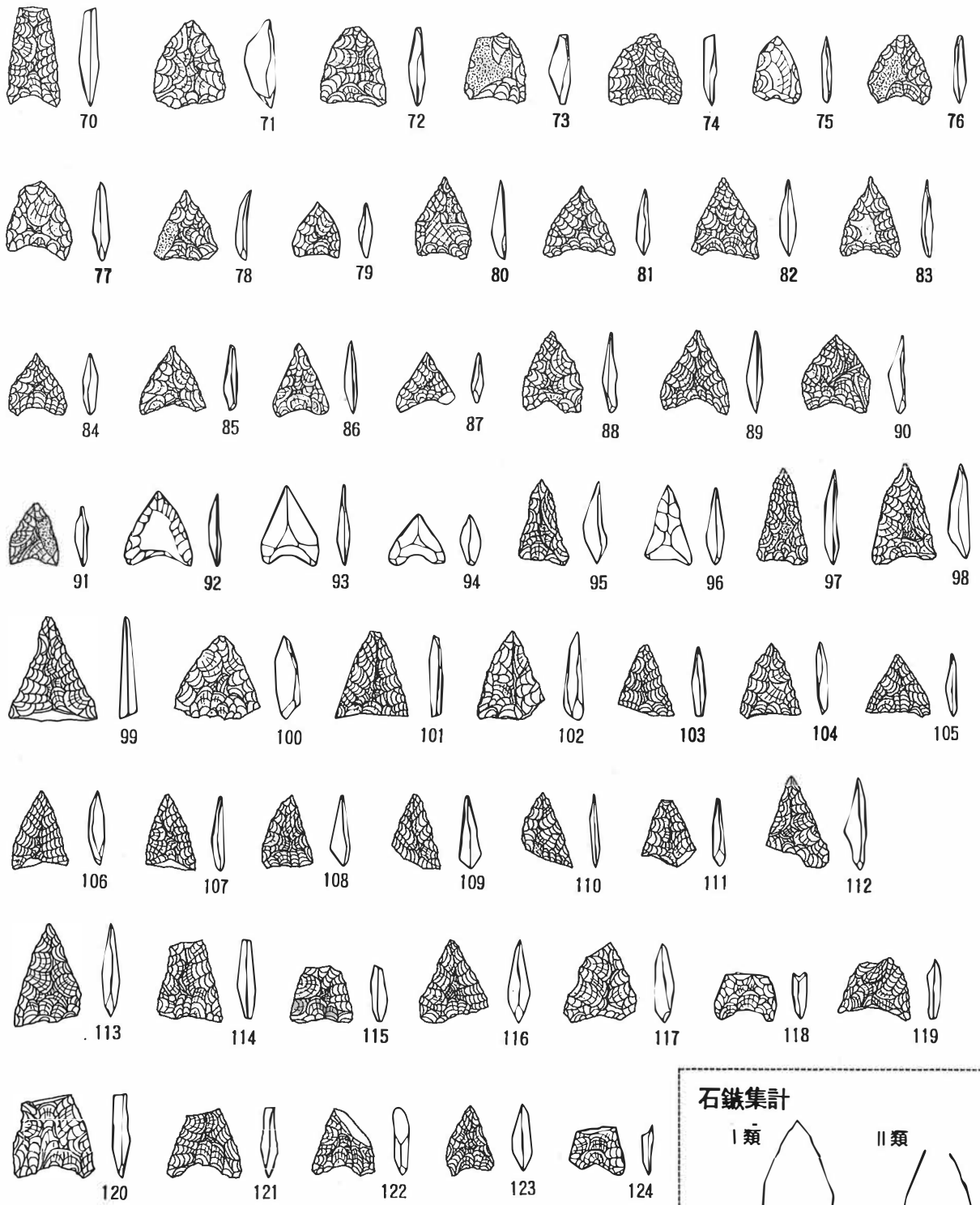
スケール：1/2

No.	分類	出土区	部位	外面文様・調整	内面文様・調整	胎土	色調	焼成	備考
298	b	S8	口縁	外反		英・長、織多	明赤褐	不良	
299	b	K9	口縁	外反	条痕(山形状)	英・長、織多	黒褐	不良	外面謀付着
300	b	R11	口縁	直立・突帯		英・長、織多	灰褐	不良	
301	b	R12	口縁	外反・突帯		英・長、織多		不良	
302	b	R8	口縁	突帯状		英・長、織多	橙	不良	
303	S7	口縁	擦痕、棘刺・竹?	擦痕		有微、細英・長微、織少	褐	普通	口唇ナデ
304	S8	口縁	棘刺・角棒	擦痕		有微、細英・長少、織少	橙	普通	口縁部刺突とは異種工具沈機あり?
305	Q6	口縁	棘刺・竹頭、唇刺・竹頭	棘刺・竹頭		細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	口縁裏裏・口唇の刺突は同一工具、口縁端ナデ
306	R5	胴上	刺・竹頭			細英・長少、織少	橙	普通	
307	Q6	胴上	刺・竹頭			有、細英・長少、織少	橙	普通	
308	Q5	口縁	刺・竹頭			有、細英・長、織少	褐	普通	
309	Q11	口縁	擦痕、棘刺・ヘラ・棒、唇刺・棒			有少、細英・長少、織少	灰褐	普通	口縁と口唇の刺突は同一工具(棒)
310	R10	胴上	擦痕、刺・棒			有少、細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	
311	P14	胴上	刺・竹?、横位2列			有少、細英・長微、織多	橙	不良	織推を喜んで軽量
312	R11	頸	2本で1単位沈線			英・長、織少	橙	普通	
313	R12	頸	2本で1単位沈線			英・長、織少	橙	普通	
314	R8	胴	2本で1単位沈線	2本で1単位沈線		英・長、織少	灰褐	普通	
315	R7	胴	2本で1単位沈線			英・長、織少	灰褐	普通	
316	R10	胴	2本で1単位沈線			英・長、織少	灰褐	普通	
317	K7	胴	2本で1単位沈線			有微、細英・長少、織少	にぶい赤褐	普通	
318	R5	胴	棒状工具沈線			有微、細英・長少、織少	黒褐	普通	

第34図 土器拓影図17



第35图 石器实测图 1



石鏃集計

I類



1

II類



1

III類



III-1-a
2



III-1-b
11



III-2-a
32



III-2-b
22



III-2-c
1



III-3
7



III-4-a
17

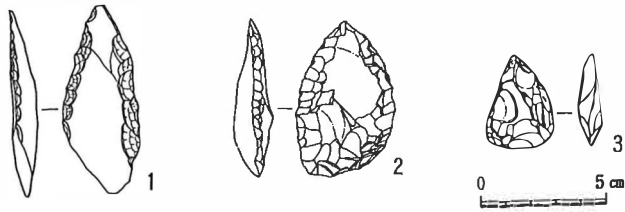


III-4-b
4

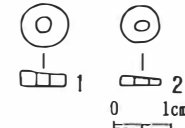


第36図 石器実測図2

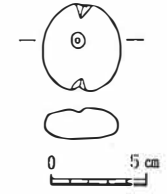
尖頭石器



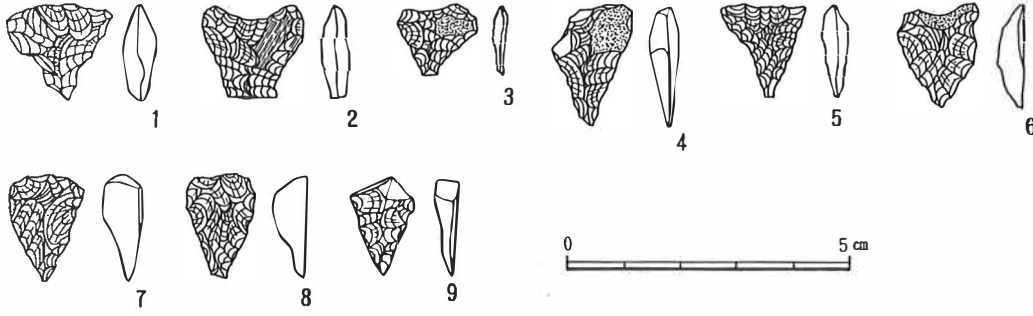
玉類



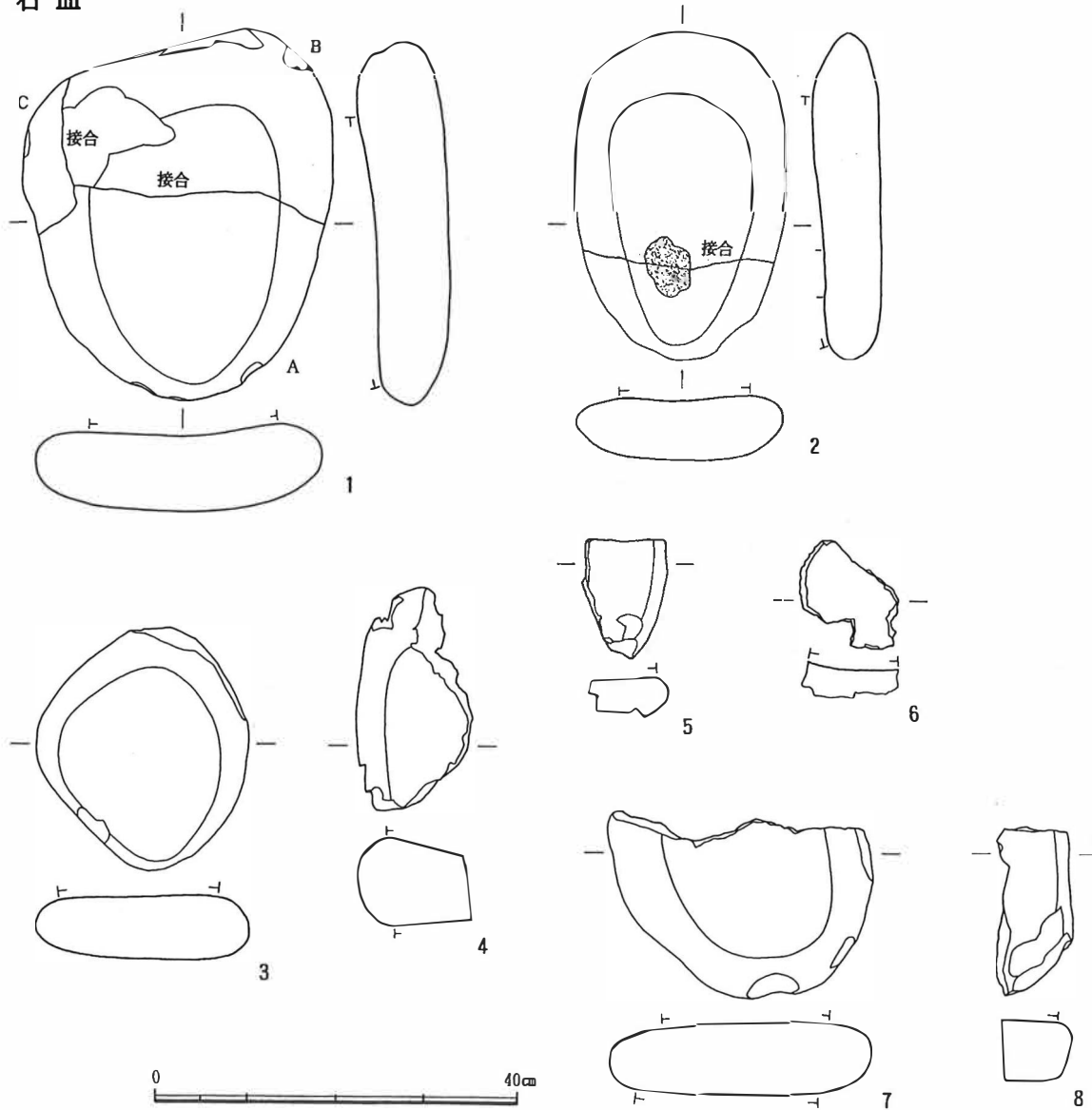
石錘



石錐

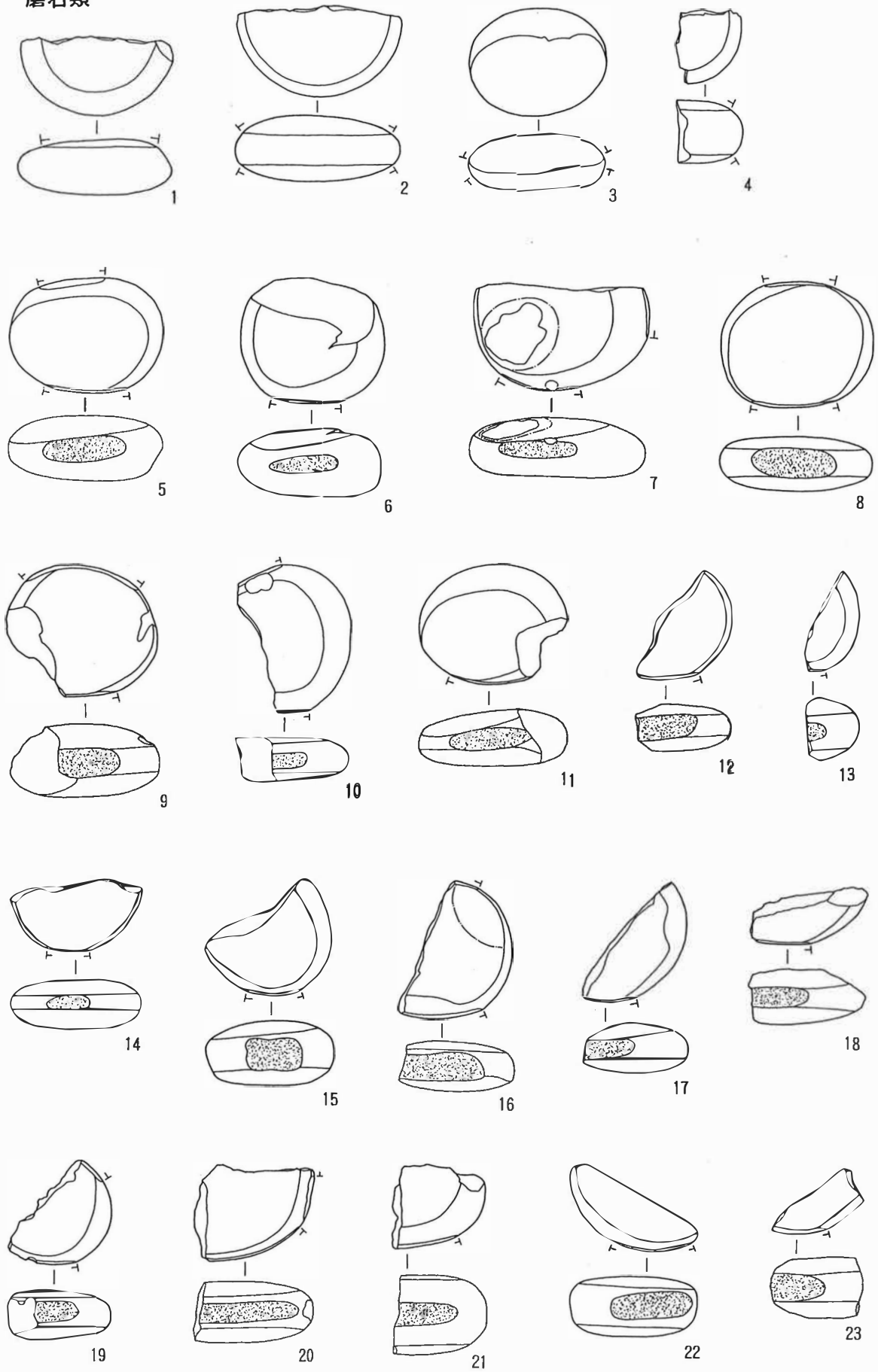


石皿



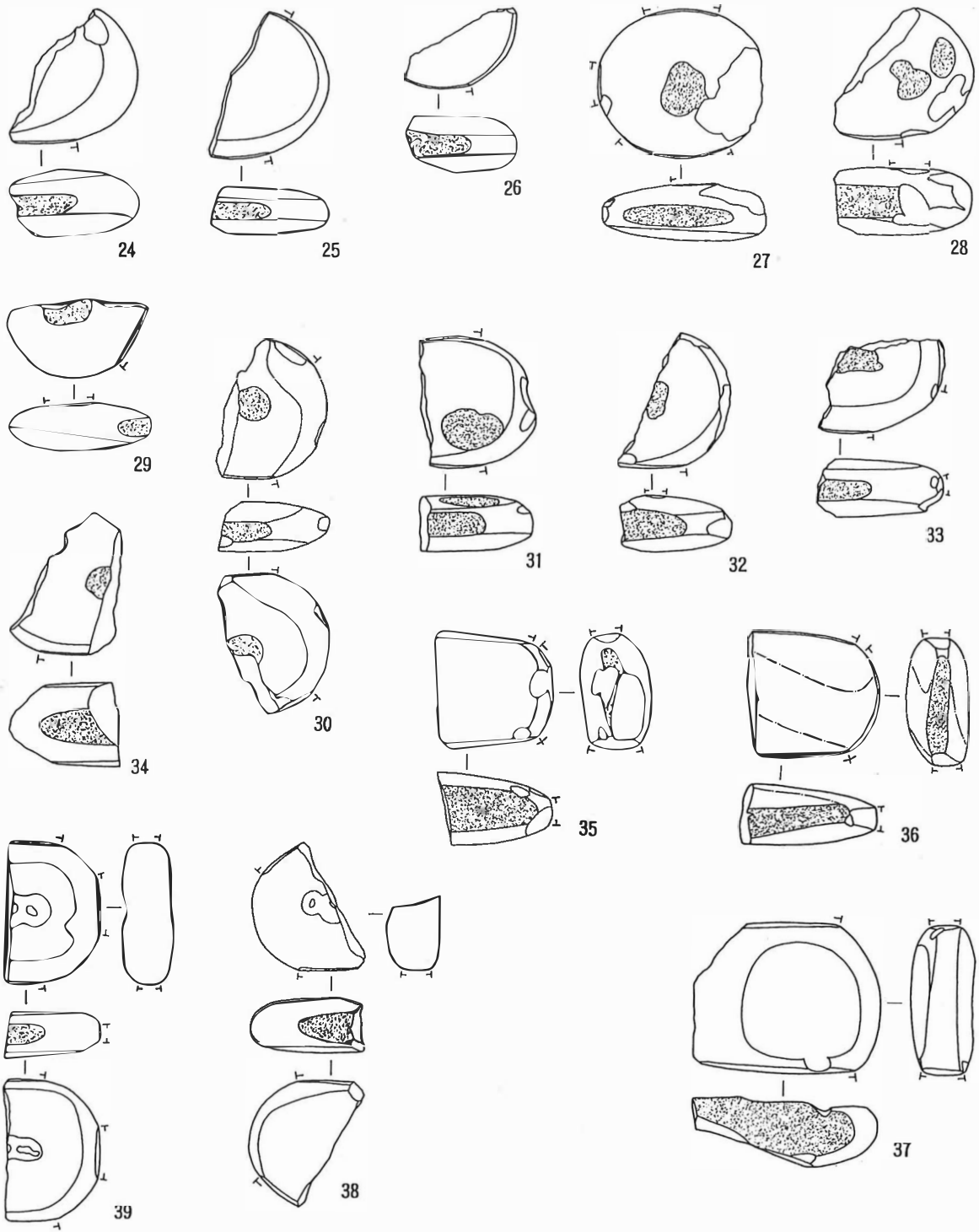
第37図 石器実測図3

磨石類

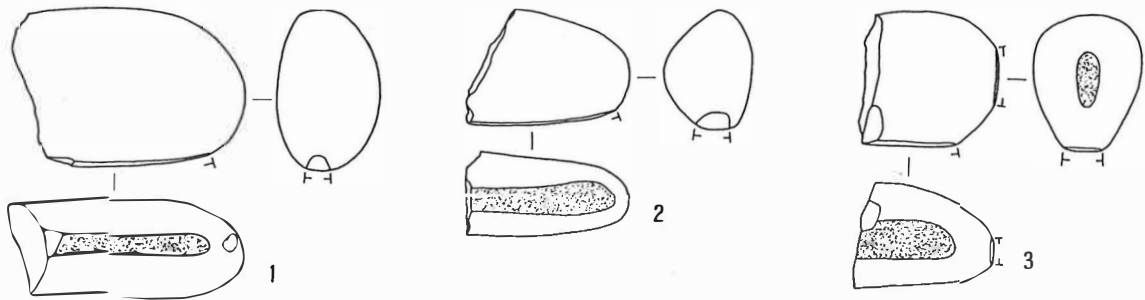


第38图 石器实测图4

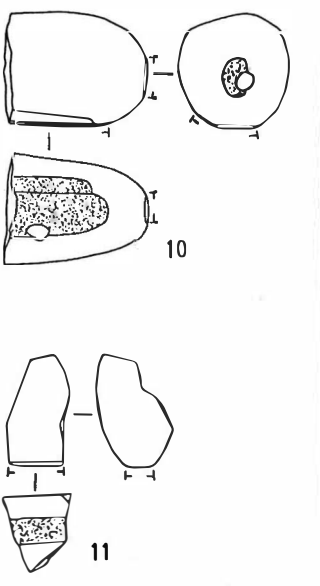
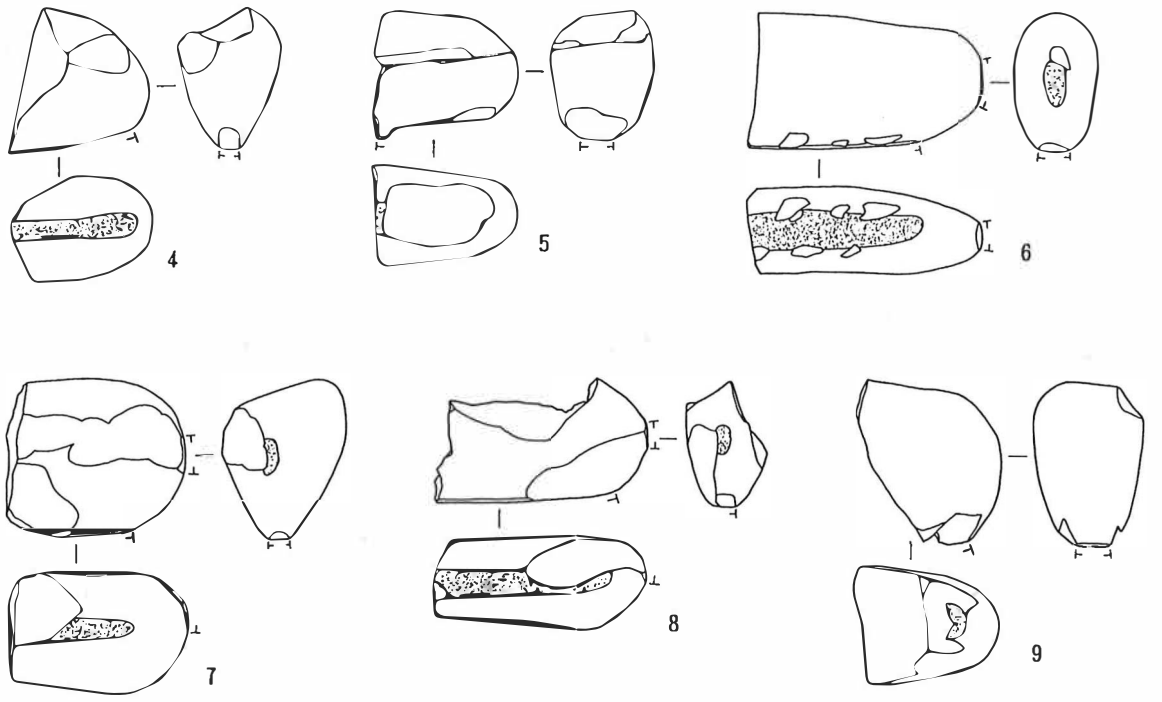




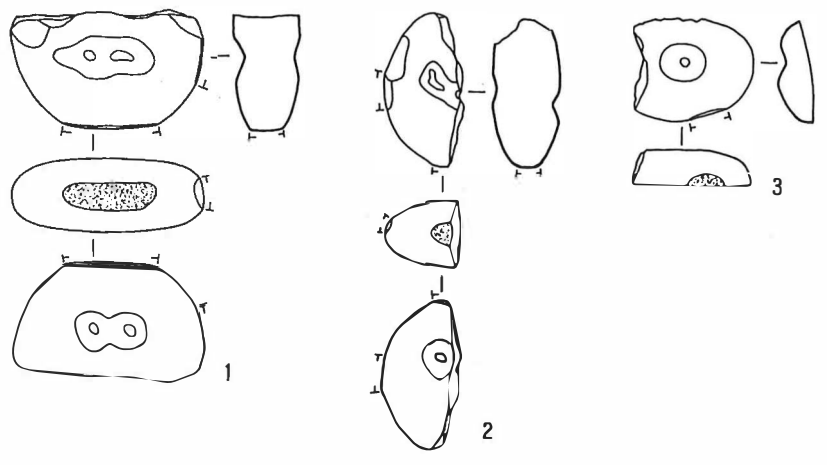
特殊磨石



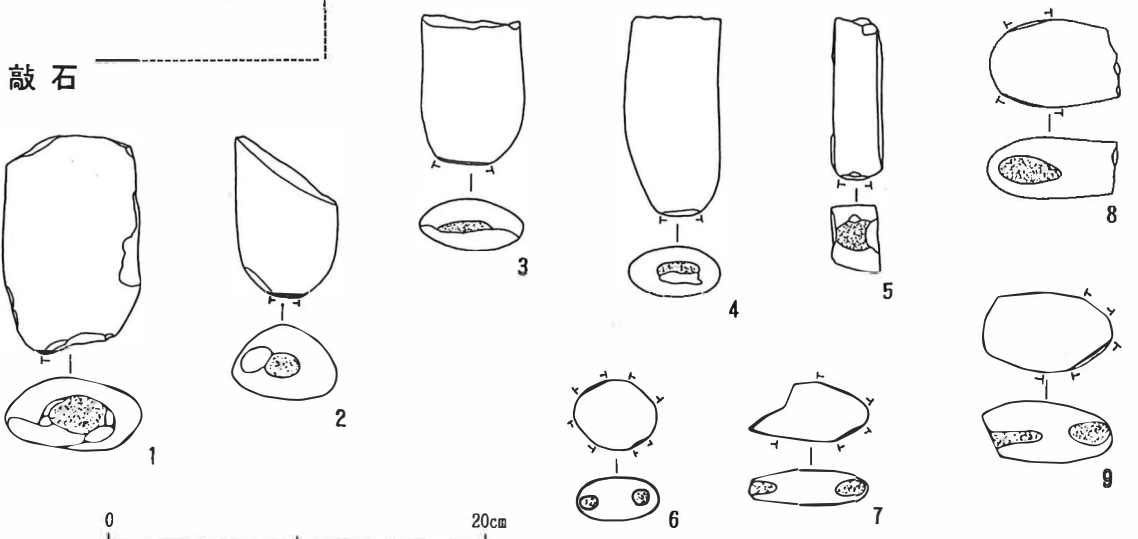
第39图 石器实测图5



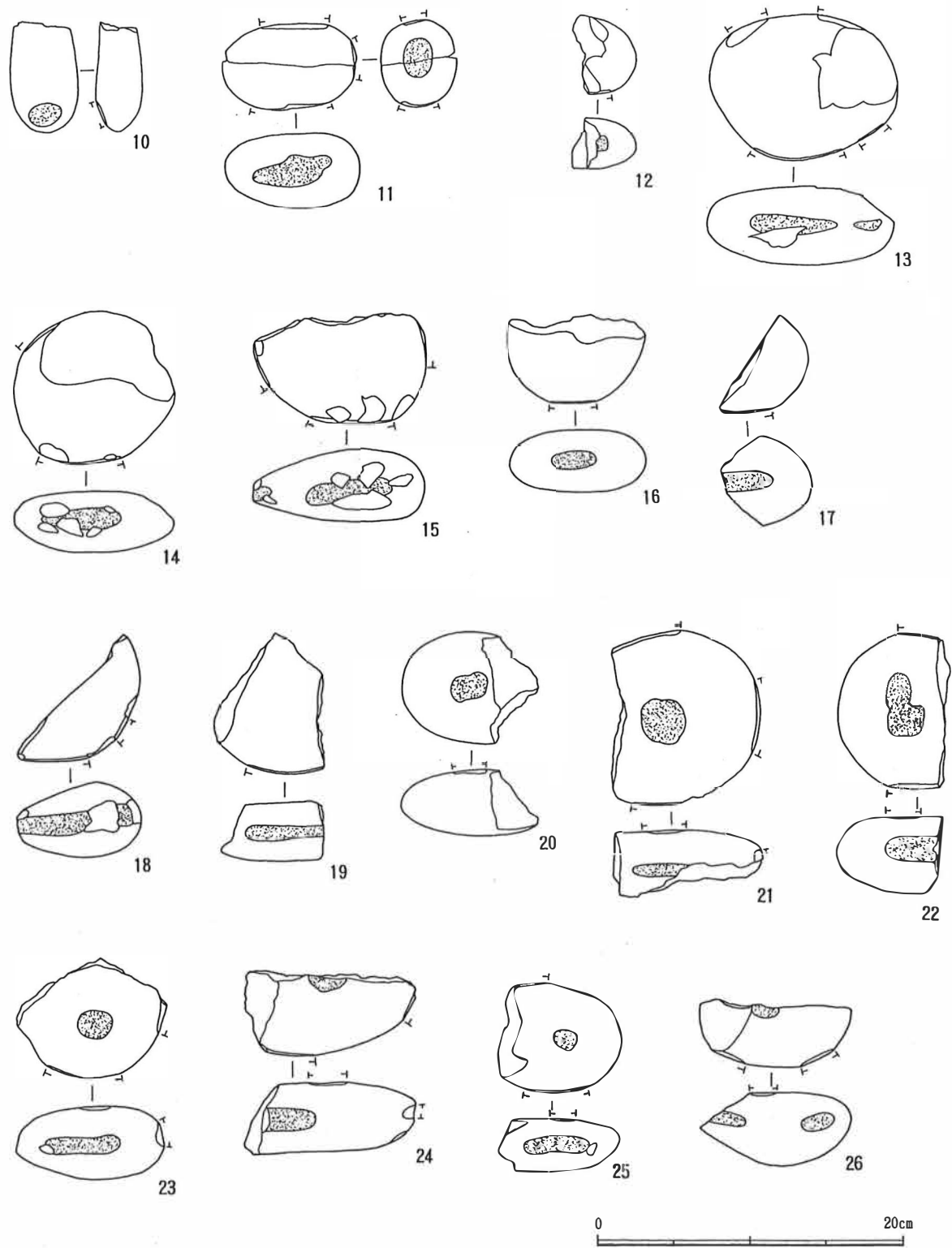
凹石



敲石

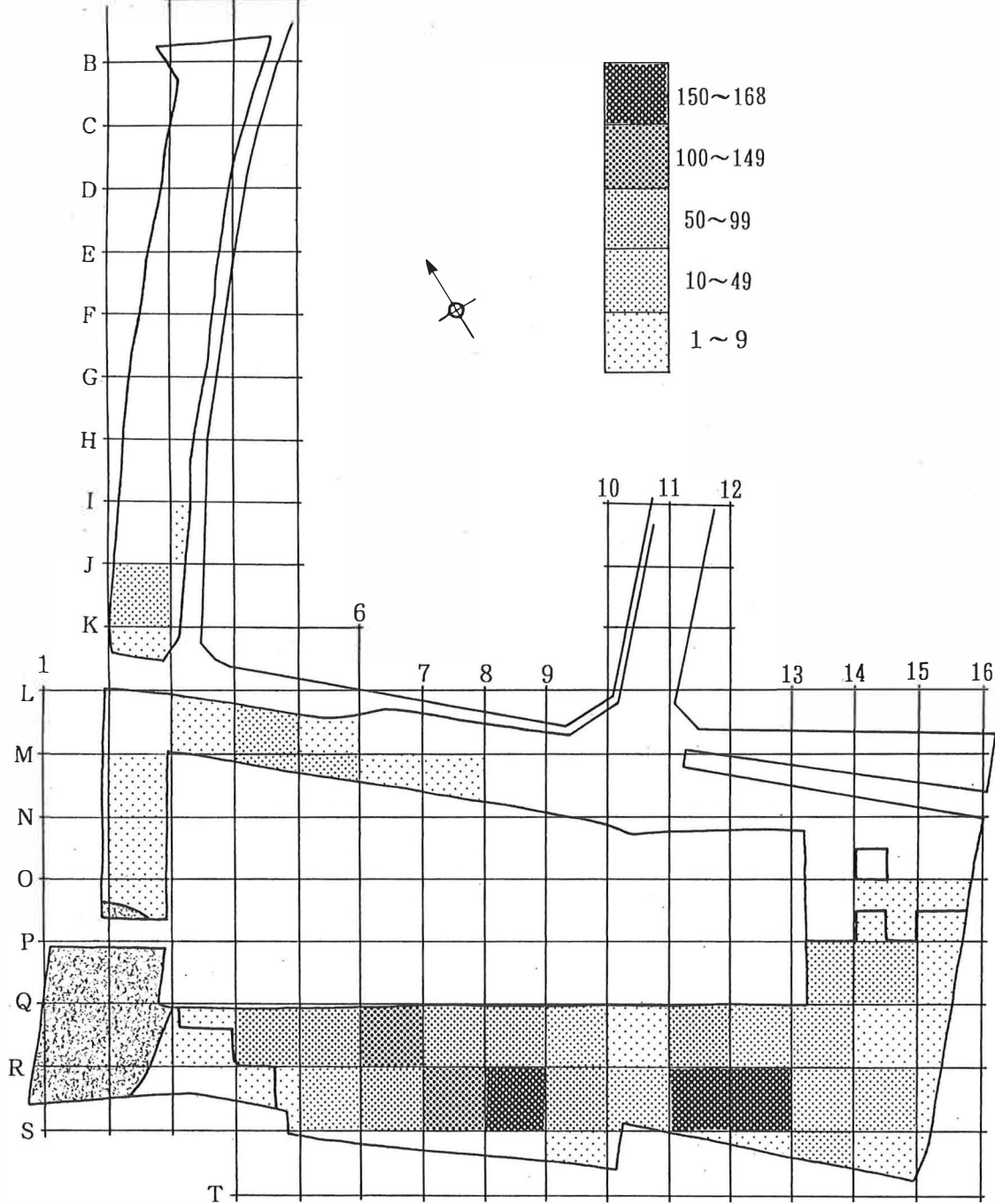


第40图 石器实测图6

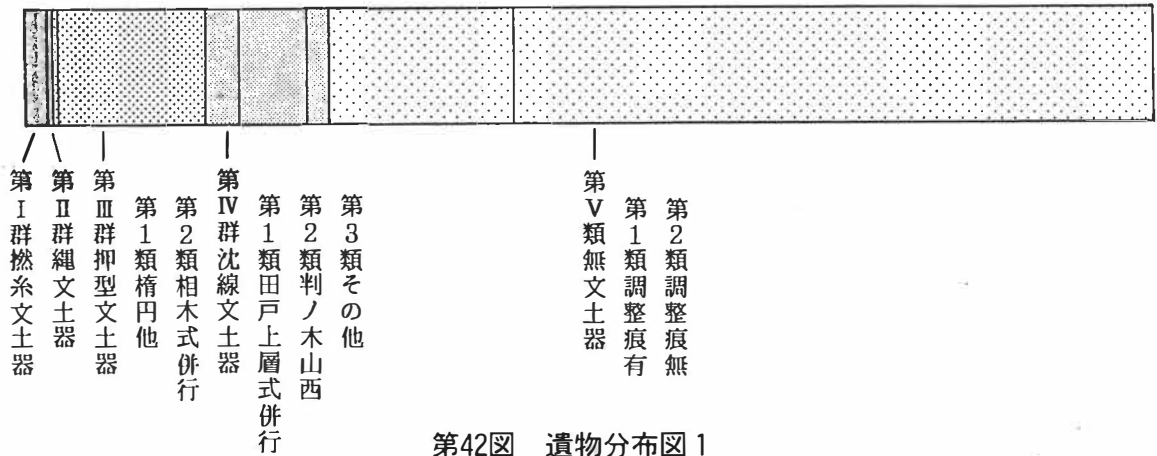


第41图 石器实测图7

土器全体分布

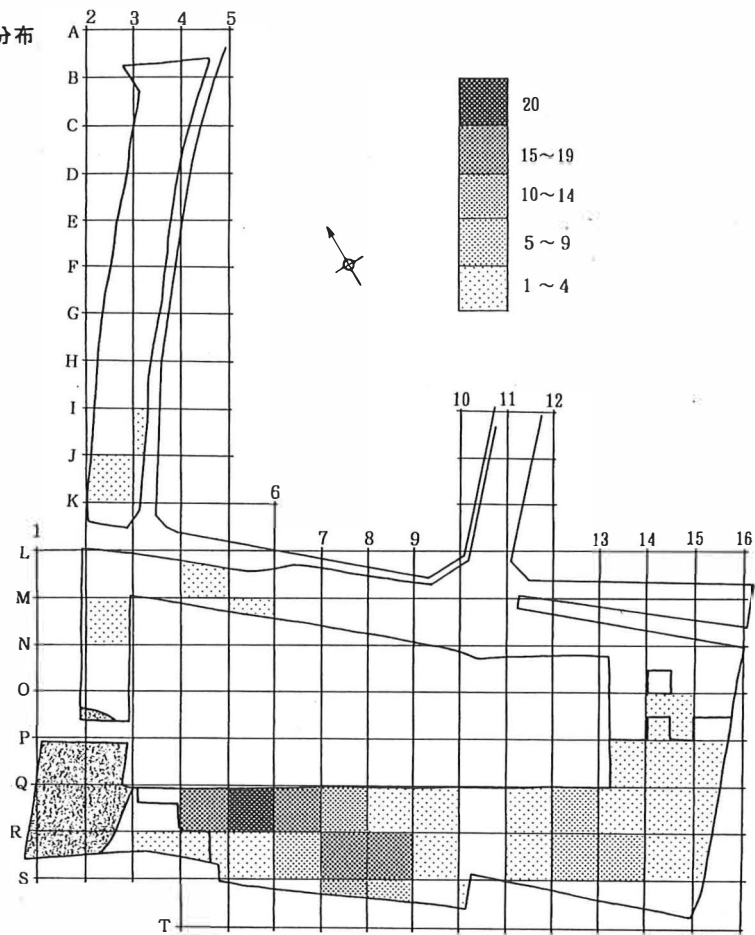


土器出土比率

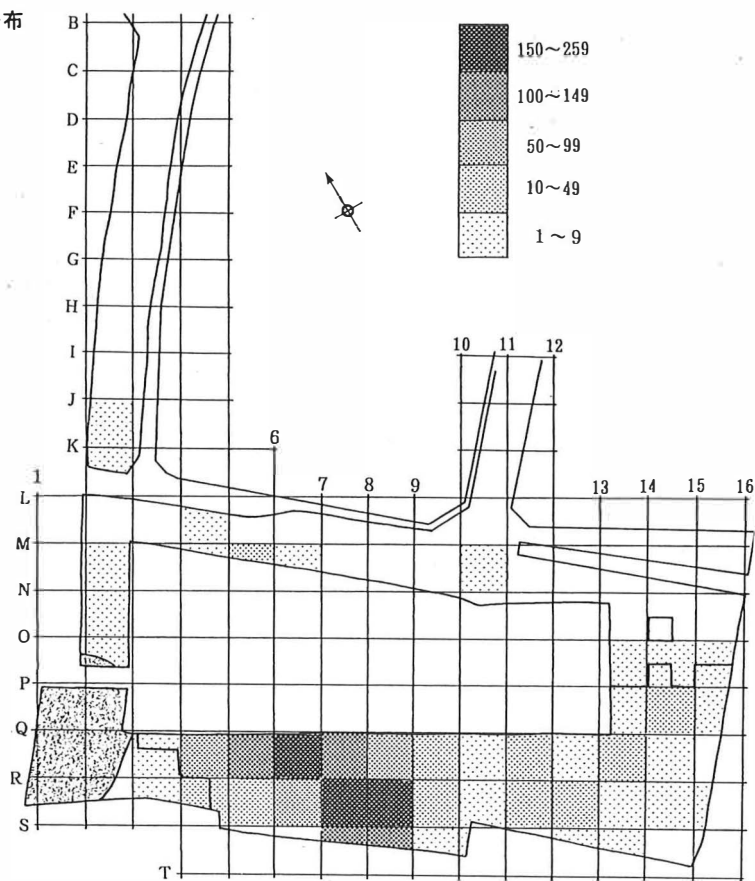


第42図 遺物分布図1

石器全体分布



黒曜石片分布



第43図 遺物分布図2

石鏃

(単位 cm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	Q-5	燧石	2.2	1.6	0.4	1.5	完形	
2	II	Q-6	砂岩?	(1.5)	1.5	0.4	0.4	先端欠	
3	III	竪穴8	黒曜石	1.7	1.4	0.35	0.4	完形	
4	III	Q-7	黒曜石	1.8	1.4	0.35	0.6	完形	
5	III	南試掘	黒曜石	2.2	1.6	0.5	0.9	完形	
6	III	R-8	黒曜石	(1.9)	2.0	0.45	1.4	先端欠	
7	III	L-4	黒曜石	2.1	1.4	0.35	0.7	略完形	
8	III	Q-6	黒曜石	(1.5)	1.4	0.4	0.6	先端欠	
9	III	Q-5	黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.5	完形	含クリストバル石
10	III	S-10	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.3	逆刺欠	
11	III	R-7	黒曜石	2.6	1.8	0.45	1.1	完形	
12	III	R-7	黒曜石	(1.9)	1.6	0.3	(0.8)	先端欠	
13	III	Q-13	ジャスパー	1.8	1.3	0.35	0.6	完形	または碧玉
14	III	R-8	ジャスパー	1.9	1.3	0.3	0.5	完形	
15	III	R-14	黒曜石	2.0	1.5	0.35	0.7	完形	
16	III	Q-7	黒曜石	1.7	1.7	0.5	1.0	略完形	
17	III	R-12	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	完形	
18	III	Q-5	黒曜石	1.2	1.6	0.35	(0.6)	先端欠	
19	III	S-7	黒曜石	1.9	1.8	0.4	0.4	完形	
20	III	R-13	黒曜石	(1.7)	1.6	0.4	(0.8)	先端欠	
21	III	R-12	黒曜石	1.6	1.2	0.5	0.7	完形	
22	III	S-7	黒曜石	1.4	(1.3)	0.35	0.4	逆刺欠	
23	III	R-9	ジャスパー	(1.5)	(1.5)	0.45	(0.9)	先端逆刺欠	または碧玉
24	III	R-13	黒曜石	1.5	(1.2)	0.35	(0.5)	略完形	
25	III	竪穴6	ジャスパー	1.7	1.4	0.3	0.5	完形	
26	III	表採	黒曜石	1.9	1.7	0.4	0.7	完形	
27	III	Q-5	黒曜石	1.9	(1.8)	0.4	(0.9)	完形	
28	III	攪乱	黒曜石	(1.7)	1.5	0.4	(0.8)	先端欠	
29	III	R-8	黒曜石	(1.8)	1.6	0.4	(0.8)	先端欠	
30	III	Q-5	黒曜石	(1.3)	(1.5)	0.35	(0.6)	先端逆刺欠	
31	III	R-9	黒曜石	(1.4)	1.3	0.3	(0.5)	先端逆刺欠	
32	III	R-7	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.5	完形	
33	III	Q-5	黒曜石	(1.7)	(1.2)	0.35	(0.5)	逆刺欠	
34	III	Q-4	黒曜石	1.7	1.3	0.35	0.5	略完形	ジャスパー又は碧玉
35	III	Q-7	黒曜石	1.6	1.4	0.35	0.5	完形	
36	III	Q-7	黒曜石	1.4	1.4	0.4	0.5	完形	
37	III	Q-8	黒曜石	(1.4)	1.5	0.35	(0.6)	先端欠	
38	III	Q-5	黒曜石	(1.5)	(1.5)	0.4	(0.5)	逆刺欠	ジャスパー又は碧玉
39	III	Q-12	黒曜石	1.5	1.1	0.5	0.7	完形	
40	III	R-6	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.4	略完形	
41	III	6Tr	黒曜石	(1.6)	1.8	0.35	0.8	先端欠	
42	III	Q-7	黒曜石	1.8	(1.4)	0.35	(0.7)	略完形	
43	III	Q-6	黒曜石	(1.4)	1.4	0.4	(0.5)	先端欠	
44	III	R-7	黒曜石	1.3	1.3	0.4	0.3	完形	

第4表 石器観察表1

45	Ⅲ	Q-7	黒曜石	1.2	1.2	0.25	0.3	略完形	
46	Ⅲ	Q-4	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.4	完形	
47	Ⅲ	R-8	黒曜石	1.6	1.2	0.35	0.4	完形	
48	Ⅲ	Q-4	黒曜石	2.1	1.2	0.4	0.9	略完形	
49	Ⅲ	R-11	ジャスパー	1.8	1.2	0.35	0.6	完形	
50	Ⅲ	Q-5	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.5	完形	含クリストバル石
51	Ⅲ	R-8	黒曜石	2.2	1.6	0.4	0.8	完形	
52	Ⅲ	R-7	黒曜石	2.3	1.6	0.35	1.0	完形	
53	Ⅲ	R-8	黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.7	完形	
54	Ⅲ	Q-9	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.7	完形	
55	Ⅲ	Q-7	黒曜石	(1.7)	1.6	0.45	(1.0)	先端欠	
56	Ⅲ	Q-13	黒曜石	(1.5)	1.4	0.35	(0.7)	先端欠	
57	Ⅲ	Q-5	黒曜石	(1.3)	1.4	0.3	(0.5)	先端欠	
58	Ⅲ	R-15	黒曜石	(1.5)	(1.4)	0.4	(0.8)	先端欠	
59	Ⅲ	R-7	黒曜石	(1.9)	1.5	0.45	(1.1)	略完形	
60	Ⅲ	M-1	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.5	完形	
61	Ⅲ	S-8	黒曜石	(1.6)	1.4	0.3	(0.6)	先端欠	
62	Ⅲ	R-8	黒曜石	2.7	(1.6)	0.4	(1.1)	逆刺欠	
63	Ⅲ	S-7	黒曜石	(2.3)	(1.4)	0.4	(0.9)	逆刺欠	
64	Ⅲ	R-5	黒曜石	2.2	(1.4)	0.3	(0.6)	逆刺欠	
65	Ⅲ	Q-9	黒曜石	(1.8)	(1.2)	0.4	(0.6)	逆刺欠	
66	Ⅲ	Q-6	黒曜石	(1.8)	1.4	0.4	(0.5)	先端欠	
67	Ⅲ	R-8	黒曜石	2.1	(1.3)	0.3	(0.6)	逆刺欠	
68	Ⅲ	R-11	ジャスパー	2.1	1.4	0.3	0.8	完形	
69	Ⅲ	6 Tr	黒曜石	2.0	1.2	0.25	0.5	略完形	
70	Ⅲ	E-13	黒曜石	(2.1)	1.2	0.45	(1.0)	先端欠	
71	Ⅲ	M-5	黒曜石	1.9	1.5	0.7	1.6	逆刺欠	
72	Ⅲ	竪穴7	黒曜石	1.7	1.4	0.35	0.8	先端欠	含クリストバル石
73	Ⅲ	Q-6	黒曜石	(1.5)	1.4	0.5	0.5	先端欠	
74	Ⅲ	表採	黒曜石	(1.5)	1.6	0.35	(0.6)	先端欠	
75	Ⅲ	Q-5	黒曜石	1.5	(1.0)	0.2	0.3	逆刺欠	
76	Ⅲ	Q-5	黒曜石	(1.5)	1.4	0.3	(0.5)	略完形	
77	Ⅲ	溝1	黒曜石	(1.7)	(1.5)	0.4	(0.8)	先端欠	
78	Ⅲ	Q-4	黒曜石	1.5	(1.4)	0.3	(0.4)	逆刺欠	
79	Ⅲ	Q-5	黒曜石	1.2	1.1	0.3	0.3	完形	
80	Ⅲ	Q-5	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.5	完形	
81	Ⅲ	O-14	黒曜石	1.6	1.5	0.3	0.5	完形	
82	Ⅲ	溝1	黒曜石	1.8	1.5	0.4	0.7	逆刺欠	
83	Ⅲ	竪穴8	黒曜石	1.7	1.3	0.25	0.4	完形	
84	Ⅲ	S-7	黒曜石	1.3	1.3	0.35	0.4	完形	
85	Ⅲ	Q-6	黒曜石	1.5	(1.4)	0.3	(0.4)	逆刺欠	
86	Ⅲ	Q-13	黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.4	完形	
87	Ⅲ	Q-7	黒曜石	1.3	(1.3)	0.25	(0.3)	逆刺欠	
88	Ⅲ	Q-6	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	完形	
89	Ⅲ	Q-4	黒曜石	1.8	1.5	0.35	0.5	完形	
90	Ⅲ	R-9	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.7	完形	
91	Ⅲ	S-7	黒曜石	1.3	1.1	0.3	0.3	完形	
92	Ⅲ	S-8	燧石	1.6	1.5	0.25	0.5	完形	

第5表 石器観察表2

93	Ⅲ	R-7	燧石	1.8	1.4	0.25	0.3	完形	
94	Ⅲ	S-8	火山ガラス	1.1	1.3	0.5	0.3	完形	発泡
95	Ⅲ	表採	黒曜石	1.8	1.1	0.5	0.8	完形	
96	Ⅲ	Q-5	燧石	1.7	1.0	0.4	0.3	完形	
97	Ⅲ	Q-4	黒曜石	2.1	1.1	0.3	0.5	完形	
98	Ⅲ	表採	黒曜石	2.2	1.4	0.5	0.8	完形	
99	不明	R-9	黒曜石	(2.3)	(1.9)	(0.4)	(1.0)	基部欠	
100	不明	Q-5	黒曜石	(1.8)	(1.8)	0.5	(1.3)	逆刺欠	含クリストバル石
101	不明	R-8	黒曜石	(1.9)	(1.5)	0.35	(0.8)	基部欠	
102	不明	Q・R-8	黒曜石	1.9	(1.5)	0.45	(1.0)	基部欠	
103	不明	R-6	黒曜石	(1.5)	(1.2)	0.3	(0.3)	基部欠	
104	不明	R-12	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.4	基部欠	
105	不明	Q-11	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.4	基部欠	ジャスパー又は碧玉
106	不明	R-13	黒曜石	(1.7)	(1.2)	0.4	(0.6)	基部欠	
107	不明	Q-7	黒曜石	(1.6)	(1.1)	(0.3)	(0.5)	基部欠	
108	不明	R-9	黒曜石	(1.6)	(1.1)	0.45	(0.6)	基部欠	
109	不明	Q-4	黒曜石	(1.6)	(1.1)	0.5	(0.4)	基部欠	
110	不明	溝1	黒曜石	(1.6)	(1.1)	0.2	(0.3)	基部欠	
111	不明	土壙5	黒曜石	(1.4)	(1.2)	0.3	(0.3)	基部欠	
112	不明	R-7	黒曜石	2.0	(1.4)	0.5	(0.7)	逆刺欠	
113	不明	L・M・N-2	黒曜石	2.2	(1.4)	0.35	0.7	逆刺欠	
114	不明	J-2	黒曜石	(1.8)	(1.5)	0.4	(1.0)	先端逆刺欠	
115	不明	R-13	黒曜石	(1.2)	1.3	0.35	(0.5)	先端欠	
116	不明	R-7	黒曜石	1.8	(1.5)	0.5	(0.8)	逆刺欠	
117	不明	Q-6	黒曜石	(1.7)	(1.5)	0.5	(0.8)	先端逆刺欠	
118	不明	溝2	黒曜石	(1.0)	1.3	0.3	(0.4)	先端欠	
119	不明	Q-7	黒曜石	(1.3)	(1.5)	0.3	(0.5)	先端逆刺欠	
120	不明	S-7	黒曜石	(1.8)	1.7	0.4	(1.0)	先端逆刺欠	
121	不明	Q-4	黒曜石	(1.5)	1.7	0.35	(0.7)	先端欠	
122	不明	溝1	黒曜石	(1.5)	(1.5)	0.4	(0.5)	先端逆刺欠	
123	不明	Q-5	黒曜石	1.5	1.0	0.5	0.5	逆刺欠	
124	不明	溝2	黒曜石	(1.0)	(1.2)	0.3	(0.3)	先端逆刺欠	

尖頭石器

(単位 cm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1		Q-4	凝灰質砂岩	7.4	3.0	1.1	21.1	完形	
2		Q-6	珪質砂岩	6.2	3.9	1.5	33.6	完形	
3		R-7	凝灰岩	3.7	2.7	0.9	8.5	完形	

第6表 石器観察表3

石錐 (単位 mm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	表採	黒曜石	(17)	18	6	(1.0)	錐部欠	
2	I	Q-6	黒曜石	(16)	17	5	(0.9)	錐部欠	含クリストバル石
3	I	S-7	黒曜石	(12)	(14)	3	(0.3)	錐部欠	
4	II	Q-5	黒曜石	21	(15)	5	(0.9)	つまみ部欠	
5	II	R-11	黒曜石	(16)	15	5	(0.7)	錐部欠	
6	II	Q-5	黒曜石	(18)	(14)	5	(0.8)	錐部欠	
7	II	R-15	黒曜石	19	13	7	1.1	完形	
8	II	R-6	黒曜石	(18)	12	6	(0.8)	錐部欠	
9	II	S-7	黒曜石	(17)	(12)	5	(0.5)	つまみ部欠	

石錘 (単位 cm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1		Q-6	礫岩	4.6	4.2	1.7	44.1	完形	円錐状凹み石

玉類

(単位 mm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	1	R-7	蛇紋岩	8.5	7.5	3	0.3	完形	内孔φ 2mm
2	2	S-8	蛇紋岩	7.0	6.5	2	0.1	完形	内孔2×1.5mm

石皿

(単位 cm, kg)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	礫集積	砂岩	41.4	31.3	9.5	18.65	3点接合完形	A-40, B-14, C-63
2	I	礫集積	砂岩	36.7	23.6	7.4	9.12	2点接合完形	タタキ併用、ヒビ割れ
3	I	礫集積	砂岩	(26.9)	23.5	7.2	(5.55)	略完形	ヒビ割れ
4	I	R-6	礫岩	(24.6)	(12.7)	(10.2)	(3.46)	1/5	ヒビ顕著、両面使用
5	I	R-8	砂岩	(13.4)	(10.1)	(4.5)	(0.56)	1/6	ヒビ顕著
6	I	P-14	凝灰岩	(11.9)	(10.8)	(4.1)	(0.30)	1/7	ヒビ顕著、被熱
7	II	溝1	安山岩	(20.5)	(30.0)	(8.2)	(7.2)	1/2	両面使用
8	II	Q-7	安山岩	(18.3)	(8.7)	(6.9)	(1.6)	1/6	

第7表 石器観察表4

磨石類

(単位 cm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	J-2	砂岩	(10.6)	(5.4)	(3.9)	(282)	1/2	ヒビ割れ、片面使用
2	I	集石2	火山岩	(11.5)	(6.4)	(4.6)	(432)	1/2	
3	I	R-4	火山岩	(9.7)	(7.4)	(4.0)	(202)	1/4	全面スリ
4	I	Q-8	砂岩	(4.8)	(5.2)	(4.5)	(127)	1/4	ヒビ割れ
5	II-1	R-8	安山岩	(10.8)	8.2	4.6	(608)	略完形	片面使用
6	II-1	S-7	砂岩	(10.1)	(9.0)	(4.8)	(488)	2/3	片面使用
7	II-1	I-3	砂岩	(12.4)	(7.5)	(4.2)	(525)	2/3	片面2面機能面
8	II-1	S-13	火山岩	10.7	8.9	3.8	571	完形	唯一の完形品
9	II-1	R-12	安山岩	(10.6)	(9.2)	(5.3)	(657)	3/4	
10	II-1	R-14	砂岩	(8.0)	(11.4)	(3.2)	(318)	2/3	ヒビ割れ
11	II-1	J-2	砂岩	(10.3)	(8.5)	(4.1)	(450)	4/5	ヒビ割れ
12	II-1	R-7	斑斕岩	(6.8)	(7.6)	(3.3)	(210)	1/2	
13	II-1	R-7	砂岩	(3.8)	(7.0)	(4.3)	(109)	1/3	
14	II-1	Q-4	斑岩	(9.1)	(5.1)	(3.5)	(221)	1/2	
15	II-1	Q-6	火山岩	(9.0)	(8.1)	(4.6)	(372)	2/3	ヒビ割れ
16	II-1	Q-4	火山岩	(8.1)	(9.7)	(3.5)	(221)	1/2	
17	II-1	Q-5	砂岩	(7.3)	(8.3)	(3.7)	(192)	2/3	
18	II-1	溝1	砂岩	(8.1)	(4.0)	(4.0)	(127)	1/6	
19	II-1	S-7	斑斕岩	(7.3)	(7.3)	(3.5)	(183)	1/2	閃緑岩
20	II-1	Q-4	砂岩	(8.4)	(6.8)	(4.4)	(288)	1/4	ヒビ割れ
21	II-1	集石2	砂岩	(6.5)	(5.9)	(5.6)	(212)	1/4	ヒビ割れ
22	II-1	R-1	砂岩	(9.0)	(6.1)	(4.3)	(191)	1/3	
23	II-1	R-8	閃緑岩	(6.3)	(4.7)	(4.4)	(81)	1/6	or 斑斕岩、佐野川
24	II-1	Q-12	安山岩	(7.9)	(8.4)	(4.2)	(311)	1/3	
25	II-1	Q-6	火山岩	(7.7)	(9.2)	(2.9)	(241)	1/3	or 火成岩
26	II-1	S-8	砂岩	(7.0)	(5.9)	(3.5)	(110)	1/3	ヒビ割れ
27	II-2	Q-12	火山岩	(10.4)	9.4	3.5	(339)	4/5	ヒビ割れ、片面使用
28	II-2	R-7	火山岩	(8.7)	(8.2)	(3.7)	(368)	2/3	片面使用
29	II-2	R-7	火山岩	(9.0)	(5.0)	(2.9)	(134)	1/2	片面使用
30	II-2	溝1	砂岩	(8.9)	(7.1)	(3.1)	(231)	1/2	平面タタキ両面
31	II-2	Q-5	安山岩	(7.3)	(8.2)	(3.7)	(342)	2/3	
32	II-2	Q-6	礫岩	(7.2)	(8.4)	(3.5)	(201)	1/2	
33	II-2	R-14	砂岩	(7.8)	(6.0)	(3.5)	(198)	1/4	
34	II-2	住居9	閃緑岩	(8.9)	(6.9)	(5.3)	(365)	1/4	
35	III	S-12	砂岩	(7.4)	(9.3)	(4.6)	(302)	1/2	ヒビ割れ
36	III	Q-6	砂岩	(8.4)	(7.8)	(3.8)	(351)	1/2	ヒビ割れ、3面機能面
37	III	S-7	玄武岩	(11.9)	(9.5)	(4.0)	(588)	2/3	
38	IV	R-4	砂岩	(7.0)	(8.0)	(3.4)	(221)	1/2	凹み片面、磨り片面
39	IV	Q-6	砂岩	(6.0)	(8.0)	(3.0)	(261)	1/2	凹み両面、磨り両面

第8表 石器観察表5

特殊磨石

(単位 cm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	Q-12	玄武岩	(12.2)	(8.4)	(5.2)	(774)	2/3	富士川近辺産出石材
2	I	Q-5	玄武岩	(8.6)	(6.1)	(4.4)	(289)	1/2	ヒビ割れ
3	I	R-13	砂岩	(7.8)	(8.6)	(6.1)	(415)	1/3	ヒビ割れ顕著
4	I	Q-4	砂岩	(7.3)	(7.6)	(5.4)	(289)	1/4	
5	I	Q-13	砂岩	(7.8)	(6.8)	(5.4)	(302)	1/4	グリッド内接合
6	II	Q-12	圧砕岩	(12.5)	(7.2)	(4.7)	(605)	2/3	赤石山脈構造線産出石材
7	II	集石2	砂岩	(9.4)	(8.3)	(6.5)	(638)	1/2	ヒビ割れ
8	II	Q-4	砂岩	(7.3)	(7.1)	(5.6)	(407)	1/3	カケ顕著
9	II	S-7	玲岩	(7.3)	(7.1)	(5.6)	(407)	1/3	
10	II	礫集	安山岩	(7.4)	(6.0)	(5.8)	(351)	1/3	2面機能面
11	不明	土壙5	火山岩	(3.4)	(5.9)	(4.0)	(58)	1/10	遺構内出土

凹石

(単位 cm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1		Q-5	礫岩	(10.3)	(6.2)	(4.0)	(303)	2/3	凹み両面
2		S-8	凝灰岩	(4.3)	(8.0)	(3.6)	(102)	1/2	凹み両面
3		R-6	砂岩	(6.2)	(5.4)	(2.0)	(65)	1/4	

敲石

(単位 cm, g)

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	R-8	砂岩	(11.5)	(7.1)	(3.9)	(453)	2/3	
2	I	R-13	砂岩	(8.4)	(5.5)	(4.0)	(211)	1/2	
3	I	溝1	砂岩	(8.0)	(5.5)	(2.8)	(147)	1/2	
4	I	住居7	砂岩	(10.3)	(4.9)	(2.7)	(209)	2/3	掘り方内、弥生石器?
5	I	R-7	砂質変岩	(8.5)	(2.7)	(3.6)	(129)	1/6	天子岳以北産
6	II	Q-7	砂岩	4.4	3.7	2.3	51	完形	唯一の完形品
7	II	R-8	砂岩	(6.3)	3.2	1.9	(41)	4/5	
8	II	R-11	深成岩	(6.9)	4.6	3.2	(150)	4/5	
9	II	住居3	砂岩	(6.9)	4.2	3.2	(115)	4/5	掘り方内、弥生石器?
10	II	Q-6	火山岩	(7.1)	4.3	3.0	(105)	4/5	八ヶ岳方面産
11	III-1	R-5	砂岩	8.7	5.6	4.8	282	(上)	50m離れて接合
		Q-14	砂岩					(下)	長軸打痕有
12	III-1	S-8	砂岩	(4.1)	(5.0)	(3.3)	(63.5)	1/3	
13	III-1	礫集	砂岩	(12.4)	(9.5)	(5.2)	(748)	4/5	斜め打痕有
14	III-1	表採	火山岩	(9.9)	(10.4)	(4.1)	(505)	4/5	
15	III-1	Q-6	礫岩	(11.2)	(7.2)	(4.7)	(432)	2/3	
16	III-1	R-4	安山岩	(9.0)	(5.7)	(3.1)	(266)	1/2	
17	III-1	R-9	深成岩	(5.9)	(5.9)	(5.8)	(181)	1/3	
18	III-1	R-5	火山礫岩	(8.1)	(8.3)	(5.0)	(246)	1/3	ヒビ割れ
19	III-1	Q-4	砂岩	(7.0)	(9.1)	(3.9)	(298)	1/4	ヒビ割れ
20	III-2	Q-11	火山岩	(9.0)	(7.4)	(4.5)	(303)	2/3	ヒビ割れ
21	III-2	溝1	火山岩	(9.8)	(11.2)	(4.5)	(615)	2/3	
22	III-2	Q-4	火山礫岩	(10.2)	(7.2)	(5.0)	(401)	1/2	ヒビ割れ
23	III-2	礫集	砂岩	(10.0)	(7.7)	(4.8)	(402)	3/5	ヒビ割れ
24	III-2	Q-6	花崗岩	(11.2)	(5.4)	(4.6)	(412)	1/3	
25	III-2	R-4	火山岩	(8.0)	(7.1)	(3.5)	(261)	2/3	ヒビ割れ
26	III-2	R-8	砂岩	(9.9)	(4.5)	(4.8)	(167)	1/2	II類打痕例

第9表 石器観察表6

IV ま と め

今回の調査では、縄文時代早期・弥生時代後期・奈良時代・中世と複合する遺跡の実態が解明された。各時代ごとに大きな成果を得ることができたが、問題点も数多い。ここでは、それぞれの時代について、その成果と問題点をまとめてみることにする。

1. 弥生時代以降

資料の限られる奈良時代以降については多くを語れないが、その様相を概観して若干の問題を指摘しておく。まず、奈良時代であるが、弓沢川左岸流域に奈良時代集落の分布が、この石敷遺跡の例が加わって増えることになった。富士宮市においては、拠点的な集落と目される泉遺跡以外ではこの地域に集中する傾向があり、特異な状況を示していると言える。それには、律令体制下における開発の振興や生業の変化あるいは『富士山信仰』とする山岳信仰に伴う宗教的な活動によるものなど多様な理由が考えられるが、その具体相については今後の検討していかねばならない課題である。

大規模な土地開発の跡として溝1を確認したことは、中世の遺跡としての大きな成果であろう。第13図37～39の輸入陶磁器に象徴されるその開発の実態や周辺に存在しているであろう『屋敷地』の規模や形態など大きな視点で検討しなければならない課題が多い。弓沢川を挟んで西側2kmには、13世紀～16世紀まで隆盛を極めた元富士大宮司屋敷跡が位置しており、そことの関連も視野に入れなければならない。現在の大宮の市街地からその周辺にかけて、元富士大宮司屋敷跡を中心とした『町』が形成されていたようであるが、その範囲や実態については、まだ何も分かっていないのが現状であろう。今回に調査では、そのほんの一端を垣間見ることができたとも言える。その歴史が現在へと直接繋がる富士宮市の中世研究は、今後、考古学の側面からもアプローチしていかねばならない分野である。そして、それを解明するためには、現在の市街地を中心とした地域に対する綿密な調査が必要となるわけである。

弥生時代については、潤井川流域に展開する集落の動向にひとつの情報を提供してくれた。石敷遺跡の弥生時代集落は、雌鹿塚Ⅱ～Ⅲ式期に営まれた弥生時代後期のものであるが、富士山側の丘陵地で確認された確実な弥生時代の例としては初例である。この段階の集落の多くは、潤井川を挟んで対岸の星山丘陵上に展開しており、月の輪上遺跡や滝戸遺跡、滝戸遺跡に隣接する沖積地の泉遺跡などの名を上げることができる。月の輪上遺跡は、雌鹿塚Ⅰ～Ⅳ式期の造営が確認される継続性を持つ集落である。滝戸遺跡では、雌鹿塚Ⅰ～Ⅱ式期の集落と雌鹿塚Ⅰ～大廓Ⅰ式期の墓域が調査されている。泉遺跡では、環濠が確認されているが、雌鹿塚Ⅱ式期に埋められおり、一旦集落の終焉を迎えている。

これらの時間的な変遷をまとめると、雌鹿塚Ⅱ式期における滝戸、泉遺跡の画期に相関するように石敷遺跡への開発が始まったようにも見える。確かに、雌鹿塚Ⅱ式期は、東遠江菊川式土器を中心とした外来系土器型式の影響が顕在化し雌鹿塚式土器の画期と認識される段階でもある。それは、滝戸遺跡の調査で解明されてように円形住居（SB28）から隅丸方形住居（SB26）への住居構造の変化としても追認されていることである。この画期をいかに評価するかが今後の潤井川流域の弥生時代後期を検討する際の大きな課題となろう。（渡井）

2. 縄文時代

本遺跡は縄文時代の遺構・遺物の年代が早期中葉に属すると判断できる遺跡の1つである。出土土器においては、近年出土例を増しつつある相木式土器や判ノ木山西式土器をはじめ、従来の分類に当てはまらない一群もみられ、これらの位置付けをめぐる近年の研究に対して良好な資料となるであろう。遺構についても、検出状況はいずれも上部が削平された状況ではあるものの、竪穴式住居跡と土壙群はそれぞれ丘陵の東と西に分布域を占める在り方を示し、竪穴式住居と集石2は同時期で何らかの関係性が看取できる。さらに遺物の分布をみると、土器・石器・黒曜石片の分布の中心がそれぞれ異なり(第42図～第44図、第42図9～11グリッドは溝1に切られている)、本遺跡の遺物出土状況が傾斜地における単なる流れ込みに伴うものではない可能性が高く、該期の生活跡として多くの資料を包括しているといえる。特に礫集積においては黒曜石片の集中区との関係、北面に広がる土壙群との関係等において、さらに検討が必要である。

本遺跡の土器について若干述べるとするならば、長野県禅海塚遺跡との類似点が挙げられる。禅海塚遺跡もまた該期に属する遺跡であり、相木式土器、判ノ木山西式土器、調整痕を有する土器、口縁部に突帯を持つ無文の土器が出土している。本遺跡では竪穴式住居覆土やその上部において、相木式土器、判ノ木山西式土器、調整痕を有する土器、調整痕の無い土器が出土し、禅海塚遺跡と同様の土器構成を示している。また同じ状況は長野県判ノ木山西式遺跡にもみられ、富士山西南麓においてもこれら土器が共伴する時期が存在することを裏付けているといえよう。この他、本遺跡田戸上層式併行の土器は長野県新水B遺跡によく類似する。本遺跡近辺の田戸上層式に比定できる土器を出土した遺跡には富士宮市黒田向林遺跡があるが、文様構成、器壁の厚さなどに相違点がみられる。それは撚糸文、縄文、楕円押型文土器においても同様である。

また本遺跡において、肉眼による観察の範囲では各種土器に胎土的特徴がみられることを提示する。相木式土器は少量の繊維と他に比しておおぶりの、直径2～5mm程度の長石・石英を含み、角閃石などの有色鉱物を含まない。田戸上層式併行・判ノ木山西式併行には少量の繊維、直径2mm程度の長石・石英と有色鉱物を含む。胎土的特徴からは後者は調整痕を有する土器、特に第V群第1類a種は似通っている。多量の繊維を含み、厚手で軽量の第V群第1類b種は胴部破片のみ、同様の胎土的特徴を示す第V群第2類b種には口縁部破片が含まれることから、両者は個体の文様の構成要素である可能性がある。

中部地方を中心としてこの時期には様々な土器が展開するが、中でも、判ノ木山西式土器は複雑な内容を含み、その出自やその伝播の解明に今後の資料の増加が待たれる。(佐野)

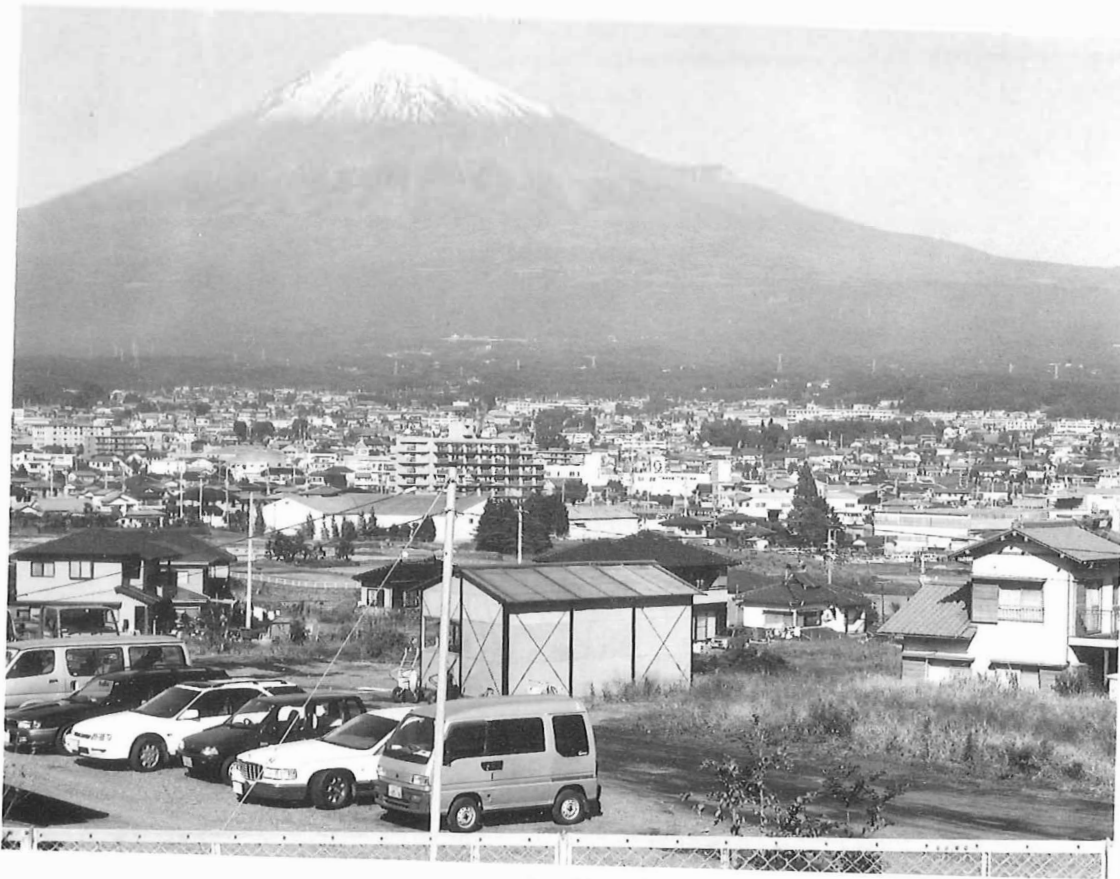
今回の調査では、縄文時代早期の資料が思いの外多く出土しており、新たな歴史研究に給する部分は大きい。富士宮市は沼久保の小松原遺跡・坂上遺跡、星山の黒田向林遺跡、小泉の若宮遺跡・代官屋敷遺跡など当該期の良好な遺跡が多いが、この石敷遺跡が加わることで総合的な地域史の構築が可能となっていくものと考えている。それには、今回の調査成果を踏まえて広域的な視野に立った検討がさらに必要であることを痛感するものである。

この調査を実施するにあたり、事業の主体者である富士宮市小泉農住組合はじめ地元関係者の皆様には多くのご支援、ご協力をいただいた。文末ではあるが記して感謝を申し上げる。

報告書抄録

ふりがな		いっしきいせき						
書名		石敷遺跡						
副書名		富士宮市小泉農住組合による土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		富士宮市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第25集						
編著者名		渡井英誉, 佐野恵里, 小野田晶						
編集機関		富士宮市教育委員会						
所在地		〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150					Tel.0544-22-1187	
発行年月日		西暦2000年3月31日						
所収遺跡	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石敷遺跡	富士宮市 小泉字・ 石敷前田	22207	市番号 127 県番号 富士宮市 32	35° 12' 45"	138° 38' 5"	19990601 19990929	3080	土地区画 整理事業 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項		
石敷遺跡	集 落	縄文時代 (早期)	竪穴 土壇 集石	1軒 9基 3基	土器、石器	類例の少ない縄文時代 早期の資料		
		弥生時代 (後期)	竪穴	7基	土器			
		奈良時代	竪穴 掘立柱	1軒 4棟	土器			
		中 世	土坑 溝	2基 1条	土器、陶磁器、砥石			

写 真 图 版



遺跡遠景



調査区Ⅲ区

図版2



豎穴 8



豎穴1と土坑2

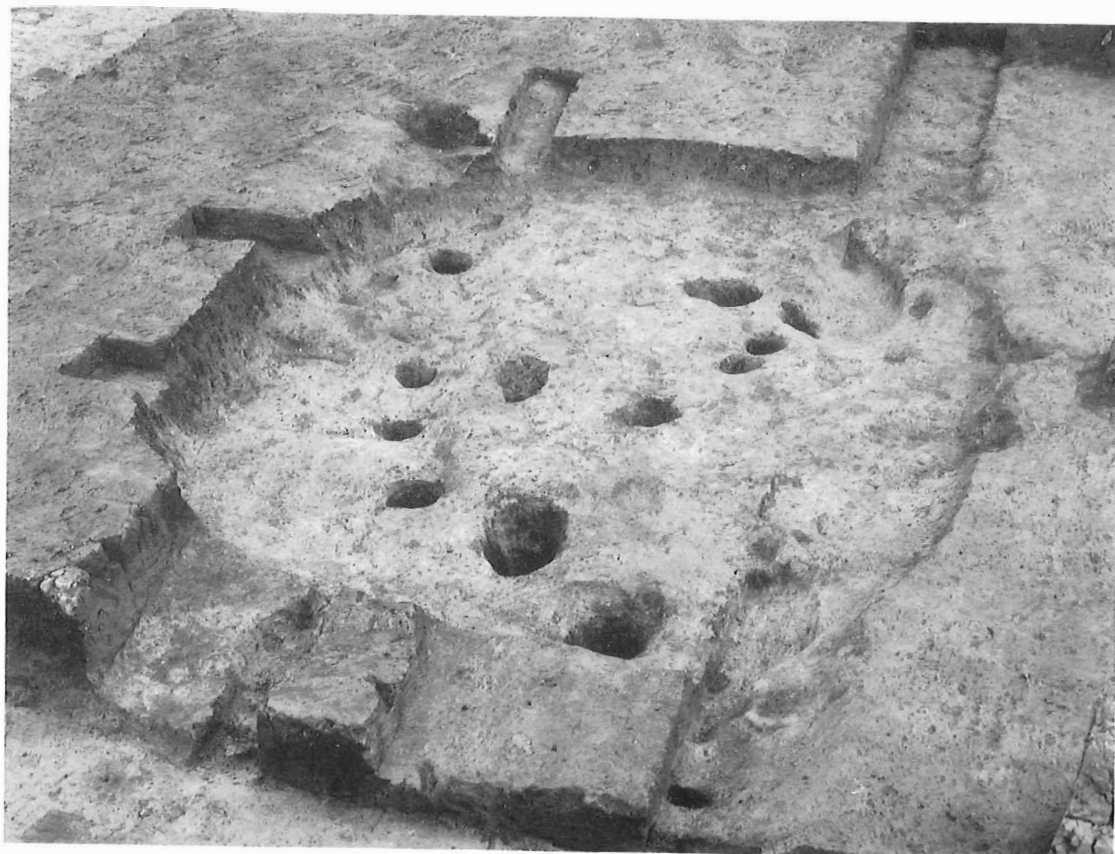


竪穴3と堀立柱2



溝 1

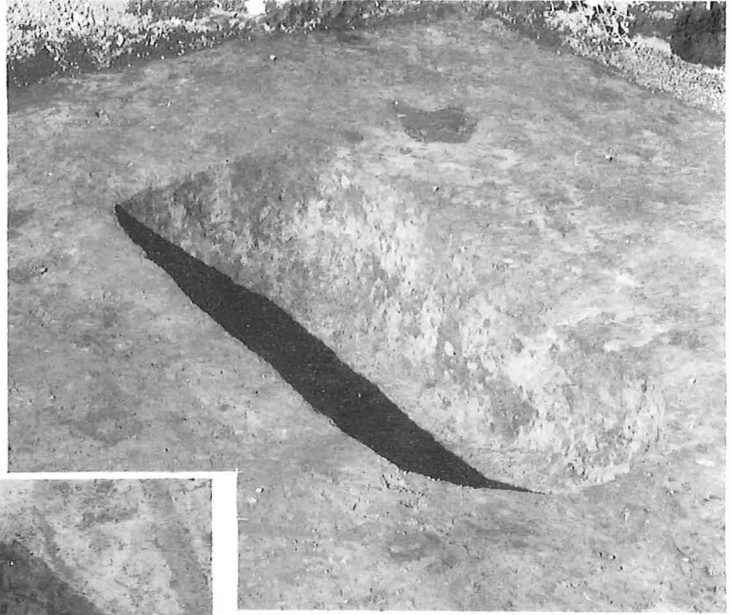
図版4



竪穴9



L・Mグリッド土壌群



土 壙 4

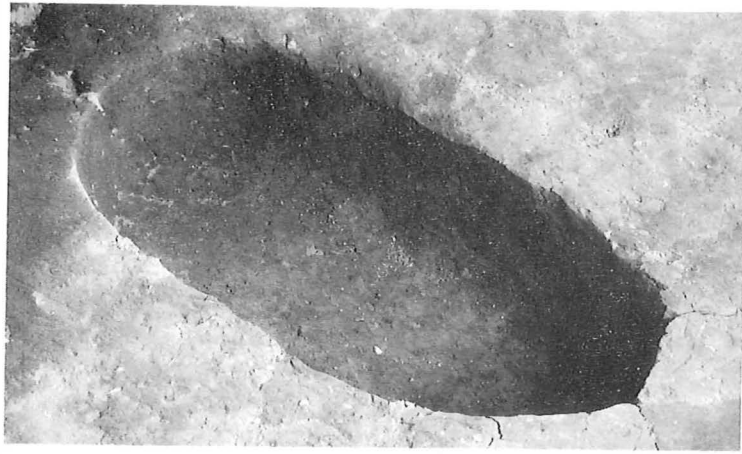


土 壙 2

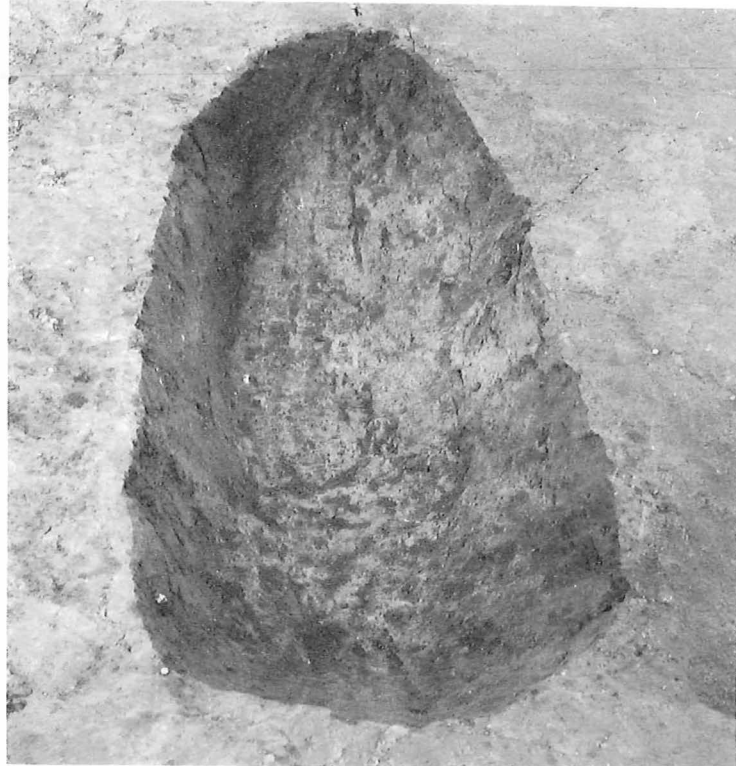


土 壙 3

图版6



土壤 6



土壤 9



土壤 7

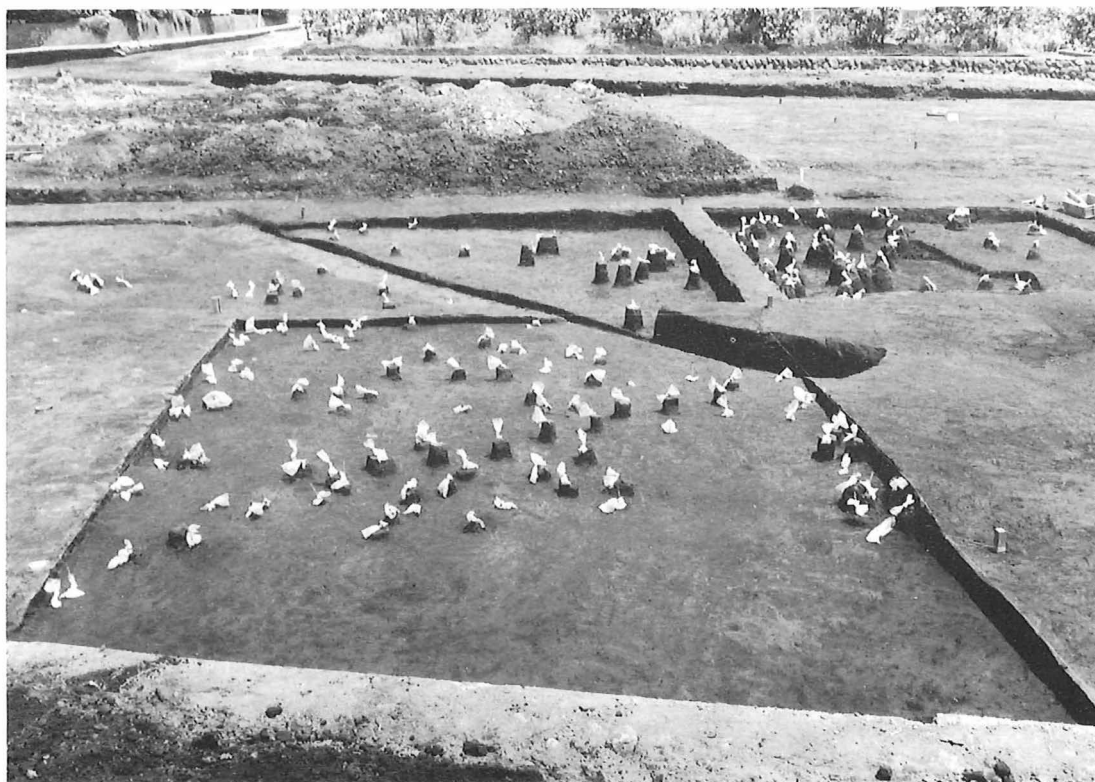


集石 2



礫集積出土状況

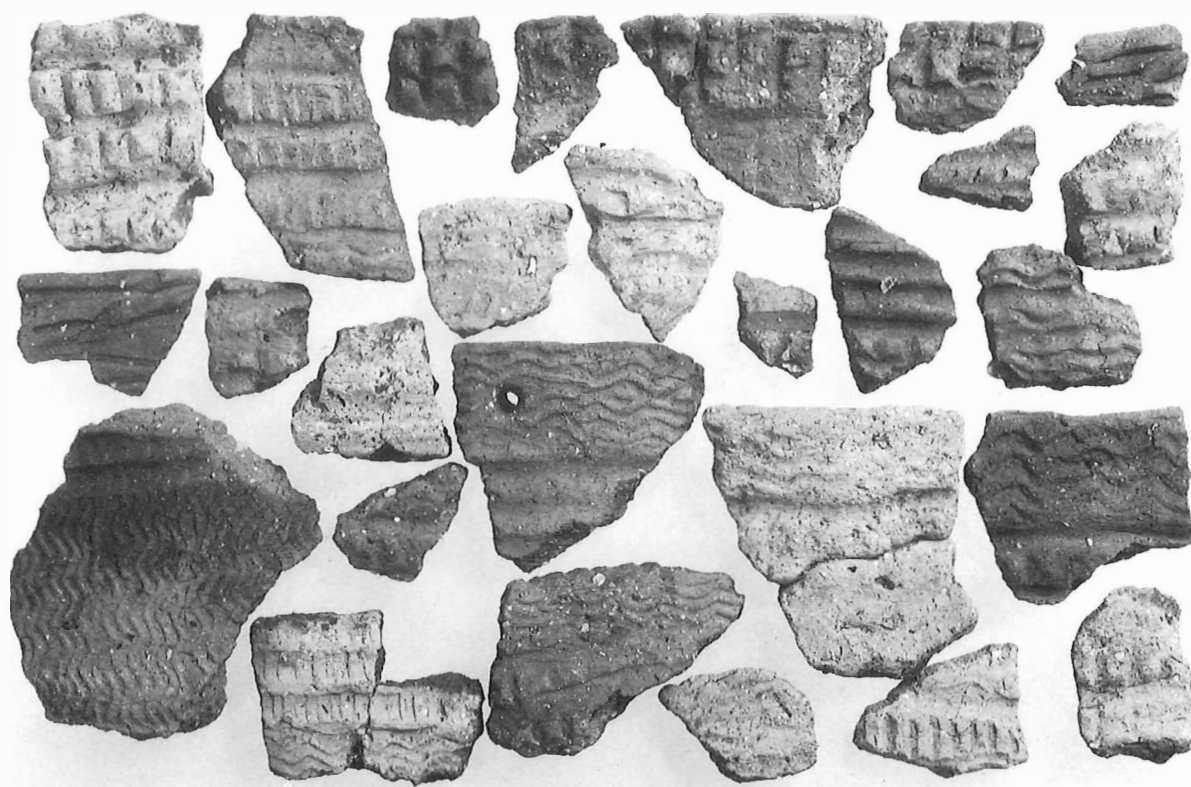
図版8



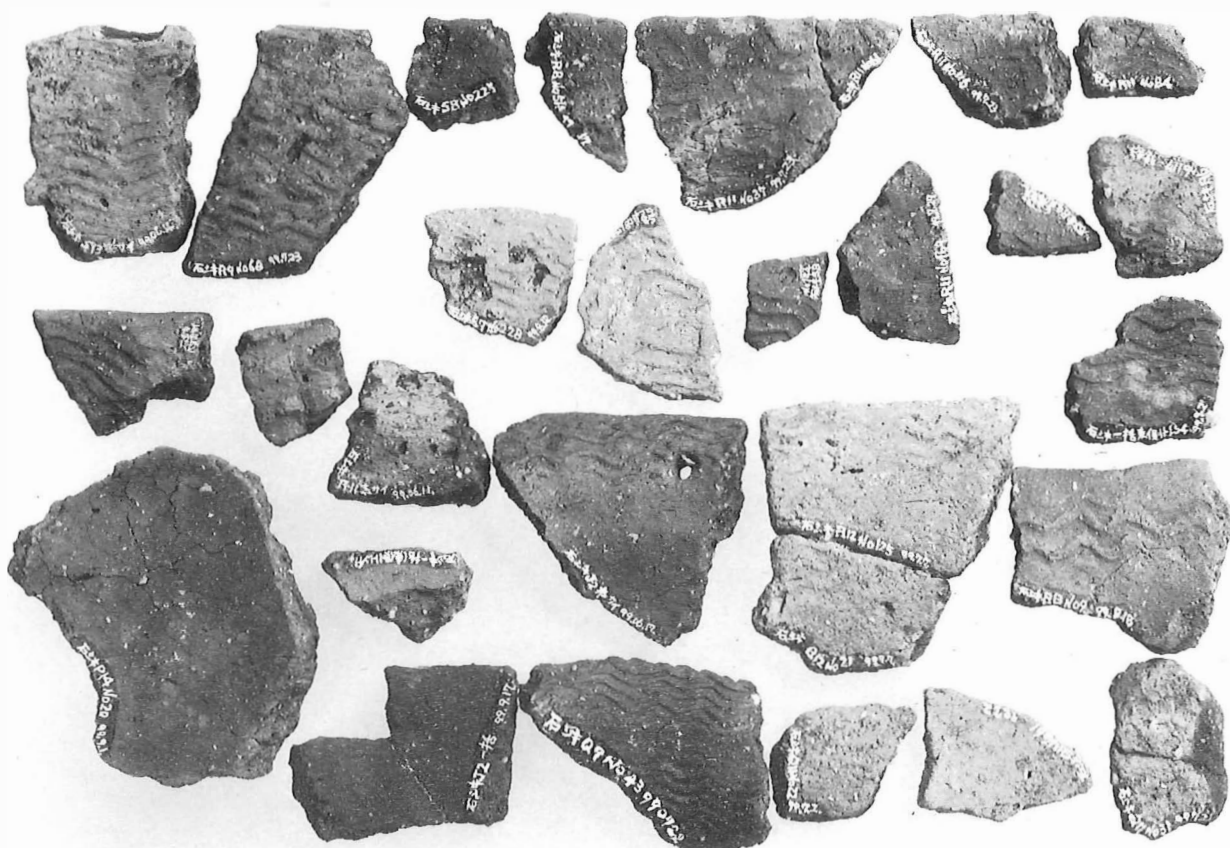
Q・R-12グリッド遺物出土状況



Q-13グリッド遺物出土状況

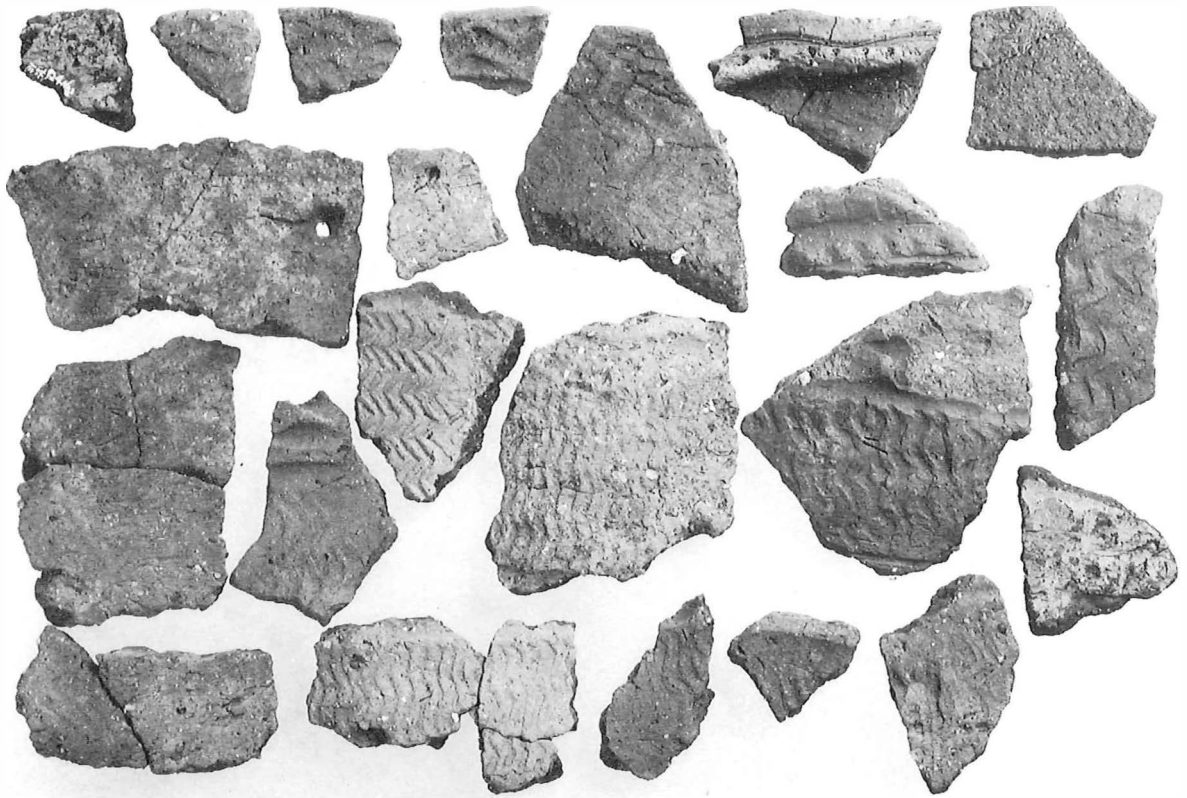


第Ⅲ群第2類土器(1)・表

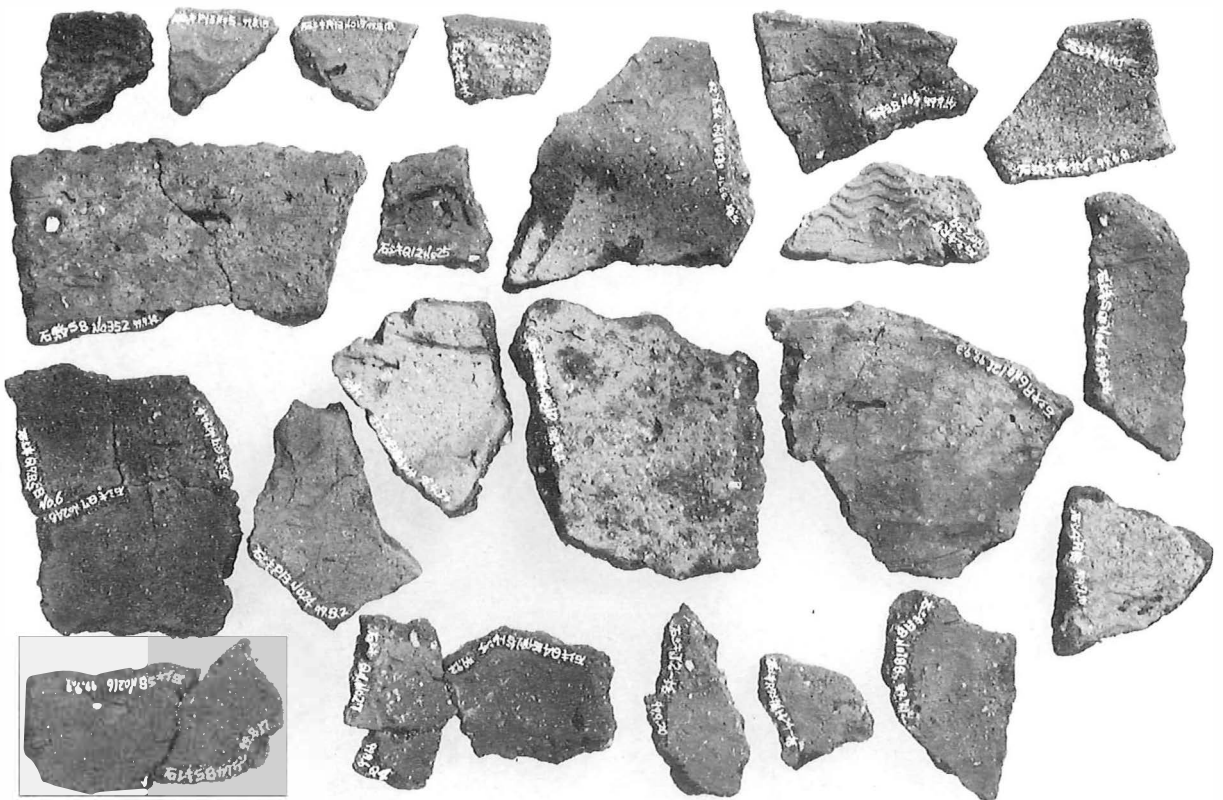


第Ⅲ群第2類土器(1)・裏

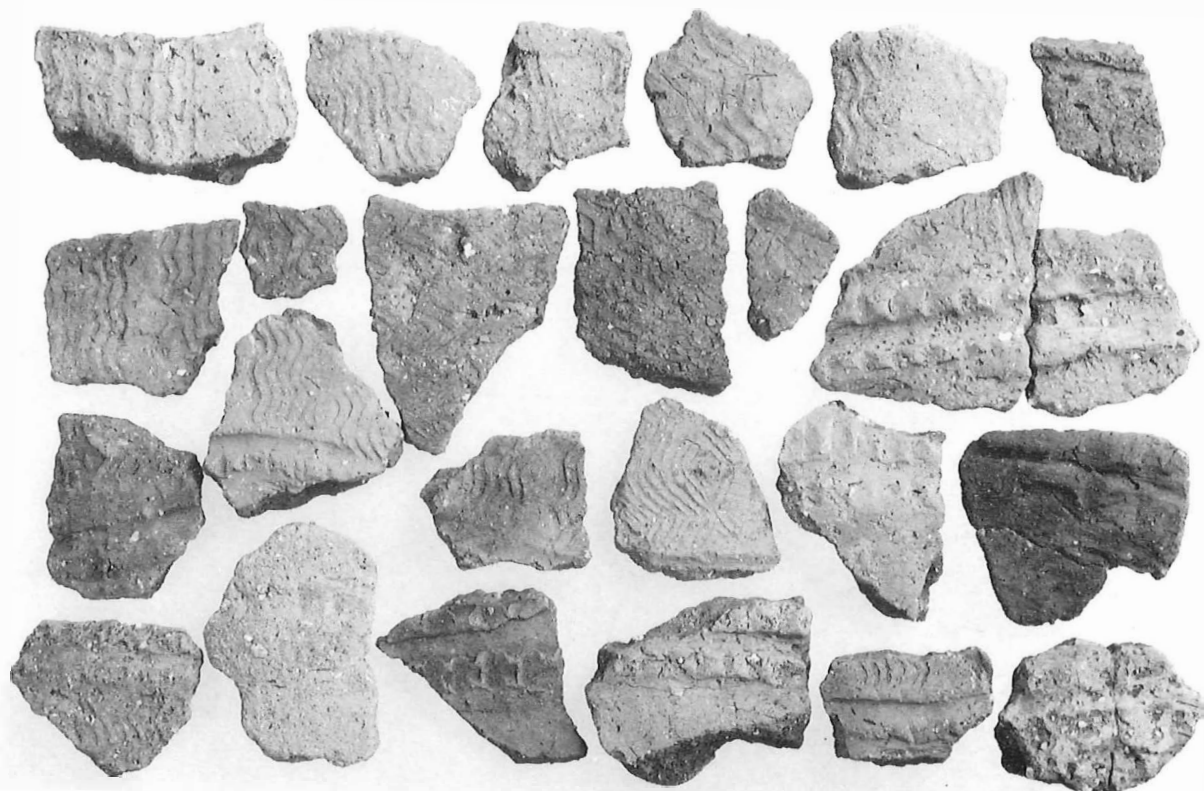
图版10



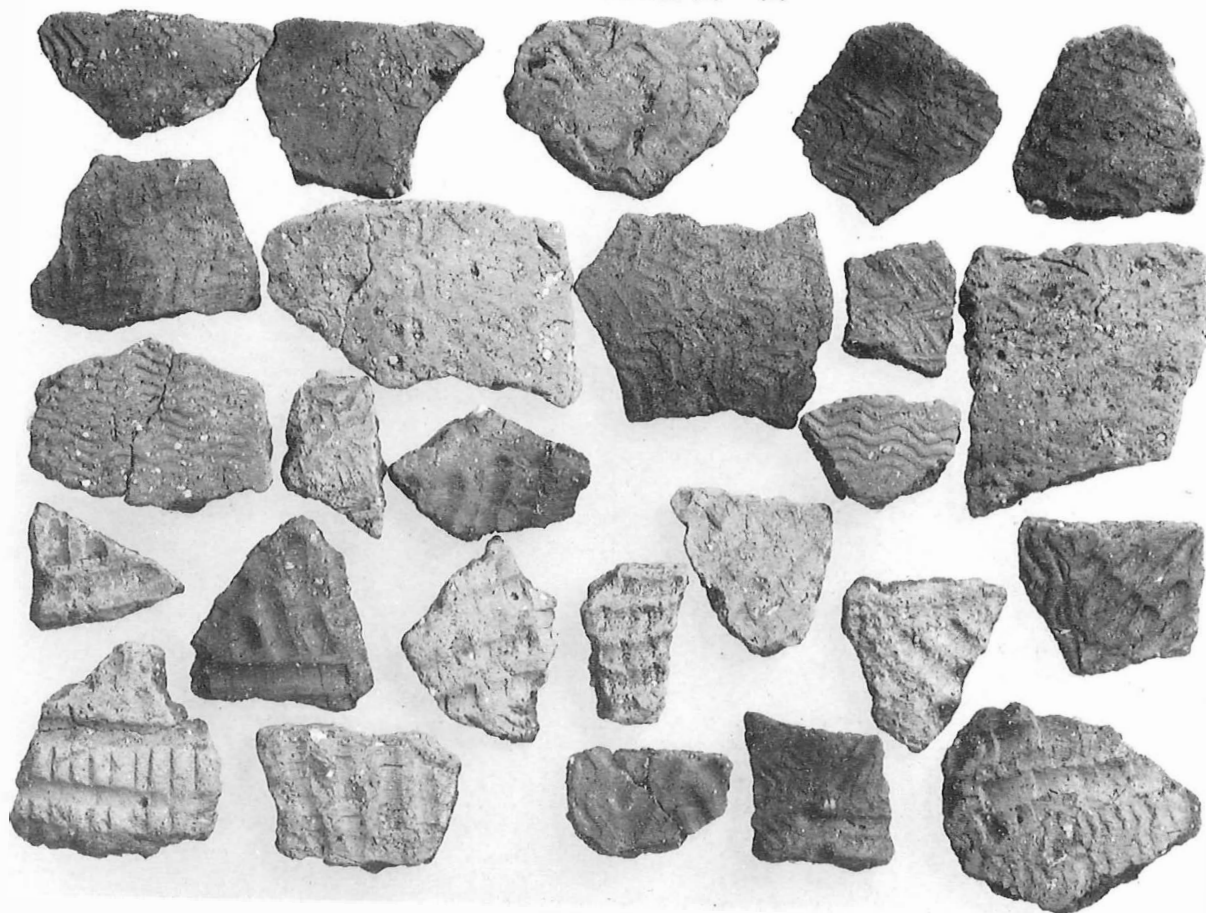
第Ⅲ群第2類土器(2)・表



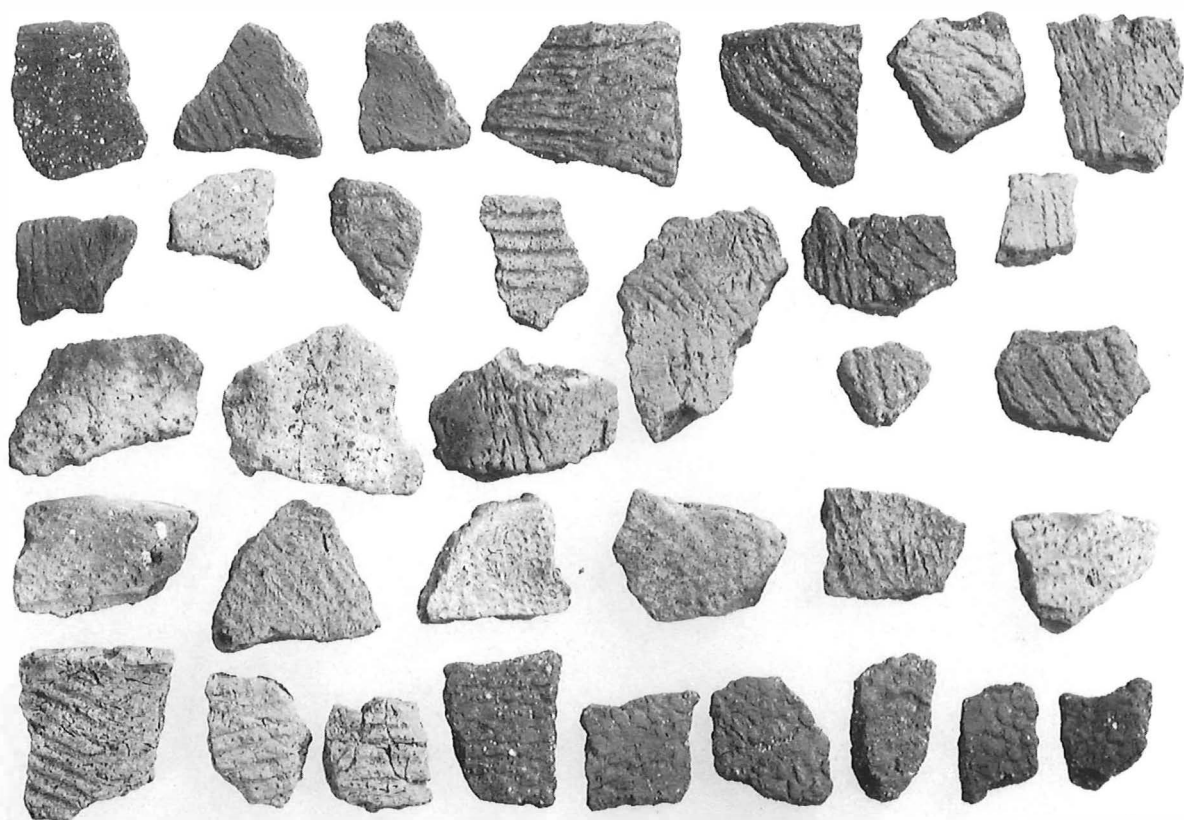
第Ⅲ群第2類土器(2)・裏



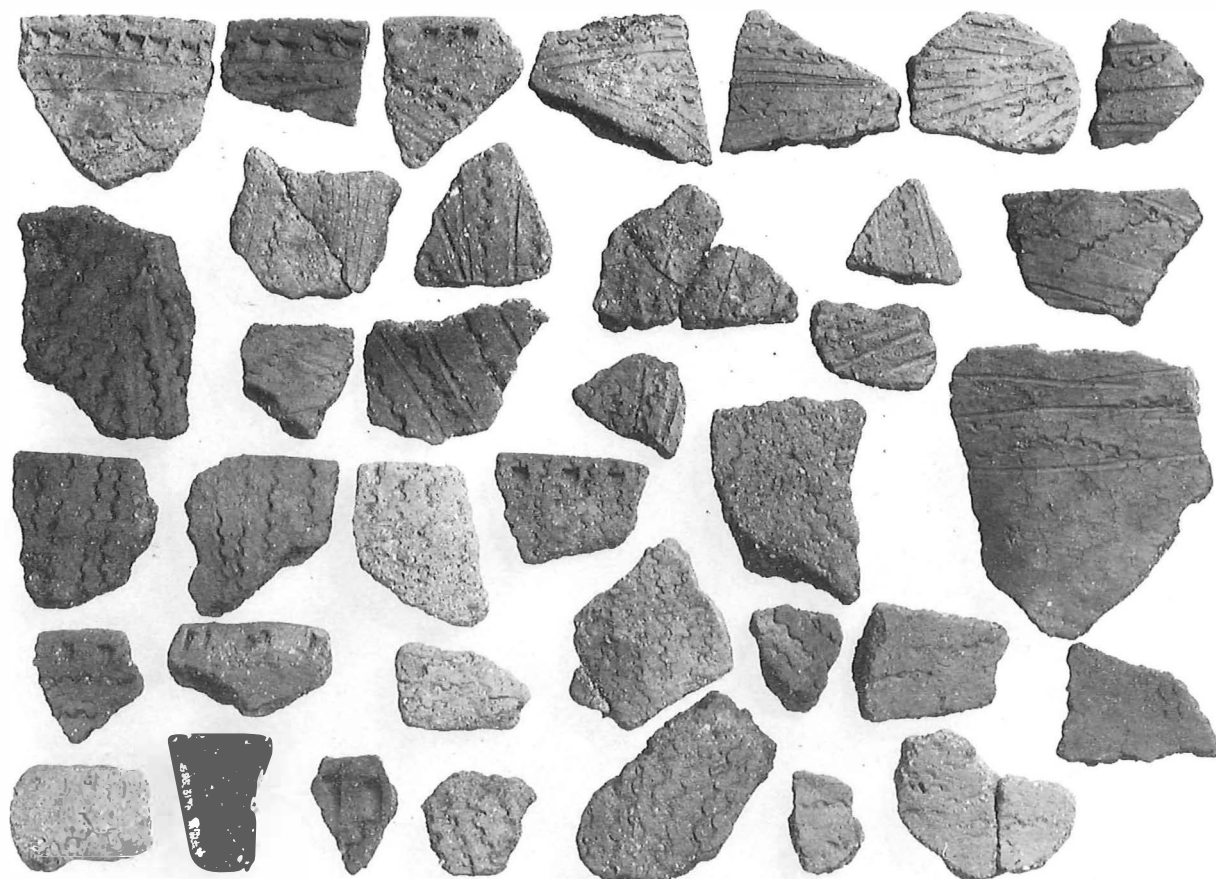
第Ⅲ群第2類土器(3)・表



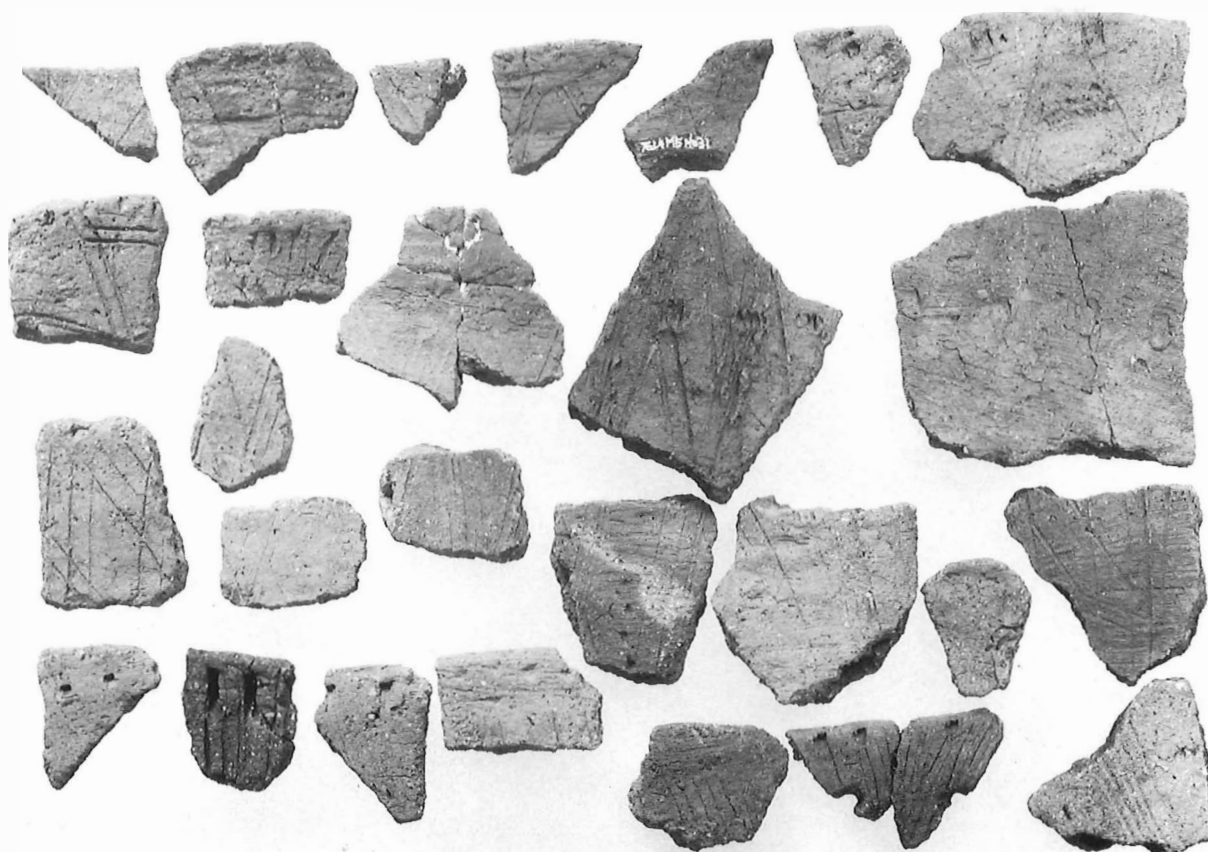
第Ⅲ群第2類土器(4)



第I群・第II群・第III群第1類土器



第IV群第1類土器(1)

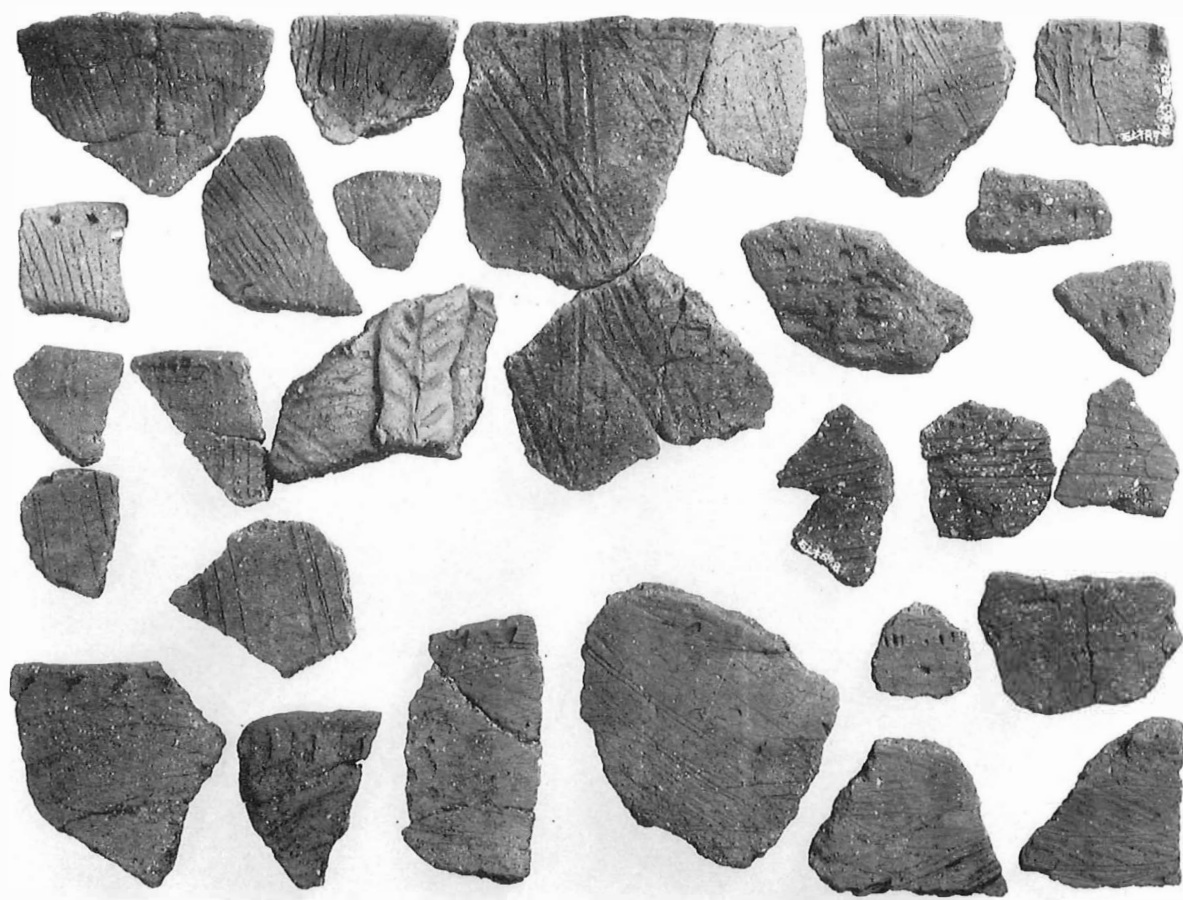


第IV群第2類土器(1)・表



第IV群第2類土器(1)・裏

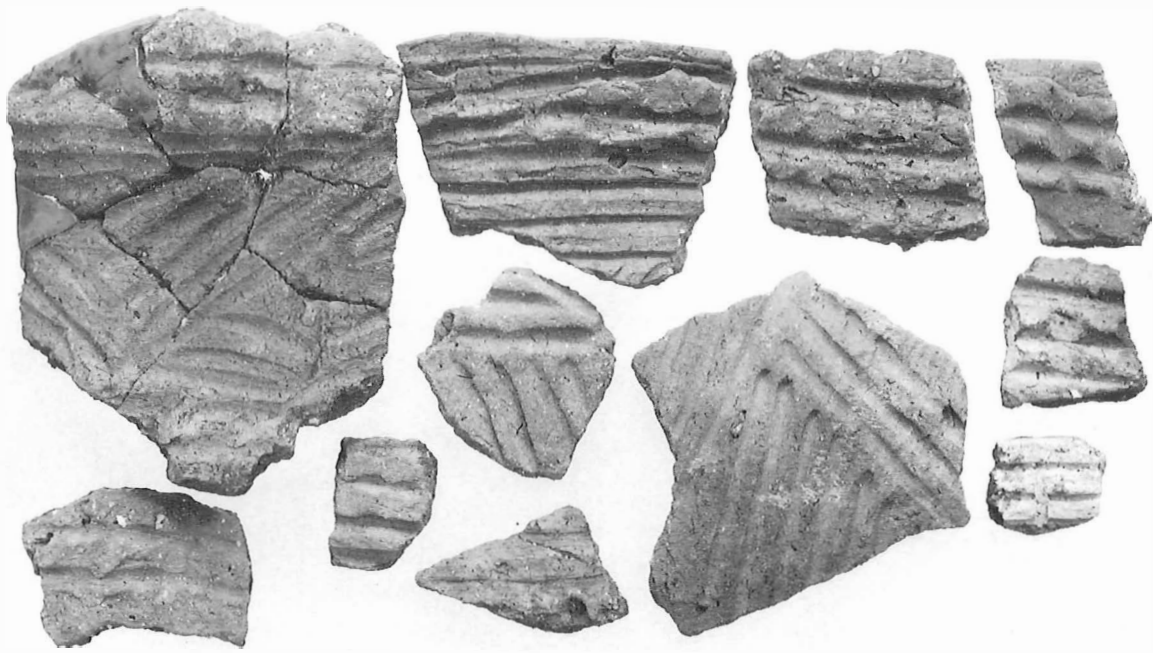
図版14



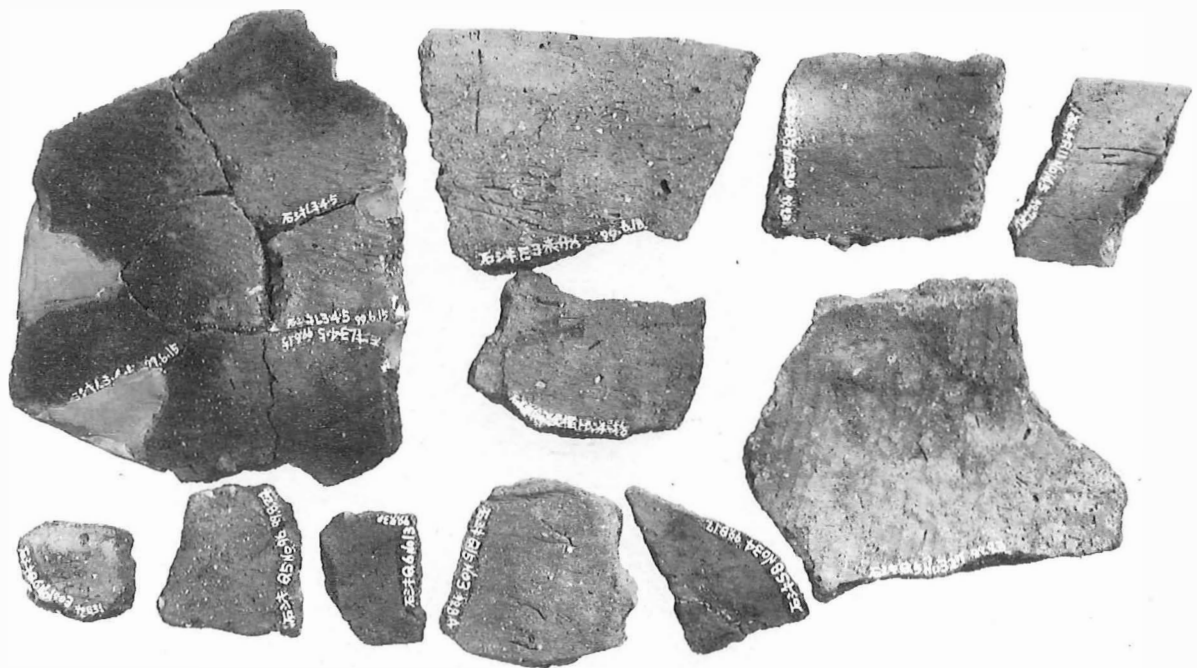
第IV群第2類土器(2)



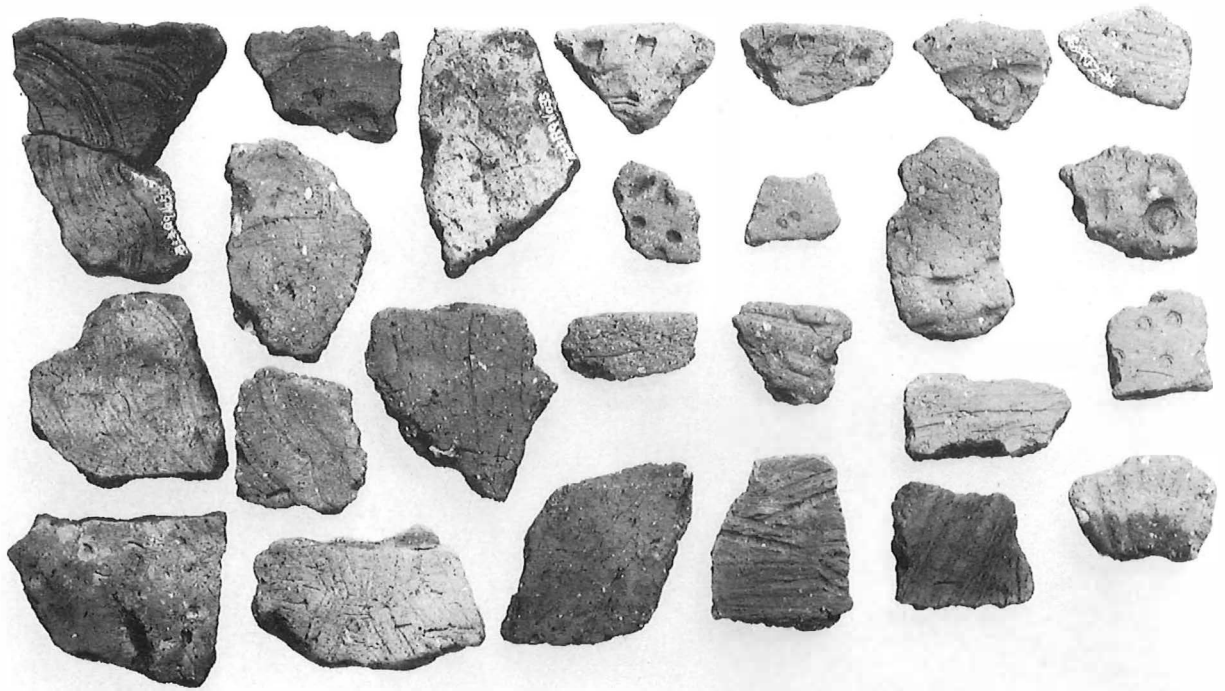
第IV群第1類土器(2)・第VI群(一部)土器



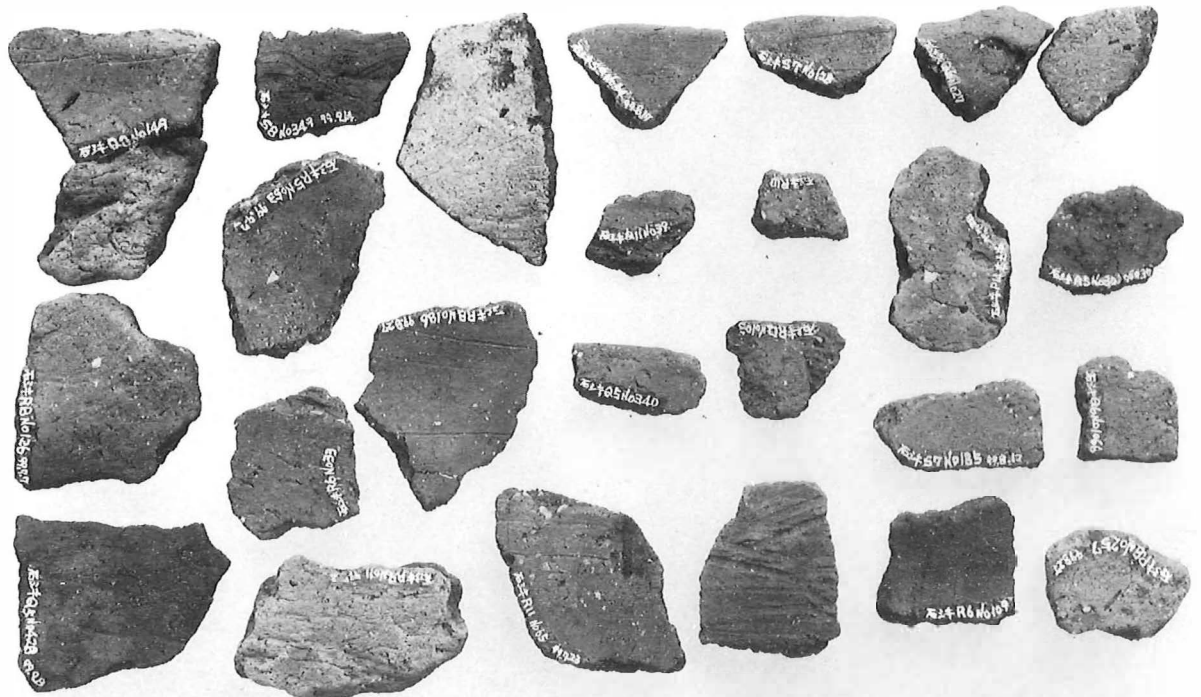
第IV群第3類土器(1)・表



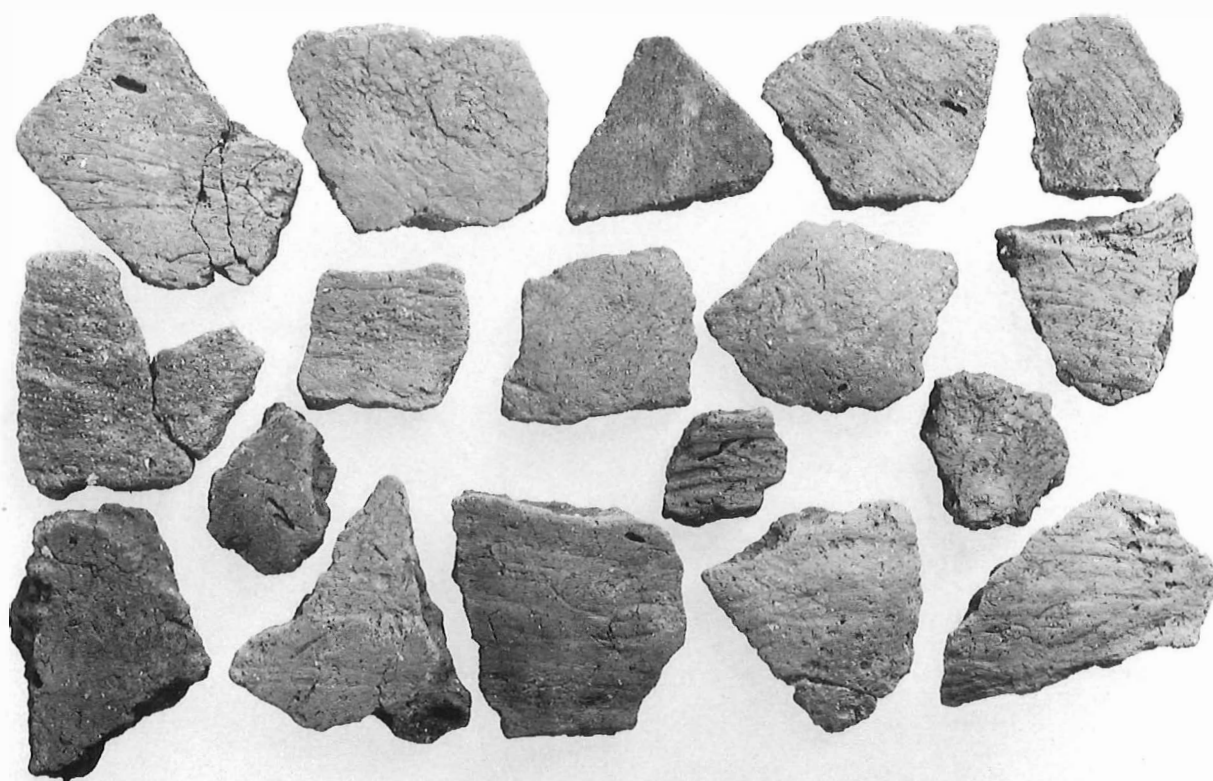
第IV群第3類土器(1)・裏



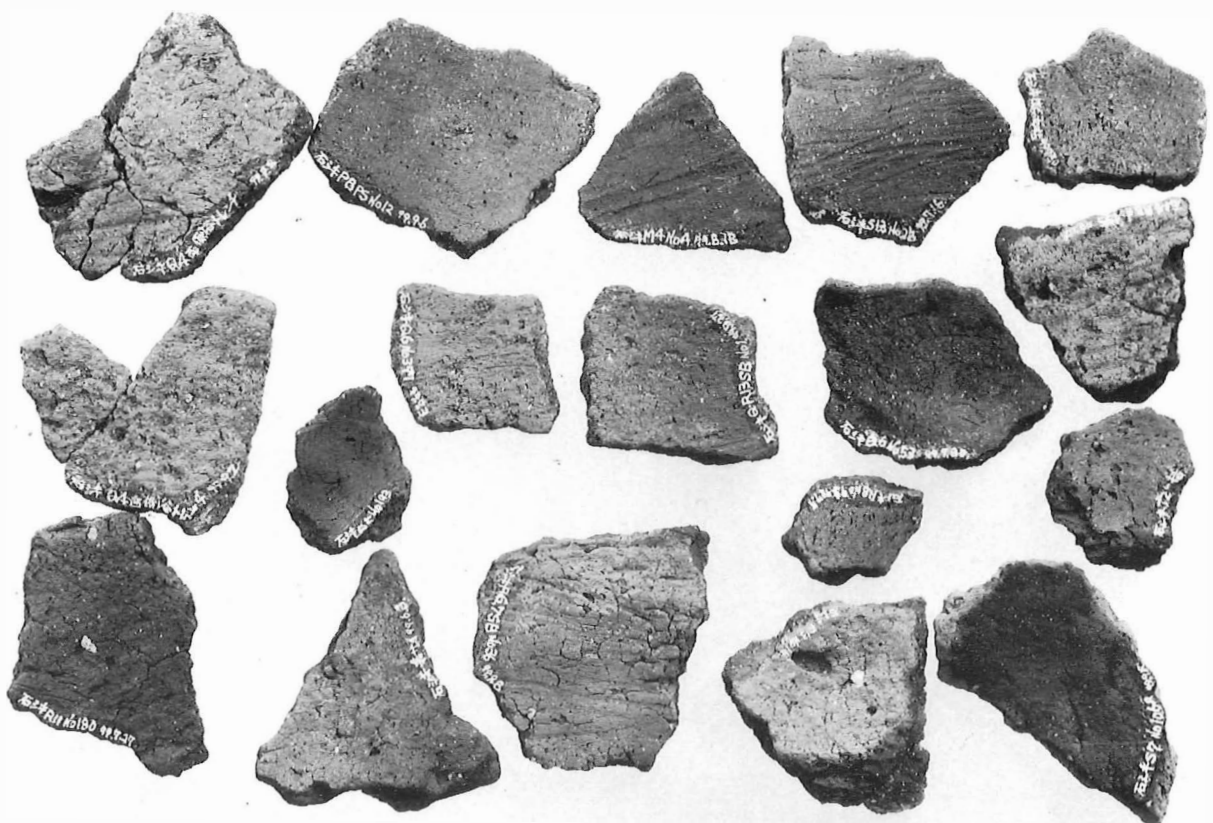
第IV群第3類土器(2)・第VI群(一部)土器・表



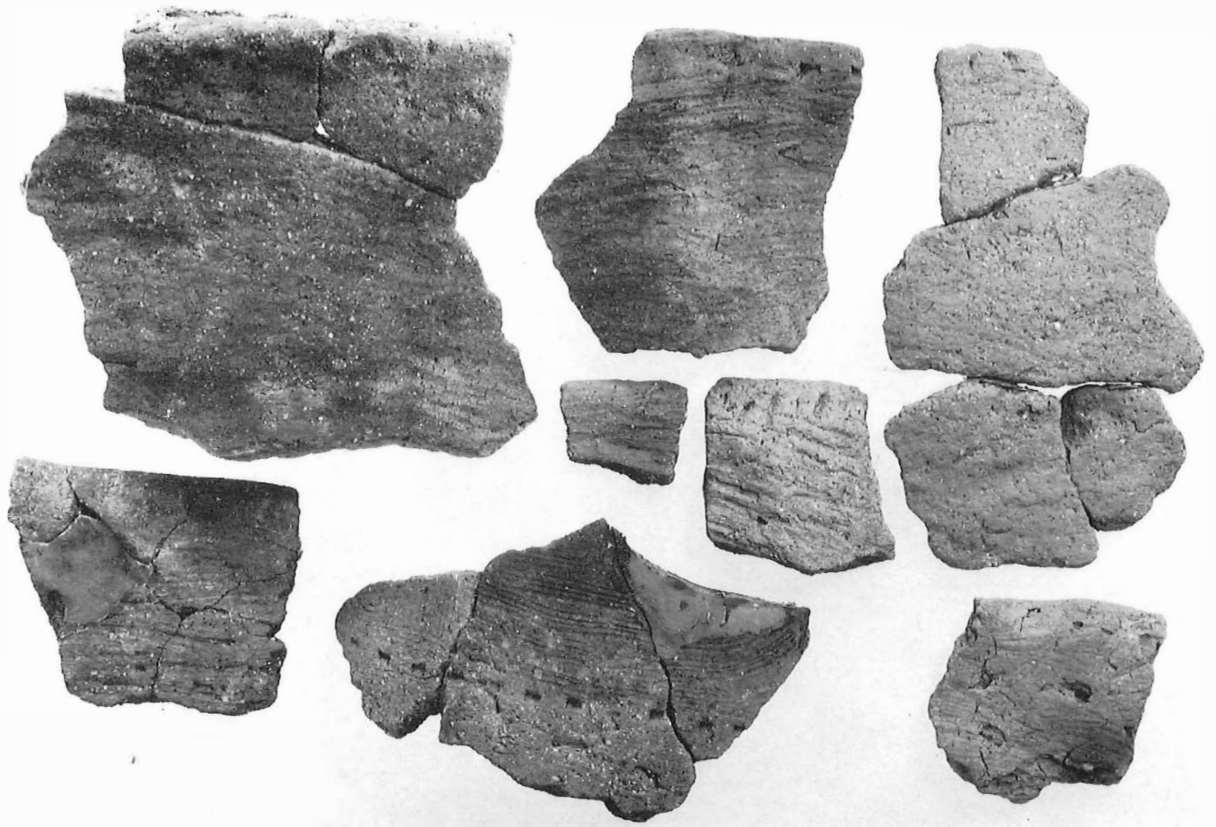
第IV群第3類土器(2)・第VI群(一部)土器・裏



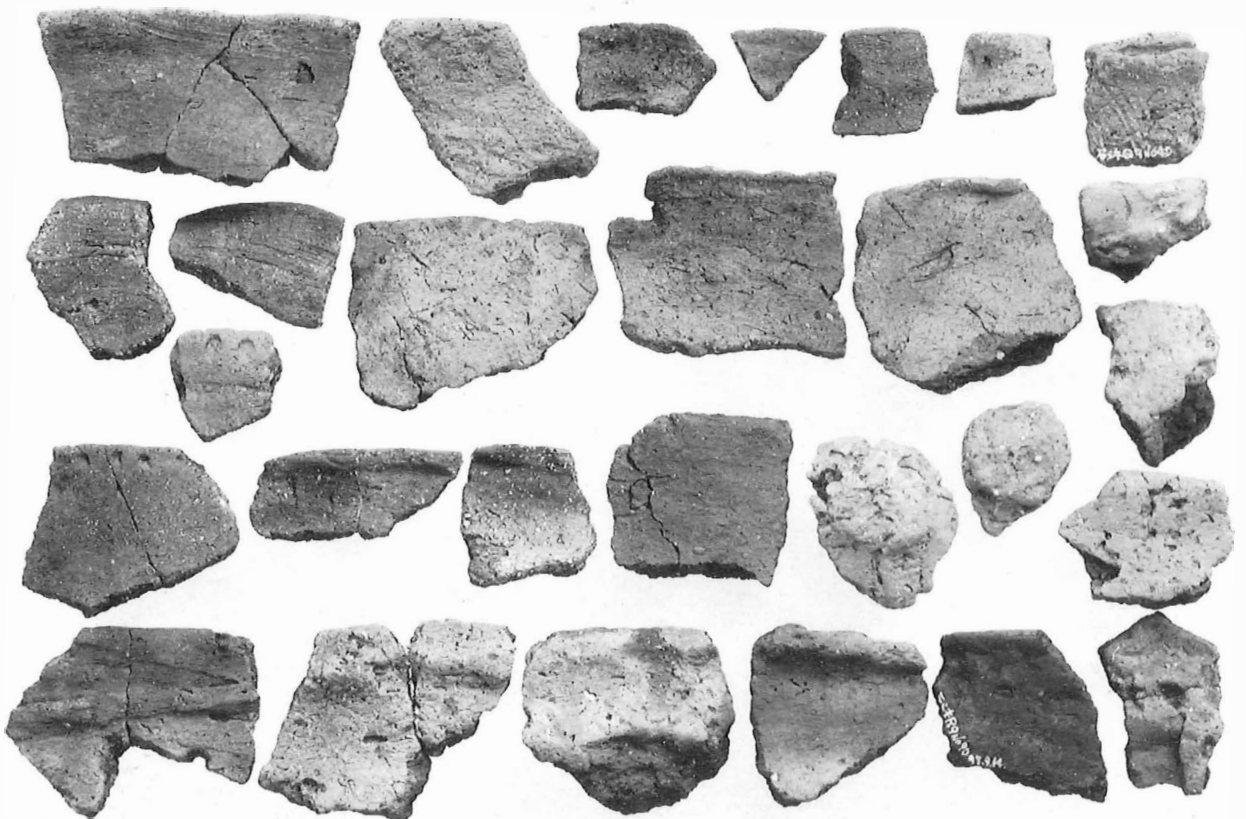
第V群第1類土器(1)・表



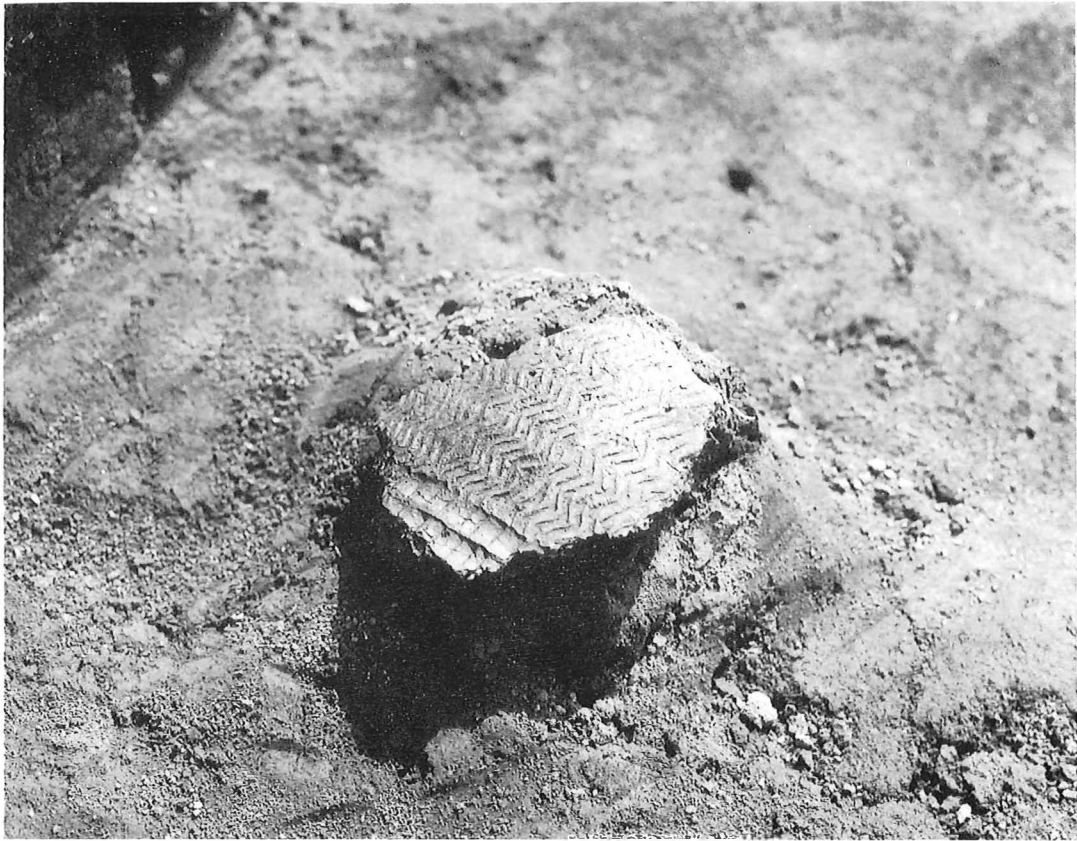
第V群第1類土器(1)・裏



第V群第1類土器(2)



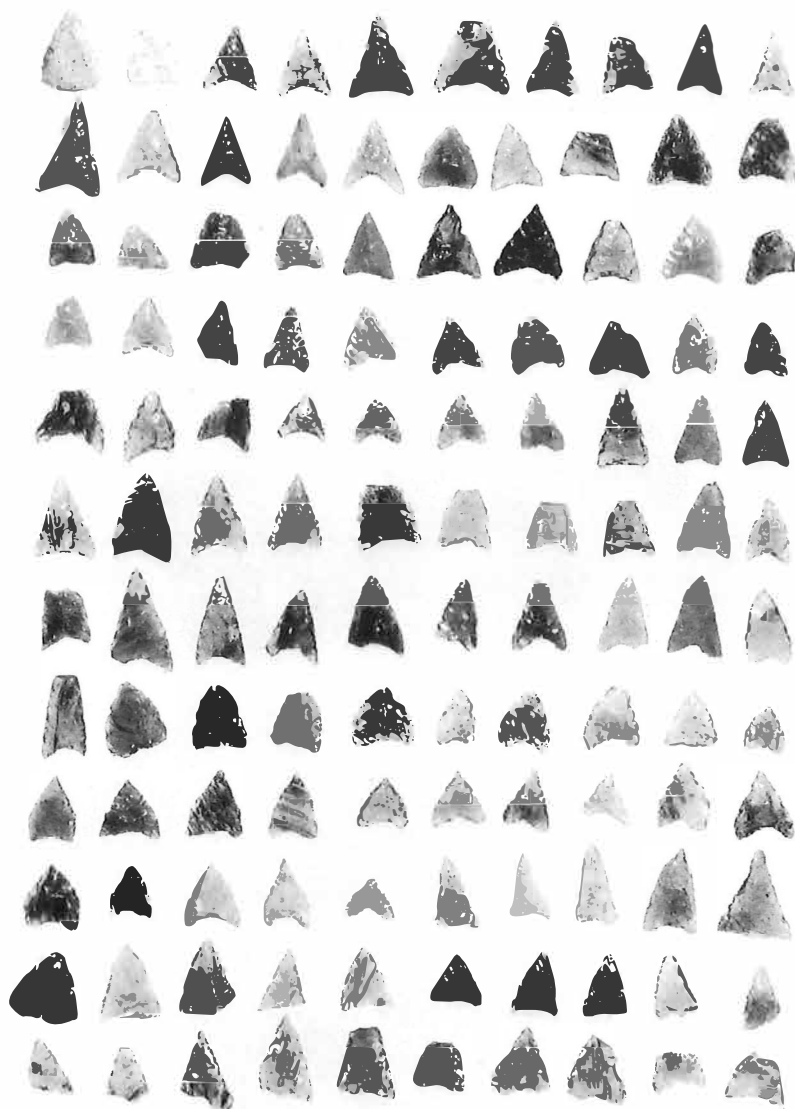
第V群第2類土器



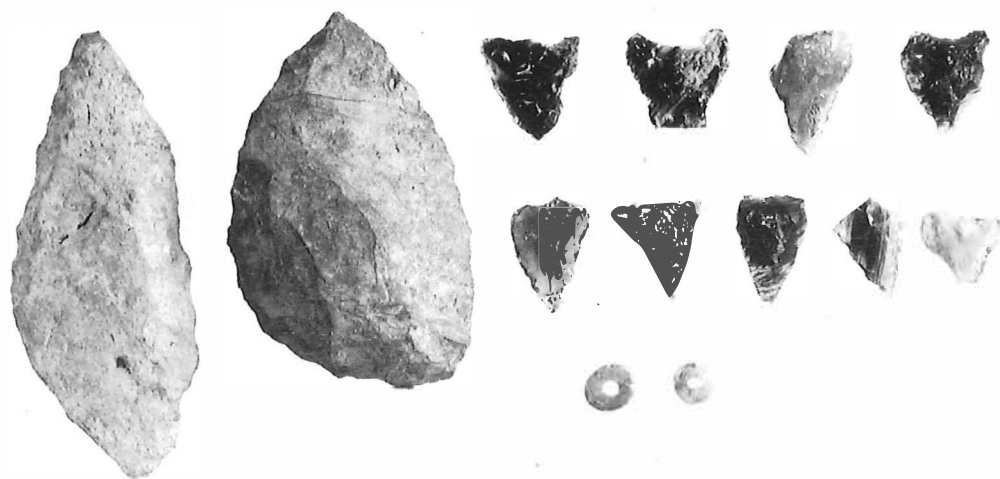
第Ⅲ群第2類土器 (No.52) 出土状況



第Ⅴ群第1類土器 (No.248) 出土状況



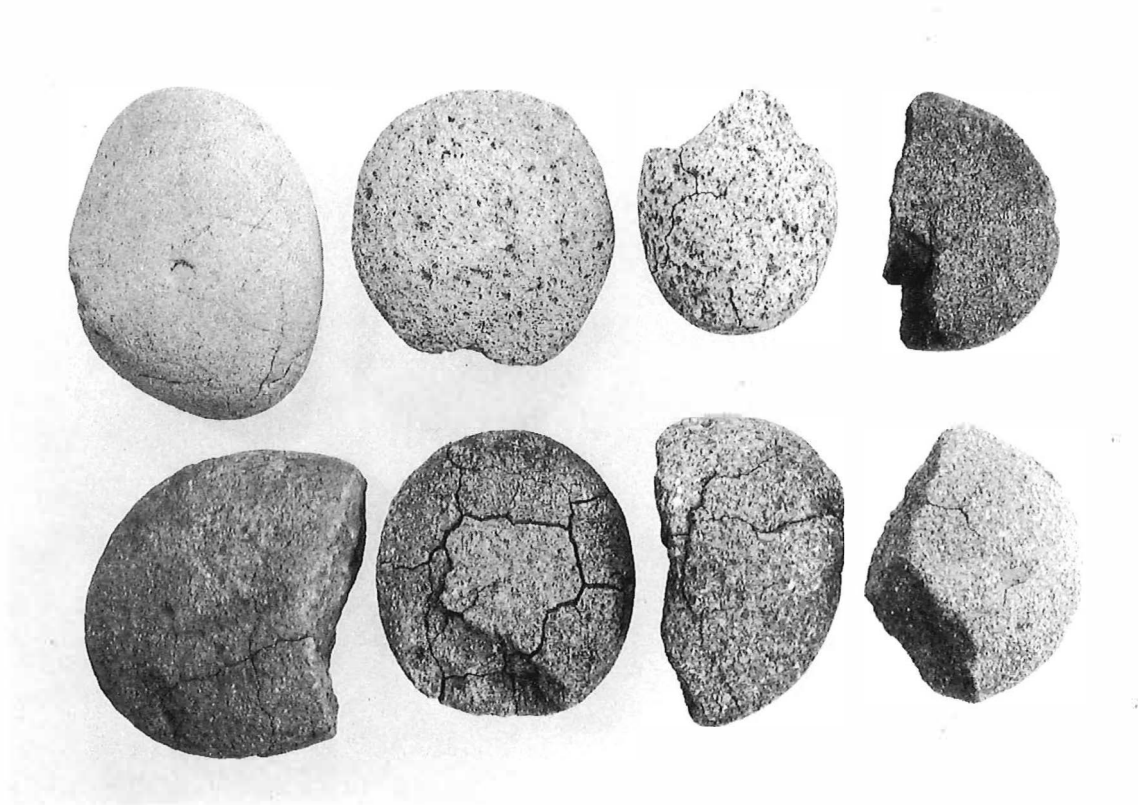
石 鏃



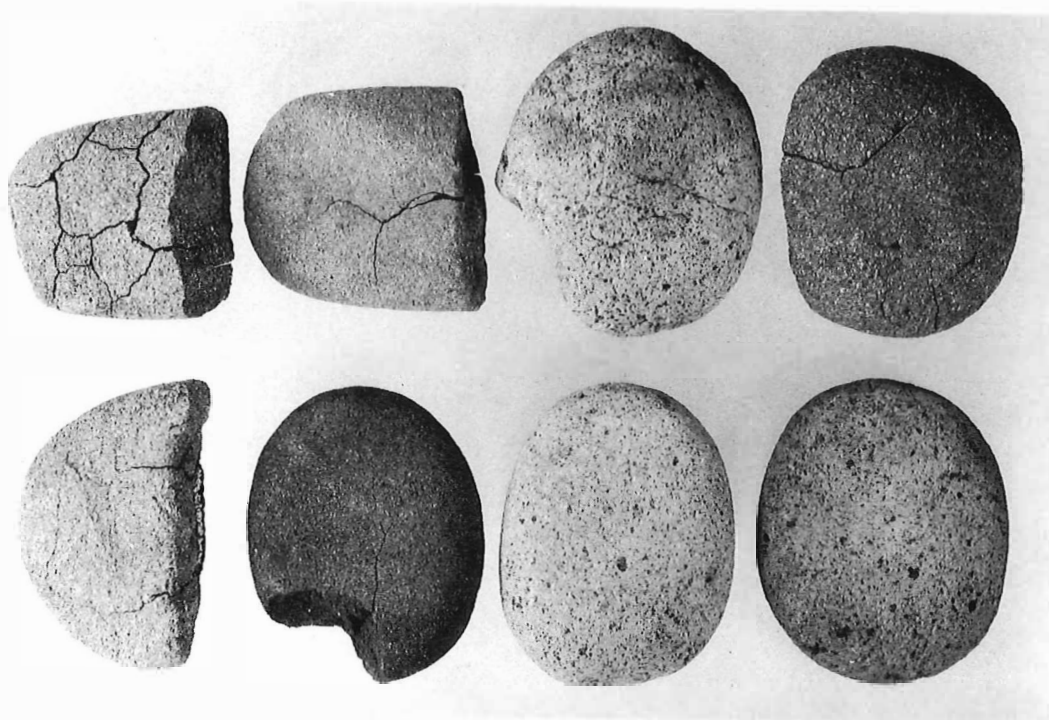
尖頭石器·石錐·玉類



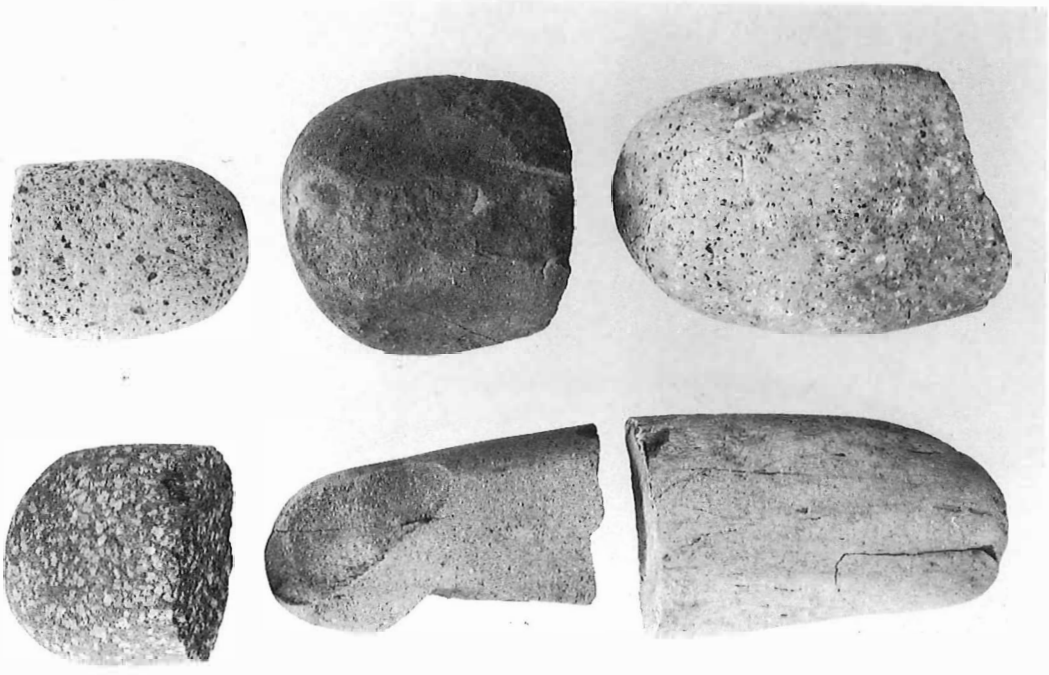
石 皿



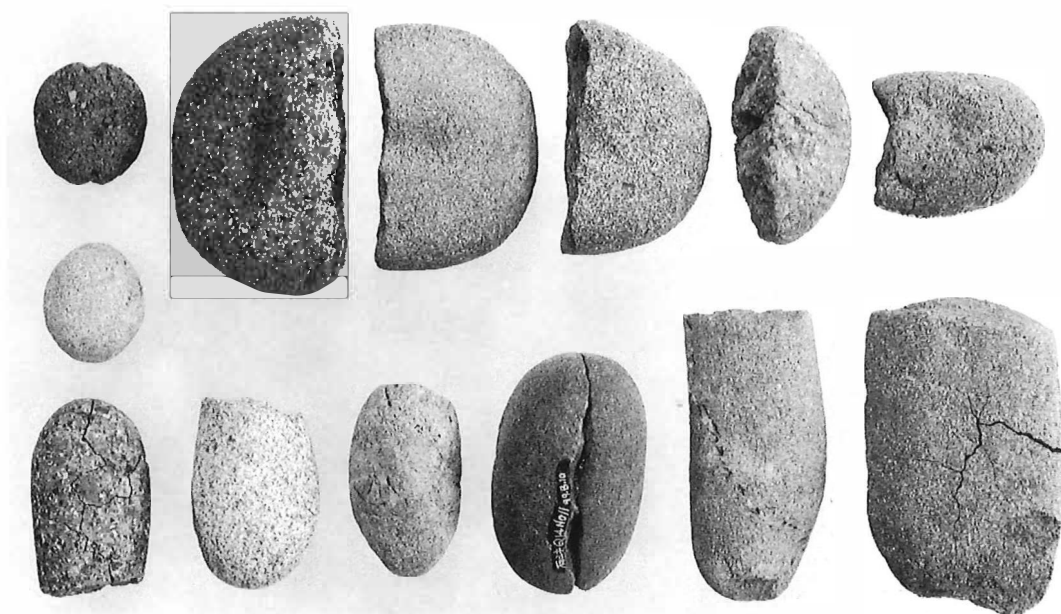
磨 石



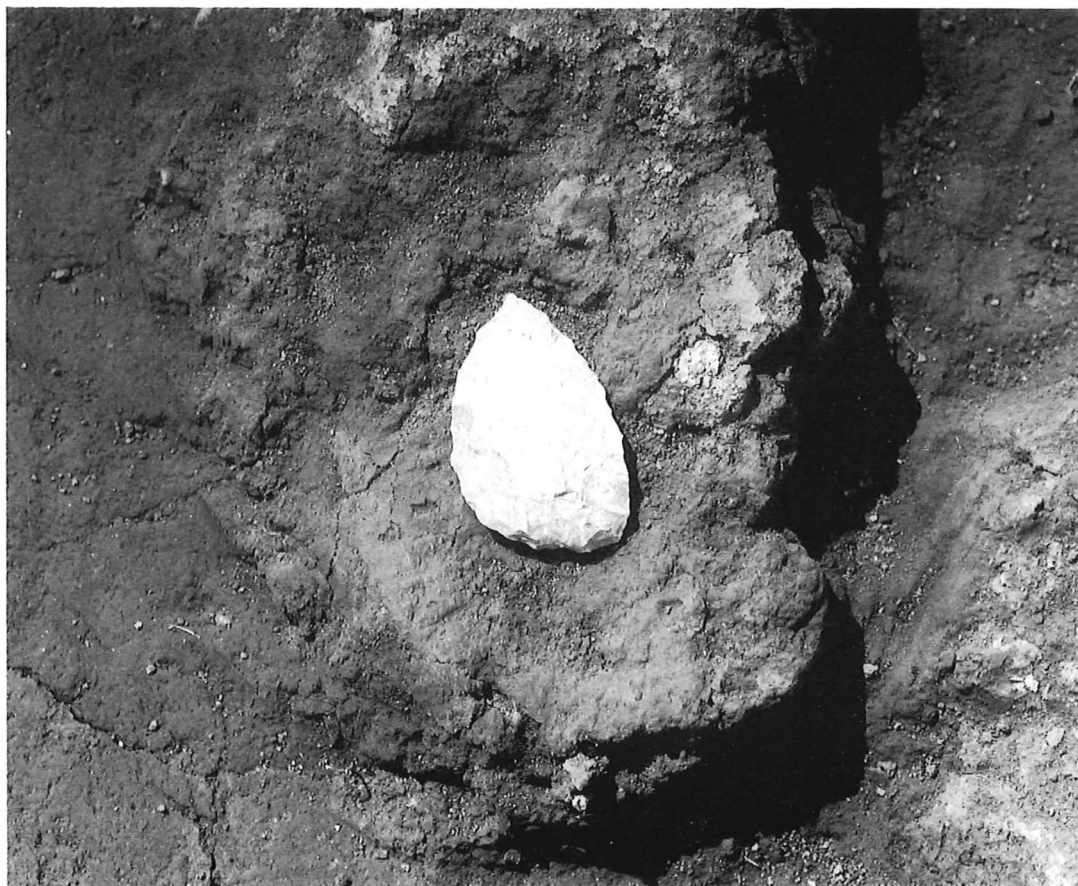
磨石



特殊磨石



石錘・凹石・敲石



尖頭石器 (No.2) 出土状況

富士宮市文化財調査報告書 第25集

石敷遺跡

平成12年3月31日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22-1111(代)

印刷 三扇美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636(代)